
異世界？へえ、異世界か……、つてはあ!?

博麗まんじゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界？へえ、異世界か……、つてはあ！？

【Nコード】

N5587V

【作者名】

博麗まんじゅう

【あらすじ】

何の因果かは知らないが、俺は自称女神様によって異世界へと転生した。転生先の世界はなんと夢にまで見たファンタジーな世界。魔法があるわ、精霊がいるわ、挙げ句の果てにはドラゴンがいるとまできた。そんじゃ、異世界ライフがつつりと楽しみますか！！

この作品は不定期更新になることが予想されます。ご容赦ください。

現在第2章始動中です。

はじめに（前書き）

この小説をご覧になる前にお読みください

はじめに

はじめまして、博麗まんじゅうです。

私の初投稿となるこの作品ですが、かなり無茶ぶりやご都合主義といったものがあります。

更に、いつの間にか後付設定があったり、分かりやすすぎる伏線などもあったりします。

できるだけそういうものは無くしていくように努力していくつもりですが、どうしてもそういうものがあったりしてしまいます。そのときは、ご容赦ください。

それでも『全然オツケーだぜ』といった寛容な方は、どうぞ作品をお楽しみください。

番外編 人物紹介（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

この小説を見てくださってる方がいて嬉しいです。これからもよろしくおねがいします。

（注）これはネタバレを含みます。先に本編をご覧くださいになってからご覧になることをお勧めします。

番外編 人物紹介

ジーク・フェレンデュラ（旧姓：赤桐冬斗）

性別：男

メモ：女神“アルテミス”によって異世界【セレナーデ】に飛ばされた元男子高校生。前世ではオタクだったせいか思考や言動に多少おかしいところが見られる。チートを女神からもらったのだが周りが強すぎて、最近チートの意味がないのではと思っっているらしい。最近の出来事：周囲にまともな人がほとんどいないと気付いた（誰も彼もチートなんだよお（涙）Byジーク）。

第1章

8 / 1 3 : ギルドで冒険者登録をした。

8 / 2 6 : リリーの正体を知った。

9 / 3 : 初の依頼受諾。心が躍っている。

1 0 / 3 0 : 無事(?) 依頼達成。でも身体酷使しすぎて療養中。

(やっぱ休暇って大事だわ byジーク)

第2章

1 1 / 2 6 : 専属騎士として熱心(?) に働市中。でもギルドに顔を出す回数の方が多かったりする。

1 2 / 2 3 : 知り合いだった女性、ユミルと再会。日常が大変になるだろうなあと達観している。

クレス・フェレンデュラ

性別：男

メモ：ジークの父親で、シュヴァイツ王国の王宮騎士の隊長。あま

り上司に恵まれない運命なのか、今まででまともな上司がいなかったとか。また、本人は否定しているが、將軍達からは貴重なツッコミ役として重宝されているらしい。

最近の出来事：上司の自由奔放ぶりがひどい。

第1章

8 / 2 2 : 上司に面倒くさい仕事を押し付けられた上、その上司に逃げられた。(仕事自体は終わったらしい)

9 / 3 : ジークの暴走に関する始末書のようなものを書いている。

(あいつもストレス溜まつてるんだなあ byクレス)

1 0 / 3 0 : ジークが無事だったのは嬉しいが、少しばかり将来を心配している。

第2章

1 1 / 2 6 : この前ニーナと行った居酒屋が気に入ったが、ニーナが酔って派手に暴れ回ったせいで店の出入りが禁止に。悔しさに涙を呑んだ。

セシリー・フェレンデュラ

性別：女

メモ：ジークの母親で、シュヴァイツ王国の元王宮魔法隊の一員。

おっとりとしているが、魔法の実力も中々で男性陣に有無を言わせない迫力を持つ。趣味は魔法の研究で新たな魔導書でも作るうかと思っているとのこと。

最近の出来事：魔導書に書こうとしていた魔法が500を越えていた。

第1章

8 / 1 3 : 魔導書が半分完成した。

8 / 2 6 : リースに紅茶を入れて貰って優雅にティータイムを満喫

中。

9 / 3 : クレスからの手紙を受け取った。

10 / 30 : 魔導書の続きを書こうとしていたら実はもう全て書き終わっていたというオチ。(使える魔法はそれ以上なかったみたいね byセシリー)

第2章

12 / 3 : ジークのことが心配で悩みの種が尽きない。

リース

性別：女

メモ：フェレンデュラ家に仕えるメイドさん。メイドさんでありながらその戦闘力は未知数で、ジークの鍛錬をしている。最近ジークの逃走っぷりがひどいので何か策を張ろうかと考えていて、新たなトラップを作成している。

最近の出来事：対ジーク専用のトラップを作成中。

第1章

8 / 13 : ジークの新たな訓練を思いついた。(仕事をしていたらふと思いついたんです、不思議ですね byリース)

8 / 22 : ジークトラップの作成数が20を突破。

8 / 26 : 紅茶の葉っぱの栽培に手を出してみようか検討中。

9 / 3 : セシリーに頼まれ、屋敷の資料をひっくり返している。

10 / 30 : ただいま物調べ中。家事をしたり、資料を調べたりと余裕が無い。

第2章

12 / 2 : ジーク完全育成プラン完成。いつかやらせようと機会をうかがっている。

ロバート

性別：男

メモ：フェレンデユラ家に仕える執事。化け物だらけのフェレンデユラ家でまともな人。結構歳を取ってはいるがその仕事ぶりは衰えていない。決して何処かの芸人の名前などではない。
最近の出来事：白髪が増えてきた。

第1章

8 / 13：セシリーに新しい紙を買ってくるように頼まれ、現在王都へ向かっている。

8 / 26：クレスから手紙を預かった。現在急いで帰宅中。

9 / 3：セシリーに手紙を手渡した。セシリーに頼まれすぐさま調査を開始。

10 / 30：異国の地に到着。何を調べるのだろうか？

第2章

12 / 3：昔の知り合いと遭遇。昔話に花が咲く。

ニーナ・アレステス

性別：女

メモ：将軍と呼ばれる戦いの勇者達のうちの一人で、何事も自由奔放を主義にこなしている。仕事は出来るのだが、その自由奔放さ故に周囲は迷惑している。弓の名手であるが、双剣を使うことも出来る。クレスの上司でもあり、そのチートぶりも半端ない。

最近の出来事：新しいツツコミ役の卵を見つけた。

第1章

8 / 1 3 : 姫君が王宮にいないので慌てて捜索中。

8 / 2 6 : 將軍達による將軍のための將軍の会議を開催中

9 / 3 : なにやらジークに関する書類を作成中。何かするつもりらしい。

1 0 / 3 0 : ジークが報告でもほしがるだろうと思って行ったら、とんでもない惨状だったので少しばかり心が痛むとのこと。

第2章

1 2 / 3 : 秘密の特訓を開始中。なにやら思惑があるようだが……。

アルちゃん（正式名称：アルテミス）

性別：女

メモ：ジークを異世界【セレナーデ】へと飛ばした張本人。何故ジークを異世界に飛ばしたのかは謎だが、何か思惑があるらしい。

最近の出来事：仕事の量が急に増えた。

第1章

8 / 2 2 : 知り合いの天使と酒を飲みかわし中。酔った勢いで何個か物を人間界に落としてしまった。

9 / 3 : ミスを上司に咎められて説教中。本人涙目。

1 0 / 3 0 : 新たなミスが発覚！ 本人は怒られるのだけは回避しようと思死。

第2章

1 2 / 2 : 暇になってジークのいる世界を見ると、いつの間にか随分と年月が経っていて驚き。

リリー・シュヴァイツ

性別：女

メモ：裏通りで男達に囲まれていたのを偶然ジークに助けられた。ジークは気付いていないが、服の高価さから身分が高い人物なのではないかと推測される。

8 / 2 6

メモ：裏通りで男達に囲まれていたのを偶然ジークに助けられた少女。街では普通の少女としてジークの前に姿を現していたが、今では一国の王女としてジークの前に姿を現した。

最近の出来事

第1章

9 / 3 : ジークと一緒に依頼を受ける。

10 / 3 1 : ジークが倒れたと聞いて心が痛み、早く会いたいと思っている。本人はジークが起きたことを知らない様子。

第2章

1 2 / 3 : シュヴァイツ王国の姫として責務を全う中。（主にジーク任せ）

1 2 / 2 3 : ピコピコハンマーをゲット。露天で買った模様。

アレス・ガラード

性別：男

メモ：酒に酔った勢いでジーク達に喧嘩をふっかけた冒険者。一応、『紅蓮の破壊者』に所属しているが、仕事以外でのプライベートな関係は薄い。しかし、神器を持っていたこともあり、チーム内でもそこそこ優遇されていた。

最近の出来事：ジークに神器を壊された（でも不思議と後悔はしてねえんだよなbyアレス）

第1章

9 / 3 : 『白迅龍』に関する情報を手に入れた。

第2章

1 2 / 3 : 知り合いの冒険者であるダンと相談中。とある大会に出るらしい。

1 2 / 2 3 : 何気に影が薄いことに気付く。

パール・ドレストン

性別：男

メモ：将軍と呼ばれる戦いの猛者の内の一人で、子供であるジークを見下している。腕は折り紙付きだが、実際に実力の無い相手は興味すらないらしい。不良のようなしゃべり方をするが、公務に関しては誰よりも厳しい。主にニーナ相手に。

最近の出来事：書類に不審点を発見。部下と共に不審点を調査。

第2章

1 2 / 3 : 久々に部下達の訓練を見に行くと、だらけていた兵士を発見。お話一（肉体言語）で矯正させた。

1 2 / 2 3 : 路地で子猫を発見。一瞬目を奪われるが、自分の趣味を隠すためにも心を引き裂かれるような思いで視線を逸らした。

ミアア・エリンシュ

性別：女

メモ：将軍と呼ばれる戦いの猛者の内の一人だが、見た目が子供なために初対面の人物には訝しげに思われることが多い。また、街でも子供扱いされることが多く、本人はそれに不満を感じている。以

前、將軍達の議題として『私の処遇について』という話し合いをしようとしたが、ミリアだからということであっさり切り捨てられた。最近の出来事：街で可愛い服を見つけた。

第2章

1 2 / 3 : 近々医療隊というのを作るつもりらしい。

ホルス・ウイグナー

性別：男

メモ：將軍と呼ばれる戦いの猛者の内の一人で、主に国家の頭脳役。暇あらば書物を読み知識を蓄えているため本の虫と称されることもしばしば。しかし、見た目はイケメンなために女性からの人気は高いとか…。

最近の出来事：見慣れないジャンルの本を発見。「……………ライトノベル？ 何だこれは？」

第2章

1 2 / 3 : 資料室で見慣れない本がどんどん増えていくのを見見。しかも文字が読めない。本人は何かの古文書だと思っているらしい。

カシウス・グレイブ

性別：男

メモ：將軍と呼ばれる戦いの猛者の内の一人。寡黙で多くを喋らず、どちらかと言えば背中では物を語る人物。大抵の事には興味が無いのか、自分の仕事以外は淡々と時間を過ごしている。

最近の出来事：ただいま鍛錬中。あの暴竜と戦えなかったことに少し不満を感じているらしい。

第2章

12/3：武闘界に出るかどうかで迷っていたが、ジークが出ることを聞き城に残ることを決めた。

ユリア

性別：女

メモ：リリー直属の護衛。リリーに寄りつこうとする悪い虫はバツサバツサと切り倒し、信用する者以外は何者も寄せ付けない強い意志を持つ。また、男は敵！と見ている節があり、実は同性愛者なのではないかという噂も立っている。

最近の出来事：騎士団の隊長として今日も働いている。ジークに対する見方が変わってきているとのこと。

第2章

12/23：実は自分が可愛い物好きだったことを発見。しかし本人の部屋は至って簡素な物だ。

ヴェツチ

性別：男

メモ：シュヴァイツ王国のギルド【デユランダ蒼穹の聖剣】のギルドマスター。金髪を後ろになでつけたオールバックな男性であり、いつも怪しく暗い笑みを浮かべている。実力は高いが、言動からどこか人の不幸を喜ぶ節が見られる。

最近の出来事：ギルド嬢の申請が多いことに疑問を持っている。「……そこまで人気のある職ではないはずだが……」

レン

性別：女

メモ：とある魔法使いの弟子として修行をしていた駆け出し魔法使い。師匠より試練を授かり、武闘界の開かれるファーレンを目指すが、その途中に盗賊崩れの集団に襲われてしまう。ジーク達の助けにより、ファーレンへの同行が決まった。かなりの爆裂天然少女である。

最近の出来事：やたらとトラブルに巻き込まれる。

ユミル

性別：女

メモ：自称頼れるお姉さんな鍛冶職人の女性。破天荒な性格で世間とのずれが激しい。そのため、時折不可解な行動をすることもあるが、それは彼女の人生にも関係している。何気に結構歳を喰っ……
(以下は閲覧削除されました)

グラム・コーリッジ

性別：男

メモ：ファーレンで開催された武闘会に出場した選手。風と水の魔法の使い手であり、その能力の熟練度はかなり高い。中でも、風属性の複合詠唱の【大風の嵐】^{エアリムストーム}や、水属性の【魔の氷槍】^{フロストスピア}は高威力を誇る。また体術も得意としており、風の魔力を剣状にする【風の刃】^{ブレイド}を使用する戦術を使う。しかし、今回の大会では、苛ついていたジークに歯も立たなかった模様。

グラスゴー・ヴァレンシア

性別：男

メモ：かつて【鬼教官】と呼ばれていた老人。現在は教官の位を退き、自由気ままに暮らしている。ファーレンの武闘会には毎回出場しているらしい。バルとは教官時代の時から犬猿の仲で、今でもかなり仲が悪い。しかし、実力はグラスゴーの方が高い。

トルテ・カインジユ

性別：男

メモ：ファーレンで開催された武闘会に出場した選手。人形を操る人形術という魔法を得意としており、様々な物を操って戦う。特に、自分で人形の炎を作りだし、それを操る戦法を多用する。しかし、その得意の戦術もグラスゴーと当たってしまったことであっさり突破されてしまった。実は影が薄いことを気にしている。

ランスロット・オルディン

性別：男

メモ：ジークとアレスの前に現れ、アレスと戦ったかと思うと、急に立ち去ったわけの分からない男。容姿はイケメンだが、話している内容が結構残念である。熱血バカ。

番外編 人物紹介（後書き）

えー、この話では人物紹介をしていこうと思ってます。更新したときは投稿した話の後書きに『追加した』と記述しておこうと思います。

各キャラの『最近の出来事』は話が進むごとに変化していきますので、ご注意ください。

8 / 2 6

最近の出来事は（更新日）：出来事となっています。

8 / 2 7

【ユリア】が追加されました。

9 / 3

複数人の最近の出来事が追加されました。

1 0 / 3 0

この話の話数を移動させました。7話目 2話目

色々な人物の最近の出来事が追加されました。

1 1 / 2 6 ジークとクレスの最近の出来事を追加しました。

1 2 / 3 色々な人物の最近の出来事が追加されました。

『レン』が追加されました。

1 2 / 2 3 『ユミル』が追加されました。

色々な人物の最近の出来事が追加されました。

12/31 『グラム・コーリッジ』が追加されました。

1/6 『グラスゴー・ヴァレンシア』、『トルテ・カインジユ』
、『ランスロット・オルディン』が追加されました。

番外編 未知の報告書（前書き）

（注）多少ネタバレを含むかもしれませんが。本編をご覧になってからご覧になることをお勧めします。

裏設定的なものです。

面白く無いかもしれないので読みたくない人は次へどうぞ（^^;）

これ読まなくても本編を読むには特に支障は無いと思います。

番外編 未知の報告書

・魔の世界【セレナーデ】

セレナーデは魔法によって繁栄してきた世界である。暴論かも知れないが、魔法が世界を支えていると言っても過言では無いほどだ。魔法は庶民にも広く浸透し、日常生活においても使われることは多い。

また、竜や幻獣といった幻想族や、ゴブリンやコボルドといった妖獣族など人外も多く存在し、まさにファンタジーな世界とも言えよう。

・魔法とは？

魔法とは世界に存在するマナやオドに術者の魔力を与え、人為的に神秘を顕現させる手法である。

魔法には基礎魔法、上位魔法、古代魔法に分かれており、おの各々属性が違っている。基礎魔法は火、水、風、地、上位魔法は光、闇、古代魔法は時、闇となっている。なお古代魔法を使う術師は年々数が減ってきており、実質古代魔法が使える者は世界でほんの一握りである。

また、基礎魔法の中には属性のない強化魔法や補助魔法も存在する。

魔法は魔力を持つ者ならば誰でも使うことが出来るが、高位の魔法を使ったりする時には魔法の熟達が必要となってくる。しかし、強化魔法や補助魔法は難易度が低く、使用する人は多い。

なお、一つの属性の中にもランクが存在するらしいが、それらは

まだはつきりしていない。

・魔剣、聖剣について

光属性の魔力が宿った剣を聖剣、それ以外の魔力が宿った剣を魔剣と呼ぶ。

【セレナーデ】では魔剣、聖剣の製造が可能ではあるが、難易度は遙かに高い。また、どちらも剣の鍛錬の際に多量の魔力をつぎ込む必要がある、一般人における作成はほぼ無理である（ここで言う一般人とは魔力を有する者達のことだ）。

さらに、材料にする金属も術者の魔力に耐えきれぬ魔金属　ここで例をあげるとすればアダマントイト、オリハルコン、レッドムーンなどだろう　を用いる必要がある、それらの採掘量と需要の面から値段は高い。

なににせよ魔剣、聖剣は貴重であるが故によほどの使い手に回されることが多いため、一般人における魔剣、聖剣の入手は困難である。

・魔金属

魔金属とは魔剣、聖剣の作成時に使われる貴金属のことで価値は非常に高い。またその価値の高さから、一度魔金属を専売にしようとしたもくろんだ者がいたらしいが、国家によって肅正されたとのこと。

次に記載しているのは、現在発見されている魔金属の種類である。新しい金属を発見次第随時追加していく予定だ。

〈現在発見されている魔金属〉

アダマンタイト

メモ：青と言うよりは水色に近い、魔金属の一つ。魔力に対して耐性を持っており、武器や防具を作るのに重宝される。

オリハルコン

メモ：鉱石の中心で虹が輝いている透明な魔金属。アダマンタイトよりも高い対魔法性を持っており、価値は非常に高い。

レッドムーン

メモ：その名の示す通り、深紅に染まる魔金属。地中奥深くで生成されるらしく、地上で見つけることはそうそう無い。ただ、昔に地殻変動が起きた地域ではそこに発見されるらしい。

イティアラ

メモ：透き通るような紺色の魔金属。水と共鳴する性質があるらしく、水属性の魔法を強化する効果がある。また、最近では水のある程度貯蓄する性質も発見された。

ブラッデス

メモ：血のように紅く、見る者を狂気に魅了させる魔金属。長く持ち続けると所有者の正気を失わせることから、武器や防具として利用されることはあまりない。

グライソン

メモ：黒ずんだ、お世辞にも綺麗とは言えない外見の魔金属。あまり有効性が見られる特徴はなく、見た目もよいとは言えないため利用されることは少ない。

レヴィーノ

メモ：白く透き通る色をしており、持つ者の魔力を増幅させる効果のある魔金属。その利用価値の高さと量の少なさから、非情に高価な値が付いており、入手が困難な魔金属の一つである。

ギレンチ

メモ：黄土色に輝く魔金属で、雷の属性を付加しやすい。雷が何かの鉱石に当たった拍子にできたと言われているが、その真偽は定かではない。しかし、比較的入手しやすいため、初心者用の杖に使われたりする。

ヴォットライ

メモ：グライソンよりなお、漆黒に染まる闇の魔金属。所有者の闇属性の魔法の威力を増幅させる効果を持つらしい。しかし、検証はまだなされていない。

トリマデス

メモ：風に共鳴し、その重さを感じさせない不思議な魔金属。翡翠

色をしており、軽く扱えるため、女性用の武器に用いられることが多い。

オルゲンデ

メモ：淡緑色の魔金属。属性は何も付加されていないが、重量は重い。とりわけ装飾用に用いられることが多く、祭事などに使われる道具もこれで作られていることがある。

ロブドルン

メモ：黄色に輝く土属性の魔力を秘めた魔金属。生成される時点で土の魔力を有しており、魔力と共鳴することはないが、魔金属内に取り込まれた魔力を使い、土属性の魔法を使うことができる。

ダンジエ

メモ：鉄色の魔金属。普通の鉄や銅などとあまり変わらない見た目を持つが、その密度はとてつもなく高い。そのため、鉄などの金属と比べて遙かに重く、斧や鎚といった武器に使われることが多い。

（現在発見されているが、詳しい特徴の分からない魔金属）
コルノ、ゼボアール、ボルビエ

・魔法の詠唱について

魔法の使用には詠唱が必要であることが確認されている。詠唱とは魔法を使用するには不可欠なもので、魔法言語と呼ばれる言葉を並べるのが詠唱だ。その魔法言語は現在でも新発見は続いており、参考本なども出版されている。また詠唱には、単一詠唱；ソロ、重合詠唱；デュエット、複合詠唱；トリオ、究轟詠唱；カルテットとあり、順番に難易度と魔法の威力が高くなっている。また、強化魔法や補助魔法は単一詠唱に含まれている。熟練者は詠唱を必要としないこともあるが、それには相応の熟練者である必要がある。

・神器とは？

神器は遙か昔、地上の種族以外の存在、すなわち神　　ここではそう表現する以外に方法はないので暫時的にそう呼ばせてもらう　　によって作られた武器や装飾品のことを言う。神によって作られているためにその武器や装飾品には神性が付加されており、様々な能力や魔法を発揮する。神器は世界各地に散らばっており、火山で鉱石を発掘している際に発見されたりダンジョンの深奥に隠されていたりする。

・ダンジョンについて

ダンジョンは今もなお謎に包まれている存在であり、日が経つと内部の構造が変わるといふ不思議な特徴を持つ。その際に内部にいるのは危険で、場合によってはそのまま行方不明ということすらあり得る。一般人は滅多に立ち入らず、中を探索するのはもっぱら冒険者である。しかし、ダンジョンの深奥には貴重な鉱石や武器、装飾品や神器などといったレアなアイテムがあることもあり、冒険者

達は危険を冒しながらダンジョンを探索しているのである。

・魔法のランクについて

魔法に属性や詠唱があることは先にも紹介したが、最近になって魔法のランクについて要約されたものが完成した。ここに記載するのはその一部だ。

魔法には各属性毎にランクが存在し、下位魔法、高位魔法、最上級魔法となっている。また下位魔法には単一詠唱、重合詠唱が多く、高位魔法には複合魔法が多い。更に、最上級魔法には究轟詠唱が必ず必要になる。また、ランクの高い魔法を発動させるための補助の道具も存在することである。

・通貨

貨幣の価値は下記のようになっている。また、魔金貨は魔金属から出来ており、中々世間に出回ることはない。

銅貨……元の世界の100円（100円）分に相当する。

銀貨……元の世界の10000円（1万円）分に相当する。

金貨……元の世界の1000000円（100万円）分に相当する。

魔金貨……元の世界の100000000円（1億円）分に相当する。

・ギルドマスターとは？

ギルドマスターとは世界各地に存在するギルドの長のことであり、その実力は折り紙付き。また、ギルドマスターは前期のギルドマスターにより依頼の達成率他を審議し、選ばれるため相当な実力が必要とされる。また、事務の仕事も多いが大半は職員に任せることが

出来る。現在、世界で確認されている有力なギルドは6つ存在しており、それぞれにギルドマスターがいる。しかし、何故か全員が全員変わり者と、非常に謎な自体となっているようだ。

・ファーレンの武闘会

武闘が重んじられる傾向があるファーレンでは、毎年一度武闘会が開かれる。自分の実力を計ったり、日頃の特訓の成果を確かめたりと様々な目的で冒険者や、腕に自信のある者が集まってくる。また、この大会では非常に貴重な鉱石や、高価なアクセサリや装備品が優勝賞品として出されるときもあるため、それを求めて集まる者達も多いのだという。ちなみに昨年は【琥珀竜の涙】、一昨年には【メーラトン】が出品されたとのこと。

【琥珀竜の涙】……存在すら伝説といわれる琥珀竜の流した涙。透き通った琥珀色で持つ者の能力を上昇する効果がある。

【メーラトン】……遙か海の底で生まれた魔力結晶。かつて、恋人を失った水の守り神であるセイレーンの心の一部だとも言われており、僅かな量でもその保有した魔力量は大きい。水の魔力と共鳴し、特殊な効果をもたらすと言われている。

・派生魔法とは？

派生魔法とは、基本属性である火、土、風、水の魔法が進化したもの、又は突然変異したものと考えられている。その数は未知数とも言われており、様々な属性が存在する。ただ、大まかに分けるとすれば、爆発、岩石、雷、氷に分類することが出来る。なお、これらの属性は後天的には身につけることは出来ず、先天的に身につくものだという事も報告されている。

番外編 未知の報告書（後書き）

8 / 27 魔金属の詳細が追加されました。

10 / 30 新たな魔金属の説明が追加されました。以下の通りです。

『グライソン』、『レヴィーノ』、『ギレンチ』、『ヴオ
ツトライ』

新たな魔金属が追加されました。以下の通りです。

『ダンジエ』、『クウエント』

新たな説明『ギルドマスターとは？』が追加されました。

11 / 26 新たな説明『ファーレンの武闘会』が追加されました。

12 / 3 新たな説明『派生魔法とは？』が追加されました。

新たな魔金属が追加されました。以下の通りです。

『コルノ』、『ゼボール』、『ボルビエ』

魔金属に新たな説明が加わったようです。以下の通りです。

『トリマデス』、『オルゲンデ』、『ロブドルン』、『ダ

ンジエ』

PV10万突破記念 超座談会です!!

博「どうもー、博麗まんじゅうです!」

ジ「おっす、みんなの主人公、ジーク・フェレンデュラだ」

リ「こんにちは、リリーです」

博「題して、超座談会のはじまりはじまり〜!」

リ・ジ「わー」「なんか超の所に凄く他作品の匂いがするんだが…」

博「さて、今回の主題を語ってもらおうか。リリー」

リ「はい。(えーと、確かカンペは…)今回は総合PVが10万に達したということ以前はやらないと作者がほざいていた座談会を開くことになりました。まったく優柔不断ですよね〜」

博「ぐはあっ!~!」

ジ「おまけにこの座談会を利用して作品中のおかしな所の補助説明(という名の言い訳)をしようとするとは。もう人間失格だな、作者は」

博「あぐうっ!~!」

リ「それだからリアル生活でも…」

博「わーっ！……頼む、それ以上はダメーっ！……！」

しばらくお待ちください

博「ふっ、余計なことで脱線したが全然問題なし。全然オツケー
……！」

ジ「さて、先ほども言った通り今回はこの作品の補助説明会。…座
談会じゃないよな？」

博「気にしない、気にしない」

リ「じゃあ最初の説明ですね」

Q・i 主人公達の詳しい容姿が書かれてない

博「あー、これですか」

ジ「確かに作品中でもほとんど記載されてないな」

リ「おかげで私たちのことがよく分からないでこの小説から去って
しまった人もいらっしやるんじゃないでしょうか？」

博「本当ならイラスト書いてみようかとか当初は思ってたんだけど

…、やっぱり無理だったんだよね」

ジ「慣れないことはするなっただことだな」

リ「それで結局私たちの容姿は？」

博「よし、それじゃ主要人物を一気にいってみよう」

ジーク・フェレンデュラ…茶髪のツンツン頭に切れ長の目。体系は太くもなく、細くもなく。まだ6歳児だけど体は鍛えられている。

リリー・シュバイツ…金髪ストレートで頭にティアラを乗せている。目は垂れ気味で体は少し細い。

アレス・ガラード…ぼさぼさの赤髪、ヤクザのような目つき、あまり手入れしていない無精髭。身長は高く、体型もがっしり。どこからどう見てもおっさ（ry

クレス・フェレンデュラ…茶髪のスポート刈りみたいな髪型。口ひげを蓄えていて、体型は敢えて言うなら細マッチョ。

セシリー・フェレンデュラ…白銀髪のショートカットでリリーと同じく垂れ気味の目。全体的におっとりとした雰囲気を感じ、ナイスバディな母。

リース…藍色のボブカットで頭にヘッドドレス。いつも目を閉じていて、目を開ける時はほとんどない。服はもちろんメイド服。

ロバート：典型的執事。白髪オールバック、白い口髭、執事服。例えるなら某八　ヒの憂鬱の荒　さん。

ニーナ・アレステレス：紫髪のポニーテール。戦士然とした鋭い目つき、筋肉質な体、そしてセシリーにも劣らぬナイスボディ。

アルちゃん（アルテミス）：金髪のツインテールで白いワンピースを装備。勝ち気に吊り上がった目は彼女の気の強さを表している。

パール・ドレストン：茶髪でオールバック。身長は男性の平均を少し超えた程度。見た目不良で目つきはあまりよろしくない。

ミア・エリンシュ：ピンクの髪の幼女でゴスロリ服を常に着用している。

ホルス・ウイグナー：銀髪ショートイケメン。眼鏡をかけていて、体の線は全体的に細い。

カシウス・グレイブ：顔の彫りが全体的に深く、いかつい顔つき。焦げ茶の短髪で一言で表すなら漢こいつ

ユリア：青色のボブショートで目は少し小さく鋭い。髪と同じ青の帽子をかぶっている。

博「ま、こんなところかな」

リ「私って金髪だったんですか」

ジ「俺なんか6歳児なのに既に目が鋭いってどうなのさ？」

博「そこら辺は仕方ないね。じゃ、次行こう」

Q・2 5話『俺の両足が真つ赤に燃える！！（いや、本当に燃えたりしませんよ？）』では足を使うのがいいと言っている割に、8話『どう見ても中二病です、本当にありがとうございました。』では手を使っているという不思議

博「うゝむ、これは一応対応策いいわけは考えてあるんだよね」

ジ「へえ、聞かせてもらおうか」

博「本編にもあったけど、一撃一撃は足の方がずっと強いけど、操作性で言うなら手の方がいいってところかな。あの時のジークは威力より操作性を重視したってことだよ」

リ「でも神器を壊すなら威力の高い足の方が良くないですか？」

博「いや、万が一外れたら体に凄まじい被害が出ると考えて手を選んだ…という設定でいいよねジーク君！」

ジ「……もはや何もいうまい」

博「それじゃ、次いつてみよう」

Q・3 神器は脆いのか？

ジ「本編ではアレスの『バンギス』はたいした見せ場もなく壊れたよな？」

リ「ですが神器というのは非常に強力な存在なんですよ？ あれが壊れたのは武器が脆いというよりむしろ…」

博「ジークのチートのせいだよな」

ジ「え？ 俺のせい？」

博「本当ならリリーの言う通り神器はめちゃくちゃ強い。ファ ナルファン ジーで言うならエク カリバーみたいなもんだし、神器が弱く感じたのはひとえにジーク君、君のせいだよ。んじゃ、次いつてみよう」

Q・4 15話『中ボスが現れ…え？これ本当に中ボス？』では、魔物は本討伐で数が減ったという割に16話『何かが見れた。どうする？ ぶつとばせ！』→『ぶつとばせ！』 ぶつとばせ！
！』ではエンカウント率がおかしい

リ「あー、そういえばそうでしたね。おかげで荷物がいっぱいになって大変でした」

ジ「これも説明は聞かせてくれるよな？」

博「これも答えは用意済みなんだけど、まず14話で『暴竜』が出てたでしょ」

ジ「出てたな」

博「あの魔物達は大討伐を免れ、森の奥に潜んでいたけど突然現れた暴竜に恐れをなして外へ出て来たって設定なんだ。だから、大討伐が行われていたのに魔物の数がおかしかったのは『暴竜』のせいなのさ」

ジ「むむむ、こじつけのように聞こえなくもないんだが……」

リ「というか後から付けた感がありりですよね」

博「細かいことは気にしない。次次！」

Q・5 17話『全力を……、ぶちまける!!』では魔力を普通に使うて剣を作ってた

博「うん、これは単なる……」

ジ「チェストーツ!!」

博「ぐへえっ!!」

リ「これももちろん設定があるんですよね(ニコニコ)」

博「H A H A H A！ もちろんそうに決まってるじゃないですか、お二方。えーと、ジーク君の作ってた剣はまだまだ未完成の技なんですね。ちなみにこれは昔の修行のときに編み出したらしいです。それで、魔力の扱いに長けてないジーク君が何故こんなものを作れるかという」と

ジ「チートか？」

博「いや、違うんだ。ジーク君の剣はなんというか、素人の作品なんだよね」

リ「…？ どういうことですか？」

博「うーん、本当になんと言ったらいいかわかんないんだけど、ジーク君の剣は魔力を極限まで圧縮しただけのものでそれ以上はないんだ。形を整えるとか、威力を高めるとかそんなのはなくてただ魔力を圧縮しただけ。素人が粘土こねただけみたいな」

ジ「抽象的だな」

博「いや、本当に説明が難しいんだって。つまりまとめて言うならジーク君でも作れる程度の剣を作ったってことです。以上」

ジ「無理矢理終わらせやがった…」

博「まあいいじゃん。この作品自体なんか半分がノリでできてるし」
リ「さらっと凄いこと言いましたね」

博「ともかく今回はこの辺でお開きということ。それじゃ最後に挨拶を」

ジ「えー、まだまだ未熟な作品を読んでくださった方、ありがとうございます！」「

リ「正直、ここまで来れたのも不定期更新にも関わらず、読んでくださった方が居てくださったからこそです」

博「この小説を読んでくれている読者様達に至上の感謝を！」

ジ「リ・博」「これからよろしくお願いします！」「」

ジ「なんかノリが最終回みたいだな」

博「それもまた一興ということだ」

PV10万突破記念 超座談会です！！（後書き）

読者の皆様、本当にありがとうございます。

これからもよろしく願います！

次やるとすれば…総合PVが30万？

まあそこまでいかないような気がしますけど、H A H A H A !

ではまた。

10/31 この話の位置を移動させました。

PV30万突破記念 超反省会です!! (前書き)

その名の通り)?) 反省会です。

PV30万突破記念 超反省会です!!

博「どうもー、博麗まんじゅうです！」

ジ「おつす、ジーク・フェレンデュラだ」

リ「こんにちは、リリーです」

博「題して、この物語に生じちゃった矛盾をこの場で言い訳して乗り切っちゃいまSHOWのはじまりはじまり〜！」

リ「わー（パチパチ）」

ジ「おいこら、駄目作者！！そこは言わなくていいから！！！」

博「では、リリー助手。この話の説明をしてくれたまえ」

ジ「いつの間に助手に……」

リ「はい、任せてください。この話は物語を書いている途中に修正のしようがないほどのミス、もしくは本編内じゃどうしても話に絡ませられない説明し忘れの部分を説明してしまおうという回です」

ジ「要するに反省会じゃなくて、言い訳会だろ？ 題名変更したらどうだ？」

博「ジーク君、世の中には知らなくてもいいことがだな……」

リ「とりあえず二人は話が長くなりそうなので先にいっちゃいませよ」

Q・1 暴竜討伐の際に、別行動をしていた騎士団の別動隊はどうなったのか？

ジ「ああ、そっぴやそっぴやだっけ。本編じゃ何も語られずにさらっと流されてたよな？」

博「一応彼らは生きてます。もちろん負傷者もいますが。魔物の大軍の進行を食い止めることはできませんでしたが、彼らは何とか生き延び国の回収班に回収されたことになっています」

リ「次いつてみましょう」

Q・2 ヒロインは誰なのか分からない

リ「これは感想欄に書かれていたやつですね」

ジ「で、実際どうなんだ作者？」

博「一応予定じゃリリーになっていました」

リ「まあ……（ポッ）」

博「が、しかし、リリーさんがあまりにも不評なのでくつつかない可能性もあります。もしかしたらヒロインがないなんて展開にも……」

リ「ええっ!? ちょ、ちょっと待ってよ!! それどういこと!?」

ジ「まあ、あれを見てたらリリーって極悪女だよな」

博「仕方ないですよ〜」

リ「作者!! 今すぐ救済イベントを作るのよ! 今すぐ!!」

博「また今度考えとくね。それじゃ、次」

Q・3 ジークは何をしたいの? 主体性が見えないけど……

ジ「マジ? 作者、どうなってんだ?」

博「ジーク君。君は本当なら異世界を存分に楽しむはずだったんだよ。でもリリーという枷かせができちゃったから……」

リ「わ、私のせい!?!」

博「今君はどう思ってるの?」

ジ「……分かん。何か本編のネタバレにも関わってきそうな気が

する」

博「……………それは止めておいた方がいいね。というわけで保留というところで」

リ「説明すらしてない気がします……………」

Q・3 ジークは何故リリーを見限ら……………」

博「わー！！ ストップストップ！！ これは駄目！！ この答えは盛大なネタバレになるからアウトーツ！！」

ジ「焦ってるな」

リ「焦ってますね」

Q・4 王国騎士団と王宮騎士の違いって何？

リ「二つとも別物ですよね？」

博「そうだね！ プロテイ『アホか（ガスツ！！）』『ごべっ！！？』きちんと説明します。王宮騎士はその名の通り、王宮を守ります、はい。王宮とか、重要人物の警備とかが仕事ですね」

リ「じゃあ王国騎士団の方は？」

博「こっちは国家レベルの騒動にかり出される謂わば鎮圧隊みたいなものです」

ジ「じゃあ何で王国騎士団の隊長のユリアがリリーの護衛なんだよ？」

博「その時、騎士団と王宮騎士内で一番強かったのがユリアだったからです、以上！」

リ「次いつてみようか」

Q・5 ジークのチートって何？ よく分からない

リ「これも感想欄のやつですね」

博「で、どうなのジーク君？」

ジ「は？ いや、答えるのはお前だろ？」

博「いやいや、自分でチート頼んだジーク君が話すべきでしょう？」

リ「はいはい。二人とも落ち着いて。二人とも分からないならあの人を呼べばいいじゃないですか」

ジ「あの人？」

ア「はい、みんなの美少女アイドルこと、アルテミスだよー！！」

オ「アルテミス、かわいいー（棒）」

ア「ありがとうファンのみんな!!」

ジ「おい、サクラ使ってまで登場してるやつがいるんだが」

博「そこは言わないでいてあげるのがお約束だよ」

リ「それじゃ、お願いします、アルテミスさん」

ア「はいはい。ジーク君のチート能力その一は、ジーク君の基礎スペックです！ 常人からは考えられないほどの魔力貯蔵量とコントロール性、それとスポーツ選手もびつくりの身体能力だね!!」

リ「でも他の人が凄すぎて目立ってないんじゃないか……」

ジ「修練しなきゃスペックも上がらないと制約までついてるしな」

ア「うっ……。つ、次のチート能力その二は、なんとといってもジーク君の成長速度だよ!! 普通人間が四、五年で化け物相手にまともにも戦えるほど強くなれるなんてないよ。これはチート能力だよね!!」

博「うん、どちらかというところはジークの努力の賜物のようない……」

リ「番外編で紹介されていた【修羅の門】で時を止めて修行していたみたいだし」

ア「い、いや、そんなことはないって!! ジーク君のチートだっ

て！！ え、えーつとね、次のチート能力その三は、ジーク君の残酷性だよ！！ 現代人が生き物殺して何も感じないとかももう狂人の域だよ！！ やったね、ジーク！！」

ジ「おいやめる。っていうかそれただの悪口だろ。要するに俺今チートないんだろ？」

ア「ぐっ……」

博「そうだね。多分今度からチート能力発揮すると思うよ、多分」

リ「多分多いですね」

ジ「保証しとけよ……」

博「じゃ、今回はこれで終わりということだ」

リ「お疲れ様でしたー」

ジ「お疲れさん」

ア「えっ！？ も、もう！？ まだ私喋りたいことあるんだけど！？」

ジ「まだしばらくカメラ回ってるし喋ってれば？」

ア「そういつことじゃないっ！！ ってもう行っちゃったし！？」

ア「うう、おいてけぼりにされた……」

ア「とりあえず挨拶だけしとくか」

ア「えー、これまで『異世界？へえ、異世界か……、っではあ！
？』をご覧になってくださりありがとうございます」

ア「これから良い物語ストーリーが書けるよう（作者が）精進していくつもりですので、よろしくお願いします」

ア「宣伝終わったし、もう私喋ってもいいよね？ いやあ、実は愚痴とかいっぱいあってさあ……」（プツッ！）「

『ザーーー』

PV30万突破記念 超反省会です!! (後書き)

これからもよろしく願います。

第1話 ……は！ここは何処！え？あんた誰？（前書き）

どうも、はじめまして白麗まんじゅうです。

かな〜りゆるゆるな話になってますので、物語の矛盾とかご都合主義とかあるかもしれません。『それでも全然平気だぜ』という方はどうぞ応援よろしくおねがいます。

第1話 ……は！ここは何処！え？あんた誰？

俺こと赤桐冬斗は、気付けば何も無い空間にいた。

何か小説とか二次創作とかにテンプレとか言われそうな状況に戸惑いつつも周りの様子を探ってみる。とはいっても周りをキョロキョロと眺めるだけだが。

一体ここは何処だとか思いつつも、何となく自分のオタク知識から此処の正体を推測してみる。ありがちなのはここで神様が出てきて「ワシは神でお前は死んだZOE」とか言うとかね。まあ、そんなことがあり得るわけも…、

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃっじゃーん！！どうも、貴方の女神様ことアルちゃんですよー！！」

あり得ました。

とても神様には見えない頭の痛そうな少女です。可愛いそうに、こんな幼いのに中二びよ…中二病を発症しちゃって…。

「今遠慮無く私のこと罵倒したわよね！？途中で言い直そうとしてそのまま言ったよね！？私神様なのにそこまで露骨に馬鹿にされたの初めてよ！？」

「何でこんな子供に俺の考えてることが分かるんだ？俺何も言っていないぞ」

「ふ…。そこは神様パワーさー！！」

思い切り良い笑顔で常識どころか頭を疑われそんな発言をかます少女。どうでもいい他人だけど将来を心配せずにはいられない。主にこの子が現代社会で生きていけられるかという点で。

「思いつきり失礼ね、あんた！！私本当に神様だから！！中二病とか頭イタいとかじゃないから！！ちよつと誰が邪気眼じやきがんよ！？」

心の中で言ってる言葉が本当に少女に伝わっていることに、表情には出さないが心底驚く。

自分は神様ですよ、なんて言ってる奴に限って信用ならない。むしろ、それで信用できる奴も頭がおかしいとしか思えない。だって、現代社会で神様とか見たこと無いのに神様かどうかなんて判断出来ないだろ？

「クツ！！すごい捻ひねくれてるわね、こいつ。生前からは考えられない程にひんまがってるわ」

目尻をぴくぴくと引きつらせながら、ドン引きする少女。

こいつも俺以上に充分失礼なのは気付いていないのだろうか？
というか人の性格にケチをつけないで欲しい。

「で、その自称女神様が何の用だ？」

「自称じゃないって！！はあ……………」

ため息ついてると運気が下がるぞ。

「アンタのせいでしょ！！アンタの！！」

「そーなのかー」

「うざっ！！まあ、いいわ。ところで、アンタ死んじやったの分かってる？」

.....は!?

「俺が死んでる!?!マジで!?!本気で!?!ここは本気と書いてマジで!?!」

「ええ、貴方の世界風に言っなら.....、.....えらくマジです」

お前は何処の超能力者だ。

そうか、俺死んだのか.....。

「いやっほうーッ!!!!!!」

「無邪気に喜んだ!?!」

だつて俺死んだんだぜ? あんな退屈な世界を出られたんだから喜ぶに決まってるだろ!! これから行くのは天国か? 地獄か? まあ、どっちでもいいが多分、今の現代社会より暇じゃなさそうだからマシだろ。

「なんて狂人っぷり。アンタ本当に人間?」

「紛れもなく人間だろうな。人間の両親から生まれたんだし」

「疑わしいわ.....」

本当に疑わしそうに視線を俺に向ける少女。失礼だな、どうあつても俺は人間だつつの。アンタ神様なら分かるんじゃないのか?

「あ、本当に人間だわ」

どっかから書類を取り出してそれを見るなりつまらなさそうに言う。

「悪かったな、お望み通りの人外じゃなくて」

「ええ、とんだ期待はずれよ」

「いや、勝手に期待しないで欲しいんだが」

「五月蠅いわね！！ああもう！！いい？よく聞きなさい」

「断る」

「あんたを異世界に転生させるからね」

スルー！？スルーなのか！？しかも異世界？そんなものあるのかよ！？

「あるつたらあるの！！私の話を黙って聞けーっ！！」

「へいへい」

激憤する少女に投げやりな返事をする、それがまた彼女の怒りに触れたのか顔を真っ赤にさせる。まるで熟れたトマトみたいだ。

「あつたまきたー！！本当ならチートみたいな能力とか色々つけてあげようかと思ってたけどやめー！！やっぱりそのまま異世界に……」

「すみませんでしたーっ！！」

恥も外聞もなく即座に少女に向かって土下座する。対して少女は急に態度を翻して土下座した俺に戸惑った表情を浮かべていた。

「え？何？何が起こったの？」

「申し訳ございません、女神様。この私めはどうやら先の自分の死の知らせで多少混乱していたようでございます。こんな私をお許しくださいますでしょうか？」

「え？え、ええ、まあ……」

「ありがたき幸せにございます」

突然の俺の態度の翻りっぷりにドン引きを通り越して珍獣でも見るかのような視線を俺に向ける。そんな目で見るな、新しい境地に目覚めちまうだろ。

「何でそんな急に態度が変わっちゃったのよ？」

「それはもちろん……」

数秒ほど答えを溜め、フツとニヒルな笑みを浮かべて親指をグツと立てる。

「チートな能力が貰えるからに決まってるじゃないですか！」

「残念な上に現金なヤツね!？」

呆れた表情のまま数秒の間固まる自しよ……女神様。

だってそうだろ？せつかく神様（仮）に会って異世界に行けるんなら何のチート能力も貰わずに次の人生なんてつまらないじゃないか!！俺は別に『俺最強www』とか、『俺truee!』とかしたいわけじゃない。ただ、向こうの世界で自分にできるであろう大切な人達を守りたいんだ!！

「本音は？」

「ぶつちやけ凡人とか面白くない」

「ぶつちやけちやつたわね。ま、いいわ。そうね……、三つまでなら願いを叶えてあげてもいいわよ」

「じゃ「ただし！願いを増やすとかは厳禁よ」チツ!！」

先手を打ってきたか。まあいい、三つもあれば充分だろう。どうしようかなあ……。

数々のネット小説他を読んできた俺にとって、どんな願いがいいのかは転生先の世界がどんなところかによって決まってくる、とい

うのはよく知っている。これは人生の半分ほどを自分の趣味に費やしてきた俺の成果とも言えるだろう。

「普通の人でもそれぐらい思いつくし、自分でそんなこと言っていて悲しくならない？」

「悲しくない！！目から出てるのは心の汗なんだ！！」

泣いてなんかいない！俺は友達とか少なかったけどさ、親友と呼べる友人がいたからいいんだよ！！

「で、どうするの？」

「そうだな…、その前に聞かせてほしいんだが、俺はどんな世界に行くんだ？」

「んー、ファンタジーな世界かしら。魔法があったりとかドラゴンがいたりとか」

「それなら身体能力の底上げと魔力操作の熟達ってのは頼めるか？」

「大丈夫よ、ただし両方とも修練したら強化されるって形でオツケーかしら？」

「おう」

「あ、サービスで魔力も修練すれば増えるようにしておいたから」「サンキューな」

二つ返事でそれらを了承する。元からそのつもりだったし、そうでなくては面白くない。力は努力するからこそ手に入るべきものなのであって、楽に手に入れるべきものでは無いのだから。

「鍛えれば強くなるという保証を私からもらっておいて何を今更…」

もし力を楽に手に入れたとすれば、忽ち力に魅せられて暴走してしまうだろう。

「なんかかつこいいこと考えてるみたいけど、さっさと次の願いを言ってちょうだい」

「そうだな……、某人の、剣が無限に刺さる荒野を現実世界に浸食させる都合の良い結界魔術とか……」

「却下。世界の修正に私たちの都合、それから著作権その他諸々に引っかかるから無理よ」

駄目か。あと最後の著作権つてのが気になるが、俺の本能が関わるなど告げているからスルーしよう。

「やっぱ無理か？」

「無理ね。ただ、それに近いものならアンタでも出来るかもよ？ただし、それはアンタの努力次第だけだね」

「じゃあ、某漫画に出てくる一時間が一年になったりする別荘とかは貰えるのか？」

「それも却下。でもまあ、それに近からず遠いものをあげるわ」

要するに全くの別物なんですわ、分かります。

「んで、それは時間はどうなるんだ？修練のためにそういうのをを頼もつと思っただが……」

「時間の方は好きなように弄れるわ、好きに使いなさい。向こうの世界で渡すから」

「了解」

さーて、最後はどうするかな？んー、正直な話、これだけ揃ってしまえば後は努力次第でどうとでもなるしな。

「なあ、その願いつてのは向こうに行ってから叶えてもらえるの

か？」

「もちろんよ、どつするの？あと一つは保留にしておく？」

「ああ、そうするよ」

「それなら、これで準備はバッチリね。じゃ、異世界へ一名様ご案内！」

少女が元気よく腕を振り上げると同時に足下にあつたはずの足場が無くなる。

「ってマジかよーっ!？」

「頑張つてね」

一瞬の浮遊感の後、俺は底の見えないある意味で奈落の穴へと落ちていったのだった。

第1話 ……は！ここは何処！え？あんた誰？（後書き）

1 / 2 微妙に書き直しました。

第2話 転生したら名前が変わるってよくあるよね(前書き)

連続投稿です。

話に穴が空きまくってるような気がしないでもないです(^| ^:)

何かありましたらコメントの方にお書きください。お願いします。

第2話 転生したら名前が変わるってよくあるよね

「おぎゃあ！おぎゃあ！」

うお、何だ？身体がほとんど動かねえ。視界もよく見えねえしどうなってんだ？

「おお、生まれたかセシリー！よく頑張ったな！」

かろうじて見える視界の中で男性が勢いよくドアを開けて入ってくるの見える。うん？今不穏な言葉を聞いた気がしたんだが……、気のせいかな？

「あなた、落ち着いてくださいな。元気な男の子ですって」

優しく何かに包み込まれる感覚に何故か安心する。そして、今度は先程の男性ともう一人見覚えのない女性が俺の顔をのぞき込む。二人とも美人なので、少しだけでもややよとした気分になるが、それよりも今は状況把握の方が大切なので二人の会話に注意深く耳を傾

ける。

「目とかは君に似てるんじゃないのかい？」

「口元とかは貴方そっくりですよ」

女性が俺の頭を優しく撫でつつふつと微笑む。あれ？なんか今の会話から考えるとさ……、

「ぶぎゃあああああ！！（俺赤ちゃんになってるじゃねえか！！）」

「おおー！何だ何だどうしたんだ！？」

「大丈夫ですよ、ほらよしよし……」

突然鳴き始めた俺を見てわたたと慌てる男性。しかし、女性は全く動じた様子もなく俺をあやしていた。あれだな、男より女の方が強いってのは本当なんだな。多分この男性はこの女性に尻に敷かれてるんだろっな。

「それで名前はどつする？」

「実は私前から決めてあつたんですよ」

「ぶう（俺も気になる）」

「お、この子も名前を期待してるみたいだぞ」

「ふふ…、ずっと前から決めてたのよ？」

にこっつと笑って、その女性は俺の名前を告げた。

「貴方の名前はジーク。ジーク・フェレンデュラよ」

ジーク…、いいねえ。最ツ高だねエー！

自分のかっこいい名前に思わず満面の笑みを浮かべる。女性と男性はそんな俺の様子を見て、嬉しそうに笑った。

「どうやら、この子も気に入ってくれたみたいだな」

「そうみたいね」

これから俺の第二の人生が始まるんだよな。よっしゃ！思う存分に楽しんでやるぜ！！

そんなくだらないことを思いつつも俺は二人が笑い会う様子をじっと眺めていたのであった。

月日は流れ、俺がジークとしてこの世界に生を受けてから早六年。へ？時間が飛びすぎた？あんな、君。延々と赤ちゃん時代のことを見てるのがいいかい？俺としてはそんなところはさっさと飛ばして話を進めるよと思うんだが。

「ジークさーん、何処ですか？」

む、やば。もう気付いたのか。急いで隠れなければ。

俺は今いる部屋の窓からこっそりと外へと脱出する。そのまま走って近くの遮蔽物に身を潜める。フツ、任務完了だ。

ガチャツと音を立て、先程までいた部屋のドアが開く。すると、キョロキョロと部屋を見回しながらメイドさんが部屋へと入ってきた。彼女は部屋を警戒しながら慎重に進んでいく。そうだ、そのまま進むんだ…。

『ドサドサドサツ!!』

「きゃあっ!!」

彼女が部屋の中央まで来た途端に天井から降り注ぐ木の実達。計画通り…!!

くつくつと押し殺した笑いを漏らす。ざまあ見やがれ、日頃から俺を稽古と称してぼこぼこにした仕返しだ。

さて、そろそろ何食わぬ顔で自室に戻ろうかね。あいつが来ても白を切ればいいし。

「あ!!見つけましたよ、ジークさん!!」

「え!?嘘だろ!!」

「そこですか!!」

「しまった…!!フェイクか畜生!!」

遮蔽物から飛び出し、全速力で走り出す。メイドはひらりと窓枠を飛び越えメイド服来てるのに何でそんなに早く走れるんだらうと疑問を持ちたいほどの速度で迫ってきた。

「お前本当に人間かよ!？」

「ジークさんも大概でしょう!！」

俺はチートが付いてるから普通の人間より足が速いのは分かる。何て言ったってこの四年間 二歳までは屋敷の中で本とかをこっそり読んでおとなしくしていた 鍛えに鍛えて六歳なのに成人男性以上の身体能力を手に入れたからな。でもさ、このメイド……。

「何でお前が俺についてこられるんだよ!?!??？」

「メイドをなめないでください!！」

「メイド関係ないだろ!？」

何故かぴつたりと俺の後についてきてる。異常事態だよな、これって。

「隙あり!！」

「しまっ……!！」

そう言ったときには地面に転がされ、メイドさんが俺に馬乗りになっっていた。

「さあ、今度という今度は許しませんよ。今日の鍛錬は覚悟してくださいね？」

「嫌だあ！！！」

ずるずると首根っこを掴まれながら俺はこの屋敷にある闘技場へと引きずられていったのだった。

さて、話を整理しようか。

俺はジーク・フェレンデュラとしてこの世界に生を受けた。フェレンデュラ家の長男であり、フェレンデュラ家を継ぐらしい。面倒な話だが……。

このフェレンデュラ家というのは貴族の家だがそこまで偉いわけではない上、武を重んじるらしく、家訓は『常に強く有るべし』とかなんとか。

まあ、そういうわけで俺は五歳になった頃から鍛錬という名の拷問を受けている。いや、正直きついです。これが俺じゃなかったらどうなってたことやら。

流石の俺もアレを使って鍛えてなかったら死んでたような気がするけどな。

ちなみに父さん、クレス・フェレンデュラは王宮騎士の隊長らしく滅茶苦茶強いです。母さん、セシリー・フェレンデュラも結婚して俺ができる前までは王宮の魔法隊の一員だったらしく、魔法はかなり上手だ。

以前、二人と戦ったことがあるんだが 半ば強制的な上に二人同時に参加してきた …………… トラウマに成る程だったとだけ伝えておこう。

そして、俺を毎日稽古という名目でぼこぼこにしてくれるメイドさんはリース。メイドなのにあの戦闘力はいかなものかと文句を言ってるやらない。

後は他にもメイドさんとか執事さんとか色々いるんだが、説明が面倒なので割愛させてもらおう。この先話すこともあるだろう……多分。

毎日が充実していて、俺は楽しい日々を送っていた。毎日本を読んで魔法とか世界観とかの知識を深めたり、リースにぼこされたり、鍛錬をしたり、リースにぼこぼこにされたり、リースにのされたり……あれ？ぼこぼこにされた記憶が半数を占めているのは何故だろう。

だが、楽しい平和というものもいつかは壊れるものだと誰かがよくいったもので、俺の平和ももうじき壊れてしまうなんてことはこの時の俺は全く知らなかったのである。

第2話 転生したら名前が変わるってよくあるよね(後書き)

P.S.

作者はコメントをもらうと猛烈に喜びます。頭がキャッキャウフフみたいな感じでしばらくはね回るほどに喜びます。

できれば、感想、ご指摘等お願いします。

10/12 年齢と月日が間違っていたので修正しました。

『何て言っただってこの二年間』 『何て言っただってこの四年間』

『鍛えに鍛えて四歳なのに』 『鍛えに鍛えて六歳なのに』

11/2 微妙に書き直しました。あと行間も増やしました。

第3話　　そうだ！剣を作ろう！！（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

投稿した次の日に見てみると、評価されてる上にお気に入り登録して下さっている方もいて驚きました。評価をして下さった方、そしてお気に入り登録をして下さった方々ありがとうございます。

これからも頑張っていきますので応援よろしくお願いします。

P.S .

分からないところや、『これ矛盾してない？』みたいなところがあったらコメント欄に書いてくれると嬉しいです。よろしく願います。

第3話　　そうだ！剣を作ろう！！

「俺が王宮に？」

「ああ、そうだ」

リースとの模擬試合（という名のいじめ）の途中で父さんに呼ばれて、嬉々として試合を抜けて書齋に来てみれば王宮に行けとのお達しだった。

このお話をする前にいくつか説明しよう。

まずはこの世界についてだが……、この世界は【セレナーデ】と呼ばれる世界らしく　　というかどこの音楽だろうかと突っ込んでやりたい　　四つの国に別れている。

一つ目は今俺が住んでいる国、【シュヴァイツ】。

昔から王族が国を治めていて今はたいした問題も無く国は動いている。周囲の国ともそこそこ仲も良く、安泰した世の中とも言えるだろう。俺の家もこの国にあるのだが、結構地方の方にあるみたいだ。

二つ目はこの国の隣国、【ファーレン】。

武術が栄えていて年に一度、某異星人達が派手に気で戦う武道会みたいなものが開かれるとかなんとか。ちなみに、何故かその国ではマーシャルアーツやCQC、カポエイラや中国拳法なんてものもあるらしい。

三つ目の国は、他民族の国【ミレニア】。

竜人族や獣人族、猫人族とか色々な民族の人間（？）が住んでいる国。今はそうでもないのだが、昔は人によって人以外の種族は迫害されていたらしい。今ではかなり受け入れられている。それどころか需要の方が多いらしい。そのときに人以外の民族が作り上げたのがこの国だという。

四つ目は、【オルティス】。

根っからの宗教国らしく、何とか教が広まっている国らしい。正直あまり興味が無いので、調べることもしなかった。故に語ることも無いのだ（キリッ）。

ここまで長々と語ってしまったが、要するに王宮というのはシュヴァイツの王族の宮殿なのだ。ちなみに王宮は施政所も兼ねているようで役場とか資料室とかもあると聞いた。

そして、俺をそこに寄越すということは……………、

「俺にも王宮騎士になれと？」

「まあ、そういうことになるな。私としてはお前には好きな道に進んで欲しかったんだが、私の話を聞いた將軍達が五月蠅くてな。実質彼らは私よりも強いから文句も言えないし、要するに逝ってこい」「字違え！？」

くそお、將軍とやらめ。次会ったら一発叩いてやる。しかも、父さんよりも強いってどんだけだよ。今じゃ父さんにすら苦戦するのに…………。この国は大概チートだな。チート乙wwとか叫んでやろうか。

「そうは言っても顔見せ程度だ。そこまでのいたしたものじゃないぞ」「……………まあ、そこまで言うなら行くよ。というか最初から選択

肢なんてないんだろ？」

「お前が嫌がるようなら初めから気絶させて連れて行くつもりだったからな」

なんと横暴な父親だろうか。何で母さんはこんなのと結婚したんだか……、そっぴや母さんも似たようなものか。有無を言わせないところとか、相手の意志など関係ないってとことか。

「それで、いつ出発なのさ？」

「明日だな。急いで準備しておけよ」

「了解」

俺は返事をして、明日の準備をすべく自室へと向かった。

自室に着いた俺はまずスキマもどきを発動させた。俺が必死に鍛錬したおかげで何とか使えるようになった。一応、サバイバル生活とか普段の生活に必要なものとかは元から入れてあるので特に入れる物も無い。あるとすれば……、無かった。

「ホント便利だよな、このスキマ。どっかから弾幕飛んできそうな気がするけど……」

必要な物は入れてあるから大丈夫だな。さて、何をしようか……

そつだ！武器を作ろう！！（京都へ行くこつみたいなノリで）

そつだそつだ。俺そついや自分専用の武器みたいなの作つたこと無いな。よし、今日はその武器の設計図でも作ることにしようか。何が良いかな？槍とか斧とかも良いんだが、やっぱり基本は剣だよな。元オタクの俺は数々の漫画を読んできたこともあつてデザインは問題ないだろう。最悪、そのまま真似ればいいし。

しかし、剣といつても何をモデルにしたものか……。某作品の赤い弓兵さんがよく使つた螺旋^{ねじ}れた剣の原典をモデルにするか、それとも某作品の剣を握つたらステータス強化で俺最強wwみたいなことしてて人が使つてて話す刀状の剣が良いか。悩むところだ。

しばらくどんな剣にしようかと迷つて結局自分の頭の中にあるフアンタジー系や西洋剣を元にした剣にしようかと決まつたのだが、その頃にはもう日は沈みかけて慌てたのは余談である。

「それじゃあ、行つてらつしゃいねえ」

「行つて来ます」

「多分二日、三日は向こうで過ごすと思う」

「ええ、分かりました。しっかり仕事をしてきてくださいね？」

「ああ」

父さんは母さんを抱き締めると頬にキスをした。母さんもそれに応えるように……。いかん。これ以上は目の毒だ。そう思つた俺はいつまでもバカッフルな母さん達から視線を外し執事さんに話しかける。

「ロバートさん、留守は頼みました」

「はい、坊ちゃん。このロバートめにお任せくださいませ」

ロバートさんは深々と90度ぐらいに腰を曲げてお辞儀をした。

「父さん、行こう。そろそろ時間だろう？」

「ああ、そうだな。それじゃあセシリー行ってくる」

「いつてらっしゃい、あなた」

俺と父さんは家の前に止めてある魔動車 元の世界で言うところの自動車に近くて、魔力を道源にしている に乗り込んだ。父さんがアクセルを踏み、軽快に走り出す。

こうして俺は父さんと共に王宮のある王都へと向かったのだった。

「んむう……………」

俺は車に備え付けてある机に羊皮紙を広げ この世界には紙もあるのだが、羊皮紙の方が安いのだ 剣の設計図を前に唸っていた。そう、設計図そのものは完成した、したんだが…………、

「材料、なんだよなあ……」

そう、問題は材料にあった。設計図はある、技術の方も修練すれば何とかなる。だけど、材料がネックになっていたのだ。

それに俺が使うのだ。生半可な物であれば使った瞬間に消え飛んでしまうだろう。

「何を悩んでるんだ？」

隣で運転している父さんは俺の唸り声が気になったのか、前を見つつもチラッと視線を寄越した。

「ほう……、これは剣か？」

「ああ、でも材料を何にするか決めかねててな」

「前からお前は変だと思っていたが……、ついには剣を作るのか。いや、お前が十分に異常なのは俺もセシリーも分かっているからな？」

五月蠅え、ほっといてくれ！どうせ俺は人外ですよ。

「ふむ、そうか。それならアダマントイトとかはどうだ？」

言い忘れていたが、この世界には鉄や鉛といった金属の他にアダ

マントイトとかオリハルコンとかファンタジー世界でしかお目にかかれぬ貴金属も存在する。無論、それらは採取も困難なので値段もそれなりに張る。

「駄目だな、使うときもそうなんだが、剣を作る時点で壊れそうだが、何しろ魔剣を作ろうとしてるからな」

「魔剣……か。いや、しかしそれでもアダマントイトとかですら壊れる製法ってどんだけ魔力をつぎ込む気なんだ……？」

呆れたような声で父さんは言うが、俺にとっては死活問題なのだ。ちなみに魔剣や聖剣にも作り方があって、剣を鍛える最中に魔力を注ぎ込むと魔剣と聖剣の完成ってわけだ。もちろん誰もができる技術じゃないし、下手をすれば死ぬことだってある。だから魔剣や聖剣は滅多に市に出回らないし、聖剣が市に出回ることには魔剣が出回ることに上がない、あつたとしても値段が半端ない。

俺に関しては……まあ言わずと知れたチートボディですから。

「ほどほどにしておけよ」

「分かってるよ」

「本当に分かっているのか？おっと、そろそろ王都だ。降りる準備をしておけよ」

「はいはい」

設計図を懐に仕舞うふりをしてスキマに放り込む。よし、準備は完了だ。

俺は車に揺られながら初めて行く王都に胸を躍らせたのだった。

第3話 そつだ！剣を作ろう！！（後書き）

1 / 2 微妙に書き直しました。

第4話 そのフラグをぶち壊す!!あ、やっぱり無理でした(前書き)

プロットが・・・、プロットがあっ!!!!

・・・っは!?!すみません、取り乱しました。

いえね、原稿がですね・・・、消えたんですよ) | (;

おかげで書き直し(涙

第4話 そのフラグをぶち壊す!! あ、やっぱり無理でした

目の前にはシュヴァイツ王都、バレッタの王宮、バレッタ城
王宮なのに何故に城とか思ったが謎の圧力がかかってきてそれ以上
考えるのを放棄した。ここで言うことは一つ。

「でけえ……………」

敷地面積が学校の体育館の4つ分はあろうかと言うほどの大きさ
の王宮。大きさに圧倒されてしばらくポカンとそれを眺める。広い
なあ…………、掃除とか大変じゃないのか？

「いつまでも見とれてないで入るぞ」

父さんに促されて入り口の門をくぐる。この王宮にも非常事態の
ための門はあるらしい。無駄にでかいなどか思いつつくぐった俺は
それ以上のものに驚かされることになった。

「何……………これ？」

王宮に入っただけで目にいった巨大な建造物。

一見塔のようにも見えるそれは、その頂点を天に向かって伸ばしていた。所々にきらきらとした光が見える辺り、貴重な鉱石とかを埋め込んでいるのだらう。でも、これ何なの？と疑問を持ちたくなるほどの形状。

「あれはレアクタの塔と呼ばれててな、世界の魔力を集める働きをしているらしいぞ」

「らしい？確定してないのか？」

「その辺りはまだまだ研究中らしい。周りに行くとも魔力が回復するからそういう働きじゃないのかって仮定されてるけどな」

いい加減だなあ。もしこれが恐ろしい兵器だったらどうする気だよ。しかもその周りに王宮を築くって……。危機管理はどうなってるのかと問い詰めたい。

「ほら、行くぞ。上司に呼ばれてるんだからな。急がないと後の報復が怖い」

ぶるつと身を震わせながら青い顔になる父さん。え？そこまで怖い人なの？俺会つのが凄く怖くなってきたんだけど。

ほらほらと急かす父さんに不安を覚えながらもその上司の部屋へ向かう俺たちだった。

二人して目的の部屋に並ぶ。

「將軍、入りますよ」

コンコンとノックをして相手の返事も待たずにドアを開ける父さん。あのさ、普通は相手の返事待つんだよ？

父さんの不作法に呆れながら入ると、突然飛来する殺気に身を捻る。

「危ね!?!」

カカカッ!!--と壁に突き刺さる複数の飛来物。その正体は先を尖らせた棒、つまるところ矢だった。

「隙あり!!--」

「何!?!」

女性のかげ声と共に再び迫る殺気。身を屈めることでそれをかろうじて避けたが、俺の真上を通り過ぎたそれはドゴオンッ!!--と音を立てて後ろの壁へ埋まっていた。

「へ？」

突然の事態にフリーズする頭。え？矢つて刺さることはあっても、埋まることつてないよね？ありえないよね？絶対にありえないよね？大切なことなので二回言いました。

しかし、それはしっかりと壁に埋まっている。

「將軍！！いきなり何やつてるんですか！？」

「君の息子をつい試したくなってな、許せ」

「そんな軽いノリで言われても俺は納得しませんよ？」

まじまじと壁を眺める俺の背後で父さんと誰かが言い合っている。多分將軍とかいう人だろう。うん、流石父さんの上司だ。無茶苦茶に更に磨きがかかっている。自分の部下の息子を射るってどんな神経してるんだか。

「まったく、クレスは最近怒りっぽいのではないか？カルシウムが足りてない証拠だぞ」

「誰のせいだと思ってるんです！？………はあ、もういいです。何言っても無駄な気がしてきました」

「ああ、私に何か言うくらいなら別のことにエネルギーを回した方がよっぽど有意義だ」

「いや、そんな自信満々に言い切られても……。さて、ジーク」

「はい、分かってます父さん。ジーク・フェレンデュラです」

「私は君の父親の上司でメリーさんだ」

「分かりました、メリーさん。よろしくお願いします」

「へ……？」

一瞬間抜けな顔になってわたわたと慌てだした目の前の女性。恐らく名前に突っ込んでくれるだろうかと期待していたんだろう。だが……、俺は敢えてそれをスルーする！！

「え、あ、いや、その、それは私の名前ではなくてだな」

「はい」

「それでだな、私の本当の名前はニーナ・アレステスと言う」

「分かりました、ニーナさんですね」

「ああ。それでさっきの名前だが、君のツツコミ力を試そうとしてだな……。まあ、そういうことだ。それより笑うな、クレス！あと息子のツツコミ教育がなっていないんじゃないのか？」

視界の端で必死に笑いを堪える父さんをキツと睨みつけるニーナさん。というかツツコミ教育って……、何それ見てみたい。父さんはニーナさんに睨まれても依然として笑いを漏らしていた。

「まったく、ツツコミの父の息子だから少しは期待してたんだが……」
「勝手に人をわけの分からないものに仕立て上げないでください」

ニーナさんは仕方ないとばかりにため息を吐くと、ズイと俺に詰め寄ってきた。

「ジーク君、実はこの王宮には七不思議があつてだな」

うわ、なんかこの人語り出したよ。

「増える階段、夜な夜な聞こえる女の声、私の部屋の前のトラップ」

最後怪談じゃねえ！？しかも、部屋の前にトラップあつたのかよ
！！

「仕事に狂う文官達、街角のゼリー有名店のゼリー争奪戦、皇妃の
若作りの噂」

どれもただ物事並べてるだけの上に、最後は別の意味で滅茶苦茶
怖え…。

「そして…」

ゴクリと息を呑む。だが、決してそれは怪談が怖いわけじゃない。
どんなボケを振ってくるかって恐怖だ。思わず突っ込めば俺の負
け。耐えきれば俺の……、勝ちだ！！

「この私だ」

「あんたかーっ!！」

思わず叫び声を上げる。

「そもそも七不思議の八割が人為的なものってどうなんだよ!? もはや七不思議として成り立っていない上に不自然すぎる! !途中危険すぎるワードもあったし、七不思議の最後を飾るのがアンタっておかしすぎるだろ! !」

はあはあと荒い息を吐く俺に対して、にやあつと嫌な笑いを浮かべるニーナさん。あ……、しまった。面倒な人に目を付けられた。

「及第点だな。お前の息子もなかなかのツッコミ師じゃないか」
「もう何も言いますまい……」

父さんは諦めきつてため息を吐いただけに留まった。

「さて、ジーク。模擬戦をしよう、準備をするぞ」
「え? は? どういうことです?」
「やっぱやるんですか……」

ちよつと待て、父さん! !今やっぱって言った? 今やっぱって言ったよな? この状況は予想できることだったってことだな?

クソッ！！これは罠だ！！これは父さんとニーナさんが俺を陥れるために作った罠だ！！

「ジーク、俺から言えるのはこれだけだ……。絶対に死ぬな」

ええええええ！？死ぬほどなの！？天然チートの父さんが死ぬなって言うほどの猛者なの！？それどんなチート！？

「じゃ、レツツゴー」

「さ、最悪だ……」

機嫌とやる気が急降下していく俺に対してニーナさんは上機嫌で俺の襟首を持って引きずっていくのだった。

第4話 そのフラグをぶち壊すー!!あ、やっぱり無理でした(後書き)

11 / 2 微妙にry。

第5話 俺の両足が真っ赤に燃える！！（いや、本当に燃えたりしませんよっ

どうも、博麗まんじゅうです。

タグにバトルってついてるけど……、

上手く書けませんでした、すみません m ((m

難しいですよね……、本当。

では本編どうぞ。

第5話

俺の両足が真っ赤に燃える！！（いや、本当に燃えたりしませんよっ

おかしいな、俺は顔見せに王宮へ来たはずなんだが……、

「さあ、どこからでもかかってこい！」

なんで闘技場に父さんの上司のニーナさんと立ってるんだろう？
しかもニーナさんは本気で殺る気満々だし。

俺はうんざり思いながらも右手に握る両刃剣を構えた。局所につ
けられた防具がチャリと音を立てる。どれもこのもので嫌がる俺
に無理矢理ニーナさんが付けたものだ。

ニーナさんは双剣を両手に構えていて腰に矢筒を装着している。
弓の名手なのに何故に双剣？

「ふっふっふ、何故私が双剣を構えているのか不思議に思っている
な」

俺の訝しげな表情を読み取ったのか、口端を僅かに吊り上げて笑
った。

「それはな…、どういふことだよ!」

ニーナさんが言い終わると同時に飛来する5本の矢。体を少しだけ傾けやり過ごす。ニーナさんの持っていた双剣は弓に変わっていた。なるほど、分裂と合体が可能ってわけね!!

「まだ終わりじゃないぞ!」

次々と飛んでくる矢の嵐。やっぱ早え…!だが、まだ様子見でもいける。

自分に当たりそうになる矢だけを剣で打ち落とし残りは避けていく。

「懐がから空きだな」

目の前にいきなり出現したニーナさんに驚きつつも剣をすぐさま、打ち付けられる双剣に合わせて水平に構える。

ドンツと重い一撃。チートであるはずのこの体を圧倒する力は少なからず俺の精神に衝撃を与えた。

「なんてパワーだよ。あんた本当に人間か?」

「人かと聞かれれば人だが、人間ではないな」

なぞなぞのような一瞬だけ考え込むが、その隙を突かれる。

「戦いに考え事は禁物だぞ！」

腹部に激痛が走り、双剣を受けている剣の力が弱まってしまった。二ーナさんがそれを見逃すはずもなく、双剣で剣を弾き飛ばし回し蹴りを放ってきた。

痛みに耐えている俺の体がそれに反応できるはずもなく、壁まで吹き飛ばされたたかに背中を打ち付ける。

「……………いつてえ」

どんな脚力してんだか。局所につけていた防具は既にボロボロで役にたちそうにもない。無茶苦茶だな、あの人。

「何だ？もうギブアップか？」

「まさか！」

俺は跳ね起き、防具を全て外す。

「いいのか？下手すれば死ぬぞ？」

「死なないよ、俺はまだやることいっぱい残ってるし」

様子見はもう終わりだ。そんなことしてたら冗談抜きで殺される。
この人の辞書には手加減なんて文字はなさそうだからな。

「む、本気か」

雰囲気が変わった俺を見て警戒を深めるニーナさん。
出す力は全力。今まで鍛えた力をフルに利用する。故に…、

「これでも喰らつとけえ!!」

剣などという荷物はいらぬ。

「正気かお前!?!」

戦いの最中でありながら呆れ声をあげる。
だが、まだ剣の習練をしていない俺にとって剣はただの荷物であり役に立たないものだ。

「正気だって言ったらどうする?」
「…………!?!」

足に魔力を流し、身体強化をかけニーナさんの背後に回る。後ろを振り向いたニーナさんは驚いた顔をしていたが、次の瞬間には楽しげなものにならっていた。

「いいぞ、最高だ。もっと私を楽しませてくれ！」

なんて戦闘狂^{バトルジャンキー}。だが、そんなことは今の俺にとっては瑣末事。下からニーナさんを蹴り上げる。それを左手の剣で迎え撃つ。しかし、切られるはずの靴は切られることなく甲高い音をたてて剣を弾いた。

「弾かれた!？」

「鉄板入りの特別製ですよ!!」

両手を地につけ、もう片方の足でカポエイラキックをかます。しかし、それすらも剣の腹で防がれる。

「なるほどな、剣は使えないか。しかも威力が制限される手ではなく、足を使うか」

一旦距離をとり、ニーナさんは呟いた。

本来、戦いにおいて手と足のどちらが力が有利かというと、足の方が強い。なぜなら、手よりも足の方が圧倒的にリーチが長く、力

の入り方も違うからだ。

「しかし、足では動きに制限がかかるんじゃないのか？」

確かに、足は手に比べ動かし方が困難だ。余程習練を重ねなければ自在に足を動かすことは難しい。だけど…、

「それは素人の話でしょう？」

足に力を入れて跳躍し、某仮面の人よろしく蹴りを放つ。

「キーイック!!」

「空中では身動きがとれないんじゃないのか！」

体を捻ってかわそうとしたニーナさんだったが、顔色を変えて一気に横へと飛びすさった。

派手な音と土煙を起こしながら俺は地面に文字通り着弾した。

「風の魔法か？」

「後明察」

俺が着地した地点は幾つもの切り傷が刻まれている。○イ○ーキツクに風の魔法を纏わせることによって、知らず知らずのうちにダ

メージを与えるという荒業だ。直撃などすればひとたまりもない。
ニーナさんは両手に握っていた双剣を弓の形に戻し、矢を番えた。

「それが当たるとでも？」

「当たるよ。必ずこの矢は君に命中する」

絶対的な自信。高速で移動してしまえば直線的な軌道しか描かない矢は当たらない。だというのにこの言い切りようは何か裏を感じさせる。

「だけど、こちらから動かなければ相手の思う壺。ならば、多少のリスクがあつたとしても…！」

「攻めに転じる…!!！」

今度は背後ではなく、横からの一撃。矢を番えている状態ならば
そう易々とは動けまい。

だが、その確信は予想外の一撃に覆されることになる。

「フラグメンツゲート
門の決片」

頬を掠る感触。次の瞬間、俺は次々と襲い掛かる上からの衝撃に
気を動転させた。俺の上部からは矢が絶え間無く降り注いでいた。
すぐに退避するが既に何本も矢が刺さっていた。

どづいつことだ！？あの向きに矢は放ったのなら上方から落ちてくるなんてありえない。まさか…！？

「君も油断していたな。私が何の策もなく矢を放つと思うか？」

ニヤツと笑う弓の名手。

そうかい、そづいつことか。

「空間の魔法だな…」

魔法。

それは神秘の結晶であり、神々の奇跡。要するに、未知の技術。世界に存在するオドやらマナやらを利用し、神秘を現実に顕現させる。

更に魔法には全部で8種類の属性がある。基礎魔法の火、水、風、土。上位魔法の光、闇。古代魔法の時、空間。魔法の難易度は基礎上位、古代の順に上がってゆき、今では古代魔法を使える人は極小数らしい。

そして、ニーナさんは空間の魔法を使ったのだ。

恐らく、ニーナさんの目の前の空間と俺が来るであろう場所の上方の空間を無理矢理繋いだのだろう。

「本当…、無茶苦茶だ…」

失血のせいかはたまた別の理由なのか、体にけだるさを感じる。それに指の先が痺れてきた。

「驚いた、まだ動けるのか。当たればすぐに痺れて動けなくなる毒を仕込んでおいたのだが」

そんなもの使うな。

そう言おうとして、自分の体が地に倒れていることに気付く。ああ、もう無理。ちょっと休ませてもらうよ。

「うむ、しっかり休むといいぞ」

何故か嬉しそうに言うニーナさんの声を最後に俺は意識を闇に手放した。

S i d e 二 ー ナ ・ ア レ ス テ ス

すつすつと寝息をたてる少年を背中に背負う。こうして寝顔を見ると可愛いものだ。

年甲斐もなく調子にのってつい本気になってしまったが、まあ楽しかったからよしとしよう。

正直な話、ジークがここまでやれるとは思わなかった。精々二、三撃耐えればそこそ良い方と考えていたんだが、あろうことか少

年は私に本気の一部を引き出させた。

『門の決片』なんて使ったのはいつ以来だろうか？確か、この少年の父親のクレスを相手にした時が最後だったはず。

あいつも相当強かったからな。その時も全力全開で相手にして、後でポロポロになったクレスを申し訳なく思ったな。無論、後悔も反省もしていないが。

「どうでした、私の息子は？」

先程の試合を見ていたのか、物影から姿を現すクレス。苦渋にまみれた表情は自分の息子を心配しているためか。

「中々な実力だったとだけ伝えておこう。かつてのお前ぐらい強かったぞ」

「そうですか…」

「何だ？嬉しくないのか？」

クレスは「いえね」と渋い口調で話しはじめた。

「力を持つと人は増長しますからね。かつての私のように」

「お前の黒歴史なアレか」

「身も蓋も無い言い方ですね。まあ実際そうなんですけど。力を持つならば、それに相応しい精神を持たなければ力に吞まれる。私はそれが恐いんですよ」

「この子がそうなるか？」

「ええ。大丈夫だろうとは思ってますけど、どうしても心配だね」
「何だ、そんなことが」

確かにクレスの言いたいことも分かる。力の魅力は絶大だ。心が弱ければ、力に依存し力に振り回される。

「この子は大丈夫だよ」

「何で分かるんです？」

「この子の中には何かは分からないが光り輝くモノがあるようだ。」

この子がそれを失わない限りはこの子も力に呑まれることはないよ」

「それは一体？」

「さあな。私も万能じゃない、それが何かまでは分かりはしないさ」

私はクレスにウインクして言うてみせる。クレスはそれに少しだけ安心したような表情を見せた。

「將軍、その年でウインクはどうかと思いますよ」

「クレス、一度死んでこい」

私の禁句を口にしたクレスに、私は思い切りいい笑顔で全力の魔法を放ったのだった。

第5話

俺の両足が真っ赤に燃える！！（いや、本当に燃えたりしませんよっ

皆さん、この小説をご覧になってくださってありがとうございます。

皆様のご期待（あるかどうかはわかりませんが）に応えられるように頑張っていきたいと思ってます。

よろしくお願いします。

1 / 2 微妙に（ry。名前が間違っっててちょっと焦った。

第6話

俺は正義の味方なんかじゃない！！ただあいつ等がむかついただけだ

どうも、博麗まんじゅうです。

なんと総合ユニークが10000を、総合PVは50000を越えていました！！読者の皆様ありがとうございました！！

正直な話、ここまでとは思ってなかったので驚きです。

ただ、上には上がいるものです。まだまだ未熟な身ですが、どうぞよろしくおねがいます。

さて、もう一つお知らせしたいことがあるのですが……、近々スケジュールに私用が入りまくってるので更新ペースが遅くなるかもです。すみません、ご容赦ください。ただ、なるべく早く更新できるように頑張ろうと思います。

長文すみませんでした。それでは本編どうぞ。

第6話

俺は正義の味方なんかじゃない！！ただあいつ等がむかついただけだ

……ううん、俺は…。

未だはつきりしない頭を振りながら今の状況を確認する。周囲は一面の闇、光の存在はなく、ただ全ては黒で塗りつぶされた世界とというのが一番ふさわしいだろうか。

「何処だ、ここ……」

「ジーク……」

「……！？母さん！？」

背後から聞こえる母さんの声。振り向けば確かにそこに母さんがいた。しかし、格好がおかしい。母さんは昔見せてもらった魔法隊の服を纏まとっている。しかも、右手にはかつて使っていた杖が握られている。何でこんな格好なんだ？そもそもなんでこんなわけの分からないところに母さんがいるんだ？母さんの固有結界こゆうけっかいとか？

「まさかジークが負けてしまうとは思いませんでした…」

「あ、いや、俺が油断してたから……」

目を伏せ、物憂げな表情を浮かべる。俺もそれにつられて複雑な顔になった。傲慢は慢心ごうまん まんしんを生み、それが負けに繋がる。以前修行してた時に俺の師匠に言われた言葉だ。俺もまだまだ修行が足りないってことだ。

「ですから、私は考えたのです。ジークの新たな鍛錬の方法を！」
「……はいいい？」

さっきまでの悲しげな表情は何処へやら。さっきと一転して喜色きしよく満面の母さんはピンツと人差し指を立てると、さも楽しそうに……、

「私の魔法を貴方の魔法で跳ね返すという鍛錬です！！」
「……………ゑ？」

死刑宣告を告げた。

「私がジークはまだ魔法が上手く使えてないと思います。模擬戦の時でも強化魔法と風の簡単な魔法しか使ってませんでしたし、もっと魔法の使い方が分かっていればあの時の矢も防げたと思います」
「確かにそうだけど……………」

魔法って術式を組み立てるところから始めないといけないから面倒くさいんだよね……………。強化魔法は凄く簡単なんだけど。

「分かっています、だからこそその修行です。ジークはまだ単一詠唱しか使えませんからね。この修行で一気に複合詠唱トシオまで使えるようになってもらいます」

「いや、それ無…」

「大丈夫です、人間死ぬ気でやればなんとかなるものですから。これから千くらい魔弾を打ちますから全部貴方の魔法で打ち消してくださいね。あ、私の魔弾は一発一発の魔力量が違う上に同じだけの魔力をつぎ込んだものじゃないと消えませんから」

「どんな無茶ぶり!?!」

楽しそうに言う母さんの頭上に現れ始める幾つもの魔弾の群れ達。しかも今から始めるのかよ!!俺まだ身体が…。

「レッツスタートです」

弾け飛ぶ魔弾。その速度は光速を越え、チートなこの身体でやっ
と目で追えることのできる。あ、これ詰んだわ。

「ぎゃあああああつ!!!!!!」

視界が目が眩みそうな光に覆われて、俺の意識はブラックアウトした。

「はっ！？……何だ、夢か……」

俺は気がつけばベッドの上で寝ていた。多分医務室なのだろう、棚の中には薬が陳列ちんれつしてあってその中から取って使ったのか、幾つかのビンが床に転がっていた。

「……嫌な夢を見た」

母さんの魔弾の群れなんて冗談じゃなく都市一つが滅ぶ威力だ。そんなものを土壇場どたんばの魔法で防げなんて無理にもほどがある。

………正夢とかじゃないよな？帰ったら母さんが鍛錬を始めましょうとか言ってきたら俺は逃げるぞ、問答無用で。

「お、起きたか」

ガチャツとドアを開けて入ってきたのはニーナさん。

俺はベッドから飛び降り、ニーナさんのもとまで歩いた。ニーナさんが使っていた痺れ薬はもう効力が切れたのか、身体は支障なく動いていた。

「あれからどのくらい経ちました？」

「まだ一時間といったところだな、時間はもう昼飯時だぞ」

「そうですね」

「それにしてももう身体は平気なのか？あれなら二日は寝込むと思っただが…」

子供相手にそんなもの使つなよ。

「もう平気ですよ、それよりこれで顔見せは終わりですよね？俺は王都へ行きたいのですが……」

「む、もつとゆっくり見ていく気はないのか？」

「ありませんね、王宮なんて見ても面白くないですし…、何より気になるところもありますし」

「そうか、なら仕方ない。行ってくるといい。ただし、夕刻までには戻ってくるのだぞ、その頃にはクレスも仕事が終わっているだろうからな」

「分かってます」

「ああ、あと明日には他の將軍への顔見せがあるからな、今日の内に存分に王都を楽しんでくると良い」

「………なんでそんな面倒なことになってるんです？」

「それは君が貴重な戦力の可能性だからだよ」

げえ、面倒くせえ。王宮騎士も将来の就職でアリなのかもしれないが、規則に縛られるのはちょっと考え物だからな。できれば、フアンタジーにありがちなギルドとかあればいいんだけど。ギルドなら小遣いも稼げるだろうし。

「ニーナさん、王都にギルドってありますか？」

「ああ、あるぞ。ギルドに行きたいのか？それなら君に王都の地図を渡しておこう。地図の読み方は分かるな」

「ええ、ありがとうございます」

「うん、なら私は自分の仕事に戻ることにしよう」

ひらひらと手を振ってニーナさんは医務室を出て行った。

よし、俺も出発しよう。

逸る気持ちを抑えながら俺はゆっくりと王都へ向かった。え？何でゆっくり行くのかって？それはもちろん周囲の評判を気にしているからだYO。HA・HA・HA！！

気にしなくてももう周りからは充分変人だと思われてるよ)

By 作者)

「む、今なんか変な電波を拾ったような……」

王都は広い。

地図を見て分かったことだが、王都の広さは軽く前世の県一つ分に及ぶようだ。しかも、人が多い上に店は似たようなものが多いから目印になりそうな変わった店は無い。それを解消するためか王都の中央に噴水があるのだが、まずそれを見つける事自体が困難だ。

さて、俺が何を言いたいか分かる人はいるだろうか？

「ここ……、何処だ？」

ただいま絶賛迷子中だ。

王宮を出てから三十分程度。ギルドを目指して歩いてきた筈の俺は、いつの間にか自分の位置が分からなくなっていた。人の流れに押し流されたというのもあるのだが、きつとこっちだろうと歩いていったのが悪かった。確かな指針を持たずに行動した俺は残念なことに、ご都合主義という恩恵にあずかることもなく迷子になってしまったのだった。

かくして、周りの店を見渡しながら位置を把握中なのだが、よく分からない。まさかこの年にもなって 前世+今世で少なくとも二十年はたってるだろう 地図が読めないなんて……。ううむ、自分の事ながら情けない。

「どうしたもんか……」

「……………！！！」

雑踏にかき消されそうな僅かな音。だが、この場には明らかに似つかわしくない悲鳴のような声。何故かは分からない、ただ不思議とそれが気になった。その微かな音をたどると、その音源は裏通りにあった。カツアゲかなんかか？

注意深く進んでいき、とある角を曲がったとき俺は驚きに目を見張った。

「やめてください！……」

「いいじゃねえかよ、どうせ嬢ちゃんも退屈してたんだろ？」

「俺等がかわいがつてやるよ、ギヒヒ」

「……………！離して！」

「ほどほどにしておけよ、そいつは計画で使うんだからな」

男三人が少女を囲んで下卑た笑い声をあげている。更にその外に軽蔑の眼差しでそいつらを見ながらも止めようとはしない青年が一人。見る限りあの少女を裏路地に連れ込んでイケナイことでもしようとしてるんだろ。

別段気にすることも無い、元の世界でもそついうのはあった。強者が弱者を一方的になぶる最悪の行為。見ていて胸くそ悪くなる。しかもその少女…、

「嫌あ！！誰かあ！！」

推定年齢が俺と同じ六歳程度。こんな少女を連れ込んだこの阿呆な大人達にこう言っつてやりたい。

「……………このロリコンどもめ」

もちろん声が漏れるような真似はしない。仮にあの少女を助けるとすれば、相手に気づかれずに救出、撃退するのが望ましい。俺は息を潜め、チャンスをうかがった。

「何だ、オメエやけに冷めてるじゃねえか」

「生憎僕は君たちのような性癖は持っていないんでね。計画を邪魔しない程度にするのなら勝手にするといいい」

「へっ！まあいい。俺等は目的を果たせればそれでいいからな」

「異常性癖は感心しないがね」

「言ってる」

男達の言動に頭を疑う。こんな世界じゃそんなの当たり前なのか？怯えたように身体を震わせる少女はその瞳に明らかな恐怖を宿していた。その姿がかつての俺と重なる。強者の暴力に怯え、なされるがままだった俺を。

ふうとため息を吐いて俺は全身に強化魔法をかけ、路地を確認する。俺が彼女を救い出せて尚かつ脱出が出来るコースを選定し、

「……………！！」

一気に走り抜ける。

迷うことはない、イメージするのは少女を助けることができたことのみ。

そのイメージに違うことなく少女の身体を抱え、路地を走り抜けた。

「ああ？何だ？」

「おい、あいつはどうした！！」

「ハア？何をわけの分かんねえこと…何！？」

「あそこだ！！あの餓鬼が連れてやがる！！」

「待てエ、餓鬼がア！！」

後ろから突然の少女の消失に驚く声が聞こえた。
だが、俺はそれを無視して走り続ける。今は安全地帯に向かうこ
とが先決だ。表路地へ出てしまえば奴らもそう手出しできまい。
両腕で抱えられている少女は大きく目を見張っていた。

「貴方は……」

「喋るな、口開けてると舌嚙むぞ」

強化魔法を重ねがけ、その場から跳躍する。表路地へ出るならば、
小道をちよいちよい行くより屋根に飛び移って抜けた方が早い。
数回壁を蹴り、屋根へと着地する。下からは男達の怒号が聞こえ
てくる。どうせただの罵倒だ。気にすることはないな、うん。

「さて、表路地はあつちか」

「あの……」

「うん？どうした？」

「貴方は誰ですか？」

「そうだな、とりあえず通りすがりの町人Aとでも名乗っておこう」

「ちよ、町人A？」

「気にすることないだろ、俺が誰かなんて。ここで重要なのは俺が
誰かではなく、助かったという結果を喜ぶことだ、アーユーオーケ
ー？」

「なんか誤魔化されてるような……」

屋根から屋根へと飛び移り、表路地の目前まで来る。脇の小道に降りて少女を地面におろした。わざわざ小道に降りたのは悪目立ちしないためだ。だって屋根からいきなり人が降りてきたら普通みんなそっちに意識が向くだろう？

「よし、この辺りなら大丈夫か？んじゃ、俺は用事があるからこの辺で……」

「待ってください！！！」

少女に静止の声をかけられて踏み出そうとした足を戻す。少女は自分の声が予想外に大きいことに気付いたのか、カアツと顔を赤らめていた。

「あの、貴方にこんなことを頼むのも変なんですけど」

ほっほっ。

「護衛に付いてくれませんか？」

な、なんだってー（棒）

第6話

俺は正義の味方なんかじゃない！！ただあいつ等がむかついただけだ

番外編 未知の報告書の魔金属が追加されました。

番外編 未知の報告書に魔法の詠唱についてが追加されました。

8 / 1 3 物語の矛盾を調整しました。

1 1 / 2 微妙に（ry。

第7話 護衛と用心棒ってどう違うんだろう？（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

えー、はじめに皆様ご愛読ありがとうございます。新たに評価をしてくださった方、そしてお気に入り登録をしてくださった方々、誠にありがとうございます。

まだまだ下手くそな身ですが、温かい目で見ていただければ幸いです。

そして、次は本編の諸事情ですが……、

予想外に手間取りました（ ; ）

ギルドってちょっと憧れるんですね。それで、『書くのも簡単だぜー』ってなめてたら開始5分くらいで挫折しました。私用も時間かかってたのでギリギリです。

まあ、愚痴はこの辺りにして…。

それでは、本編どうぞ。

第7話 護衛と用心棒ってどう違うんだろっ？

小道で向き合って固まる俺と、顔を真っ赤にさせてうるうるとした瞳でこちらを見ている少女。そんな円らかな瞳で見ないでくれ！！俺のHPはもう零だ！！

端から見れば、少女が俺に告白したとでも見えそうな構図だが、残念ながらそんな見ていてニヤニヤできるようなものじゃない。

「俺が、護衛？」

「お願いします！ひよっとしたらまた襲われるかもしれないんです」「何で俺？」

「子供なのにあんな複数人の大人達から私を連れ出せることが出来るほどの実力を見ましたし…、大人はあまり信用出来ないのです」

それ言ったら俺も同じような気がするが……。

こいつ本当に大丈夫か？ひよっとしたらその子供が仕組んだ可能性だって否定しきれないってのに。危なっかしく思っている間にも、少女の口は言葉を紡ぐ。

「お願いします、払えるものなら何でも払いますから！…」
「じゃあ身体」

「うっ………」

こともなげにそう言うと、彼女は顔をただでさえ真っ赤な顔をさらに紅潮させ、頭から蒸気でも出るんじゃないかと思いきうな勢いだっただ。

「冗談だよ、俺はそんなことしやしない」

「へ……？ 冗談？」

「つたく、俺は正義の味方じゃないんだがな……」

少女を助けたのだから見てて胸くそ悪くなっただけだし、彼女が自分のトラウマとかぶったからでただの自己満足なだけだ。

「いいよ、その護衛引き受けた。ただ……君の護衛の途中で寄りたところがあるから寄っていいか？」

「あ、はい。構いません。こちらこそお願いします」

「んじゃあ、行くぞ」

表路地へ出ると、小道の人の少なさが嘘のように人が溢れかえっていた。見ただけで悪酔いしそうだ。

「あ、先に俺の用事を済ませていいか？」

「用事ってなんですか？」

首を傾げ、小動物のような動きをする少女。愛玩動物として愛でるのはいいかもしれないな。それでも、あの男達はどうかと思うけどな!!……はっ!!? いかんいかん、人を愛玩動物として愛でるだなんてどうかしてる。

「ギルドへ行きたいんだ……ってそういやここ何処だ? ただでさえ迷子だったのに……」

くそお。どうすんだ、これ。下手すりゃ今日中に辿り着けるかどうか……。

「あの、ギルドならあっちですよ?」

思考の海に沈む俺を引きずりあげたのは意外なことに少女の言葉だった。

少女は俺が向いている方向とは反対の方向を指差していた。

そうか!! 今の俺には少女という強力な味方がいるじゃないか! しかもギルドの道も分かってるっぽいし。これはラッキーだ。

「じゃあ案内してもらっていいか? 俺は今日ここへ来たばかりかでも分からないんだ」

「ええ、いいですよ」

ニコツと笑って何故か俺と手を繋ぎ、歩いていく少女。そりゃさつきあったことがアレだから心細いのは分かるけどなにも手を握らなくても…。

さつきまでは状況が状況だったから全く意識していなかったが、よくよく見れば少女は同年代の女子達よりも、一際綺麗だった。垢抜けた容姿は自然と人の目を引き、結果的に彼女も手を引かれていく俺も町民に注目されていた。なにこの羞恥プレイ？

「……………何故手を引くんだ？」

「迷子になっちゃいますよ？」

「……………」

最強の切り札を使われ、黙るしかない俺。ま、別にいいけどさ…。迷子になるよりは…。

はあとため息を吐きながら俺はなされるがままに手を引かれたのだった。

「ここがギルドです」

「へえ……………、ここがねえ……………」

目の前の大きな建物を見上げる。王宮よりは小さいが、それでも優に広いそこは多くの人。ギルドにいるんだから多分冒険者がほ

とんどだろう によって埋め尽くされていた。

「ギルドって登録いるよな？」

「ええ、受付で登録はできますよ」

「で、受付は何処だ？」

「あ、それならあっちです」

「ちよっくら行ってくるわ。お前どうする？」

「私はここで待ってます」

「あいよ」

受付へ向かい、何人かいる受付嬢のうちの一人に話しかける。

「登録したいんだが…」

「あ、はい。冒険者の登録ですね？それならこの紙に必要事項をお書きください」

渡された紙には氏名、性別、年齢、得意武器、魔法の使用が可能かどうかを記入するための欄があった。ここで面白可笑しく書いてもいいんだが、後で後悔しそうなので真面目に書くことにする。

「できたぞ」

「はい、ちよっと待ってくださいね？」

俺から受け取った紙を、近くにある機械に通す。すると、今度は

反対側に置かれている機械からカードのようなものが出てきた。受付嬢はそれを取ると、俺に差し出す。

「はい、どうぞ。これが貴方のギルドカードです。紛失したら再発行に別料金がいりますのでご注意ください」

「はいはい」

「ギルドの説明はどうしますか？」

「頼む」

「はい。えー、コホン、ギルドでは町民や国から依頼されたクエストを受注することが出来ます。クエストには鉱石の採取といった採集クエスト、魔物の討伐といった狩猟クエスト、盗賊の撃退といった特別クエスト、行商人などの護衛クエストがあります。どれも難易度が設定されており、難しい順にSSS、SS、S、A、B、C、D、E、Fとなっていて、報酬もレベルが高くなっていきます。自分のランクより一つ上のクエストまで受けることが出来ます。ジークさんのランクは登録をしたばかりなのでランクはFです。Eまでのクエストを受けることが出来ますが、失敗した場合にはそれなりのペナルティがあると思ってください。ペナルティは様々なものがあるのです、ここでは割愛させていただきますね？」

「了解」

やるなら狩猟クエストからだよな。手っ取り早いし。モンスター狩るだけでいいんだからな。

「さらに注意して欲しいのがペナルティの数が多いようだと言ランクを下げられることです。しかし、クエストの成功が多いと言ランクは上がっていきます。ですので、なるべく自分に合ったクエストをし

てくださいね。他に何か質問とかはありますか？」
「いや、ひとま「何ですか貴方達！！やめてください！！」……またか」

受付嬢に返事をしようとした矢先に聞こえた、聞き覚えのある拒絶の声。

ぐるっと振り返ると、あの少女はギルドのメンバーらしき男達に絡まれていた。なんだ、あいつは。スキルとして『絡まれやすい』人脈-10』みたいなのが付いてんのか？いくら絡まれやすいって言っても限度があるだろ…。

「いいじゃねえか。俺たちに酌してくれよ」

「お断りします。私は人を待つてゐるんです、貴方達に何かしてあげる義理はありません」

「随分とじゃじゃ馬だな。お前に乗りこなせるのか？」

「こつこつにはコツがあるんだよ。こつや「とりあえず吹き飛ばさぶべらっ！！」」

約束をした以上見過ごすわけにはいかない。仕方なく少女を助けるために少女に触ろうとした男を蹴り飛ばす。男は壁まで吹き飛ばんで、本来なら外からの異物から中の人を守るための壁を皮肉なことに内側から破壊していった。

「つたく、面倒事を次から次へと呼ぶのな、お前」

「ち！違います！！」

「はえ…、仕事が増える…」

「大丈夫か、ガル君！！」
「ガキイ！！何しやがる！！」

俺の突然の乱入に腹を立て怒鳴り散らす男達。どこにでもいるよな、こつこつやつらは…。

「見て分からないか？俺はこいつの護衛を頼まれていてね。害となる敵を排除しなければならぬからな」

「デメエ…！！」

俺の言葉に激昂し、青筋を立てる男達。周りの人たちは荒事が好きなのか、『もっとやれ』と囁し立てたり賭けをしたりしていて、あくまで止める様子は見られなかった。ギルドの方も我関せずといった感じだ。

「なあ、受付嬢。私闘とかってやってもいいのか？」
「構いませんが、ギルドの損害は払ってもらいますよ」
「……初めから止めるよ」

まるで何度も心えてきたと言わんばかりにすらすらと言葉を並べる受付嬢。何度も同じ事を繰り返してきたんだろつな…。後片付けにいそしむギルドの皆さんが、ありありと目に浮かぶ。

「俺たち『デストロイヤー紅蓮の破壊者』に刃向かったことを後悔させてやるよ、ガキ」

「後で泣いて謝っても許さねえからな」

「後で泣きを見るのはどっちだか」

新たな厄介事にはあとため息を吐いて俺は男達に向き合った。

第7話 護衛と用心棒ってどつ違うんだろっ？ (後書き)

11 / 2 微妙に (ry)。

第8話

よく見ても中二病です、本当にありがとうございますと言っていました。

(前書き)

どうも。遅れてすみません、博麗まんじゅうです。

よくやく続きを書いたのでUPします。

内容が若干中二病のような……、気のせいかな。

第8話 どう見ても中二病です、本当にありがどうございました。

「やれやれ…、何でも厄介事が向こうから来てくれるんだか…。
おまけにデストロイヤーってどこの中二病だよ」

「何わけ分かんねえこと言ってるんだ!!」

これ見よがしにため息を吐いてみせると、ヤクザもどきの冒険者は激怒し掴みかからんばかりの勢いだ。カルシウム足りてないんじゃないのか？

ひとまずカードを懐に仕舞い、構えを取る。構えは脚術を使う俺専用の構え。

左手右足を前面に、右手左足を後面に。一見すれば妙な構えだが、最速の先制攻撃を入れるのに研究した果ての構えがこれだ。とは言っても改良の余地はまだまだあるが。

武器がない今使えるのものは俺の身体のみ。まあもつとも、この程度の相手なら不足は無いか。

「さて、行くぞ」

身体に少しだけ捻りを入れ、跳躍する。と、同時に右足を軸に回転し左足に重心を乗せる。自然と身体は重心に引っ張られ、容赦の

無い一撃を冒険者もどきのヤクザ 面倒くさいから以下『もどき』
に喰らわせる。」

「ぐへえっ…!？」

速さは最速、避けられるはずもない。

『もどき』は無様に吹き飛び、先の冒険者と同じように壁まで吹き飛ばされる。

「何しやがったガキ!!」

「何をしたって…、普通に蹴っただけだが。今の見てただろう」

呆れ口調で言う俺に対し、ますます激昂する『もどき』。再びため息を吐き、構えを取る。流石に『もどき』も警戒したのか雰囲気
を戦士のそれに変える。

相手の隙を伺い…、両足に力を込め、

「そら…!」

全力の拳を叩き込む。

「なっ…!？」

やつはまた足の一撃が来るとでも思っていたのか、一瞬だけ目を見張るがすぐに腕をクロスさせ防御の態勢を取る。ガツと鈍い音を立て、数センチ後ろに下がっただけに留まる。ほう、最後のヤツは少しは骨があるみたいだな。

「せい！」

身体を屈め、足払いをかける。が、『もどき』の片足に阻まれ不発に終わる。

「調子にのるんじゃないねえ！！」

体勢が危うい俺は怒声と共に繰り出されるそれを避けることが出来ず、そのまま身に受ける。二回三回と地面をバウンドし、床どころかギルドの外に投げ出される。通行人達が驚いた表情でこちらを見ていた。

「はっ！！所詮はガキってことか。図にのるからだ馬鹿野郎」

中から聞こえてくる罵声。通行人はそれで何か察したのか俺に近寄り「大丈夫か」と声をかける。

やれやれ、目立たないつもりだったのに大事になってるな、こりゃ。いや、私闘になってからもう目立ってるか。

「図にのってんのはお前だろつと」

身体を跳ね起こし、首を鳴らす。

身体のあちこちを確かめ、身体に異常がないことを確認し、ゆっくりとした足取りでギルドへと歩く。途中で通行人が何か叫んでいたが関係ない。どうせ『刃向かうだけ無駄だ』だの『やめておけ』だのと警告してるだけだろう。

「何勝ち誇ってるのかなあ、『もどき』？」

「デメエ…、まだ起き上がれんのかよ！！」

「当たり前だ。あんなしょっぱい一撃で俺をのそうなんざ百年早えよ」

笑って言っていると、額にいくつもの青筋を立てだした。こいつの堪忍袋の尾はもう限界だな。

「やるなら剣でも鎚でも持ってこいつての」

「……………なら、お望み通りにしてやるよ！！」

パンッ！！

『もどき』は両手を叩き、ゆっくりとそれを広げる。バチバチバチと両手の間から発生する火花。青白く輝くそれは何かの召喚を待ちわびるように弾けていた。

何だ？何が始まるんだ？ひよつとしてどっかの錬金術師みたく何か錬成すんのか？

「この【バンギス】でなあ！！」

振り上げられた一振りの鎚。

お世辞にもおしゃれとは言えない無骨な黒の塊に幾筋もの群青の線が引かれている。煌々と輝くそれはまるで……、

「…恐ろしいな。人の作ったモノじゃない…」

「あれは神器【バンギス】です！！触れればたちまちの内に切り刻まれ、致命傷を負わせると言われています！！絶対に触れないでください！！」

場外から飛ぶ少女の警告の声。その文の意味に愕然とする。

神器なんてものがあんのか……。やべえ、神器とか聞いてわくわくしてきた。今度それ探しに行こうかな。それなら材料面も何とかなりそうだ。武器を鍛え直すだけで作り直せるからな！！

あ、でもそうしたら武器に備わってる神性みたいなものが無くないか？うむう…、困った。

俺の沈黙を恐れと受け取ったかのか、『もどき』はニヤツと笑いを浮かべる。

「怖いのか、ガキ？そうだろうな、なんてっただってこいつは神器だからな。その辺の武器とはわけが違う」

ペラペラと何か話しているが、思考まっただ中の俺には聞こえない。したがって、俺はやつの話をスルーしているわけで……、

「聞いてんのか、ガキイ!!」

見れば、彼の怒りは頂点にあった。

「あ、わりい。聞いてなかった」

「…ぶつ殺す!!」

怒り任せに大槌を振るう。振るう速度は遅い。これなら見てから回避も余裕だろう。

そう、思っていた時期が俺にもありました。

ブシャアッ!!!

「……………!?!」

完全に避けた筈なのに吹き出る血しぶき。それは俺の身体の至る場所から居場所を求めるところにして流れ出ている。

それを見て、すぐさま距離をとる。

何だっつてんだ!?!俺は間違いなく完全に避けた。いや、待て。少

女は確か『触れたものを切り刻む』と言っていた。ならば、これは恐らく魔法。しかも、風の魔法！

「…鎌鼬、か。とんでもない代物だな。触れれば御陀仏、近づいても御陀仏ってことか」

『もどき』が触れても平気なのは武器が持ち主として認めているからだろうな。

「まずいな…。早く終わらせないと周りに被害が出る」

事実、先の一撃だけでもギルドの中は荒れ狂っていた。冒険者達は被害を受けないように端や二階に避難しているし、机はひっくり返され、物は散らかっている。少女は受付嬢に保護されているようだ。

ひとまずは無事ってところか。だけど、そう長く続けるわけにもいかない。

ならばどうするか？簡単な話だ。

「ターゲット田ツクオン
………目標確認」

その元凶を破壊してしまえばいい。

キラーフルバースト カウントダウン スタート
「必殺装填、秒読み、開始」

精神を落ち着かせ、敵を見据える。ヤツは大槌を振りかざしたままこちらへと向かっている。その目には計り知れない狂気。武器に意識を侵されたか？

いや、関係のないことは考えるな。俺が考えるのはヤツの【バンギス】の破壊のみ。

「3…」

右手を溜めるように後ろへ引き、意識を張り詰める。

『もどき』との距離は5メートル強。その凶器が俺へと迫る。

「2…」

大槌は盛大に風を起こし、目の前の敵を排除しようと旋風を巻き起こす。強化をしなければ立つてすらいられないほどの暴風。どうやら相手は俺が弱者に見えても容赦はしないらしい。暴風はどんどんと強くなっていく。

「1…」

大きく振り上げられる凶器の塊。それを打ち付けられる瞬間を狙

い…、

「イゲニツシヨウ
滅殺！！！！」

右の拳をたたき付ける。

「なっ！？」

驚愕の表情を浮かべる『もどき』。当たり前だ。一番警戒すべき部分に素手で触れているのだから。

故に振り抜いた右腕は既にボロボロ。一部は原形すら留めていない。だがコイツを壊すことの前には及ばない、気にすることもない事実。

「うおおおおっ！！！！」

感覚は皆無。既に壊れた右腕には痛みなど感じるはずもない。だからこそ、この右腕は神器に届く。ピシッとひび割れる音。それを引き金に神の力を宿した器はその力を失っていく。

「砕けるおおおお！！！！」

右腕に暴走しかねないほどの魔力を通す。
暴走しかねないほどの魔力は圧倒的力をもって、

「ば、馬鹿な…！？」

ガシヤァンッ！！
神の器を破壊した。

第8話

どう見ても中二病です、本当にありがとございました。

(後書き)

【番外編 未知の報告書】に新たな魔金属が追加されました。

【番外編 未知の報告書】に『神器とは?』、『ダンジョンについて』が追加されました。

【番外編 人物紹介】に最近の出来事、新たな人物が追加されました。

11/2 微妙に(r y)。

第9話 冒険者が なかまになりたそうに こちらを見ている！（前書き）

どうも、お久しぶりです、博麗まんじゅうです。

更新が遅れ気味になってしまつて本当にすみません。

言い訳をさせてもらつと、模試とか補習とか始まつたんですよ（
^；）

おかげで半日は学校に拘束されて、暑さのおかげでネタも考えられない状態です。いやね、熱いんですよ、本当に。

さて、愚痴もここまでにして、えー、皆様。この小説をご覧になつていただき誠にありがとうございます。

お気に入り登録してくれた方々や、評価をしてくださつてる方々も増えてきて、嬉しくはね回りそうな勢いです。

これからも頑張っていきますので応援よろしくお願いします。

第9話 冒険者が なかまになりたそうに こちらを見ている！

ガラスが割れるような音を響かせ、その姿を破片へと変えて床へ落ちていく【バンギス】。呆然としながらそれを眺める目の前の『もどき』、いや、呆然と見ているのは『もどき』だけではない。今の戦いを見ていた冒険者、果てはギルドの受付嬢や管理員までもがポカンと口を開け、食い入るように床の破片を見ていた。

「壊し…ちゃった。神器を壊しちゃった……」

少女がぼつりと呟く。それと同時に騒然とした冒険者達他。慌ただしくギルドの職員達は駆け回り、冒険者達はひそひそと話しだす。

そこまで驚くことか？形あるものはいつか壊れるって誰か偉い人が言ってたぞ、うん。

「……………は…え」

「は？」

「こいつは凄えー!!」

ガツと肩を掴まれ、後ろに仰け反りそうになる。物凄い形相で俺の体を揺らしながら俺の顔を見る『もどき』。や、やめる!! 気持ち悪くなるから!!

「おいダン!! 今の見てたか!？」

「まあ、戦いを見てたから今のも見てたわな」

鼻息荒く聞く『もどき』に対し、極めて冷静な口調でどう返せと言わんばかりに答える冒険者。そいつは別段驚いた様子もなく俺のことを見ていた。

「おい、坊主!! お前名前なんていうんだ!？」

「その前に離せ! 目が回りそうだ!」

ただ今も絶賛揺らされ中の俺はそろそろ限界を迎えそうだった。少女が居る手前、無様にも吐きたくはない。

「おっと、悪い悪い」

パツと手を離し俺を解放する。俺は二、三度深呼吸をして吐き気を押さえながら手の甲で額を拭った。危ねえ…、あともう少しで吐くところだったぜ。

「んで坊主、お前の名前はなんていうんだ？」

「ジーク、ジーク・フェレンデュラだ」

「俺はアレス・ガラードつつうんだ。さっきは悪かったな。酒も入ってたせいで正気じゃなかったんだ」

じゃあ、真つ昼間から酒を飲むなど言ってやりたいが、それを言うと話がこじれそうなので、心にとどめておく。

「嬢ちゃんも悪かったな。謝らせてくれ」

「あ、いえ。次からは気をつけてくださいね」

イイヒトダナー…。あつさりと終わらせてしまうのは心が広いせいかはたまたまの考えなしか。そんな単純に済むんなら警察いらなからな。あ、この世界は警察無かったっけ。代わりに別のがあるけど。

「つつか坊主。お前どうやって神器を壊した？俺は神なんて信じちゃいねえが、こんな代物を壊すなんて初めて見たぞ」

「それは俺も気になる」

「わ、私もです！」

いつの間にか会話に少女とダンと呼ばれた冒険者までが加わってくる。少女は話に置いて行かれないようにと一生懸命背伸びしているのが微笑ましい。

とは言っても簡単な話なんだよな。要は神器よりもでかい力の塊

をぶつけたただけだし。

「簡単な話なんだが…、物を壊すならどうすればいいかって知ってるか？」

「……………?」「」

「……………」

頭に疑問符を浮かべるアレスと少女。分かってないみたいだ。

ダンは顎に手を当て、真剣な顔で考えている。だから、そんな難しくないんだつつの。

「物に大きな力を加えてやりやいいのさ」

「……………??」「」

頭に更に疑問符を浮かべる二人。それとは対照的にダンは何かを思いついたようにハッと表情を変えた。

「つまり、神器に何か巨大な力の塊をぶつけたということか」

「ま、そういうことだ。今回は普通の腕力じゃ無理そうだったから魔力をぶつけたんだけどな」

魔力の制御が上手くなくとも、魔力を集約し、ぶつけるだけなら今の俺にもできる。

とはいっても、最終的には【バンギス】との根性比べだった。俺

が力つきののが早いか、【バンギス】が壊れるのが早いか。今回は俺が勝てたけど、次にやれと言われても絶対にやりたくない。懸けるものが命なのはあまりにもハイリスクだ。

「へえ……。つて、あ！？け、怪我してるじゃないですか！！」

突然叫び、俺の右腕を指差す少女。そういや怪我してたな。感覚無くなつてたからさっぱり忘れてたけど。

「ち、治療しなくちゃ！！」

「いや、別に平……」

「すみません！！メデイカルパックありませんか！？」

「だから俺は平……」

「黙っててください！！！」

有無を言わせない物言いに圧倒され黙るしかない俺。それを面白そうに見ているアレスとダン。アレスに至ってはぶるぶると肩を震わせていた。この野郎……！後で絶対にボコす。

椅子に座らされ、右腕を前に出すように促される。仕方なく言われるがままにする。

俺を座らせた少女は急いでポケットの中を探り回していた。そうして数十秒後に取り出したのは青色の宝石がはめ込まれた銀色の指輪。彼女はそれを右の薬指にはめると音無き言葉を紡ぎ出した。

魔法言語……、しかも高位魔法。

頭に過ぎる本で読んだ知識。高位魔法というのはその名の通り魔法で高いランクの魔法を指す。しかし、その魔法は難易度は高く、

「さて、そろそろここを出るか。お前も用事があんだろ？」

「え、あ、はい。雑貨屋へ行こうと思って…」

「場所は分かるか？自分で言うのもなんだが、俺はあまり頼りにならないぞ」

「大丈夫ですよ」

場所は分かっていますから、と言ってギルドの出口へ向かう少女。

「んじゃ、俺等は今行くわ。またな、おっさん達」

「誰がおっさんだ、誰が！！」

「これでもまだ二十代前半なんだがな…」

おっさん達に挨拶して追いかけてよと思うと踏み出した足を一旦止め、足下の【バンギス】の破片を眺める。

「なあ、アレスのおっさん。これもらっていいか？」

「あ？壊れたし別に構わんが……、何に使うんだ？」

「それはまたお楽しみってことで」

アレスの許可も貰ったので破片を懐にしまっ振りをしてスキマに放り込む。ん？何に使うのかって？そりゃアレスにも言ったけど、お楽しみだ。

「んじゃなー」

破片を拾い集めた俺は少女を追い、外へと出て行った。

sideアレス

つたく、最後の最後まで生意気なガキだったぜ。

だが、面白いもんは見れた。まさか、この世界に神器を、しかも素手でぶっ壊せる奴がいるなんて思いもしなかったぜ。

神器つてのは神が作ったとか言われる代物だからその耐久力は半端じゃない。もちろん、既存の鉱石や貴金属、魔金属にすら当てはまらない攻撃力の高さ、耐久性、魔法に対する防御力も兼ね備えている。

果たしてそんなモノが素手で壊れるのか？

答えは否。たとえどんな一撃だとしても神器を壊すことは不可能だ。

にも関わらず、あの坊主はそれをやり遂げちまった。

あいつは魔力の塊をぶつけたなんて言うが、それも無茶苦茶だ。

そもそも神器の魔力の包容力は異常だ。神器はそれぞれに魔力を宿しており、様々な特殊能力を発揮するが、その魔力の限界は無いのではないかと言われている。

そんなものを壊すだけの魔力量、考えるだけでも冷や汗ものだ。限界のない力を突破する無限、それほどの魔力をあの坊主は持っているんだからな。

敵に回せば、これほど怖いものはないが味方なら話は別だ。

これからのことを考えればぞくぞくするほどにわくわくしてくる。今までは退屈だったが、これからは楽しめそうだなア。

「おい、アレス」

「ああ？何だ、ダン？なんかあったのか？」

「いや、それなんだが」

「ダンには煮え切らない話し方で俺を一気に現実へと引き戻してくれやがった。」

「あいつ片付けとかせずつたぞ」

「辺りに散乱する机、椅子、食器、資料その他諸々。確かに、喧嘩をふっかけたのは俺だし、修理代も俺が払うべきだろう。だがな……！！！」

「片付けぐらい手伝えや坊主ウ！！！！！！」

「その後の片付けで俺達は日が暮れるまでたっぷりと手伝わされたぞ。」

「あの坊主、次会ったらただじゃおかねえぞ……！！」

第9話 冒険者が なかまになりたそうに こちらを見ている！（後書き）

えー、一言付け加えておきたいことが一言。

ジーク君の魔力量についてですが、なんか自分でも感じているのですがとんでもないことになってます。

「魔法と魔力量は修練したら増えるはずだよね？」、そう考える人も多いと思います。

これは幼少期にとある修行の成果で魔力量だけは異常になっているんです。

しかし、その修行中には簡単な魔法しか使いまくっていないので、魔法の熟練度は低いと言うことなんです。

一応付け足しておいた方がいいかと思い、付け足しておきました。

【番外編 未知の報告書】に『魔法のランクについて』が追加されました。

【番外編 未知の報告書】に新たな魔金属が追加されました。

【番外編 人物紹介】に新たな人物が追加されたようです。

11 / 2 微妙に（ry。

第10話 迷子？違うな、方向音痴といってくれ！（前書き）

どうもお久しぶりです、博麗まんじゅうです。

更新が遅れちゃって本当にすみません（<―>）

ネタが上がらないのと、予定が込んだりしてなかなか書けませんでした。心待ちにしていた方々（いるかどうかは甚だ疑問ですが）申し訳ありませんでした。

それと、新たに評価してくださった方々、そしてお気に入り登録をしてくださった方々誠にありがとうございます！

日々伸びて行く数字を見てニヤニヤ…ゲフンゲフン！！ニコニコと笑う毎日でございます。

では、前置きが長くなってしまいました、本編をどうぞ！

第10話 迷子？違うな、方向音痴といってくれ！

人が多い……。

少女の後を着いていきながらうんざりする。街を見たときから分かっていたが、いざ実感してみるともはや誰かの陰謀ではなからうかと疑いたくなる。

ギルドで多少時間は食ってしまったが、それでもまだ昼を少し過ぎたぐらいだ。今から昼飯を食おうとする人だっているだろう。そのせいか人は多い、本当に多い。大切なことなので二回言いました。果たしてきちんと雑貨屋へ着けるのだろうかと心配になり出した頃に、それは姿を現した。

「あ、あれですよジークさん」

「ん？何でお前が俺の名前知ってたんだ？」

「何でってさっきの話の時に聞きましたから」

「へえ、そうか」

「あ、私の名前はリリーです。覚えておいてくださいね？」

「覚えても次会わないんじゃない意味無い気がするがな……」

ぼそりと少女には聞こえないように呟く。聞かれたら聞かれたでまた面倒だからな。

「……………疲れてんのかな？店名がダソーに見える気がするんだが……………」
「……………？読み方が違うんですよ、あれはダイーではなくてデイソーと読むらしいですよ」

思い切りパチモノフラグですね、分かります。

しかも看板が元の世界のダソーに似てること似てること。全くの偶然なのか甚だ怪しく思えるが、まあ偶然なのだろう。多分……………。

「それじゃあ俺は外で待つてるから君は早く買い物……………」

そこまで言っ言葉を切る。少女は突然言葉を切った俺を不思議そうに見ていた。

よく思い出せ、俺。この子はちよつと目を離れた際に厄介な面倒事を引き連れてくる天然トラブルメーカーだ。そんなものを店の中に、しかも一人で放り込んだらどうなる？

「……………と思ったがやはり俺も着いて行こう。一応護衛だしな」

たつぷりと数十秒頭の中で吟味した後、俺は結局着いて行くことに決めた。

護衛だなんだとそれらしいことを言っているが、実際には面倒事に巻き込まれたくないというのが本音なのはここだけの秘密だ。

「へえ、中はそこそこじゃないか」

店舗の中に入ってざっと中を見回す。店自体が大きいせいで奥は見づらいが、結構物は揃っているようだ。服に羊皮紙、筆記道具があるかと思えば別の所には工具やアクセサリがあったり、薬瓶が陳列している様子を見ている途中に魔法の参考書が目に入ったりと、よく言えば物が揃っている店だった。

しかもそれら全ての物が銅貨1枚　前世で言う百円に当たる分の金額だな　の値段になっている。高いか安いかと聞かれれば「まあ安いんじゃないの?」と答える金額。面倒だからとここで一気に物を買っていく人にすればこれほど便利な店は無いだろう。

「こりゃ本当に前世のダ　ソーそっくりだな」

感心するどころか呆れすら感じる店の似具合。これはあれだな、こここの店長はちょっと向こうの世界の電波拾っちゃったんだ、きっと。その内、マイとか伊　丹とか高　屋とか出るかもな。

「って、またいなくなってるし」

ふと隣を見れば、そこにいたはずのリリーがいなくなっていた。普通に物を探しに行ったとかならいいんだが、また面倒事に巻き込まれてましたとかじゃ冗談にやらん。

仕方なく早々に目的を店の見物からリリーの搜索に切り替えて店内を歩き回る。参考書のコーナーを過ぎ、薬瓶の陳列コーナーを曲がり、帽子のコーナーを横に見ながら突き進む。むう……、いない。周りを見渡してリリーがいないことを確認して、移動を始める。洋服のコーナーを曲がり、農作業用具のコーナーを通り過ぎ、ペンと時計のコーナーの間を横切る。

さて……、

「ここはどこだ？」

適当に突き進んでリリーの搜索を試みた結果、見事に迷子になりました。

やべえ、搜索人が迷子とか笑われるネタにも程がある。とつとと脱出せねば！

しかし、今まで来た道が分からない。適当に回ってたから帰り道など覚えているはずも無く、その上どの通路も出口に見えてしまい、踏み出す勇氣もなくおろおろと立ち往生するのみ。

困ったものだと慌てながら周囲を見回していると、リリーが通路の合間から見えた。

見失わないうちに急いでそれを追う。大丈夫、道は一本道、迷うはずがないのさ！！

「おい、リリー！」

「あ、やっと見つけました。もう、どこ行ってたんですか？」

「悪い悪い。店の中見てたらいつの間にかリリーがそばにいないくな」

もちろんリリーが先に消えたことも、搜索してて迷ったことも言わない。男には黙っておかなければならないこともあるのさ…。

店の外に出ると、空はもう赤らみ始めていた。灼けるように赤くなつていく空、夜の帳が降りるのもそう遠くはない。

「さて、それじゃキミを送り届けますか。家はどこだ？」

「あ、えーと、その…、訳あって今は王宮に居るんです」

「へえ、俺も訳ありで王宮に戻らなきゃいけないんだ。それならちよつどいい、行く先も一緒だな」

幸いなことに行き先は同じ。時間も時間だし、せつかなので俺も街の探索は切り上げ少女の護衛ついでに王宮に帰ることにする。父さんの仕事もそろそろ終わっていてもいいはずだ。

少女の隣に立ち、肩を並べて歩く。本来なら護衛らしく後ろに控えるのが普通なのだが、少女はそれを望まず自分の隣にいるように言った。半ば強制的に。

時間も時間なせいか人は昼間に比べると少ない。俺に取ってはありがたいことだが、その一方で寂しさを少しだけ感じるのは何故だろう。

別に人に揺られるのが好きな訳ではない。大勢人が居る中に放り込まれるのは勘弁願いたいことだ。

だけど…、俺はいつの間にかこの街が好きになっていた。

なんというか、こう人が笑い合っているこの雰囲気が好きなのだ。はたとそれに気づき、やれやれとため息を吐く。

「……………？どうかしましたか？」

「いや、何でもない。新たな事実気づいただけだよ」

尋ねてくる少女に曖昧に答え、俺は空を見上げる。

なんやかんやと語るのは俺らしくない。俺は俺でこの世界を楽しめばいいだけのだから。

考えなければならぬ時が来たら、そのときに考えればいい。今はこうして楽しい時間を無邪気に過ごすのが賢明なのさ。

第10話 迷子？違うな、方向音痴といってくれ！（後書き）

『番外編 人物紹介』が更新されました。

『番外編 未知の報告書』に新たな魔金属が追加されたようです。

8 / 25 貨幣の価値に修正を入れました。詳しい説明はまた『番外編 未知の報告書』に追記しようと思います。

10 / 21 天屋 伊丹。インマイ

11 / 2 微妙に書き（ry。

第11話　む？なにやら怪しい影が……気のせいか。（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

……えー、そのですね。はい、毎回毎回更新遅くてすみません。

実はうちのパソコンのうちの一台が壊れちゃったっぽくて、使えないという事実

？（ ; ）

しかも別のパソコンは姉妹に占領されて中々使うに使えない状況（ ;

）

……どごしましゅoriz

第11話　む？なにやら怪しい影が……気のせいか。

あれから城に着いてリリーと別れた後、俺は初めに連れてこられた執務室に来ていた。むろん父さんを迎えに来たんだが……。何故だろう、扉の向こうからおどろおどろしい気配が漏れてきてるんだだけ。

さすがに何かあったのかと思いつつ扉を開けるとそこで思わぬ光景を目にした。

「ちゃっちゃと働け、阿呆が！！てめえの怠けっぷりは俺のところにも伝わって来てんだよ！」

「ええんっ！！バールの鬼い！！！」

金髪の青年が般若の如き形相でニーナさんに向かって怒鳴り声を上げていた。ニーナさんとはいうと泣く泣く机の上の書簡を片付けていた。というかこの書簡の量多すぎだろ。部屋の三分の二は埋まってるぞ。

「初はつからてめえがサボらなきゃ余裕で終わってたんだっつもの！！勝手に俺のせいにしてんじゃねえ！！！」

「いじわるうーっ！！！」

えんえんと大きな声で子供のように泣いている。キリツとした印象を持つていたので正直そんなところを見たのが意外だが、出会い頭のことを考えるとそついや感性は子供っぽいなと思直す。

このまま見ているのも面白いなと思いつつ声をかけようかどうか悩んでいると、先にニーナさんが気づいたらしくパアツと顔を明るくした。青年もその様子を訝しんで振り向いて俺と目が合った。ニーナさん表情豊か過ぎだろ。

「ほら、バール！私に客が来ているから仕事は他の者に……」

「却下だ。それと何なんだ、この坊主は？」

「うう…クレスの息子だよ、明日の顔合わせのために王都に来てるんだ」

「ほう、こいつがああクレスのねえ」

金髪の青年はじろじろと品定めするように俺の体を見た後にフンと鼻を鳴らした。

「まだまだガキじゃねえか。経験も浅そうだしこんなのが使えんのか？」

「まあそう言うな。期待の新人だよ」

俺のことを置いてけぼりで言葉を交わす二人。いい加減俺にも喋らせてほしいのですが。

俺の願いが通じたのか、『それはそうと』とニーナさんに用件を

尋ねられた。ちなみに書簡を整理する手は止まっではない。

「父さんを迎えに来たんですけど、どこにいますかね？」

「ああ、それなら隣の資料室にいるぞ。神妙な顔つきで昔の資料をひっくり返していたようだが……」

「ありがとうございます」

礼を言っ て隣の資料室に向かう。途中、視界の端で流れて席を立つとうとしていたニーナさんが青年にげんこつで殴られているのが見えたとが、華麗にスルーしてそのまま歩く。それにしても、あのニーナさんを殴ったり泣かせたりと一体あの青年は何者なんだろうな…。

父さんはすぐに見つけることが出来た。資料室に備え付けられている机で取っ て来た資料を開いて難しそうな顔でそれを眺めていた。

「やはりあれは……。いや、しかし……」

「何見てんの、父さん？」

「……………！？ジ、ジークか。いや、何でもない。昔の資料を見ていただけだからな」

俺の声に慌てて本を閉じる父さん。すぐに閉じられたからよくは分からなかったけれど、

何か伝承のようなものに見えた。

「……………?」

よほどのことがない限り隠し事をしない父さんにしては珍しく言葉を濁す。多少訝しげに思ったけれど、追求したところで素直に答えてくれそうにもないので気にしないことにする。

「もう仕事終わったかどうか聞きにきたんだけど?」

「仕事なら終わったよ。さて、宿に行くか。一部屋ぐらいなら空いてるだろうからな」

「……………宿とってなかったのか」

宿くらい予約しとけよとか思いながらやれやれとため息を吐く。

父さんは本を元の場所に戻しながらそれに肩を竦めて返した。

帰り際、ニーナさんと金髪に挨拶して帰ろうかと思っただが、修羅場のような雰囲気に進んで挨拶する気にもならずこそこそと二人して城を出た。

「はい、二人一部屋なら空いてますよ。お泊まりですか?」

「ああ、ここで泊りたいんだが…」

「ええと、それなら食事つきで銀貨3枚になります」

そっぴや剣とか作らなきゃいけないよなあ。王都でのことが落ち

着いたら家で作るか。材料は調達できたし。でもこれ何の魔金属なんだ？アレスが狂気に満ちてたっぽいからブラッデスかな？でも色からするとトリマデスっぽいんだよな…。

明らかに新人の雰囲気を出している受付嬢と父さんとの会話を見ながらつらつらとそんな事を考える。ちなみに銀貨は向こうの世界で言う一万円に相当する。つまり二人で一日一万円ってことだな。食事ありで一人五千円は中々安いんじゃないかと思う。

「これで」

「はい、確かに。それではこれにお泊まりになる方のお名前をお書きください。………、はい、受付完了です。それでは食事と浴場についてなんですけど、ご説明した方がよろしいですか？」

「ああ、頼む」

「かしこまりました。えー、ここ『エバーグリーン新緑の妖精』では一階にあります食堂で食事をとることが出来ます。朝食の時間は決まっていますので部屋にあるパンフレットを見てご確認ください。また夜には浴場を使っていたりすることもできますが、これも時間は決まっていますのでご確認ください。時間外の使用は認められませんから気をつけてくださいね。説明は以上です。何か質問はございますでしょうか？」

「いや、ない。ジークもいいな？」

「へ？あ、うん」

考え事に没頭していたせいで思わず間抜けな声で返事をしてしまった。受付嬢はクスクスと笑い、父さんは何とも言えない苦い顔をしている。え、いや、別にいいじゃん変な声でも。

「…フェレンデュラ様御一行の部屋は1285室となっております。ごゆっくりおくつろぎください」

未だ口元が震えている受付嬢から鍵を受け取り、自分の部屋へと向かう。ええと1285室は2階の階段近くみたいだ、うっし。階段に近いってよくない？すぐに外に出られるから俺は階段の近くとか好きなんだよな。あ、後で食堂の場所と浴場の場所を確認しないと。もちろん行くつもりだし。

部屋へ戻ったらまず風呂へ行こうとか思いつつ廊下ですれ違った人にぺこりと頭を下げる。相手もこちらに気付いてぺこりと頭を下げた。すれ違いの挨拶って大事だよな、挨拶はコミュニケーションの基本だしな、うん。……………あれ？

「……………？」

すれ違いざまに見た人の顔がどこかで見たことあるような……………。

「お、ロバートじゃないか」

「おや？旦那様もここに泊まっていたのですか」

見慣れた白い口ひげを揺らしながら驚いたように目の前の男性は目を見張った。

あ、ロバートさんじゃん。そりゃ見たことあるわけだわ、ハハハ。

「って何故に!？」

「何故と申されましても。奥様に紙を買ってこいとの用事を預かったでございます。行きは午前だったので平気なのですが、流石に帰る頃には夜になっていて危なかったのでやむなく泊まることにいたしました」

成る程、いつもの母さんの無茶ぶりですね、分かります。

付き合わされるロバートさんも可哀想だ。母さんってば用事があればすぐにロバートさんに頼むんだもん。たまには自分で行けと。そんなこと言ったら後が怖いから言わないけどさ。

「そうか、お前も大変だな。……おっと忘れていた。ロバート、伝言を頼めるか？」

「伝言でございますか？」

「ああ」

懐から手紙を取り出し、ロバートさんに渡す。渡すときに何か他にも渡していたようだ、こっそりと渡していたので分からなかった。何だろう？

「……………、他に何かございますか？」

「西の空に狼が出る可能性がある。気をつけるように言っておいてくれないか」

「……………!?!?分かりました。必ずお伝えしましょう」

表情が傍目から見ても激変したロバートさん。いつもの穏やかな笑みから一転、厳しい顔つきで手紙を受け取った。だけど、一体何が起きているのか分からない。

手紙を受け取ったロバートさんは「では」と言うと、廊下を歩いていった。その後、父さんに何だったのか聞いてみたが苦笑いするばかりで何も教えてくれなかった。

眠い……。外では鳥が元気に囀っている。

おはよう、諸君。あの後必要最低限なことを済ませて何事も起こることなく寝たんだが、今日の会議に出るってことで俺の予想以上に緊張していたらしい。ドキドキしていて中々寝付けなかった。ほら、遠足前日の小学生みたいな気分だ。もちろんその数分後には爆睡してたけどな！

「うう…、眩しい。誰か窓閉めてくれえ…、太陽の光で灰になりそうだ…」

「お前はいつから吸血鬼になったんだ…」

先に起きていたらしい父さんは洗面所から顔を出し、呆れたようにため息を吐いた。

実は俺は朝に弱いとは余談な話なんだがまあそれは置いておいて、ベッドから起き上がり支度をする。体内時計が朝食の時間はもうすぐだと告げているので、なるべく早く早く行動する。それでもいつもの半分くらいの遅さになっているが。

ちょうど顔を洗っているとカンカンカンとフライパンを叩く音が

する。この宿での朝飯の合図らしい。部屋にあったパンフレットで読んだことだ。

「急げえ…、朝飯はもうすぐだア……」

「俺としては今のお前に急いで貰いたいんだが」

父さんはもう準備が出来たらしく、いつもの騎士の服 王宮騎士は白をベースとした服の上に鎧を着込むのが正装らしい。だけど、今は鎧は外している を着て俺を待っていた。しかし、そう急かされたところで早く支度出来るわけでもないので、ゆったりとマイペースで準備を進めることにした。

第11話 む？なにやら怪しい影が……気のせいか。(後書き)

『番外編 未知の報告書』に「通貨」が追加されました。

11/2 微妙にry。

第12話 き、君はまさか……！？（前書き）

どうも、連続投稿です。

気合い入れて頑張ってみました！それでも駄文に変わりありません
けど）・・・（

あと活動報告なるものも書いてみてください。よろしかったらそちら
もどうぞ。

第12話 き、君はまさか……！？

時刻は午前十時過ぎ。將軍達の会議の真つ最中。

今の俺、極度の緊張状態、そしてだらだらと背中に冷や汗をかきながら場に漂っている威圧感に耐えております、はい。

俺の緊張が分かっているのかニヤニヤと笑って見ているニーナさん、小馬鹿にしたような表情で俺を見る昨日の金髪、ふむふむと俺を見て頷いている小柄な幼女、我閉せずとばかりに目を閉じ孤高の雰囲気をおっさん、チラツと一瞥しただけですぐに自分が読んでいる書物に目を戻す銀髪のイケメン。

はつきり言おう。

何このカオス？

時は数十分前の話だが、朝食、支度両方を無事済ませた俺達は急いで王宮へと駆けてきた。時間がギリギリだったのですよ。

それで目的の場所に着いてみれば、扉の前にいたいかにも秘書ですみたいな人に俺だけ掴まれひよいと中へ放り投げられ扉を閉められ、今の状態になる。

將軍つて聞いてたからもっと年寄りの集団を想像していたが……、こいつらを見てくれ。俺に感心を示さないおっさんがかううじて將軍つぱく見えないこともないが、他は普通の若者達に見える。というか一人子供混じってるし。

「……あ、あの……」

「そう緊張することもないぞ、ただの顔合わせだからな」

あのな、緊張するとか以前の問題だから。あんたらが放ってる威圧感に気圧されてるんですよ、こっちは!!

はあと気の抜けた返事を返してしまったのはご愛敬。今の状況を例えるなら、ごつつい男達に囲まれて話をしている感じ。頭では安全だと分かっているけど自然と身体が固まってしまう。

「はっ！こんなガキに未来を期待しなきゃいけないんだからウチも終わったもんだな！」

「むう、バール！それは言い過ぎなのです。少年だって経験を積みば立派な戦士になると私の勳が告げてます！」

「……………」

「こんなガキが使えるってか？冗談じゃねえっつもの。こんな奴相手にしてるほど俺は暇じゃねえよ」

「バールの言うとおりだな。僕もこの子供が上手く成長するとは思えない。悪いが失礼させて貰うぞ、あまり暇じゃないからな」

会議開始早々に席を立ち上がるつととする黒髪のイケメン。ニーナさんがまあまあと宥めると、渋々ながら 本心に嫌そうに 席へと戻った。

なんか好き放題言われてるけど反論しようにも反論できない。いや、無理だっってこんな奴らに言い返すのは。後々が怖いですから。

「まあ、落ち着いてくれ。この会議は彼の紹介のためだけに開いた訳じゃないからな。彼はおまけみたいなモノだ」

ニーナさんまで言うてくれるぜ。悔しいけど今の俺じゃその認識を崩すことはできない。……………修行、しないとな。

「ジーク君、適当に挨拶でもしてくれ」

「適当に……、ジーク・フェレンデュラです」

「ちなみに彼は突っ込みの期待の星でもある」

おいこらニーナさん、余計な一言を付け加えるな。

「ふうん、少年は突っ込みの名士なのかね」

むっふうんという意味ありげな笑みを浮かべて俺の肩にぼむと手を置く幼女。っていうかさつきから気になってたんだが……、

「ニーナさん、何で子供がこんなところに？」

ピシッ！

その音がぴつたりだっただろう。さつきまで威圧感が漂っていた空間は、また別の妙な緊張感と沈黙に包まれた。

え？俺なんか悪いこと言った？

幼女は顔を俯かせ、ぷるぷると肩を震わせている。金髪は「知らね」とでも言いたげに目を逸らし、二ーナさんに至っては手で顔を覆い天井を見上げている。もしかして……、地雷？

「……………が……………」

「はい？」

「このポケナスがア！！」

「……………！？」

鬼のような迫力で叫ぶ幼女。なにこれ怖い。

「だアれが子供だ、ガキイ！！私はもう大人だっつウの！人を見た目で判断してんじゃねエゴミカスがア！！！！」

血走った目で俺に詰め寄り、ぐいと襟を掴みかかる幼女。その気迫に気圧されながらひくひくと口端を引きつらせる。將軍つてのは一癖あるのが多いのか？

「大体どいつもこいつもおかしいんだよ！！私を見れば微笑ましい表情を向けてくるわ、ハアハア言いながら近寄ってくる気持ち悪い奴がいるわ、拳げ句の果てには『お嬢ちゃん一人でも大丈夫？』だとオ？冗談じゃねエ！どっからどう見ても私は大人だろウ！？」

いや、それには納得しかねるわ。

「何年ぶりの爆発だ？」

「……………3年とたったところだ」

「こりゃしばらくかかるな。時間は浪費したくねえんだがな」

目の前の暴走生物を放置して世間話を始める男衆。誰か助けくれませんかねえ？

「そこら辺どうなんだお子ちゃまア!？」

「……………」

正直俺もうんざりしてきた。早くこの人の怒りを収めないとやばそうな気がする、色々。

仕方ない、こうなったら俺の必殺技の一つ、アンリミテッドスペースキラー…ゲフンゲフン【無限の褒め殺し】だ。

(説明しよう!【無限の褒め殺し】というのはジークが編み出したいわば固有技…ゴホンゴホン!話術で、息も吐かせず相手を褒めまくることによって機嫌をなおしてもらおうという何ともせこい技なのである!—)

……………電波か?今電波来なかったか?……………気のせいか。

【無限の褒め殺し】発動中。

「……先程は申し訳ありませんでした、ミス・レディ」

「お、おおう？」

「貴方を見たときにあまりの美しさに動揺してしまったのです。それ故にあのような失言をしてしまいました。今となっては何故あのような失言をしてしまったのだろうと悔やんでおります。本当に申し訳ございません。このような罪深い私をお許し頂けますでしょうか？」

「え、ええと……う、うん」

「ありがたき幸せにございます。貴方には感謝してもしきれません。私、貴方の持つその広いお心に感動致しました。まさに深い慈愛心を持つ女神のようでございます」

「そ、そうかなあ？」

「ええ、こんな私を許してくださいだったので、貴方は誇るべきお心を持っています。それに心は身体にも出てきているというのは貴方を見ていると本当のことなのだと感じました。貴方はお美しい。そう、まるで草原に咲き風に揺られている白き花、マドリガルのようでございます。マドリガルの花言葉は【清楚】。貴方のような心のまっさらな方にびつたりです」

「えへへ、そこまでじゃないよう」

「……勝った（ニヤリ）。

内心で黒い笑みを浮かべる。無事に成功したらしく、幼女は俺の術中にはまった。エヘエへとやけながら笑っている幼女が微笑ましい。

「さて、それではニーナさん。続きをお願いしますか？」
「…あ、ああ」

他の將軍達は幼女の変わりように驚いたのか、眉根を寄せたり、しげしげと顎髭を撫でたりしていた。

「さて、次は私たちの自己紹介といこうか。栄えある未来の若者にはコネを作っておかねばならんからな」

もうちよつとオブラートに包むということをしませんか、ニーナさん？

「まずは私、ニーナ・アレステスからだが…、私のことは大体分かっているはずなので次へパス」

うわ、いい加減！

「ああ？じゃあ次は俺か。俺はパール・ドレストン。ガキには特に語ることも無し、以上」

見下した目で俺を見ながら吐き捨てるように言うパールさん。なんでそんなに俺は嫌われてるんだ？

「……………カシウス・グレイブだ……………」

カシウスさんは寡黙な人物のようで名前を言ったつきりそれ以上何も言うことはなかった。今も腕を組み、目を閉じてます。

「ホルス・ウイグナー……………、次」

言うことだけ言ってさっさと次を促すホルスさん。俺の事は眼中に無しって感じだな。

「はわぁ……………」

「おい、しっかりしろミリア。君の番だぞ」

ニーナさんは未だ夢見心地な幼女の肩を叩き現実へ連れ戻した。

「は！？え？あ、自己紹介ですね？分かってますよ、ちゃんとお話は聞いてました。ミリア・エリンシュです。よろしくなのですよ」

にはあと笑顔を浮かべるミリアさん。さっきの今なのであまり悪いことは考えないでおこう。うっかり口に出たら困る。

「よし、これでジーク君は私達將軍格の人間とコネが出来たわけだ。しっかり活躍して私たちに恩恵をもたらすように」

さもありませんと言わんばかりの口調で告げるニーナさん。あのさ、俺は別にあんた達に楽しませるために働く訳じゃないからな？その辺り分かってるはずだよな？

「それじゃ、次の議題に……」

そう言いかけて、ニーナさんは言葉を切り、扉の方を見た。見れば他の人達も居住まいを正し、扉に向かって視線を投げている。

「……………：パール、あの方の今日の予定は何だった？」

「確か午前中は帝王学の講義で埋まってた。さてはサボったか？」

あの方って誰だと思っている時にカツンと音が聞こえる。

俺も思わずその音源の方を向く。それは扉の向こう、廊下から聞こえてきたものだった。誰か来る予定でもあったのか？でも、ニーナさん達の様子を見る限りそれは無いと断言できそうだ。

「ここにはあんまり来ないように言ってたんだけどね、何で来たんだろっ？」

ミリアさんはんぐと人差し指をあごに当てながら首を傾げていた。ひよっとしてホルスさんやカシウスさんも異変を感じているのかと思ひ二人を見てみたが、二人は特に変わった様子もなく椅子に腰掛けていた。

カツン。

再び音がする。硬質で、無機質にも聞こえるそれは恐らく誰かの足音。それも足音のテンポを聞くと身分の高い人間のように感じられた。ゆっくりと一歩ずつ刻む一定のリズムはその人物を王女や王子のように錯覚させる。

カツン。

音が扉の前で止まる。誰もが席を立ち、王を迎え入れるかのように頭こぶを垂れる。

ギィと扉が開き、その人物が姿を見せる。

俺はその人物を見、目を見開いた。

純白に紫青色のレースのついた蔽かさを感じさせるドレス。幼さよりも大人っぽさを感じさせるそれは身に纏う人物の年齢を少しでも増させようと人物を着飾らせていた。そして触る者を包み込むというよりは拒絶を感じさせそうに白いハンドグローブ。

どこからどう見ても王女様です、はい。

でも、俺が驚いたのはそこじゃない。

俺が驚いたのは……、

「ご機嫌うるわしゅう、リリー姫」

昨日、街を回ったあのリリーが姫として俺の前に立っていたことだった。

第12話 き、君はまさか……！？（後書き）

えー、今話では花言葉が出てきてますが、作者は花言葉などまったく分かりません。

あくまで話の中だけで…ということですので、実際に世間話とかで使わないでくださいね？（^^;）

『番外編 人物紹介』に新たな人物が追加されたようです。

『番外編 人物紹介』に新たな情報が追加されました。

10/21 誤字を修正しました。

11/2 微妙に書き（ry。

第13話 ある日、城の中、に出会った（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

本編には関係ないけど、実はつい最近こんなことがあったのでごゆるよ。

『姉さん、ちよっとは家事を手伝って貰えぬか？』

『パス1』

『（・・・）』

『妹よ、少しは家事を手伝って貰えぬか』

『面倒くさい』

『（・・・）』

おまえらちよっとは手伝えよー！！

……はい、関係無いですね、すみません。

では、本編を……とその前に、

今回はちよっと長めですが、ジーク君が見事に暴走しちゃってます。

一応注意事項ということので……では改めまして本編をどうぞ。

第13話 ある日、城の中、に出会った

「こんにちは、將軍の皆……さ……」

ぺこりと頭を下げ、目線を上に戻したりりとバツチリ目が合う。数瞬。パチクリと目を瞬しばたかせた後、大きく目を見開いた。

「あああああっ……!!」

窓を揺らがすほどの大音量。思わず両手で耳を塞ぐが、ダメージは軽減されなかったようでクラクラと目眩がする。とんでもない肺活量だ、畜生。

「あ、あああ、貴方が何で……」

「どうしました、姫様……!!」

混乱が混乱を呼ぶように新たに現れた女性の兵士。腰の剣に手をかけ、リリーを庇うように俺とリリーの間立つ。殺気を漲らせ、険呑な目付きで俺を睨め付けた。

「貴様、姫に何をした…？答える！！」

いや、俺何もしてないんですけど…。

助けを求めて周囲を見れば、將軍達の皆さんはニヤニヤと笑ってカシウスだけは無関心を貫いていた。事の成り行きを見守ることにしたようだ。

はあとため息を吐き、事情を説明するために一步前へ出る。兵士は警戒を強め、俺に向けた視線を更に強める。その勢いはまさに視線だけで人が殺せるんじゃないかといったほど。

「初めに言っておきますが、俺何もしてませんよ？」

「とぼけるな！！」

説得失敗。俺の言い訳をいとも簡単にバツサリと切り捨ててくださいましたよ、この野郎！

しかし、何度も粘り続けていればきつと分かってくれるに違いなし。俺はそう信じ、再び説得を始めた。

「俺はずっとここです…」

「ご託を並べるのはいい！！貴様が何をやったのかだけ言え！！」

「いや、だから俺は何も…」

「それはもう聞き飽きた！」

とりつく島もない。俺の言葉を次々と蹴散らしていく。

これもう説得無理なんじゃね？とか思っていると、意外なところから助けが来た。

「おい、ユリア。そのガキなら何もしてねえからとりあえず剣から手を離せ」

「ば、バール様!？」

至って真面目な口調でバールさんはそう告げた。

流石は將軍といったところか、女性兵士はバールに気付くと渋々と剣から手を離し、後ろに控えた。つーか今まで気付いてなかったのか…。

「んで、姫さんは何でこんなところにいんだ？何か緊急の仕事でもあったか？」

相手が王女だというのに普通の粗野な口調で話すバールさん。普通ならこれ監獄刑レベルじゃない？

「あ、いえ。フェレンデュラさんのご息が参られると聞いて人目見ようと来たのですが……」

チラツと俺に一瞬視線をやり、顔を赤らめさせてサツと逸らした。俺何かしたかな？その仕草を見て、ユリアと呼ばれた女性兵士は更に殺気を増した。怖いこの人…。

「ガキ、てめえ何かやったか？」

「これと言って何もしてないですけど」

「嘘吐いてたら罪の一つは免れられねえぞ？」

「だから何もしてないですって」

「パールさんまでもが俺を疑い始める。と、突然「あああ！」とミリアが大声を上げる。何だ何ですか何なんですか？」

「そっぴえば姫ちゃん昨日街に出てなかった？」

「え……！？」

「ああ、成る程。道理で昨日見つからなかった訳だ」

「……二ーナ、監督不行届じゃないか？」

「まあ、そう言うなホルス。私にもできることとできないことある」

「……………」

「む、カシウスまでも私を非難するか」

途端にがやがやと賑やかになる室内。將軍達は気楽に話しているが、リリーとユリアさんは動揺しまくっていた。

「ひ、姫様！街に出たとはどういことですか！？」

「い、いや、そ、そんなわけ……」

「いや、あれは姫ちゃんだったね、間違いない」

「み、ミリアさん……！」

「あれ、そういえば少年もその時一緒にいなかったっけ？」

「……………／／／」

「姫様の顔が赤く……！！貴様何をしたあ……！！！！！！」

もはや掴みかからんばかりの勢いで、とういか俺の襟を掴み俺に詰め寄るユリアさん。目が血走り、息を荒げている様子はかなり引いたが、今はそれ以上に俺の心を埋めている物があった。

面倒くせええええつ……！！！！

初めは顔合わせただけだからって気楽に構えてたらこの有様だし、王女が乱入してくるわ、その護衛（？）は俺に喧嘩売ってきそうだし、誰も彼も助けてくれないわ。いくら何でも面倒くさすぎる。

俺だって聖人なわけじゃない。俺にだって限界はあるわけで……

「……………つたく、うるせえな。いちいち突っかかってきやがって……」

「なに……？」

「うるせえって言うてんだよ、アマ！」

襟の手を振り払い、ユリアさんを睨みつける。突然の変貌のしよくに驚いたのか、リリーやユリアさん、それどころか將軍達も目を驚きに見開いていた。

「王都に来たら面倒事に巻き込まれるわ、無理矢理模擬戦させられるわ、街歩いてたらトラブルメーカーに遭遇するわ、挙げ句の果てには王宮の兵士と喧嘩ですかア！？」

俺の異様な雰囲気呑まれたのか、ユリアさんは剣を握ったまま
ごくりと生唾を飲み込んでいる。

「ふざけんじゃねエぞ!! どんだけ俺を巻き込めば気が済むんです
かねエ!! 俺はいつまで付き合っただらば良いんでしょうかア!？」

「…おい、ニーナ。あんなの報告になかったぞ…」

「…私にだって分からん」

「なアに喋ってんですかア、そこの二人!!」

ビクツと身を竦ませ、いやいや何もと全力で首を振る二人。そう
ですかア、何も喋ってませんでしたかア。俺の気のセイでした力。

「やって……られつかア!!!!!!」

「『『『『『『…!!?』』』』』』」

俺ハモウ我慢の限界でスカラ。だから…、

「殺ツチャツテも、イイヨね?」

ゴゴゴゴゴ!! 部屋全体が揺れ出す。

ハハハハ、楽シイネエ!!

「それが……、真に申し訳ないことに何にも覚えていないです」
「……………ふう。これは由々しき事態だとも言えるな。君は数十分に及び、ここで暴れ回ったんだよ」

うつ！！俺そんなことしたんですか、これは要反省だ。
それならリリーが震えているのも合点がいく。大方、俺の暴れようが怖かったつてところだろう。

「規則に従うなら君は監獄行きだ」

来てから早々監獄入りとか……。ごめん、父さん、母さん。悪い息子でごめんなさい。

「まあ、それも本来ならだがな」

「へ？」

「今回の事はまあ私たちにも非はあるからな……」

「どういうことですか？」

「テメエがキレた理由の一つに、ニーナに無理矢理模擬戦させられたつてのがあつたしな」

「うつ……！」

「こいつも強くは出られない。それに、姫さんのこともあるしな」

ビクウツと小動物のように飛び上がるリリー。女子に怖がられるつてリアルに傷つくわ。今、俺のガラスハートは粉々に砕かれたよ。

「今回だけは見逃そうって事だ。ただし、次は無いぞ」
「あ、ありがとうございます!!」

よかった、何とか見逃して貰えるらしい。でも、そんな簡単に許しているのか、パールさん。

「ちなみに本音は？」

「私が言及されそうだ（ニーナさん）」

「始末書書くの面倒くせえ（パールさん）」

「少年に媚売つところかと思って（ミリアさん）」

「気まぐれだ（ホルスさん）」

「……………今後に期待している（カシウスさん）」

なんてこつた、カシウスさん以外まともな理由じゃねえ!!

次々と明かされる將軍達の本音に愕然としてみると、俺を見る視線に気がついた。視線の主はリリー。俺が彼女の方を向くと、慌てて視線を逸らしてしまった。そりゃあんなことがあった後だからな怖がるのも無理ない。

「姫様…、そろそろ時間です」

「ええ……………」

「それでは將軍の皆様失礼ながら先に退出させていただきます」

リリーの代わりにユリアさんが告げ、二人は部屋を出て行った。

「……………」
「ジーク君、会議は終わりだ。私たちも解散しよう」
「……はい」

ニーナさんに言われたとおり、会議を解散し、次々と部屋を出て行く將軍達。その途中に、パールさんは俺に哀れみの視線を送っていた。わけ分からん…。

「ニーナさん、何かパールさんに哀れみの視線を送られたんですが」
「彼も苦労人と言うことだよ」

……………。そりゃこんな人が同僚だもんなあ、苦労してるんだパールさん。

心の中で合掌しつつ俺も部屋を出た。

「どつすつかな」

王宮を出、最初に口にした言葉がそれだった。

部屋を出ると、父さんがいないことに気付いた。来たときは入れて貰えなかったみたいだから外で待ってるものだと思っていたがそうでは無いらしく、自分の仕事をしに行ったらしい 入り口にい

る秘書みたいな人に教えて貰った。
そういうわけで、することも無い俺は街に出て悩んでいるところ
なのですよ。

さっきの今だからあまり何もする気が起きない。何をしたのか。
数十分ほど道の脇で考え込んで、結局ギルドにクエストを受けに
行くことにした。え、理由？そんなもの、モンスター相手に憂さ晴
らししに行くために決まってるじゃないか（キリッ）。

「それならまずはギルドに…」

「ジークさん!!」

突然の後ろからの衝撃に、たたらを踏んだ。え？何が起こったの？

「リ、リリー!?!」

背中に喰らった衝撃はリリーの突進によるものだった。どうやら、
後ろから助走を付けて、思いっきりぶつかったらしい。おかげで背
中が痛い。

「何でここに…。しかもどうしたんだ、その服？」

彼女はさつき纏っていたドレスではなく、平民が着るような普通
の服を着ていた。それでも、着こなしが上手いのか彼女自身を充分
可愛く魅せていた。そして、その上からいくつか防具を身につけて

いる。まるでこれから冒険にでも行ってきますとでもいいだけな…。

「……まさか着いてくるつもりなのか？」

「もちろんです！…今日はジークさんとクエストを受けようと思っ
てましたから！」

は、はいはいっ！？

第13話 ある日、城の中、 に出会った (後書き)

ジーク君はストレスがたまってるみたいですね。まあもつとも、これからも弄：ゲフンゲフン！！活躍していただくわけですが。

それにしてもあれを見てクエストと一緒に行くだなんて…、リリー、恐ろしい子！！

怖くないんですかねえ？その辺は次回と言うことで。

『番外編 人物紹介』に新たな人物が追加されたようです。

『番外編 人物紹介』に新たな情報が追加されました。

『番外編 未知の報告書』に新たな情報が追加されたようです。

11/2 微妙に書き(r y)。

第14話 リリーはお転婆王女様（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

更新遅れちゃってすみません！夏休みが終わった上に受験勉強が忙しくて中々書けませんでした。

それでは、本編どうぞ。今回は少し長めです。

るほかないとはまさにこのことだろう。

「それじゃ、何だ？あの時の俺は怖くなかったと？」

「あの程度で怖がってたら王宮じゃやっていけません」

えへんと無い胸を張る。あれをあの程度呼ばわりとは……。王宮の実情が知りたいところだ。

「でも震えてたよな？」

「実は私は魔力に対して凄く敏感で…、強い魔力の近くにいと所謂当てられた状態になるんです。だから、さっき震えてたのもジークさんの強い魔力に当てられてただけなんですよ」

俺があのことを気にしていると読んだのか、幾分優しい声で語りかけてくるリリー。

俺としては内心大きく安堵の息を漏らしていた。

いや、こっちで初めて知り合った歳の近い女子だし、こんな心も容姿も綺麗な子に嫌われたら心が折れてしまいそうなんだよ。

言い忘れていたけど、リリーはかなりの美少女だ。十人いれば八人は可愛いと言いそうなのな。ちなみに余計な事だが残りの一人はゲイだ。

「ところでジークさん、クエストは何のクエストを受けに行くんですか？採取ですか？討伐ですか？」

「あ、いや、まだ考え中だけ」

うずうずといった感じで俺に詰め寄る。想像以上にお転婆な印象に最初に抱いていたリリーはお転婆というイメージを……、あれ？最初から印象変わって無くない？

「でしたら私は討伐をお勧めしますね。理由は道中で説明します。とりあえずギルドへ向かいましょう」

「あ、ああ……」

ぐいぐいと俺を引っ張っていくリリー。予想以上に俺の手を強く引くリリーに多少驚かされながら、抵抗することもなく俺は付いていくのだった。

「それで討伐を勧める理由なんですけど、クエストには採取と討伐、それからその他様々なものがあることはご存じだとは思いますが、報酬は討伐や護衛のクエストが一番高いです」

はぐれないようにと俺と手を繋いだリリーはもう一方の手の人差し指を立て、先生が子供に教えるかのように話し始めた。

確かに討伐は他のクエストよりも報酬は高い。討伐のクエストは対象を必ず倒さなくてはならないために生命の危険は跳ね上がる。護衛のクエストにもそれは言えることで、護衛では自分だけならず他の人間までも守る必要があるために自然と報酬も高くなる。偶に

採取クエストでも強敵に出逢うこともあるが、その時には逃げることも出来るので危険性は討伐クエストに比べれば低い。

つまり、もし実力があるのを前提でやるのだと仮定すれば採取のクエストよりも討伐や護衛のクエストをやるのがいいということだ。しかし、護衛は面倒なので選ぶとするなら俺はもちろん討伐を選ぶ。

「なので、私は討伐をお勧めしますよ。それに次の理由ですが、それはジークさんの実力にあります」

「……？俺の実力？俺結構弱いと思うんだけど」

「神器を破壊した貴方が言いますか……」

「いや、だってリースにも勝てないし、母さんや父さんにも勝ったことないし、ニーナさんにも負けたし」

「そのリースさんという方は知りませんが、貴方のご両親のお二方は私達の国のエースとも呼べる方達でしたし、ニーナ様は仮にも將軍の一人なのです？比較する相手が間違ってますよ……」

む、あれらは例外なのか……。てっきりあれが世界の標準なんだと思ってた。

「あの方達を基準だと思われてたら他の皆さんが不憫すぎます」

はあとため息を吐くりりー。

どうでもいいけど王女とか悩み事多そうだな。そういう時は誰かに愚痴を話すんだろうな。俺に対しては勘弁だけど。

「お、そうこう言ってる間に着いたな」

目の前には、何度見ても荘厳な雰囲気を漂わせてそこにあるギルド。建物の作りとかがグツジョブだ。

ちなみにFランクの掲示板は入り口を入れてすぐ右側にあり、見つけるのは容易い。

さーて、討伐の依頼はあるかなあつと……。

「……………無いな」

「……………そうですね。誰かが纏めて狩ってしまったんでしょうか？」

「可能性としてはあり得るな。無い物ねだりしても仕方ない、あるものから受けていこう」

「その方がよさそうですね」

えーと、なにになに？ルル草の採取に薬の調合の手伝い、魔金属鉱山の調査……etc。何かパツとしたもんが無いな。別に苦労をしたいわけじゃないんだが、あっさり終わるとそれはそれで面白みが無いというか。

「おいこら坊主！！テメエこの前はよくも片付けを手伝わずに逃げやがったな！！」

掲示板を眺めていると突然に響く怒号。それは間違いなく俺に向けられたもので、俺にもそれは心当たりがあった。

ノシノシと音を立てて歩いてくるのは赤髪を無造作に伸ばしてい

る二十代のおっさんもといアレス。俺は親しみを込めて(?)アレスのおっさんと呼んでいる。

「何言ってるんだアレスのおっさん。お前が喧嘩ふっかけてきたんだからそこら辺は全部あんた持ちだろ」

「そこを突かれると大きくは言えないが……。あとおっさん言うな」

再び掲示板を眺める作業に戻る。少しでも割の良い仕事を見つけないとな。出来るだけ敵が多くて憂さ晴らしできるくらいのが無いだろうか？

「あ、こんにちはアレスさん」

「おう、嬢ちゃんは素直だな。それにひきかえ……………」

「こつちを見るなおっさん」

先日の出来事は何処へやら、リリーは特に緊張することもなくアレスと話していた。普通ああいうのがあったら自然と身体が強ばったりするものなんだが…、意外に大物なのかもしれないな。

「何だ？仕事探してんのか？討伐の依頼なら何処も入ってねえぞ。

この前大規模な魔物討伐がされたらしいからな」

「大規模な魔物討伐？」

「魔物というのは繁殖数が異常で、何か起こってしまったては遅いということは何年かに一度行われているんです。それなら討伐クエストが無いのも頷けますね」

「ま、そういうことだ。せいぜい他のクエストに精出してろ」

「言われなくてもそのつもりだよ」

「フン、可愛くない小僧だぜ。…っといけねえ、忘れるところだった。坊主、お前『白迅龍』って知ってるか？」

『白迅龍』、その名の通り白銀の身体を俊敏に動かして相手を翻弄させるかなり高位に位置する魔物だ。しかし、その個体数は少なくて滅多に発見されることは無いと聞いている。

「そりゃ知ってるけど……、何かあったのか？」

「ああ、最近聞いた話なんだが…、国内の各地の森で『白迅龍』が頻繁に目撃されているらしい。しかもそいつらはいやに気が荒立ってる上に冒険者を見つけたら攻撃を加えてくるとのことだ。お前らも森へ行くなら気をつけるよ？」

『白迅龍』は本来温厚な性格の魔物で、人を襲うことなんか俺が知りうる限りでは聞いたことがない。その『白迅龍』が人を襲うとは一体何が起こっているのだろうか？

まあもつとも、考えたところで答えが出るわけもない。さっさとクエストを決めてしまおう。

ギィッ……………。

控えめに扉が開かれる音がする。ふと視線をやると、そこには一人の少女。気後れしているのか、おどおどしながらフランクの掲示板をのぞき込み、ハアツとため息を吐いた。

少女の見たところを見ると、何気ない一つの依頼書がある。

【翠鈴草すいじゆんの採取】

依頼人：ラルカ・ウエンス

目的：翠鈴草の採取

場所：フォルスの森

詳細：お母さんの病気を治すためにどうしても必要なんです。誰か取ってきてくださいませんか？

報酬：銀貨二枚

依頼発行日：ノーマの月十七日目

恐らくこの少女が依頼したものなのだろう。何度もそれを見て少女はため息を吐いていた。

今日はノーマの月の二十二日目。ということはこの依頼は貼られてから五日経っていることになる。誰か引き受けてくれる人を期待して毎日ここに通い、その度に落胆したのだろう。

しかし、今は森では『白迅龍』が目撃されているために冒険者達は森へ行くことを避けたがるはずだ。しかも、ましてやこの掲示板はフランク。ビギナー達が進んで依頼を受けるとも思えない。

「……………」

何度も言っているかもしれないが、別に俺は正義の味方なわけじゃない。自分の私利私欲と正義のどちらを取るかと聞かれたら、迷わず私利私欲を選ぶだろうし、自分の命を犠牲にして誰かを守るなんてことはしたくない。

それでも、何故だか俺はこの依頼書を取っていた。いつから俺はこんなお人好しになっただんだか……。横で掲示板を見ていた少女は驚いたように俺を見ている。

「受付嬢、これの依頼の受諾はできるか？」

「あ、はい。何人での受諾ですか？」

「二人だ」

「受諾人数は四人までですが二人でよろしいんですね？」

「ああ、構わない」

「では、受諾完了です。依頼人は…、そこのお嬢さんです。詳しい話は彼女から聞いてください」

「了解だ」

流れるような作業で依頼の受諾をする俺をポカンと見ていた少女は呆然としたまま俺の顔を見ていた。

「さて、リリー勝手に決めてしまったけど別に良いよな？」

「ふふっ、私は構いませんよ。ジークさんのお好きなように」

「ありがとうございます。さて、お嬢さん。話を聞かせて貰えるかい？」

未だ呆然とした様子で少女は縦に何度か首を振ったのだった。

「君の名前は…、依頼書にあったな。ラルカ・ウエンスであつてるか？」

「……………（コクン）」

「君は母親が病気で翠鈴草を求めてると。間違いないか？」

「……………（コクン）」
「……………スリーサイズは？」
「……………／／／！？」

ゴスツッ！俺の頭にたたかに叩きつけられるリリーの拳。俺と
同い年の少女でありながらその威力は激しく、頭が猛烈な痛みを訴
える。い、痛え！！痛えよう！！

「お、女の子に何聞いてるんですか！！は、破廉恥です！！」

顔を真っ赤にして激昂するリリーに対して少女は俯いたまま頬ど
ころか顔を真っ赤に染めている。初心^{ウラ}よのお。俺はこれでも中身二
十代なのでそこら辺の話題は聞いても何とも思わない。実際に現場
を目の当たりにしたらどうかは分からないが。

「いやだって、コクンコクン頷くだけだからひよっとして意識がぼ
やけたままなんじゃないかと思って…」
「だからってあ、あんな話をしなくても！！ほら、この子もドン引
きしてるじゃないですか！！」

甘いな、リリー。俺はこう場を和ませようとな…。

「言い分は結構です！！」
「ひ、ひでえ…」

あのさ、ちょっとは俺の言い分も聞こうぜ？俺もまともな言い分を曲解してごちゃごちゃにして色々ネタ混ぜてそれを一旦捨てて、新しく考えたネタを混ぜた無茶苦茶な話を話すつもりだったんだからさ。

「それでラルカさん。依頼の詳細を話して欲しいんですけど」

「無視かよ……」

「……お母さんが眠凍症みんとうにかかっちゃって……。お薬が必要なんだけど私の家は貧乏で買えなかったんです。何とか必死にお金を貯めて薬を買おうと思ったたらいつものお店で品切れだって言われて……。色々お店を回って見たけどやっぱりどこも品切れで……。お父さんが薬を作るから材料を揃えようとしたら、薬と同じで何処のお店でも翠鈴草だけでも手に入らなかったんです」

眠凍症、文字を変えれば冬眠とも読めるが全く違うことをここに記しておこう。

それで眠凍症なんだが、眠凍症というのはある特定のコケ類の胞子を吸うことよって引き起こされる病気で、吸ってしまった人は長期間昏睡してしまいやがては死に至る病気だ。しかし、これには有効な薬が開発されており、もう市場にも出回っている。

その材料も色々あるんだがとりあえず割愛して……。絶対に必要なのは翠鈴草だと言われている。

いつもならその翠鈴草も普通に雑貨屋で売っている。それこそ、昨日のデイソーとかにも売っているだろう。しかし、ラルカは何処にも置いていなかったのだと言う。少々奇妙な話だが、それも『白迅龍』のせいだというのなら合点はいく。

翠鈴草は森の奥地にしか生えない。特にフォルスの森に数は多く比較的簡単に見つかる。奥地にさえ行ってしまえばいくらでも手にはいるのだが、『白迅龍』のせいで奥地まで行けずに需要に関わらず供給が追いついていないのだろう。

「それでギルドに依頼をしたと。なるほどね……」

「それで、その翠鈴草はいくつぐらい取ってくればいいんですか？」

「えと、五本ぐらいです」

「分かりました。五本取ってくればいいんですね」

ラルカはコクンと頷き肯定した。

「うし、それなら目的も決まったことだし、とっとと行きますか」

「フォルスの森はすぐ近くですし、今からいけば今日中には帰って

くれますね」

「そうだな」

「あ、あのー！」

ギルドを出ようとした俺たちを呼び止めるラルカ。その声は大きくギルドにいた人のほとんどがラルカを見るほどで、彼女も予想外だったのかカアツと顔を真っ赤にした。……？何か話があるのか？

「あの、どうして依頼を受けてくれたんですか？他の人は誰も受けてくれなかったのに……」

「どうして……、か。俺にも分からん」

「へ？」

俺の答えに間抜けな声を上げる。そりゃそうだろう。俺がもし彼女の立場なら同じ事になったらろっし、俺なら更に「アホか、あんた」と付け加えたくなる。

「少なくとも俺は君が可哀想で依頼を受けたわけじゃないし、楽そうだったからというわけでもない。ただの気まぐれさ」

俺はそれだけ言ってギルドの扉を潜った。後ろにいる少女はやはり、俺が依頼を受けたときと同じくぽかんとした表情をしていた。外に出てしばらく歩いた後にリリーが横腹を突いてくる。

「あんなこと言っちゃって。不器用なんですね、ジークさんは」

「何のことだか」

「ふふっ、素直じゃないんですから」

へっ、勝手に言ってる。

第14話 リリーはお転婆王女様（後書き）

『番外編 人物紹介』に新たな人物が追加されたようです。
『番外編 人物紹介』に新たな情報が追加されたようです。

11/2 微妙に書き（ry）。

第15話 中ボスが現れ…え？これ本当に中ボス？（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

更新おくれちゃって本当に申し訳ないです。

とりあえず本編を楽しみにしている（？）人もいるでしょうから本編をどうぞ。

あ、今回はちょっと書き方を変えてみたっていうか、行間をいくらか空けてみたんですけどどうでしょうか？何かあれば感想欄にお願いします。

第15話

中ボスが現れ…え？これ本当に中ボス？

「……………?!?!?!」

爆音のごとき轟音が耳をつんざく。叫びを上げたちんにゅうしゃ闖入者はまるで自分が新たな森の王者であるかのように確かな存在感を醸かもし出していった。森の生き物達は突然に現れた絶対的王者から逃れるために我先にと森を走り去ってゆく。

そして俺ことジーク・フェレンデュラもまた、茂みで息をひそめそいつの様子を窺っている。

背中を冷や汗が伝う。

こんな緊張感を抱くなんて久しぶりだ。傍ではリリーが身を震わせ、ギョツと俺の服を掴んでいる。

何故俺がこうしてスパイのように息を潜めねばならなくなってしまったのか…、それは数十分ほど前にさかのぼる必要がある。

無事森にたどり着いた俺とリリーはひとまず荷物整理をすることにした。え？ 何でかって？ それは討伐部位が山のようにあるからだ。なぜかは分からないが、道中で魔物が山のように襲って来たんだよ。当然全部返り討ちにしてやったけどな！

魔物は討伐部位と呼ばれる、いわば討伐の証明となる部位をギルドに持つて行くことによつて、クエストを受けた時ほどではないが金を得ることが出来る。

山のように襲つて来た魔物達の討伐部位を剥ぎ取ればどうなるのか？ 言わずもがなわかるであろう。

というか魔物は大討伐みたいなのが行われたんじゃないのか？ 少なくとも大討伐が行われた後の魔物の数じゃなかったぞ。アレスの野郎、嘘の情報を渡しやがったのか？

「ジークさんは大丈夫なんですか？ 私ほど荷物整理してないみたいですけど」

「実は俺は収納の達人だからほとんど荷物整理は……」

「大丈夫みたいですね。なら先へ行きましょうか」

「……………」

俺の言葉を途中で無視しさつさと歩き出してしまった。うう、最初は何でも反応してくれて面白いやつだったのにな。俺と少しの間を過ごすだけでリリーは見事なスルースキルを手に入れてしまったようだ。俺が旅路の途中でからかい続けたつてのもあるんだろうけど。

今回の目的は翠鈴草の採取。翠鈴草はどここの森の奥地にも群生しており、フォルスノ森に多いとは世間で知られていること。それを見つけてしまえば依頼された数だけ採取するのはさほど難しくない。

……ただ、一つ気になるとすれば、国内の各地の森で出現していると言われている『白迅龍』のことだろう。

ちなみに『白迅龍』の本当の名前はヴァレンディーナで、『白迅龍』のちは後に付けられた渾名あだなみたいなものだ。モンソンのリオウスでいうなら火龍、ジンウガでいうなら雷狼龍みたいなものだ。

周囲の気配を探りながら、さくさく前へ進むリリーの後を着いて行く。今のところ、周囲に目立った気配はないようだ。

さくさくと進んでゆくと、あら不思議。そこはもう森の奥地じゃないですか。

「何にも会わずに着いちゃいましたね」

「会わないのは喜ばしいことなんだが、なんかこうストレスが…」

「…道中あれだけ魔物を狩ってまだ言いますか……」

そついや俺の本来の目的って憂さ晴らしたつたよな。こつもエンカウント率悪いとフラストレーションが溜まってどうしようもないじゃないか。魔物仕事しろ。

さて、後は翠鈴草を探すだけだ。さつきも言った通り翠鈴草は群生しているので一つ見つけてしまえばあとは集めるだけという簡単な作業だ。

「翠鈴草はどつこかな」

「……………あ、これじゃないですか？」

一つ摘み取り、俺にそれを見せた。うん、間違いない。確かにこれは翠鈴草だ。となれば、近くにもつとあるはずなんだが…………。

「お、俺もはっけーん」

「…二つ、三つ、四つ。うん、これで達成ですね」

「おう、ついでに何本か摘んで帰ろう。何かに使うかもしれないしな。しかし…、なんか消化不良だな」

翠鈴草を摘みながら顔をしかめる。えらく簡単な作業だったな…、次はもっと難易度の高いものを……………!？

「まだ言いますか…、そもそもジークさんは…」
「静かに!」

リリーの手を引き、そのまま近くの茂みに転がり込む。突然の行動に驚き、顔を紅潮させ、抜け出そうともがくりり。無理矢理押さえ込み、口を手で塞ぐ。

「……………！？ ………………！？ ………………！！」
「しっ……………！！」

人差し指を口に当て、おとなしくするよう促す。リリーも俺の真剣な顔を見て暴れるのをやめた。悪いな、リリー。
ある一点を見つめる俺の頭の中でガンガンと警鐘が鳴り響く。道中の魔物達とは比べ物にならないほどの本能の警告。見つければ死は確定すると錯覚せんばかりの濃密な気配。

「お出ました……………！！」

ついにその巨大な気配が姿を現す。

白銀の鱗に幾重にも走る紅の筋。自然の中で鍛え上げられた強靱な肉体はまるで限界まで引き絞った弓の弦を思わせる。深紅の瞳は見開かれており、一体何を視ているのか。

『白迅龍』、頭にその言葉が思い浮かぶ。確かにあれは凄い。見ているだけで畏敬の念を抱きそうな存在感。

だが、それは恐怖の始まりに過ぎなかった。

……？ 様子がおかしくないか？ よく見れば『白迅龍』は全身に傷を負っており、死に体ていで何かから逃れるように足を引きずっていた。

「…傷を負ってる？」

「何かに襲われたんでしょうか…？」

いつの間にか口の拘束を外したりリーが小声で尋ねてきた。しかし、『白迅龍』はドラゴンの中でもかなり高位の存在。その位に違たがわぬ実力を持つと聞く。そんなやつがそこら辺の雑魚に死にかけるほどの傷を負うだろうか？

答えは否。そして、それはすぐに証明されることとなった。

「……………?!?!?!」

ズンツ。辺り一帯を揺らすほどの衝撃、そして咆哮。
バキバキと樹を薙ぎ倒し、『白迅龍』に迫る巨大な影。全身が黄土色で覆われたそいつは、ずらりと並んだ鋭い牙を『白迅龍』に突き立てた。

一瞬の断末魔たんまつま。全身を噛み砕かれ、原型すら残さない。あまりに凄惨な光景にリリーが口元を抑える。

冗談じゃない。なんなんだ、こいつは！？

本を読み漁った俺ですら見たこともない目の前の暴力的な存在。そいつは牙を血でぬらぬらと光らせ、勝利の雄叫びを上げた。

そして冒頭へ戻る。おい、誰だ回想長過ぎて言ったやつ。とりあえず表出る。

つと、そんなことしてる場合じゃないな。

突然の乱入者をよく観察しつつ、気持ちを落ち着かせる。

見た目はまるでティラノサウルス。あの様子を見るに獰猛どうもつそうな姿に変わらず攻撃的な性格なのだろう。しかし、ティラノサウルスと違う点がいくつかある。

まずは背中の剣山けんざんのような無数の棘とげ。おそらくは外敵から自分を守るためなんだろうが、それにしても過剰のような気がする。まあ、いい。そういうやつなんだと認識し、頭に留め置く。

二つ目は硬い骨に覆われた尻尾。先端部分が鉄球のように丸い塊になっている。敵にぶつけければ雑魚なら一撃必殺は必至ってところか。

三つ目は膨大な魔力。前世の恐竜達に魔力があったかどうかは知らないが、そいつは『白迅龍』に劣らない魔力量を持っていた。おかげで、リリーはさっきから震えっぱなしだ。

「……………」

ダメだ、攻略法なんて見つかるはずも無い。いくらなんでも化け物過ぎる。父さん達でも勝てるかどうか…。

「……………」

「……………」

ならば取る方法の一つ。
そう、戦略的撤退のみ。

べ、別に怖くて逃げる訳じゃないんだからね！……………やめよう、俺を含む色んな人が不幸になりそうな気がする。

「……………」

「……………」

「なんかあれの様子が変じゃないですか？」

「様子が…、変？」

リリーに向けていた視線を恐竜へと向ける。

やつは自分の殺した『白迅龍』には目も向けず、ただ一方向だけを見ていた。その視線の先には…、

「まさか……………、王都か……………！？」

「ジークさん、それって……………！」

まさかのそのまさか。恐竜はズン！ズン！と地響きを立てながら、森の外へと移動していく。その方向は先ほどと同じ、王都の方向。何かに駆り立てられるようにやつは盛大に咆哮し、歩みを進めて行った。

「まずい！！ 王都じゃあんな化け物が出るなんて思っても無いはず！！」

今あの恐竜に攻められれば恐らく被害は甚大。だが、俺にはあれを王都へ知らせる方法が無い。どうにかしないと…。

「リリー、何か王都へ伝達する方法は！？」

「私には…、いえ、一つだけあります」

彼女はそう言い、服を探り笛を取り出し、息の続く限りそれを吹いた。

俺はこの音を聞きつけて恐竜が戻ってくることを警戒したが、それは杞憂きゆうに終わったようだった。バサッバサッと翼を羽ばたかせ、それはリリーの右腕にとまった。

「鷹？」

「はい、王都との連絡役を兼ねてくれているんです。……！？そ、そういえば紙が無いです」

あたふたとするリリーにスキマから取り出した紙と筆を渡す。彼女はどこから？と戸惑っていたが、さっさと書くよう急かして手紙を書かせる。

それを鷹の足に結びつけ空へと放す。鷹は迷い無く恐竜の向かった方へと向かって行った。

俺たちもすぐさま移動を開始する。リリーをひょいと掴んで背中に乗せ、全速力で走り出す。彼女も何か文句を言おうとしていたが、走り出した瞬間に口を閉じた。

葉で埋まる地面を、地面に横たわる木の根を、大きな岩すらも、飛び越え走ってゆく。

森の中はリースとの修行で何度も追いかけてこしたおかげで慣れている。森の中を遮蔽物しゃへいぶつを避けつつ全力で走るなんて雑作も無いことだ。そうでなくてはリースとの修行に付いていけない。

たちまちの内に森から脱出する。遠いが、王都はここからでも見える。そして、あの恐竜の姿も…。

「あいつ足早過ぎだろ！ もう王都まで数キロも無いぞ」

「急いでください、ジークさん！！」

「もとよりそのつもり！！」

再び加速し、恐竜のあとを追う。とはいえ、ここから王都までは優に十キロはある。このままじゃ俺がやつに追いつく前にやつは王

都を襲うだろう。

それ故に…、

「リミットブレイカー
限界突破」

強化魔法を無理矢理重合詠唱に置き換え、行使する。

本来、強化魔法は単一詠唱によってでしかできないもの。その一つ上の重合詠唱や、またその一つ上の複合詠唱では発動することは出来ない。それには魔法の形式に関するんだが、ここでは割愛させてもらおう。

要は、魔力にもの言わせて無茶をするってことだ。当然、その反動は俺に返ってくるし、下手をすれば命を落とす危険もある。だが、今はなりふり構ってられない。

だが、強化魔法の重合詠唱の効果は絶大だ。普通の詠唱の数十倍から百倍の威力を発揮する。

だが、常人が耐えられるような速度ではないため、リリーの周囲には魔力を保護膜のように張り巡らせている。

一秒、森の近くにいた俺たちはあっという間にその距離を詰め、道の半分を駆け抜ける。

二秒、更に駆け、恐竜を追い越し門の前に辿り着く。

三秒、リリーを乱暴だが、振り落とし恐竜に向き直り両足に力を集中させる。

四秒、限界をもって地を蹴り、

「喰らうとけええっ！……！！！」

五秒、渾身のドロップキックを恐竜に叩き込んだ。

第15話 中ボスが現れ…え？これ本当に中ボス？（後書き）

えー、どうも。

今回もちよつとばかり遅れた理由（という名のいい訳）を話そうと思います。

受験勉強で忙しいのです、はい。
暇作れるのがそうそう無くて中々執筆できなかったんですよ、はっはっは。

すみません、笑い事じゃないですね。

冗談抜きで休みとれる暇無くて…。もう一度夏休みが欲しいと思うほどです。

それはそうと、この小説のお気に入り登録が百を超えました！（パチパチ）

皆様ありがとうございます！！

『えー、たつた百う？』

『きつもーい』

『お気に入り登録数でたつた百が許されるのは小学生までだよなー』とか言わないでください。作者は小物なんです！それこそ脇役Bで出てても全く違和感ないほどの。

まあ、小物の作者は小物らしく頑張っていくことにしましょう。

では、そろそろこの辺で。

そういえば、これを読んでいる方は作者が活動報告をかいていることをご存知でしょうか？もし良ければそちらもどうぞ。

……前にも言ったような…。ま、いつか。

1
1 / 2
微妙に書き (r y)
y。

第16話 何かが現れた。どうする？

ぶっつぶせー！ー | ぶっつぶせー

どうも、博麗まんじゅうです。

今度から裏話は後書きでしようと思います。

そういうわけで本編へGO！

あ、今回ちょっと短いです。

第16話

何かが現れた。どつする？

ぶつとほせー！

ーぶつとほせー

ズウンッ！！

巨体が宙を舞い、地に叩きつけられる。死ぬほど硬てえ……！！
並の魔物ならば即死を通り越して破裂するほどの威力にも関わらず、依然として形を残している恐竜。

「……………！！！！」

それどころか、巨体を勢いよく起こして咆哮をあげる。なんてチートボディだ、畜生。それにしてもこの世界のチート率はんぱねえな、おい。

奴はキラキラとその目を殺意に漲みなぎらせ、こちらを威殺いころさんばかりに睨にらみつける。

再び地を蹴り、肉迫する。

足に回した魔力は今度は両手に。勢いのついた一撃を奴の腹に叩き込む。

だが、不発。こちらの拳が届く前に奴は飛び上がり、空へと跳躍した。

「なっ……………!?!」

奴は空中で体勢を変え、地に背中を向け落下する。それが意味することはすなわち……………、

「はあっ!?!」

無数の剣山が俺に牙をむいた。

後方へと跳躍し、着地地点から逃れようとするも奴はこちらを追いかけるように俺の周囲に影を作った。違わぬ事のない狙い。それから逃れる術は……………、

「限界突破!!」

奴を振り切ることに他ならない。

二度目の強化の重合詠唱、自身の魔力がごっそりと持って行かれるのを感じる。だが、命あつての物種。惜しむわけにはいかない。

俺を逃した無数の剣山が地へと突き刺さる。地が揺れ、衝撃波が襲う。なんつー威力だ。

「化け物かよ……………」

「ジークさん!!」

立ち上がったらしいリリーがこちらに駆け寄ってくる。その手にはどこから出したのかは知らないが、恐らく背中に背負ったバッグから取り出したのだろう。純白の杖が握られていた。

「私も加勢します!!」

「何言つてやがる!! お前が相手出来る奴じゃ…!!」

リリーを片腕に抱き、その場から跳躍する。俺たちが離れた次の瞬間、そこには鉄球のような奴の尾が叩きつけられていた。一瞬でも遅れれば、俺たちは押しつぶされその場で絶命していただろう。死の危険が常に隣り合わせの戦い。俺だってあれを喰らって生きていられるかどうかは分からない。そんな戦いにリリーを巻き込むことができるだろうか？ 答えは否だ。

「笑えねえ威力だな」

「ジークさん、あれ!!」

リリーが指差したのは目の前の化け物ではなく、俺たちが先程まで居た森の方向。よく目を凝らせば、黒い米粒のような点が大量に見える。

いや、あれはまさか……!!

「魔物……か？」

「恐らく、あの竜に付いてる『白迅龍』の血に惹かれたんだと思い

ます」

「厄介だな……！」

リリーを抱いたまま身体を屈める。すぐにその上を風切り音を立てながら何かが通過する。紛う事なき奴の尾だ。

どうする、俺？

このまま戦っていれば消耗は避けられない上にあの魔物達も追いついてしまつたろう。そうなれば、俺一人では無理だ。リリーを守りながらだなんてなおさらできやしない。

だからと言ってあの魔物達の掃討に向かえば、俺という障害を失つたこの恐竜は間違いなく王都を襲い、街の人々を殺すだろう。

どうあつても手詰まり。今の状況で俺には何の解決策も見あたらない。

だが、もしも

「……………？何の音でしょう？」

ゴロゴロと揺れる地面。そして僅かに聞こえてくる音。

「…やっとか…。もっと早く来いつての」

第三者による介入があつたとしたら？

「全軍突撃ーっ!!」

恐竜に襲いかかる無数の矢の嵐。奴はそれを物ともしないが、突然の敵の出現に戸惑っているようだった。

現れたのはシュバイツ王国騎士団、王国きつての鋭兵たち。その熟練度の高さ、チームワークから【鉄壁の遊撃部隊】とも呼ばれている……らしい。

だが、そんな肩書きはどうでもいい。今の俺に必要なのは、頼りになる戦力。名声は戦いにおいては何の役にも立ちやしないからな。

「姫様!!」

「ユリア!!」

ユリアさんが焦った様子でリリーに近づき……、

「何やってんですかーっ!!」

その頭に思い切り拳骨を落とした。うわ、痛ぞ。

「~~~~!!」

声なき声で痛みにも苦悶するリリー。ここが外じゃなかったら頭を抑えて地面を転がっていたじゃなかるうか？

「勝手に外に出たりして！どれほど私が心配したと思っているんです！！」

「いや、置き手紙したから……」

「問答無用です！帰ったらお仕置きしますからね！！」

ズーンと見るからに暗くなるリリー。うん、気持ちは分からなくもないが、自業自得な気もするぞ。

対するユリアさんは表情こそ怒ってはいるが、心底ホツとしているようだった。リリーのことが本当に心配だったんだらうな。

「ひとまずはあいつを倒すのが先です。部下を一人付けますから姫様は安全なところに避難してください」

「でも……！！！」

「ユリアさんの言うとおりだ。お前はこの国にとって大切な存在なんだろ？」

恐竜を見据えたまま、背中越しに言った。

俺には器用なことなんか言えやしない。それで他人に恨まれようが、蔑あはまされようが知ったことではない。だから……、

「悪いが、今のお前じゃ足手まといなんだよ」

俺はこう言うことしかできなかった。

近くのユリアさんも何か言いたそうな顔をしているが、黙ったままだった。後ろでリリーが息を呑むのが分かる。そして、泣きそうになっているのも。

我ながら不器用な人間だと思う。皮肉なことだ、自分が守らなければならぬ人を自分で傷つけているのだから。

「……無事に…帰ってきてください…!!」

彼女はそれだけ言うと、背を向けて走り出した。

唇を噛む。もっと上手い言い方があったらと、どうして彼女を傷つけるような言葉をかけたのかと。

もっとも、後悔したところで遅い話だが。

「お前……」

「………気持ちを切り替える。敵はあれだけじゃない、森の方からも来てた」

「それに関しては平気だ。別の討伐隊が向かってる」

それなら大丈夫だな。

気持ちを切り替える。これから必要なのは相手を倒すことのみ。俺の心はただそれだけに向けられる。

「ギルドで奴の名前は『暴竜』と決定されたそうだ」
「暴れる竜ね、違うない」

まさに奴にお似合いのあだ名だろう。

奴もそろそろこちらに慣れて動き出す頃合いだ。その予想通り、
暴竜は轟音を上げる。戦闘開始の合図だ。

ユリアさんは背中に背負っていた斧と槍が合わさったような槍
確か、パルチザンとか言ってたっけか　を両手に持ち、構えを取
った。

「奴の身体は硬い！その立派な槍が折れないようにな！」
「そっちこそ、調子に乗っていると怪我するぞ！」

軽口を叩いて、俺たちは戦場へ突進した。

第16話

何かが現れた。どうする？

ぶつとばせー！

ーぶつとばせー

どうも、改めまして博麗まんじゅうです。

更新遅れちゃって申し訳ないです。前からだいぶ経ってる気がします。

これも全ては度重なる模試のせい…。

おのれ、模試め！！

さて、愚痴もこの辺で。

皆様この小説をご覧になっていただいております。

なんとこの小説も皆様のおかげで総合ユニークが1万を越えました！

嬉しい！でも更新のペースを速められるほどの体力と時間その他諸々が無いので、祝！総合ユニーク1万達成！！みたいな話は無いです、はい。

230

ひとまず、今回はこの辺で。

また次回お会いしましょう。

10/5 ユリアをユリアさんに訂正しました。

11/2 微妙に書き（ry。

第17話 全力を…、ぶちまける!! (前書き)

どうも、博麗まんじゅうです。

遅れちゃってすみません。では、本編どうぞ。

第17話 全力を…、ぶちまける！！

「うおおりゃっ！…！」

巨木のような太い足に右の拳をたたき込む。そして、それと同時に振るわれる尾。

ヒット&アウェイの要領で、その場を離脱し距離を取る。これを何度繰り返したかは覚えていないが、少なくとも二桁には達しているだろう。だというのに、奴は全く堪える様子が無いどころか、ピンピンしている。やってるこっちの方が参ってしまいそうだ。

『暴竜』との戦闘が始まってはや十数分。既に戦線は死屍ししかい類類の状態だった。

暴力的なまでの奴の攻撃にこちらはどんどんと戦力を削られるが、こちらの攻撃は奴には全く通用していないようだ。なにそのチート？ おかげで騎士団達はどんどんと戦線離脱。残わすっているのは僅わずかか十数名といった所。

ちなみに、騎士団は半分ほどで分かれて森から出て来た魔物達の討伐も同時並行で行っているとユリアさんが言っていたから、魔物の群れの方は大丈夫だろう、きつと。

となれば、俺がすることはこいつの撃退または討伐ってところなんだが…、

「……………！！！！」

ダメだ、勝てるイメージが思いつかない。

考えてもみてくれ、一応俺は自称神様一（女神だからね！？ b
yアルちゃん）から俗に言う中二病的^{チート}能力をもらったわけだが、そ
れはあくまで能力を持つていただけあつて使いこなせているわけ
はない。例えて言うなら、ドラ エで最強装備を持つてるけど、能
力は初期能力値のままみたいな。

そんなもので魔王に挑んだりすれば、結果は分かるよな？

あれこれと考えている間にも次々と繰り出される攻撃。紙一重で
それを避けながらも内心で俺は冷や汗をたらしていた。

何を隠そう、こいつの攻撃力が半端じゃない。地面に当たりゃク
レーターができるわ、かすりでもすれば腕なんか簡単に吹き飛ばわ
で、俺が今紙一重で避けられているのも実はかなり危険な行為だ。

そして極めつけが…、

「……………！？ まずい、アレが来るぞ！ 総員退避！！」

ユリアさんが叫ぶと同時に回転を始める『暴竜』。そして飛来す
る背中の大量の背中の棘^{とげ}。

驚くべきことに奴は背中の棘すらも武器にしていた。回転をする
ことよって全方位への攻撃を可能にし、無数の棘を飛ばす。たち

まち、非常にえげつない光景の出来上がりだ。俺もあまり言いたくないから言わないが……。ひとまずしばらくは肉食えないと思った。

俺の常識が間違ってたなかったら恐竜みたいなやつって回転しないはずなんだよね。やっぱりそこはファンタジー補正（ご都合主義）乙と言ったところか。

「うお！？ 危ね！！」

飛来する棘を避けつつ、避けられないものは魔力を放出しただけの魔力の壁で威力を相殺させる。魔力量にも言わせた障壁もどきは棘を相殺するどころか塵に変えて消し飛ばした。土壇場どたんばで使ったけど成功したか。

だが、それと同時に感じる疲労感。この魔法は予想以上に俺の魔力をもつていくらしい。数発防ぐだけで【限界突破】と同じぐらいの魔力をもつていかれるのを感じた。そら魔力放出するだけならそうなるわな。今後の課題だ、うん。

後ろでは退避したにも関わらず次々と倒れていく王国騎士達。テレビなら間違いなく『みせられないよ（＾？＾）』って看板を持った小人さんがもれなく出てくるだろう。

一旦後方へ下がり、人数を確認する。……って、残ってるの俺とユリアさんだけかよ！？ いや、これもう無理じゃね？

「くっ……！残ったのは私とお前だけか」

ギリツと唇を噛むユリアさん。無理も無い、自国の誇る鋭兵達を
あつという間に蹴散らされたのだから。その悔しさはとてつもない
ものなのだろう。

それ故だったのだろうか？

彼女は俺を奴からかばうように俺の前に立ち、手に持つパルチザ
ンを構え、暴竜を見据えた。

「私が奴を食い止める。だからお前は逃げるんだ」

「はあ？」

ユリアさんの言葉に正気を疑った。今この人はなんと言った？

「お前が民に逃げるよう告げてくれれば多くの人が…」

「待て待て待て！！ お前今なんだった？ 自分が困になるって言
ったのか？」

俺の頭がおかしくなっていないのだとすれば、ユリアさんの言っ
たことはそういうことだ。ユリアさんが犠牲になることで俺は逃げ
て助かることができる。だが、そうしてしまえば、恐らくユリアさ
んの死は確定するだろう。

「……………」

何人もが奴に立ち向かった結果はどうだった？ 尽くが殺され、傷を負い、倒されていった。何人も束になって敵わなかった相手にたった一人で勝てるだろうか？

答えは否。そんなことができるのなら、出てくるのは初めからそいつ一人で十分だ。何も犠牲を増やす必要性は無い。

彼女がもし一人で奴に立ち向かったとしても結果は変わらない。ただ、奴に殺されるだけだ。

「そつだ。そうすれば私が助からなくとも民は助かる」

「お前…、ふざけてんじゃねえぞ！！ お前が死んだら、リリーはどうなるんだ！！」

「姫様は…、悲しむかもしれないが私の代わりなら探せばいくらでもいる」

「てめえ…！！」

頭の中が怒り一色になり、ユリアさんに詰め寄る。もしも、俺の手が届いていたなら、ユリアさんの胸ぐらを掴んでいただろう。

「てめえはリリーが大切なんじゃないのかよ！！ だったら、何が何でも生き延びてリリーの傍に居てやれよ！！ お前の代わりになれる奴なんてこの世界に誰一人としていやしない。それを分かった上で言ってるのか！！」

失う者と消える者。どちらが苦しいのかなんて、初めから答えは決まっている。消える者は消えたら終わりだ。だが、失う側からとって見ればたまったものではない。残された人々はその悲しみを背

負い続けなければならぬのだから。

誰も誰かの代わりになんてなることはできない。それは世界で彼女が唯一彼女である証。

「…だったら」

ガツと胸ぐらを掴まれ、持ち上げられる。一瞬だけ息がつまり、次の瞬間には憤怒を露にしたユリアさんの顔が目の前にあった。

「だったらどうしろと言うんだ!! 兵士達はもうやられた!! 戦術はもう無い!! このままむざむざ死ぬしかない私にこれ以上何をしろと言うんだ!! 皆が生き残るためにはこれしか方法が無い!! ならそれをする他にないだろう!!」

間近で見た彼女の瞳は怒りに染まっていた。

自分の無力さへの憤り、人々を守ることができなかった不甲斐なさに対するやるせなさ、彼女の目の中でぐるぐると渦巻き現れては消えていく。

「もう…これしか方法はないんだ…」

震える声には行き場の無い感情が溢れ出し、目尻からは涙すら浮いている。

そこでようやく気づいた。彼女の抱え込む感情に。

彼女は悔しいのだ。自分が犠牲になることでしか人々を救えない。よしんば、彼女が犠牲になったとしても人々が必ず助かるとは限らない。その選択しかできず、どうしようもない自分の無力さに歯噛みし彼女は泣いている。

なんて尊く、罪深い生き方なのだろう。

彼女の覚悟、そして信念はこれ以上にならないほどに真っ直ぐで間違はなく本物。人々を助けたいという自分の信念を貫くために自分の親しい人々を悲しませなければならぬ。彼女にはそれが分かっている。分かっているからこそその選択が苦しい。

人々の命とリリー、それらを天秤にかけ彼女は人々を選んだ。リリーを選ぶよりも人々を助けることを選んだ。

彼女にとつてそれは身を引き裂かれるような選択だったに違いない。どちらも大切で、どちらも助けたい。だが、現実にはそれが叶わない。

「早く逃げる。お前はとことん気に入らない奴だったが、それでもこの国の民だ。王国騎士団は何があっても民を守り抜く。それが私たちの使命だ」

その時、ユリアが輝いて見えた気がした。

どこまでも真っ直ぐで、気高い強さを持つ彼女。

「……ったく、仕方ないな」

胸ぐらを掴んでいる腕を振り払い、『暴竜』へ向けて一歩踏み出した。

「お前…、何を…」

「いいからちよつと黙ってる」

残る魔力はそう多くない。故に勝負は長くは続けられない。やるならば一撃必殺、失敗は許されない。

意識を集中させ、イメージする。思い描くは最強の武器、何者にも負けぬ刃こぼれを知らない一振りの剣。

某漫画では魔力を編み、剣を作っていたが俺にはできっこない。俺がやったとしても、成功しないだろうしなにより世界の修正力（著作権）に邪魔される。

だが、魔力を圧縮しただけの剣ならば別だ。

残っている魔力を総動員し、巨大な風の剣を作り上げる。

「ロールアウト構築完了、風華剣」

キーン！！

刃渡りの全長が2メートルもある巨大な剣が顕現される。魔力を極限まで圧縮したそれは風を巻き起こし、その存在感を周囲に認識させる。

極限まで圧縮された魔力は質量を持ち、あらゆるものを容易く切り裂くだろう。

だが、それ強力さ故に力は暴走する。

バチチチツ！！

「ぐっ……！！！」

コントロールを超え、暴発した魔力が俺の体を襲う。
俺程度の熟練度ではこの魔力を抑えることは出来ない。早く片をつけなければ、魔力は暴走し俺の身を滅ぼす。

「やめろ！！ そんなことをすればお前が……！！！」

「んなこたあ分かってんだよ」

「なに……？」

力を抑えることに全力を注ぎつつ、彼女に振り向き、

「危険を冒してまでも俺はお前らを助けたいらしい。お前らには傷ついてほしくない、そう思ってたんだよ」

「え……」

「俺だって死ぬ気はさらさら無い。だから、これは誰かを助けるための犠牲になることじゃない」

俺はニツと笑いかけた。

自分でも自分の言うことに苦笑する。無茶苦茶な屁理屈だ。人には犠牲になるなど言っておきながら自分はまさにそうしようとしているのだから。

「俺を信じる。絶対勝つ」

ユリアさんの言葉を聞く前に地を蹴り走り出す。

この剣が使えるのは一度きり。それを超えれば下手すれば死ぬ。故に決着はただ一度きりで決まる。

「—————!!!」

「あああああああつ!!!!!!」

自分を鼓舞するために声を張り上げる。怖くないはずなどない。だけどそれ以上に誰かを失うことの方が怖い。

迫る奴の体。両手にこんかぎりの力を込める。

全身の筋肉が悲鳴を上げる。うるさい、そんなことなど百も承知。あまりの負担に脳が叫ぶ。だが所詮は瑣末さまつごと。

魔力が枯渇し、息苦しさで張り裂けそうな痛みを感じる。今の俺には何の関係もない。

体に残るありとあらゆる力をかき集め、

「
　　」
「ッ！？」

すべてと共に切り捨てた。

第17話 全力を…、ぶちまける！！（後書き）

えー、どうも。博麗まんじゅうです。

まずはこんなにも更新遅れちゃってすみませんでした。折角読んでくれる人がいらっしやるのに申し訳ないです。

それと、活動報告にもあったAO入試の話ですが…、自分は今回は見送ることにしました。要するに、センター一本です。

大丈夫、覚悟は出来てます。何があっても後悔しないように頑張ります。

さて、話題は変わりますが実はアンケートを取りたいと思ってまして。

友人に自分の書いた小説のことを話したのですが、話の展開が遅いと言われてしまいました。そこで、皆さんにお聞きしたいのですが、

Q今の小説の話の早さはこのままでもいいでしょうか？

- 1・もっと早くしてほしい
- 2・今のままで十分
- 3・もっと遅くてもいいが内容を更に濃く

三つの選択肢から選んで感想欄をお願いします。

あと、誤字脱字の指摘、感想もお待ちしています。では、今回はこの辺で。

第18話 長い…戦いだった(ガクッ)(前書き)

お久しぶりです、博麗まんじゅうです。

とりあえず言いたいことはいっぱいあるけど後書きで。

第18話 長い…戦いだっただ(ガクッ)

ゴウウツ!!

全力をもって振り抜いた魔力剣は魔力不足でもとの魔力になって掻き消える。そもそも風華剣は魔力を風の属性に変換させ圧縮したものだ。それ故に魔力が切れたりコントロールを離れたりすれば、自然と剣はその形を維持することができずに霧散し下手をすれば暴走した魔力が術者の体を滅ぼしもする。その魔力剣は扱いが難しいが、

ズシャアアツ!!

「――!?」

その威力は折り紙付きだ。

内側から風の刃と化した無数の魔力刃に切り裂かれ、奴は体中の傷から血を噴き出しながら地に倒れ伏した。

ああ、ようやく終わった。

途端に足から力が抜けた。緊張のせいか体はずいぶんと気を張っていたらしい。もうずいぶんと体力を消耗していた。足から力が抜けると体は自然と重力に従うわけで、俺の体も例外なく地面へと倒れようとしていた。

「まったく…、無茶をする」

そんな俺の体を直前で止めてくれる手。後ろから感心するようなあきれするような声とともに俺の体が倒れないように支えてくれた。

「言いたいことは山ほどある。だが…、今は休め。君はもう十分に闘った」

ぜひともそうさせてもらいたい。体中の筋肉という筋肉が悲鳴を上げてもう一歩も動けそうにないぞ。

さて一眠りしようかと瞼を落とそうとした矢先にそれは目に入った。

森の方から立ち上る多量の土煙。嘘だろ？　嘘だよな？　頼む、誰か冗談だと言ってくれ。

視力を強化してそれらを見た瞬間、さすがの俺も絶望しそうになった。俺が向けた視線の先、フォルスの森の方角には大量の魔物達が王都へと向かって進行して来ている。

十、百、五百……千……？　冗談じゃねえぞ、こちとらあの化け物と闘ったばかりで死にそうだったのに。

きしむ体を無理矢理起こし立ち上がる。戦いはまだ終わってない。あいつらを倒せばそこでやっとゲームセットだ。

「おい、なにをしている？」

「見るよ、あれ。魔物の大群だぜ？」

ユリアもまた俺と同じ方角を向いて少しだけ目を見開くが、それは一瞬のことですぐに真顔に戻った。

「大丈夫だよ。あいつらのことなら」

ヒュッ！！ ヒュッ！！ ヒュンッ！！ ドッゴーンッ！！

俺の上空を通り過ぎ、魔物達に降り注ぐ数々の矢と魔法、それに大砲。それらは魔物の群れ？？というかもはや軍 に着弾すると派手な爆発を起こしてその一帯の魔物を駆逐した。

『突っ込めーっ！！』

『うおおお！！』

『任せろ！！』

『俺、この戦いが終わったら…』

『見敵必殺（サーチ&デストロイ）！！』

「冒険者達が倒してくれるさ」

城門から溢れ出す人の波。彼らは鎧やローブやジャケットとかを着込んで武器を片手に物凄い勢いで魔物の群れに突っ込んでいった。突然の増援に動揺し、その隙に倒されていく魔物達。時折『ひでぶっ！？』とか『せこむッ！？』とか聞こえてくるけど絶対に気のせいだろう。きつと気のせいだ、うん。あと最後から2番目の奴、御愁傷様だ。

「よう、生きてたか坊主」

人の波から外れてこちらに駆けてくる見慣れた赤髪のおっさんごとアレス。彼は彼の背ほどー大体2メートル弱といったところかーもある大剣を軽々と担いでいる。

「死にそうだよ、おっさん。というか増援遅いだろ？ 危うく死にそうだったじゃないか」

「いや、そりやお前らが中々撤退しないからだろ。本当なら魔法兵器ぶっぱなして仕留めるつもりだったのに、どっかの誰かさんごとと倒しちまうからな」

さつと視線をそらす俺。それをじとーとした目で見てくるが無視を決め込む。

大体、何も言われなかったしあのままじゃ街がやられるだろうって考えたら普通の奴は引いたりなんかしないよな？

これ以上言及されると俺の方が困りそうなので、とつと話題を変えることにする。

「そ、それよりおっさん達が何で来てるんだ？ やっぱ依頼があったとか？」

「ああ、国王直々にな。以来内容は魔物達の掃討で、報酬はかなり弾むとよ。おかげでどいつもこいつもやる気出してご覧の有様だぜ」

魔物達の方を見てみるとあらかた討伐されかかっている。残っている魔物は戦意喪失して逃げ出したりもしているようだ。そりゃあれだけの人数がいりゃ狩るのも早いし、魔物達が逃げるのも道理だ。

「ここいらの討伐は俺らがやっとくからよ。その嬢さんの言うとおり休んどけ」

「おいおい、俺を嘗めてもらっちゃ困る。俺はまだまだ…。」

そう言おうとして体がもう動かないことに気付く。気付けば俺は空を見上げる形で地面に背中をつけていた。

「ああ…、もう無理なのか。」

そこでようやく自分の体が限界を迎えていることに気付く。騙し騙し酷使していた体はどうやら我慢の限界を超えたらしい。指先一本すら動きやしない。

「すまん、後は頼んだ。」

「言えたかどうかは分からないがそう呟いて、俺は訪れる睡魔に身をゆだねた。」

side???

ジーク達が『暴竜』を倒したその頃、フォルスの森ではとある異変が起きていた。

おいおいと茂る樹々のにぼつんと不自然にそこは存在していた。周囲の青々と茂る樹々や草たちと違い、その場所だけは生気を吸い取られたかのように草たちは枯れ、生者の気配が全くない。

その中で一人、枯れ果てた切り株に腰掛ける人の姿があった。フード付きの黒いコートに身を包み、時折吹く風でコートに下の青髪がちらりと見え隠れする。しばし時が止まったかのように動かなかったが、何かに反応したように突然立ち上がった。

「フン。やはりあの程度では無理だったか……」

「明らかな侮蔑の色を含み、吐き捨てるように言う。ガサツ……」。

近くの草むらが揺れ、そこから魔物が顔を出した。その目は黒いコートを捕らえており、周囲の草たちには見向きもしない。魔物の頭にあるのは獲物のことのみ、それ以外のこと意識を割くほどの魔物は頭脳が発達していない。

「ただの雑魚か、とつとと向こうへ行け。刃向かうなら殺すぞ？」

途端に漏れ出す猛烈な殺気。普通の人間ならば軽く気絶してしまいそうな濃度の殺意はそれだけで相手に死という概念を理解させる。魔物は身震いし、寄生を上げたかと思うと一目散にその場から逃げ出した。

フンと鳴らすと、コートを翻して歩き始めた。

「まだ世界は動き出したばかり。精々そのぬるま湯の中でぬくぬくと過ごすことだ」

ニヤリとフードの下から笑いが漏れる。

すると、突然に風が吹いた。突風が収まった次の瞬間にはそこには誰もいなくなっていた。

第18話 長い…戦いだった(ガクッ)(後書き)

まずは更新が遅れてしまいすみませんでした。

リアルの事情で凄く忙しかったのと受験勉強が本格的になり始めたので中々書けませんでした。

本当にすみません。

さて、アンケートの件ですが今のところ、2(今のままで充分)が一票入っております。

アンケートにご回答なされた方ありがとうございます。

ではまた次回でお会いしましょう。

第19話 残された謎、そして……（前編）（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

今回はちよっと長いです。しかも前編・後編に分かれています。

ひとまず本編にGO！

第19話 残された謎、そして……（前編）

気がついたら目の前には見覚えのない天井があった。よし、俺が言いたいことは分かるよな？ それでは皆さん、ご一緒に？

「…知らない天井だ」

誰もが人生で一度は使うであろう言葉だと俺は思う。うん、後悔はしてないぞ？

さて、状況を確認しよう。今居るのは全く見覚えのない部屋。壁も天井も木材で出来ており、ところどころにある粋な絵画がこの部屋の所有者のセンスを窺わせる。いや、そういうの俺はさっぱり分からないけどさ。

淡い色のカーテンは閉じられているが、窓が開いているせいからゆらと揺れて微かに光を漏らしている。

「…うげえ」

身体を起こそうとすると、全身に激痛が走った。そこでようやく自分のしたことを思い出し、軽いため息を吐く。そうだ、そういう俺かなり無茶やったんだっけ。

自分の体内に意識を向けると、ちゃんと正常に魔力が流れていることが分かる。水の流れのように澱みなく流れているところを見る限り、身体に異変は起こらなかったということだろう。

「心配だったが大丈夫みたいだな…」

魔力を枯渇するまで使い切るのは、体力の限界までマラソンをさせ続けられるのと似たようなものだ。もっと分かりやすく言うなら、息が持ち続かなくなっても水中に潜っているのが良い例か。そんなになるまで潜っていると、下手すれば溺れ死ぬことだってある。まあ、つまりは命の危険が迫りかけてたってことだな。

それにしてもあれからどうなったんだろうか？ 今がいつかも分からないし、何があったのかぜひとも情報を集めたい所だが…。

ボタンツ！

「ジークー!!」

ドアを勢いよく開けるなり、ずんずんと肩を怒らせて俺に歩み寄る父さん。ええ!?! なんか凄い怒ってるみたいな感じなんですけど。俺何かしたっけか？

「待て、クレスー!!」

そんな父さんを追いかけるようにして部屋に入ってくるーナさん。その表情には珍しく焦りが浮かんでおり、本気で余裕がないように見えた。

「お前という奴は…!!」

俺の胸ぐらを思い切り掴み上げ、一瞬息が詰まったと思ったら次の瞬間には目の前に憤怒の形相をした父さんの顔があった。

これ以上ないほどに見開いた目には怒りの感情が浮かんでおり、幾つも眉間に深い縦皺が刻まれていた。般若のごとき表情はそれだけで周りを圧倒しそうな雰囲気をおぼわせる。

「自分が何をやったのか分かっているのか!？」

「ちょ、父さん……! く、苦しいって……!!」

「クレス、やめるんだ!!」

父さんの手を振りほどこうと腕に手をかけるが、腕の一振りですーナさんは部屋の外まで弾き飛ばされていた。おい、大丈夫なのかよ!？

「將軍は黙ってください!! いいか、よく聞けジーク! お前はまだ子供だ! 普通なら一人でギルドに行かせたりも、依頼を受けさせたりもしない!」

あ、やっぱり知ってたのね。

「だが、お前は強く賢い。だから俺もセシリーもお前のやることは多少は黙認して来た！　だが、今回のお前はどうかだ！？　自らの命を懸けてまで街を守ろうとしたその気概は認める！　その判断もお前が一人前だったなら言うことなどなかった！」

ギリギリと強まっていく父さんの手の力。なんとか外そうとするも酷使したせい、身体に力が全く入らない。

ヤバい、保たないかも。今酸素が欠乏して視界がぼやぁとしてきてる。

が、しかしそれは唐突に終わりを告げる。突然掴まれていた服から力が抜け、鈍い音を立てて床に落ちた。

訳が分からず、視線を上上げると普段じゃ絶対目にする事のないような、くしゃくしゃになった父さんの顔があった。

「お前は俺たちの大切な息子なんだ……。何よりも大切に、かけがえのない存在だ。それを……、自ら壊すような真似はしないでくれ」
「……………」

「お前が引くに引けなかったのも知ってる。お前は正義の味方は嫌うくせに妙にお人好しだからな。自分が引いてしまったらとんでもないことになると思ってた、違うか？」

「……………ああ」

「だけどな、それはお前一人が背負うことじゃない。子供一人に背負わせるようなものじゃない、俺たち大人が背負わなくてはならん

ものだ」

なんだか申し訳ないような気がして、俺はただうつむいた。

父さんが自分を心配してくれてるのは分かる。父さんたちが自分をこんなにも大切に思ってくれてるのは分かるし、俺自身、あれは相当な無茶だったとも思ってる。それでも、俺があのかげ物と対峙して無茶したのを後悔するかと聞かれれば、俺は間違いなくノーと答えるだろう。

端から見れば俺の行動は偽善なのかもしれないが、俺は偽善なんてものをさらさら肯定する気はない。現に、俺は偽善というものが大嫌いだ。

誰かを助ける、それ自体はいいことなのかもしれない。そりゃ、死にかけて人を見捨てるよりは助けた方が良くに決まってる。けど、それを押し付けることは間違ってる俺は思う。押し付けられた側にとって見ればたまったもんじゃないさ。

なににせよ、俺は自分のやったことが偽善じゃないと思うし、後悔もしていない。絶対偽善じゃない、うん。大切なことなので二回言いました。

? ツンデレ乙wwww byアルちゃん

…今物凄く不快な電波を受診した気がしたぞ。具体的に言うなら、こっ、自分の知り合いが人差し指さしながら『プギャー』とか言うてそうな。

ま、いいや。気にするだけ無駄だ。なんか俺の中でシリアスがー

気に崩れた気がする…。

「ごめん、父さん。でも、俺は間違っただけだとは思ってないよ。それに、結局は俺が生き残ったからいいじゃないか！」

「…はあ、お前という奴は。何言っても無駄なのはよく分かった。まったく、ちゃんと反省はするんだぞ。俺もセシリーも気が気じゃなかったんだからな」

「分かってるよ。もう無駄はしないさ」

ニツと笑って、父さんに言う。父さんは厳しい表情を緩めてやれやれとため息を吐いていた。

「もう話は終わりか？」

扉の影からひよこつと頭を覗かせるニーナさん。すっかり忘れてたけどもう大丈夫なのか？

「私のことなら心配ないぞ、少年。折角の親子の対談を邪魔しては悪いと思ったからドアの影から見させてもらった。私は空気の読める女だからな」

「自分で言ってるところで台無しなのに気づいてください、ニーナさん」

空気を明るくさせようとしているのか、それとも素で天然なのか。

よく分からないところだが、多分前者だと俺は思いたい。

「それで、魔物達はどうなったんです？」

「うむ、それなんだがな……」

「それについては私から話をしよう」

聞き覚えのない第三者の声。低く、重みのあるバリトン。それは俺に警戒心を保たせるには余りにも十分だった。

コツコツと革靴の踵を鳴らして現れた、シンプルな紺色のロングコートを纏った壮年の男性。顔の彫りは深く、黒髪は後ろに撫で付けられている。所々に刻まれた皺と、意味ありげな暗い笑みが俺の警戒心を猛烈にかきたてる。油断をしてはならないと俺の本能が警鐘を鳴らしていた。

「何の用だ、ギルドマスターのヴェッチ」

心無しか、そう言うニーナさんの声は硬い。顔を引き締め、キツと男性を睨みつける。彼はそれを飄々とした態度で受け流し、ツカツカと歩み寄って来た。

「苦労してくれたギルドの一員に礼を言うのは当然だろう。違うかな、將軍ニーナ・アレステス」

「……………」

「なあに、そう警戒せずともいい。さて、ジーク君といつたかな？」
「ああ」

ギルドマスターは妖しい笑みを浮かべたまま、こちらをじつと見る。その瞳に感情らしい感情は見られない。ただ、濁ったような、魚の死んだような目をしていた。

気味が悪い。吸い込まれそうに深い色をしている癖に、まるで底なし沼のようにならずぶと身体が沈んでゆくような錯覚を覚える。それは藻掻いても藻掻いても抜け出すことの出来ない……、

「ヴェツチ！！！」

ニーナさんの言葉でハッと我に戻る。先程までの感覚がかき消え、悪夢から目覚めたときのような不快感が押し寄せる。いつの間にか心臓の鼓動は早鐘を打っており、額で汗が玉を結んでいた。

「ふむ、幻覚のような魔法には耐性が低いようだな。攻撃の耐性には強いようだ……」

「ヴェツチ、お前何をしたか分かってているのか!？」

「ヴェツチ殿、貴方がいくらギルドマスターとはいえ、このような真似はやめていただくか」

俺を庇うようにギルドマスターの間に立つ二人。ニーナさんなど戦闘体勢に入っており、何かきっかけでもあれば飛びかからんばかりの勢いだ。

壮年の彼はフツと一蹴すると、懐から書類を取り出した。

「すまないな。これも職業柄どうしてもすることだな。不快に感じたら謝罪しよう」

表情を崩さぬまま言う彼に全く謝罪の心が感じられないのは果たして俺だけだろうか？

「当たり前だ。期待の新人に何をしようとしているんだか」

「そういう將軍も真っ先に戦おうとしてましたけどね」

痛いところを突かれたらしく、吹けない口笛を吹くフリをして視線を横にそらすニーナさん。もうちょっとまともなはぐらかし方はないのか……。

「さて、話を戻そうか。状況の確認だが、魔物達は無事討伐された。負傷者こそいるものの、死傷者はいない。君のおかげだ、ジーク君」
「あの化け物はどうしたんだ？」
「あれならギルドの生物鑑識員に引き渡した。じきに新たな魔物として発表されるだろう」

そうか、それならいいんだ。しかし、今までアレの存在が知らされていなかったってのはどうも怪しいな。あれ程の魔物なら姿ぐらいは知られていてもいいだろうに……。どうも裏がありそうだな。

「そして、あれ程の魔物を倒した君は特例としてCランクまで格上げとなった」

「Cランクう！？」

「ふむ、まあ妥当なところだろうな」

素っ頓狂な声を上げる俺とは対照的に随分と冷静に頷くニーナさん。え？ そんなものなのか？ FからCって結構な出世だと思うんだが……。

「不満顔だな。これでは足りないか？ 報酬も別に払われるはずだが」

「そうじゃない。ただ、見返りが大きすぎないか？」

「フツ、随分と謙遜な性格なことだ。君は情報も何も無い状態であれを見事討ち果たした。しかも、王宮騎士団が敵わなかった相手であっさりとな。君がいなければ、それこそ多くの人間が死んでいただろう。そう考えれば当然の報酬だと思うが？」

彼はそう言って書類を俺に手渡した。それには今回の魔物討伐の詳細が詳しく記されており、国からの依頼の内容とその報告結果が詳しく書かれている。

「詳しいことはそれに書いてある。生憎私は忙しい身でな」

さつきと言ってること矛盾してるじゃねえかよ。

「これからも精々頑張ってくれたまえ。さらばだ」

来たときと同じようにコツコツと踵を鳴らしながら去っていくギルドマスター。

へ、変な奴としか言いようがない。空気を悪くするだけ悪くして出ていきやがった……。

父さんやニーナさんも空気の悪さを不快に思っているらしく、眉根を寄せたり目を閉じて天井を仰いだりしている。

「あー、ひとまず聞きたいんだけどここ何処？」

「ここは【新緑の妖精】の一等室だ。あの魔物から街を護ってくれたお礼ということで、この女将さんがわざわざ用意してくれた」「そっか。それで、今はいつ？」

「君が倒れてから二日は経ってるぞ。つまり君は二日間寝てばかりだったわけだ、少年。姫も君のことをいたく心配していた」

「へえ、そうか二日も経ってたのか……」

うん？ そうなると、父さんが俺が起きてるって分かって入ってきたのはおかしくないか？ あんなに怒ってたみたいけど、俺が寝てるって分かってるんならあんな風に怒って、しかも都合よく俺が起きてるタイミングで入ってきたのもおかしいような……。

「ジーク。何を思っているのかは知らないが、お前の『おげえ!』
つて声は外にまで漏れてたからな? 偶々来ていた俺はそれを聞いた
ただけだ」

さ、さいですか。ていうか今普通に心読んだよね? 読心術まで
使えるとかもう人外の域に踏み込み始めてるよね、父さん?

すると、急に父さんはニーナさんの方を見て、俺に視線を戻した。

「読心術くらいやってないと將軍の部下は勤まらないぞ?」

「んなわけあるか!?!」

俺と、そしてニーナさんまでもがツッコミ役になった瞬間だった。

第19話 残された謎、そして……（前編）（後書き）

ようやく更新です、はい。

待たせた方々には申し訳ありませんでした。

それといよいよ物語の山が超えかけということで章を分けてみました。

だいぶ見やすくなったと自分では思います（^ ^ ;）

『番外編 未知の報告書』に新たな魔金属が追加されたようです。

『番外編 未知の報告書』の魔金属に新たな説明が追加されたようです。

『番外編 未知の報告書』に新たな説明が追加されたようです。

『番外編 人物紹介』に新たな人物が追加されたようです。

『番外編 人物紹介』に新たな説明が追加されたようです。

第20話 残された謎、そして……（後編）（前書き）

はい、どうも博麗まんじゅうです。

早速本編へGO！

第20話 残された謎、そして……（後編）

あの魔物達の襲撃から数日、俺が目覚めた翌日、俺はとある目的のために街へと出てきていた。あれ程俺を苦しめていた激痛も、流石のチートボディには敵わなかったのか起きたときにはすっかり鳴りを潜めていた。汚い、流石チートボディ汚い。

街に目を向けてみれば、魔物の大討伐が成功したせいかわけに活気づいており、街道に並ぶ商業魂溢れる店主や売り子達が大声で客を呼び込んでいた。道行く人々もそれにつられて店先の品を眺めたり、冷やかしたりと大忙しのようだ。

かくいう俺も露天を冷やかしたりして街道を歩いている。今日は、ギルドへ行くことが目的だ。何故にギルドへ向かっているのか……？ 実はあれからゴタゴタしてまだ依頼を完了していなかった。

ここでシンキングタイム。制限時間は3秒だ。

はい、シンキングタイム終了。さて、俺の受けた依頼内容は何かあったかな？

……何？ リア充爆発しろ？ 何を訳の分からないことを。

答えは、そう、翠鈴草すいりんそうの納品だ。暴竜との戦闘のせいですっかりと忘れていたが、俺の本来の目的は翠鈴草の納品であり、暴竜の討伐じゃない。

勿論、暴竜を倒した分の報酬はきちんと貰いましたよ？ 貰えるというなら貰っておいて損はない。

話がずれたが、ひとまずそういう訳で依頼主のラルカに翠鈴草を届けるためにもわざわざ出て来たというわけだ。

「自分の依頼を忘れるとか…、我ながらアホで間抜けだよなあ」

後々自己嫌悪で床をのたうちまわりそんなことを呟き、既に悶え狂いそうになるのを必死の思いで押さえてギルドにたどり着く。…ん？やけに騒がしいようだが…。

一抹の疑問を持ちながらも、扉を開けて中に入れば、そこでは天国と地獄が混ざり合ったような宴会が繰り広げられていた。

『おい、嬢さん！ 酒の追加頼むぜ！』

『こっちにも一杯！！』

『こっちにゃ水だ！』

『は、はい、ただいま！！』

『てめえ、俺の肉とんな！！』

『へっ、知ったことかよ！！』

人々がひしめき合い、酒を片手に派手に騒いでいる。せかせかと忙しく働くギルドの職員に対し、大声で騒ぎながらがぶがぶと酒を飲んでいる冒険者達。魔物の大討伐の成功で宴会があるのは分かるが、もうだいたい日にち経ってるぞ？

「ふふ、変わった喋り方ね。背伸びしたい時期なのかしら？」

クスクスと人懐こく笑うギルド嬢。違うと言っても「はいはい」と微笑ましいものでも見るように笑うだけで取り合わないギルド嬢に俺は早々に匙さじを投げた。

「それで、納品ってどの依頼なの？」

「ラルカって子の依頼だ。翠鈴草を取って来てくれとの依頼を受けて取ってきたんだが」

「ふむ、ちよっと見せてもらってもいい？」

懐から出すフリをしてスキマから翠鈴草を持ち出す。いいよね、スキマ。マジ便利。

ちなみにこのスキマは中に入れてても物の時間が過ぎないので食べ物ひんが腐ったりということもなく、鮮度が落ちたりもしないので頻ばんに使っている。

「むむ、かなり高品質ね。鮮度もいいし……。やるわね、坊や」「だから子供扱いするなと……」

はあとため息を吐き、呆れてみせる。それすらも微笑ましそうに見てくるのだからもうどうしようもない。

「これなら薬にも使えそうねえ。あら？ そろそろ時間ねえ……」。

どうしたのかしら？」

「時間？ 何の話だ？」

「まあ、ちよつとねえ。あ、来た来た。おい、ラルカちゃん！」

俺の後ろに手を振るギルド嬢。振り返れば、入り口の辺りに依頼主のラルカがいた。今日は少しばかりお洒落しゃれをしているのか、淡緑色のワンピースを着て鍔つばの広い帽子を被っていた。

ギルド嬢の声に気付き、ぱたぱたと駆け足で近寄ってくるラルカ。大勢の大人がいるせいか少し恥ずかしいようで、頬ほが紅潮こうしゅうしている。

「あ、ジークさん」

「よう、翠鈴草とつてきたぞ」

「ほ、ホントですか!？」

ほれ、と手渡すと、目を輝かせてそれに見入るラルカ。それをそつと受け取ると、おもちゃを貰ったかのようにそれを大切に抱き締め、満面の笑みを浮かべた。そういやこれでお母さんが助かるって言うってたな。

「ありがとうございます、ジークさん!! 本当にありがとうございます
いました!!」

「いや、これも仕事のうちだからな」

「あつ、それでお礼なんですけど」

「こそこそと懐ふところを探り、銀貨を二枚差し出すラルカ。ん？ 依頼っ

てのは直接依頼人から報酬を受け取るのか？

「ラルカちゃん、ひとまずそれをこっちに渡してくれるかな？ そ
うじゃないと依頼達成にはならないから」

「あ、そうでした」

恥ずかしさをごまかすようにわたたとギルド嬢に銀貨を手渡す。
ギルド嬢はそれを確かに受け取った後、俺に差し出した。

「はい、これが報酬よジーク君」

「……面倒くさくないか？ ギルドの職員も見てるんだから直接渡
してもかまわないだろうに」

「まあまあ、これがルールですから」

とりあえず疑問その他を全て飲み込んで銀貨を受け取る。受け取
った銀貨はポケットにしまっフリしてスキマにin。

さて、これで初依頼達成か。

思わず顔が緩み、喜びがこみ上げてくる。初めての依頼を達成し
たよ！ やったぜ、アルちゃん。

おいバカ、止めなさいww！！下手すると消されるわよ！？
byアルちゃん

電波受信ができる人っておかしいと思うよな？ はい、俺でした、

すみません。

「そついやラルカは何でそんなにお洒落してるんだ？ 今日は何か特別な日だとか？」

「いえ、そついうわけではないんですが……。えと、その……」

顔を俯かせてモジモジとしだすラルカ。何が何だかさっぱり分からない。ギルド嬢もニヤニヤしながら事の成り行きを見守っているいや、意味が分からない。

『僕と契約してよ！』と言われそつなラルカは数分間、モジモジとしたまま俯いていたが、急にバツと顔を上げると、艶あでやかに光る唇を開き、精一杯に叫んだ。

「あ、あの、これから付き合つて貰えませんか！？」

………はい？

何が何だか分からないまま、ラルカに連れてこられた一軒家。恐らくラルカの家だろう。

あ、成る程。薬の合成か何かにつき合つて欲しいって事ね。いや、絶対そつちじゃないだろうなとは思つてたけどさ。

「お父さーん、ただいまー！」

ぱたぱたと廊下をかけるラルカ。そして、それを迎えるように一人の男性が笑ってラルカを受け止めた。

「おかえり、ラルカ。でもそんなに喜んでどうしたんだい？」

「あのね！ あそこにいるお兄ちゃんが翠鈴草をとってきてくれたの！」

ラルカが俺を指を指し、それにつられて俺を見る男性。一応会釈は返しておく。

改めて見ると、男性は中々にイケメンだ。前の世界でツナギ着たおっさんが『ウホッ！ いい男！』とか言ってそうなほどにだ。穏やかな性格なのか全体的に出ている雰囲気落ち着いていて、少し垂れた目が更にそれを増させている。髪が少しぼさつとしているのは薬師だからだろう。それでも研究者然としたところがないのは不思議なところだ。

「君がとってきてくれたのかい？」

「まあ、そうなりますね」

「そうか。君にはお礼を言わなければならぬね。本当に感謝してる、ありがとう。これで妻も助かるよ」

俺が答えると、彼は本当に嬉しそうな顔でお礼を言った。率直に

お礼を言われると恥ずかしいので、適当に返事をして視線を逸らした。

彼は翠鈴草を持つと、自分の研究室へ戻ると言って何処かへ行ってしまった。

「そっぴやラルカはどうして俺をここに？」

「はっ!? そっぴでした、それを言っぴてなかつぱです。お父さーん! アレどこに仕舞つぱたっけー!？」

『へっ? アレ? ああ、確か書齋の机に仕舞つぱた気がするよ』
「分かつぱたー!」

少女はやはりぱたぱたと走っぴて行つぱた。行き先は恐らく書齋だろっぴ。しかし、アレとは何なのか……。うーむ、気になる。

しばらく待っぴていると、小包を持つぱたラルカが戻っぴてきた。ティッシユ箱ぐらいの大きさで、白い布に巻かれてる。何だろっぴつか?

「えーとですな、ジークさんにはこれを受け取っぴて欲しいのです」

ラルカはそう言っぴ、小包を開封した。

その包みの中にあつぱたのは……。携帯電話だつぱた。

うん、紛う事なき流線型のそれはまさしく、前世の俺が使っぴていたお気に入りタイプの携帯電話で機能とかが充実してて使っぴやすかつぱた……。って、え!?

「な、なんでこれが……」

「あれ？ やっぱリジークさん知ってるんですか」

「知ってるも何もこれは……。ラルカ、一体これは誰が？」

んーと眉根を寄せて難しそうな顔をして懸命に思い出そうとして
いるらしい。何コレ、かわいいんですけど。

「金髪で左右に髪をくくってた白い服を着たお姉ちゃんに渡された
んです。『もうじき貴方の依頼を受ける子が来るだろうからこれを
持ってなさい。貴方の依頼が無事完遂されたときにはそれを渡して
あげて』って言っていました」

あ、それ多分自称女神様だね。ほら、アルちゃん。

急にある種の頭痛がしてきたので、こめかみを揉んで今度あつた
とき何やってんのと問い詰めてやろうと考えた俺はきつと悪くない。

「あとそれから渡したときに伝言を伝えてとも」

「伝言？」

「『後々連絡するから持っておいでね キラッ』って」

よし、絞めようそうしよう。

クッククク、どうしてやるうか……。多量の魔力こそ使うがあの
魔力剣でぶつとばすか、それともナイフを大量に買い込んで張りつ
けにした上でダーツをしてやるうか……。待ってるよ、アルテミス。

お前の寿命は短いぞ。

「ジ、ジークさん？ 凄く怖い顔になってますけど」

「はっ!? すまん、考え事をしてな。それなら遠慮無く貰うことにしよう。それともしその女性に会うことがあれば、近々会いたいとでも伝えてくれ」

「は、はあ」

戸惑った声を上げ、訳が分からないと首を傾げるラルカ。今思ったんだが、俺の周りって凄く幼女率高くないか？ リリーといい、ミリアさんといい、ラルカといい。あ、俺も今はシヨタか。

どうでもいいことを頭の隅に追いやり、携帯電話を受け取る俺。ポケットにそれを放り込み、ラルカに別れを告げる。ラルカは名残惜しそうに俺の袖を掴むが、おれを優しく解いてやる。じゃあなと笑って俺は扉を越えた。

「むう、やっと出てきましたか少年」

外に出たらミリアさんが俺を仁王立ちにおうたちで待ちかまえていた。しかし、そうはいつでもやはり幼女なので仁王立ちに全く迫力は出てない。どちらかというとほほえましきの方が勝っている。

今日の服は白黒のゴシッククロリータらしく、全体的にふわふわした感じがする。というか服にあまり詳しくない俺にはこう表現する

のが精一杯だ。

「なにやってんですか、ミリアさん？ 買い物ですか？」

「まあそんなところだよ。それと少年に伝言があるから」

「今日はやけに伝言が多いな……。それで誰からですか？」

「うん、姫ちゃんからだね。大切な話があるから城に来てって」

姫ちゃん……。あ、リリーか。

ミリアさんは伝言を伝えると、『じゃ、伝言は伝えたよ！』とだけ言って大通りの方に走っていった。よっぽど急いでいたのか、ミリアさんが走り去った後には土埃が舞っていた。何があったんだ、あの人は。

ここでじっとしていても仕方がないので俺もさっさと城に向かうことにする。むう、何か土産でも持って行った方が良さだろうか？

S i d e リリー

空が紅く色づき、もうすぐ夕闇ゆふやみが支配する時間が近いことを告げる。城下の子供達は親たちの待つ温かい家へと戻るため、無邪気に街路がいじを走っていた。太陽もあと少しで沈むだろう。

夜になれば城下の街道に設置された街灯が仄ほのかに輝き、ここから

見る景色も昼とは様変わりする。私はそれを毎日見るのが好きだ。暗い闇の中で点々と輝くそれがまるで夜の空で輝く星々のようだから。

少し前の私は窓からそれを眺めては、いつか自分もあの幻想的な感じのする街に降りたいと思うようになった。でも、待ち受けていたのはそんな綺麗な幻想じゃなく、残酷な現実。

とてもじゃないけど綺麗とは言えない街の影を見てしまった。その時はユリアがいたから無事だったけど、今思えばぞっとする。

飢えに苦しむ孤児が裏路地で建物に背中をあずけるのを見て、破落戸達が町の人から金を巻き上げるのを見て、私はあつけにとられた。あれ程綺麗だと思っていたものがその実、醜い面を持ち合わせたものだなんて子供でしかない私がどうして思えただろう？

でも、今の私はそんな街を見てそれが当たり前だと思っている。光が存在すれば闇がどうしても存在してしまうように表には裏がつきものだから。

見るべきモノの中に確かに裏は、闇は入っている。綺麗事ばかりじゃやっていけないと父上にも教わった。でも、決して自分の正しいと思うことには逆らっちゃいけないとも教わった。

でも、世界には闇ばかりじゃない。光だってある。今の私ならそう思える。

「よう、リリー。話ってなんだ？」

そう、私にはもう、貴方という光があるから。

S i d e ジーク

バルコニーで夕焼けを眺めていたリリーに気さくに話しかける。大切な話と言われたらついつい最初はおちゃらけてしまう。ほら、人間、やるなと言われたらやりたくなる衝動と同じだ。

くるりと振り返るリリーは思わず息を吞んでしまうようなどこか大人びた雰囲気があった。先日のリリーとは全く違っていて、幼さは残るものの成長をしたことを思わせる。その目には確かな意志の色があった。

281

「ふふ、相変わらずな方ですね」

「俺を構成する物の半分以上が冗談と言っても良いほどだからな」

腕を組んでうんうんと頷いてみせると、彼女はクスクスと笑った。

「そうですね。それなら、ジークさんの残りの半分はお人好しでしょうが？」

「おいおい、俺はお人好しなんかじゃないぞ」

笑って返すリリーに俺は肩を竦めた。

彼女は微笑を浮かべたまま、街の方へと向いた。俺もリリーの隣に並び街を見下ろす。

夜の帳がもうすぐに落ちるであろう街は静かとは対照的な雰囲気だにぎわっている。先日の大討伐の成功の影響もあるのだろう。まだまだ終わりとはほど遠そうだった。

「ねえ、ジークさん。この街をどう思いました？」

「ん？ そうだな」

少しだけ考えて、俺は口を開きかける。だけど、それはすぐに俺の中に呑み込まれた。

気楽に応えてはいけないような気がして、俺はその真意を問おうとリリーの方を向いた。リリーは静かに街を見下ろしていた。その目には一体何が映っているのだろうか？ 街の中に何を見ているのだろうか？

そう思っても答えは出るはずがない。何故なら、それは俺の思っている事じゃなくて、リリーの思っていることだから。

「俺はさ、この前ここに来たばかり何だけどさ」

「はい」

そこで言葉を切って黙る。頭の中で考えていた言葉が上手く纏まらない。だから、俺はときれときれに言葉を紡いだ。

「その、良い街だと思う。明るいしさ、みんな活気があってさ。

そりゃ、悪い奴だっっていたし、粗暴な奴だっっていた。でも、それに負けないくらい良い人がいたと思うぜ？」

「はい」

「何というか、上手くは言えないけど……、俺はこの街が一番だと思っ」

何故かその言葉だけはすらりと言葉にすることができた。まるで、その言葉を紡ぐことが当たり前であるかのように、紡ぐことが当然であるかのように俺は自然とそれを口にしていった。

別に他の街を俺は知りやしないし、全体的に見て良い街なんざこの世に五万とあるだろう。

だけど、それでも俺はこの街を一番だと思えるはずだ。

自分の初めての冒険が始まった場所、それが紛れもなくこの街なのだから。

「そうですね……。私もこの街は好きです。自分の生まれ育った場所ですし」

彼女は綺麗な金髪を揺らし、ゆっくりと俺の方を向いてにっこりと笑った。

「ジークさんに会えた場所ですから」

ドキッとして顔が熱くなる。恥ずかしさを誤魔化すように街の方

を向き、必死に感情を落ち着かせる。ちくしょう、反則だぜそりゃ
……！

落ち着け、俺。そうだ、素数を数えろ。1、2、3、5、7、……
…、あ、1つて素数じゃないね。

そんな俺の動揺をいざ知らず、笑ったままリリーは話を続けた。

「私はこの街をよくしていきたいんです。でも私はまだ幼い、ただの少女です。だけど変えていこうとする気持ちはあります」

リリーが真剣な声で話す。俺でも、彼女の真剣さが分かるほどにその声にもしつかりとした彼女の意志が感じられた。

「だからジークさんに協力して欲しいんです。この街を良くしていくために。私だけじゃ駄目だから……。ジークさんに支えて欲しいんです」

プロポーズとも取れるようなセリフを口にする。やれやれ、俺が誤解したらどうするんだ？ もちろん、そんな阿呆な考えは微塵も表情には出さないが。

「私の専属騎士になってももらえませんか、ジークさん？」

その時、不思議なことに俺は夢を視た。そこに映るのは凜として

立つリリーとその脇で控える俺の姿。だけど、その表情は暗い。二人とも何かを見て憂いを感じているような……。

「ジークさん？」

「……あ、ああ。悪い。考え込んでた」

リリーの声で現実に引き戻される。何だったんだ、さっきのは？ やけにリアルだったような……。

返事を待つリリーは決意を宿した瞳で俺を真っ直ぐに見つめていた。俺は一度、息を吸い、目を閉じて、静かに目を開いた。

「俺は難しいことは分からない。リリーの専属騎士になるとかならないとかは良く分からにけどさ……」

俺はニカツと笑って、続きを言うべくそれを言葉にした。

「リリーが街をよくするために動くってんなら俺はいくらでも協力するぜ？ 俺に任せとけ！ どんな難題だろうと打ち破ってやるさ！」

俺の返事にぱあっと笑顔を開かせる。

うん、うんと頷く彼女に俺は騎士の真似事のように片膝を付き、右腕を左の肩にやり頭を垂れる。

「我が剣を貴方にお預けしましょう、リリー・シュヴァイツ王女よ」
「貴方の剣、確かに承りました、ジーク・フェレンデュラ」

S i d e ????

その日、一人の騎士が誕生した。後々に名を残す偉大な騎士。だが、今はまだ未熟である彼には様々な困難が待ち受けているであろう。

これは彼が最強の騎士として名を残す、その果てを目指す一つの道しるべ。一つの物語の終わりに過ぎない。

まだまだ続く彼の旅路。いつかたどり着くであろう彼らの旅路にどうか幸あらんことを……。

第20話 残された謎、そして……（後編）（後書き）

はい、第1章【王都シュヴァイツ】完結です。

無事（？）に1章終わってほっとしてる博麗まんじゅうです。ただ、クオリティが低いのは否めない……。

そんなことより、まずは読者の皆様には感謝を！！

1章だけでも終わらせることが出来たのは、小説をご覧になってくれた皆様のおかげです。もしも誰も見てくれなかったら続ける事なんて出来なかったでしょう、ええ、本人である自分が太鼓判を押します。

そんなわけで色々要約すると第1章完結です。はい、そこに戻ります。

では、また次回お会いしましょう。

幕間 修行(俺) × 遊び(相手) || 地獄(前書き)

どうも、博麗まんじゅうです。

今回は番外編。ジーク君が4歳の時の話です。

幕間 修行（俺）×遊び（相手）＝地獄

これはとある少年の修行風景を淡々と描く物語です。過度な期待はしないでください。

あと、画面からは1・2寸ほど、離れてから見やがってください。

「はあ……、はあ……！！」

肺に溜まっていた空気を一気に追い出し、新鮮な空気を求めて何度も息を吸う。馬鹿みたいに振り回していた腕は鉛のように重く、少し動かそうとするだけでも筋肉が軋み、悲鳴を上げた。

額には幾つも汗が玉を結び、汗に濡れた髪がべちゃっと張り付いていて正直気持ちが悪い。

疲労困憊というのが一番しっくりくるであろう状態に今の俺はいた。全身は泥だらけ、身体の切り傷、擦り傷は数知れず、足が震えてちよっと気を抜けば今にも倒れてしまいそうだ。

顔を上げれば、そこには無骨な大剣をかついだ、身長が2mを超えようかという大男がニヤニヤと笑いながら俺を見下ろしていた。鍛え上げられた肉体は限界まで引き絞った弓のように締まっており、右頬ほおに大きく走る切り傷がこの男の勇猛さを物語る。顎髭を撫でながら觀賞するような視線は間違いなく觀賞する目そのものなのだろう。

こいつこそが俺をここまで疲労させた張本人である。無論、手加減というものは知っているらしく、こちらがギリギリで出来ることの範囲を見極めてそれを修行として俺に課かした。

もちろん、無茶をしないギリギリの範囲のことなので、文句を言うことも出来ず、この野郎と内心で毒づきながら仕方なく従った結果がコレである。もうやめて！俺のライフはもうゼロよ！

「まったく、情けねえなジーク。もうギブアップか、うん？」

「五月蠅いな、あんたと一緒にすんなオリオン」

がっはっはと豪快な笑いを上げ、ばんばんと俺の背中を叩く。こいつはデフォルトで力が強く、ちょっとはたかれただけでも相当痛い。そんな奴が俺の背中を遠慮なく叩けばどうなるのか？俺は文字通り吹き飛び、数メートル宙を舞ったところでようやく地面と再会を果たした、しかも顔から。

逆転した視界にはどこぞの魔術師の心象風景のごとし紅あかく灼やけた空と無限に広がる荒野が広がっていた。違つとすれば地面に剣が刺さっていないことだろうか？

身体を起こして空を眺める。久しぶりにここで修行を始めてからまだ二時間。だというのに俺はもう気力を失いかけ、やめにした

と思い始めていた。視界の端にはノシノシと歩いてくるオリオンの姿。はあっとため息を吐きながら再度空を仰ぎ見るのだった。

事の始まりは2年前。無邪むじや気に遊あそびつつも自分を鍛たくえることに熱心だった俺のもとに、その手紙は届けられた。

「ジークサーン！ お届け物ですよー」

今思えば、後々頭を抱えることになる原因の種はこれだったんだが、母さんが書いた魔法書グリモワールと悪戦苦闘あくせんくとうを繰り返していた当時の俺は気づくはずもない。誰からだと不審に思いながらも俺はリースから小包を受け取った。小包の包装を開くと、小箱に手紙が添えられていた。リースも興味津々きょうみしんしんらしく、後ろから顔を出して覗き込んでいる。

手紙の封筒を破り、中にあるものを取り出すとそこには見やすいように大きく書きなぐったように書かれた紙が一枚。

『やつはー アルちゃんだよ？ 元気にしてるかなジーク君？ 元気にしようよと元気にしていなかろうと私に取っちゃどうでもいけど、君に知らせたいことができたから一緒にいてる鍵を使っ

てね？ あ、お土産もよろしく』

思わずクシャツと紙を握りつぶしてしまったのは言うまでもない。後ろのリースは手紙を見ても何がなんだか分からないといった表情で首を傾げている。

それもそのはず、これはここで使われている言葉ではない。元の世界の、それも日本語で書かれている物だ。ミミズがのたくったよ。うなこちら側の言語は世界共通のもので、基本は英語に似ている。そのため固有名詞などは覚えるのに苦労するものの、それ以外に関してはそうでもない。

くしゃくしゃになった手紙を机に放って今度は小箱を開けることにする。中には小さな金色に輝く鍵が一つだけ。手紙を見た限りでも俺にこれを届けることが目的だったのだろう。

「鍵ですか？」

「まあ、これが鍵以外の何かに見えるなら医者に見てもらうことを勧めるが」

「分かりませんよ？ ひよっとしたらカードの中の妖精を顕現けんけんさせるための杖かもしれない」

「……俺はカードをキャプトする少女じゃない」

それにしてもこれをあいつはどう使えというのか？ アレか、どこぞの羽みたく空へ放り投げるのか？ それとも『アンロック』とか言いながら両手を胸の前で何かすればいいのか？ 使い方がさっぱり分からないぞ……。

むむむと鍵を前にして唸っていると、リースは俺が握りつぶした

手紙の裏を見て声を上げた。

「ジークさん、まだ続きがあるみたいですが？」

「はあ？ まだ書いてあるのか？」

リースから手紙を受け取り、ざっと目を通す。

『ふっふっふ、こちらを見ているということは無事私のトラップに気づいたということね？そこは褒めてあげようじゃない』

いかん。もうこの一行だけで手が勝手に動きそうになる。落ち着け、クールになるんだ俺。手紙を最後まで読んでから燃やしても遅くはない。

『鍵の使い方は……そうね、空に鍵を掲げて『ほにやららパワー、メイイクアップ！』って言えば多分大丈夫よ』

グシャッ。

俺の右手から紙の握りつぶす音が聞こえる。俺はというと、とてもイイ笑顔で青筋をビキビキと立てていた。流石のリースもそんな俺の様子に驚いてか、驚愕に目を見開き、引き気味に俺を見ている。落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け。よし、大丈夫。俺はクールだ。

『かけ声は何でもいいから強く扉をイメージすることが大切よ。それで修羅の門が開くはずだから。私の首がかかっているんだから何があっても絶対来てよね？　じゃ、また後でね、アデュ。』

追伸

ねえ、知ってる？　お風呂の後って耳の中湿ってるらしいわよ？
とあるアニメからの受け売りだけどね』

全部読み終えた俺は不思議と晴れやかな気分ですれを切り刻んだ。なんだらう？　こう、悟ったというか諦めがついたというか。とにかく俺は凄く解放された気分だった。あいつにお仕置き（という名の天罰）を加えることが出来るのだから。

「あ、あの、ジークさん？」

「ああ、リース。ちよつと出かけてくるから。すぐに戻るから心配すんなよな」

どこかへ通ずるであろう扉をイメージしながら俺はその鍵を高く
放り投げた。

ゲート・オープン
「開門」

瞬間、光に包まれて俺はどこかへ転移する感覚を最後にその場から
らかき消えた。

「はい、いらっしやういジーク」

意識がクリアになると共に聞こえてくるあの幼女ボイス。ああ、これは紛れもなくアルテミスだな。よろしい、ならばお仕置きだ。

「あんま調子にのんな幼女神がー!!!」

「きゃーっ！ ジ、ジークが反抗期い！」

素早くアルテミスを捕まえ、ガシツとヘッドロックを決める。ギリギリと力を込めて締め上げるが、アルテミスには全く効いてないようで、はしやぎながらキヤーキヤーと遊んでいる。イラツと来た俺は更に力を込める。

「ちょ、ジーク？ 力が洒落しゃれになってないんだけど」

「安心しろ。俺はいつでも本気だ」

「えっ！？ それって愛の告白？」

「……………」

「ちょ、痛い痛い！ ごめん、謝るから！ 痛いってー!!」

流石に耐えきれなくなったのか、バンバンと俺の腕を叩いて降参の意を示すアルテミス。俺は今度から自重するように約束させてから拘束を解いてやった。アルテミスは頭を擦りながら上目遣いで「いじわる」と口を尖らせた。

「それで、俺をわざわざ呼んだ訳は？　こんなわけのわからない所に呼んだんだ。何か（言い）訳があるんだろう？」

辺りを見回しながら言った。周囲は見渡す限りの荒野。終末でも来てしまったように寂しい荒野にはそれ以上は何もなく、ただ空虚な世界がどこまでも続いていた。空は夕焼けにも似た紅で、沈むか沈まないかの瀬戸際の太陽が暗い荒野を照らしていた。

「うん。これが君の欲しかったものでしょ？」

「俺の欲しかったもの？」

「なに不思議そうな顔してるのよ？　時間調整のできる修行場が欲しかったんでしょ？」

「いやまあ、そうだが」

「大丈夫。これは入る時に任意で時間の流れを変えられるから。今は外の時間よりかなり早いスピードだけど」

つまり、此処で1時間ぐらい経ってたとしても向こうではまだ1分ぐらいしか経ってないってことになるな。

「今は向こうでの一分がこっちの一年だけだね。それで、わざわざ君を呼んだのはこれだけじゃなくて、会って欲しい人がいるの」「会って欲しい人？」

はて、一体誰だろう？ アルテミスのお会って欲しい人って言うぐらだからやっぱり神とか天使だろうか？ しかし神のことをよく知らない俺には一体誰が来るかなんて予想が…。

「よつす、俺オリオン。俺すっごいわくわくしてるぜ？」
「超有名人かよ！？」

片手を上げ、軽いノリで挨拶する巨人もかくやという大男。顎髭あごひげを蓄え、右頬に走る傷がただ者でない気配を感じさせる。軽く3メートルはあるつかという大剣を肩に提げ荒野に佇む姿はさながら戦士のようなものである。

さて、オリオンとは誰か？ 分かる諸君は分かるはずだ。そう、あの空に浮かんでいるオリオン座のモデルその人である。海の神ポセイドンとゴルゴン三姉妹の次女エウリュアレとの間にできた息子であり、海を渡れる力を持ってたとか、アポロンの刺客の毒サソリによって死んだとか、目の前にいるアルテミスに弓で射殺されたとか色んな伝説を残している人である。

「お前がアルテミスが異世界に送った人間か。ふむふむ、なるほどな」

「どう？ 中々素質ありそうでしょ」

「まあ、俺に言わせりゃそこそこだがな」
「そりゃ貴方に比べりゃどんな人間だつてまあまあでしょうよ」

はあつとため息を吐くアルテミス。話の中心である俺を差し置いて話を進めるとは何事か。俺も入れてください、お願いします。

「えと、ジーク。分かつてると思っただけこれがオリオン。私の元恋人で多分神の中じゃ中々強い剣士よ」

「手厳しい紹介だな」

「あんななんかこれで十分でしょ？ で、こつちがジーク。私がある事情で異世界に送り込んだ少年よ。精神年齢は…二十歳前後？」
「そこはどうでもいいと思うぞ」

一々余計な一言を付けるのがこの子は好きなのだろうか？ 俺の知ったことじゃないが。

「ジーク、よろしくな」

「こちらこそ」

こつこつとしたオリオンの手を握る。差し出されたその手は鍛え上げた大人の手だった。戦場で剣を振り続けたのか、何か修行した成果なのかそれには戦士特有の手の感触があった。

彼はぎゅつと俺の手を握ってくる。負けじとにこやかに笑いながら力を込め返す。すると、オリオンもまた手の力を強めた。ならばと俺もまた力を込め返す。すると、

「ぬぬぬ……！」

「ぐぐぐ……！」

笑顔で青筋を立てながら握手をするという何とも滑稽こっけいな構図が完成した。互いに汗を額に結び、握る手は真っ赤でプルプルと震えている。プライドとプライドがぶつかったらどうなるのかという良い見本に違いない。

「やめなさい馬鹿二人」

パンとどこから取り出したのかアルテミスは巨大なハリセンで頭を叩いた。これ以上話を脱線させるなどのお達しのようなのだ。

「というか、こいつが元恋人って……、オリオンって実はロリク……、

「おい、ジーク。何考えてるのかはよくわかる。でも俺はそういうのじゃないからな？」

「そ、そうか」

なにげに必死なオリオンに引きつった笑みで答えてから、何事もなかったかのように俺は話を続けた。

続きを話し始めたアルテミスの話を要約すると、

・この世界通称【修羅の門】を俺に譲る
・オリオンがあんたに興味を持つちゃったから死しあ合あいを殺やりなさい

とのことだ。うん、いろいろ間違ってる気がするよな？ 俺も間違ってる気がする。

そう言う訳で障害物のない荒野で俺たちは対面した。アルテミスは横で観戦する気まんまんである。片手にスナック菓子持ってるし。

「それじゃ、ジーク。相手を気絶させるか降参させたら勝ちだからな」

「あいよ、開始の合図はどうする？」

「そうだな」

彼は考え込んで右手を顎にやるオリオン。その口元が一瞬だけ小さくにやりと歪んだのを俺は見逃さなかった。

「今からスタートだ」

次の瞬間には目の前にあの大剣が迫っていた。無骨な金属の塊は俺に一撃を与えるべく振り上げられ、太陽の光を反射して鈍く光っていた。

身体を捻ってそれを避ける。対象を逃した大剣は地面へとその一撃を繰り出し、地を抉えくった。反撃をしようと拳を構える。が、それがすぐに甘い考えであることを思い知らされる。

奴はあろうことか、振り下ろした大剣を次の瞬間にはそのまま俺

めがけて振り上げていた。そんな無茶な、と驚きつつ姿勢を低くしてそれを避ける。上を通り過ぎたそれは耳障りな風切り音を残して俺のすぐ真上を通り過ぎた。

今度こそと拳を構えてもやはり俺の攻撃を遮るように大剣が迫る。不気味なことに、その一撃一撃の間にはタイムラグがほとんど存在しない。

剣を振る際にはどうしても次の一撃を繰り出すためにタイムラグが出て来てしまう。それは筋肉を一方に集めて力を叩き付けるために、急に力のベクトルの向きを変えられないのと、仮に変えるとしてもその向きを変えるときに多大な力を要するためだ。それでも、双剣とか、連撃に向けたナイフとかは別だけどな。

しかし、こいつが使っているのは巨大な大剣。軽々と振り回せるはずのないものを奴はいとも簡単に操っていた。

すれすれの位置を切っていく大剣を避けながら俺は必死に頭を回転させていた。

こちらには理不尽なことに武器は無い。ならば使えるものは自身の身体のみ。そこは問題ない。ほら、弘法は筆を選ばずっていうな。

だが、問題はタイミング。少しでもタイミングを誤れば俺は間違いないくあの剣の餌食になる。もっとも、致命傷だけで殺しはしないだろうが……。

オリオンの振る大剣のパターンが変わる。それまで一撃必殺であった攻撃は攻撃力ではなく、ひよひよい避ける俺に合わせて手数を重視したものになった。一撃一撃にそこまでの威力は無いが、速いせいで避けづらい。先ほどまでは危なくもかわしていたが、今は身体に切り傷を増やしていく一方となった。

「どうした、ジーク！ 怖じ気づいたか！」
「そんなわけあるかよ！」

とは言ったものの未だ攻撃のチャンスは無い。なんとかして攻撃しなければ体力切れで間違いなく俺が先にやられる。

隙を見極めるため、奴の一挙一動を注視する。剣を振るうたびに生じるタイムラグはコンマ1秒にすら満たない。

ならば、それに合わせて拳を振るうのみ！

奴が剣を振り終わる寸前で拳を構え、タイムラグが生じるとともに右の拳を突き出す。全力を乗せたそれは、果たして奴の身体に届くこと無く大剣の刀身に吸い込まれていった。

ガアンと強い衝撃と共に響く大音量。空しい荒野にそれが反響し、幾つものエコーを作り出す。だが、今の俺にそれを楽しむほどの余裕は無かった。

（タイミングは完璧だった。間違いなくあいつの身体に当たるはずだったつてのに……！？）

拳での一撃を防がれた俺はかなりショックを受けていた。必ず当たるかと確信していた一撃は無情にも防がれ、その一瞬俺は身体を硬直させていた。だが、それだけで奴には十分だったらしい。にやりと口端を歪めて大剣を下段に構えた。

「残像だ、坊主」

どこがだよ、と思うと同時に身体に鈍い衝撃が走る。気がつけば俺は宙を舞っていて、空を見上げる状態でした。

「安心しろ、峰打ちだ」

その割にはやけに重い一撃だったぞ。

華麗に宙を舞っていた俺は地面に落ちると共に意識を失った。グッバイ、俺。

「……………ん」

「あら、起きた？」

目を覚ますと、アルテミスが俺の顔を覗き込んでいた。どうやら倒れた俺を介抱していたらしい。礼を言って立ち上がるうとするど、ズキンと腹に鈍痛を感じた。

「起きてても良いけど無茶はダメよ？ あんたってばまともにオリオンの一撃喰らっちゃったんだから」

学校の教師が生徒に言い聞かせるようにアルテミスは言った。はいはいと適当な返事を返すと、ぷりぷりと怒りながら俺に詰め寄ったが、ひとまずは無視して俺を気絶させた本人を探す。

しかし、オリオンの姿はこの荒野に無く、ここに居るのは俺とアルテミスだけのようだ。アルテミスに彼はどうしたのかと尋ねると、
「急な仕事が入っちゃったから慌てて帰っていつっちゃったわ」

そうか、と短く返事をしてから俺は物淋しさを感じていた。

あれほど強かったから今さっきの戦いでのアドバイスをもらいたかったんだけどなあ。仕事あるなら仕方ないよな。

「あ、そつといえば伝言んだけど」

彼女の言う言葉に何故か嫌な予感を覚えながらも俺はその言葉の続きを聞くべく耳を傾けた。

「今度この世界の一年単位で週に六回鍛えにくるって。逃げたら地獄をみせてやるってさ」

あはは面白い冗談よねえ、とアルテミスは笑っているが、当の俺はというとももの凄い嫌な汗をかいていた。

かくして俺の修行という名の地獄は始まりを告げ、2年後、いや、その先でも俺はこれをもたらしたことを時折後悔するのだった。

幕間 修行(俺) × 遊び(相手) || 地獄(後書き)

本編中で『アレで鍛えてなければ』のアレとはこの修行場のことでした。

さて、次回はいよいよ第2章……かな？

あ、そういえばアンケートですけど票数は少なかったです(そのままのペースで)を選んだ方が多かった(このままのペースでいこうと思います)う、嘘は言っていないよ()。

第21話 親方ーっ！！ 向こうから女の子がーっ！！（前書き）

お久しぶりです、博麗まんじゅうです。

更新遅れてすみません！ 模試やらなんやらで忙しかったんです。申し訳ないです。

ひとまず、こんな駄目作者の謝罪よりも本編を読みたい人が多いだろうから本編へGO！

第21話 親方ーっ！！ 向こうから女の子がーっ！！

金属製の格子から漏れる微かな月明かりが私のいる石の部屋を照らす。薄情にもそれは私を照らすことなく、何も無い石の床の上に白い四角形を作るだけだった。虚しい気持ちがかみ上げて来て膝をさらに抱え込む。

今日は空に雲が出ていているらしい。床を照らす明かりはいつもに比べると暗く、ぼんやりとしている。

また夜が来た。永い永い夜が。

この身を縛り付ける銀色の鎖は未だ健在で、私の両腕と両足に巻き付いている。何度も外そうと試したけど、成功することも無いことに気付いて私が諦めたのはここに来てそう遅くはなかった。

壁でうずくまり、膝を抱え込む私はさぞかし惨めなのだろう。両腕両腕に鎖を引き連れ、この限られた部屋を歩き回るなんて滑稽にも程がある。

時折、格子の外から覗く影がとても腹立たしい。どうせ私が逃げないようにとあの男が配置したものだ。

命令を忠実に守る影はとても厄介だ。実体がないためにこちらの攻撃は効かないし、何があってもしつこく私を追い掛けて来る。ストーカーなんかよりもよっぽど質が悪い。

私が立ち上がれば、それにつられて鎖がジャリと音を立てる。鎖の長さは優に10メートルはあり、何処へ行こうと無駄だとばかりに鈍く光っている。

格子の外に見える月を見上げ、私は自然と涙を流していた。

「会いたいよ、お父さん、お母さん」

溢れ出した感情は止まることなく、無茶苦茶に私の心を塗り潰す。寂しい、つらい、悲しい、苦しい、寒い、痛い。ありとあらゆる負の感情が私の心を包み込み、大きく揺さぶった。

「冬斗……」

頬を流れる涙は一つの軌跡を残して床に落ちた。空に浮かぶ月はただ檻の中の私を嘲るように空から見下ろすだけだった。

「はい、ジーク。これよろしくね」

「……ちょっと待て」

「あ、ついでにこれも」

「……おいこら」

だんだんと積み重ねられていく大量の書類。俺の抗議を無視して積み重ねられたそれは、椅子に座っている俺の背を遥かに越えている。ゆらゆらと揺れる様はまるで崩れるタイミングを計っているかのようだ。

恐らくそれは少しでも刺激を与えればあっという間に崩れてしまっただろう。このスリリング感がたまらない、訳が無い。

「それからこれにこれに、あとこれもよろしく」
「……………」

ふわりと風の魔法で書類の塔に新たに書類が重ねられる。それを塔の頂上に乗せた人物は杖を軽く振るだけで、自分は悠々と読書タイムを満喫しているようである。もはや堂々と仕事をサボっていることに敬服の念を抱きそうになる。だが、今の俺にはため息を吐く暇すら惜しい。

「仕事はさっさと済ませてよ？ まだまだ残ってるんだから」
「いい加減にしたらどうだ、リリー？」

ヒクヒクと目尻を引きつらせながら顔を上げれば、薄暗い部屋で書類を片付けている俺とは対照的に、晴天の下の庭で優雅に本を読む我が主人ことリリーの姿があった。

8年という年月は人を変えてしまうには余りにも十分な時間らしい。風に流れる金紗の髪、透き通るように白い肌は8年前よりもあでやかさを増しており、優しげな瞳、ふっくらとした桜色の唇はなまめ艶かしい。体つきも大分女性らしくなっていて、女性であれば誰もが

憧れるであろう容姿を彼女は手にしていた。

実際、リリーはこの8年間の間にお披露目式やらなんやらで正式な王女として周囲に認知されたわけだが？俺と会ったときにはまだ若いからという理由で箱入り娘状態だったらしい？、その人気は高く、瞬く間に国のアイドルとして不動の地位を築き上げた。

もっとも、それも彼女の理想のために磨き上げたものだと言うのだから随分と皮肉な話である。見た目は美人、中身は黒い。ギャツプが激しすぎる子供はどこぞの名探偵一人で充分ですから。

「何をいい加減にするのか分からないけれど？」

「これだけ俺に仕事をやらせといて当の本人は何をしやがってるんですかねえと聞いてるんだよ」

「あら？失礼ね。私だってちゃんと仕事はしているわ。ただ、ジークに任せる仕事が多いだけよ。それ、に、補佐っていうのは上司ないしは主人を助けるものだと聞くわ」

「限度があるんだよ、こんちくしょう！！」

机に叩き付けられた俺の拳に呼応するかのように、俺の執務机の上に積み上げられた大量の書類がなだれ落ちる。あれほど積み重なっていた書類はあつという間に崩れ落ち、必死で仕分け、処理したもののすら巻き込みながら音を立てて崩れていった。それを見て俺はがっくりと肩を落とした。

その様子を横でにやつきながらリリーはこちらを見ていた。本当に腹黒い姫だ。

あれほど純粹だったリリー姫も、国に関わって国の仕事をして、姫としての責務を果たすうちにだんだんと変わっていった。恐らく

彼女自身も純粹では居られなかったのだらう、こんなどろどろとした政治の世界では。

ばらけた??ばらけたなんてレベルじゃないほどに散らかっているが―書類を拾い上げ、崩れないように床にある程度の高さで積み重ねて優先して処理するものとそれ以外に分けていく。

これらの書類はどれも機密のものだ。しかし読書を満喫するリリ―には、そんなことおかまい無しとばかりに無造作に机の上に放りなげていた。拳げ句の果てには当の本人が優雅に金紗きんしゃの髪を風に揺らして、呑気のんきにティータイムを満喫しており、俺が額に青筋を浮かべるのも至極真つ当であらう。

「お前、補佐つて何のためにあるか知ってるか? 絶対知らないだろ?」

「知ってるわよ。主人の代わりに仕事をしてもらうためでしょ?」
「んなわけあるかー!!」

俺の叫び声に顔をしかめ、彼女は気分直しとばかりにティーカップを傾けた。良質なハーブの香がこちらにも漂い鼻腔をくすぐる。

それに気分を良くしてまたニコニコと笑いながら読書に戻る。

結局のところ、俺は報われならしい。こめかみを解ほくしながら、改めて書類を処理する作業へと俺は戻ったのだった。

あの『暴竜』の襲撃から、月日が経ち8年。はいそこ、『時間経ちすぎだろw』とか、『ご都合主義乙ww』とか言わない。

何が起こる訳でもなく、ただ不気味なまでに平和な時間が過ぎた。

街では今までと変わらない生活が続いているし、特に大きな事件が起きたなんて話は聞かない。ちよくちよく強力な魔物が出現したという話は聞くが、それ以外には変わったことは無かった。

あの襲撃が人為的なものなのか、それともただ自然的に発生したものであったのか、それは8年経った今でも未だに分かっていない。

真相は謎に包まれたまま、襲撃は幕を閉じていた。

この非常に奇妙な感覚に当初の俺は戸惑いを隠せずにはいたが、今ではすっかり慣れ仕事に忙殺ほんまきつされる日々を送っている。それもこれも仕事を何かと理由をつけて仕事を俺に回すリリーのせいだ、間違いない。だが、一応重要な仕事はきちんとやっているらしい。もっとも、これもリリーから聞いたことだから全てが本当かどうかは分かったものじゃないが……。

そもそも上司といいながら仕事を部下にほとんど丸投げするような奴にろくな奴はいない。どこぞの官吏さんもだいたい苦労してみたいだしな。

それはともかくとして
閑話休題。

そうして毎日仕事に励むほか無い俺だったわけだが、文句は無かった。不満なら山のようにあるけどね!!

「あ、そういえばジークは武道会の件知ってる?」

「武道会の件? 何のことだ?」

ペラペラとページを捲りながら、しかも視線を本から話さずに彼女はまるで『買い物頼んだわよ』みたいな口調で衝撃な事実を告げ

た。

「今度武道会あるけどそれに出場してもらおうから」

「……………はい？」

おかしいな、俺の耳がおかしくなければ『ジークには今度の武道会で派手に暴れてもらうから』という風に聞こえたんだが……。何？ 解釈が間違ってる？ そんなわけ無いだろう。

「なあ、リリー。それでは『あんたはもう武道会出るの決まってるからね』という風に聞こえてしまう。すまないが、もう一度言ってくれないか？」

「だから、ジークには武道会に出て欲しいのよ」

「はあ！？ また急になんなんだよ？」

ようやく俺の方を真剣に見るリリー。何か事情があるのかと思いつ、俺も真剣な表情を作る。

が、相変わらずリリーは俺の予想斜め上を行くらしい。

「私の暇つぶしよ」

瞬間、世界が止まった……ような気がした。

俺とリリーの間には静かな沈黙が流れ、空を飛ぶ鳥の音がよく響き渡る。そよそよと吹く風がいつもとは違って随分と自己主張をし

ており、何者にもかき消されることなく俺たちの耳へと届く。

「……冗談よ」

俺の固まりようを見てばつが悪そうな顔で彼女は告げる。そしてようやく俺の硬直も解けた。

な、なんて奴だ。部下に仕事を投げるのはともかく、暇つぶしに部下を大会に送り込もうとする奴がいるとは……。この世の恐怖を味わった気がする。

「あ、試合に出てもらうのは嘘じゃないから」

「はあ!？」

再度、俺の叫びが城内へと響き渡ったのだった。

「まったく、なんだってんだよ……!」

城下を歩きながら俺はブツブツと愚痴っていた。

片手には騎士団から支給されたただの安物の剣。切れ味はそこそこだが、俺が使うとすぐに壊れてしまいそうだ。

その後、リリーの話を知ると要するにこういうことだったらしい。

・ファーレンに交流という名目で視察に行かなければならなくなつた。

・正直面倒くさいし、向こうに行っても暇そうだ。

・なら暇つぶしにジークを武道会に出場させればいいんじゃない？

話を聞いて俺は改めてリリーは尋常じゃないって思ったね。あいつなら表の顔と裏の顔を使い分けて冗談じゃなく世界を征服しかねん。

しかもその尻ぬぐいを俺に求めてくるのだからやってられないと言えはやってもらえない。以前はかなり純粹だったのになあ。今じやそんな影も見えやしない。………付いていく相手を間違えただろうか？

「大体あいつも止めればいいものを、何もかも俺のせいにしてくるし」

あの青髪ショートの鬼め。次会ったらけちよんけちよんのポッコポコにしてやるっての」

「ほう、君にそんな度胸があつたとは驚きだな」

あり得るはずのない人物の声を聞いて文字通り飛び上がる。だからだと嫌な汗を流しながら振り向いたその先には、俺と同じ騎士用

の剣を腰につり下げ冷やかな眼差しで俺を見る女性の姿があった。つり上がった鋭い目付きは見る者を圧倒させ、それだけで並の間なら恐れを抱かせる。女性の平均身長よりも少し高い彼女はいつもなら頭の上にある青い騎士帽を取り、自分の青色の髪を太陽の下で煌めかせていた。

「はっはっは。何を言っているんだいユリアさん？　俺は何も言っていないぜ？」

「私は嘘が嫌いだ。それが君の態度だと言っなら私は君を切り捨てるしか選択肢は無いな。安心しろ、痛みは一瞬だ」

つとユリアさんは目を細めた。やばい、今の彼女は見るからに怒っており、表情こそあまり変わっていないが目は笑っていない。腰の剣に手をかけ、いつでも剣を抜けるように身構えていた。

すぐさま俺は飛び上がりジャンピング土下座を繰り返した。路上の人は啞然としてこちらを見ているが関係ない。今の俺に必要なのは輝かしい明日！　そう、生きていくということなんだ！

「ごめんなさいでしたーっ！」

「フン、次からは気をつける。次にそういうことを聞くと訓練で間違っって君を殺してしまいそうだ」

背中に悪寒が走る。はははと笑って無理矢理誤魔化した。……今度から夜道には気をつけよう。

「そついや、ユリアさんは何してたんだ？　今は部下の訓練の時間だろ？」

ユリアさんは首を振って答えた。今日はどうやらオフの日らしい。暴竜襲撃の際に多大な被害を負ったシュヴァイツ王国騎士団だが、今では人数も補給され更なる質の向上に努めている。あの襲撃で亡くなった人もいたが、その人達は国で手厚く葬ほうむられた。

そしてユリアさんはその騎士団の団長でもある。襲撃の終わった直後、多大な被害を被らせてしまったとして自ら辞表を出したそうだが、ユリアさんという惜しい人材を手放すわけにもいかないため国王が必死になって説得したらしい。仕舞いには城の人間総出で引き留めたとのこと。皆さんグッジョブ。

「姫様が護衛だと言って私を派遣したんだ」

「護衛？　俺なんか護衛しなくても充分俺は……」

「勘違いするな。護衛するのは君じゃない。私が護衛するのは街の人間だ。君がトラブルを起こすのではないかと心配らしい」

クツ！　余計なお世話だよ畜生！

ずんずんと肩を怒らせ、大股おおまたで歩く俺の視界の端にやれやれと首を振ったユリアさんが見えた。と、次の瞬間、ドンという衝撃が前から俺を襲い、情けないことに俺は俺に突っ込んできた何かと共に路上を転がった。

な、何なんだ今日は！　今日は厄日か何かなのか！？

シリアスなのに割と阿呆なことを考えていたが、周りの状況は確認しておいた。

ユリアさんがこっちに目も向けず、何かがあつ込んできた方向を見ていた。嫌な予感がして俺は魔力で視力を強化する。土埃が上がっており、いつかの魔物の群れを彷彿ほうふつとさせるが、生憎ここは城下街。こんなところで魔物など出るはずもない。

ならば、あれはいつたい何なのか？ そんなことは決まっている。

「君は相変わらず厄介事を呼ぶようだな」

「俺のせいじゃないだろ、絶対」

土埃の中に見えたのは複数の人間。片手に武器を持ち、張り詰めた顔でこちらに走ってきていた。

げんなりとしてそういえばと思い、自分の腕の中を見ると、

「はあつ、俺の人生は波乱ばかりだな……」

そこには傷だらけで苦痛に顔を歪める赤髪の少女の姿があった。

第21話 親方ーっ！！ 向こうから女の子がーっ！！（後書き）

はい、いよいよ始まりました。第2章【愚者の円舞曲^{ワルツ}】。

あの暴竜の襲撃から8年。ジーク君達も成長し、ステージは新たな段階へ。

果たして、次はどんな物語を紡ぐのでしょうか？

………と、ナレーション風に締めしてみる。

12/28 本文に多少訂正を入れました。

・ジークにリリーの不審の心が……。

・リリーは完全に仕事をしていないわけではないのです。

第22話 女とは……強い生き物なんだ（前書き）

お気に入り登録数が減って、文章も書けなくなってる。

まさか……、これが巷で噂の鬱というやつか！！

ジーク「いや、むしろスランプを疑えよ」

第22話 女とは……強い生き物なんだ

少女を地面に寝かせ、向かってくる敵に相對する。ユリアさんは既に臨戦態勢で、腰の剣を抜き放っていた。抜かれた刃が光を反射してキラリと鈍く光る。抜いている剣は俺と同じだというのに、迫力が全く違う。これも経験の差というやつだろうか。

土煙はやがて大きくなり、それにつれてその発信源たちの姿も見えてくる。どいつもこいつも武装していて、少女一人に対しては随分と大仰だ。

見た目も冒険者然とした奴が多いが、そいつらに共通しているのは肩に入った竜の刺青だ。大方、どこかの盗賊とか冒険者崩れの集まりだろう。その証拠に彼らの動きにはばらつきがある。

それにしても少女一人に何人も大人が襲いかかるとか、それなんて犯罪？

奴らも俺らに気づいたか、その足を止めて俺たちの真正面に立った。奴らも立ち上る殺気はあるが、うちのユリアさんの方が遙かに勝っている。正直こうして隣にいる俺の方が怖かったりする。

ユリアさんはリリーと同じぐらいこの街を愛しており、それを怖そうとすればたちまち鬼神と化すほどだ。つまり、今のこの状況はユリアさんにとっては非常に腹の立つ事態だということになる。

阿修羅と化したユリアさんを味方に出来ているのはとても嬉しく頼もしいのだが、彼女の怒りの現場を一度見たことがある故、俺は

彼らに同情せざるをえない。

「あんだ、てめえら！ 俺らはその嬢ちゃんに用があんだよ。とつとどけカス」

見た目を裏切らないというか彼らは思いっきり汚い口調でユリアさんに暴言を吐き付けた。みるみるうちに機嫌が急降下していくユリアさん。もしも殺気だけで人を殺せるのだとしたら、今のユリアさんはどれだけの人を殺すことが出来るだろうか？ まあ、恐らくここにいる全員は倒れそうだ。

「私の方こそ君らに問いたい。君たちは誰だ？ 何の目的で彼女を付け狙う？ 素直に答えれば精々半殺しで済ませてやろう」

相変わらず物騒な性格は変わりないらしい。いや、8年前に比べれば大分ましになってるけどさ。

「つつせえんだよ！ 邪魔するならてめえもぶつ殺すぞ！？」

「おい、お前らそこら辺でやめておいた方が……」

「良い度胸だ。貴様ら全員に地獄を見せてやる。ジーク、住民の避難は任せたぞ」

俺が文句を言う前に、剣を片手にアホの集団に突撃していくユリアさん。このままじゃ周囲に被害が出るかもしれないということだ、

ひとまず不満を飲み込み住民の避難を開始した。

少女を背負い、住民に大声で声をかける。店を開けている者には店を閉めさせ、この区画を離れさせる。幸いなことに通行人は少なく、避難もスムーズに進んだ。途中、ユリアさんが吹っ飛ばして来たアホがいたが、向こうに向かつて蹴り返してやった、ざまあ。

少女を背負ったまま、住民が避難したのとは別の方向へと走り出す。

さっきやつらも言っていたが、あいつらの目的はこのお嬢さん。ならこの子には悪いけどこうして囷にした方が街に対する被害は少ない。

狭い路地へと入る途中で一瞬ユリアさんのことが心配になったが、よく考えたらバーサーカーモード真つ最中のユリアさんに勝てる一般人など俺が知りうる限り存在しないので、放置することにした。アホの皆さん、ご冥福をお祈りいたします。

俺が路地へと入ると同時に、奴らの半数が俺に気づき俺を追ってくる。ユリアさんはそれを防ごうとしていたが、他の奴らに邪魔をされ突破を許すこととなった。

しかし、ニヤリと内心でほくそ笑んだ。こうして少女を背負ってはいるが、このくらいのハンデは俺にとって何の障害にもなりやしない。

戦闘をさつさと終わらせるため、この辺りで着いて来た奴らを適当に処理しようと思っていたので、意外に数が多いことは僥倖ユリウチキだと言えた。

「待てや、ガキイ!!!」

「待てと言われて待つアホがいるか、馬鹿!!!」

「んだとてめえ!!!」

「悔しかったらここまで来やがれ」

地面を蹴り、時々路地にある木箱を蹴り飛ばしたりしながら確実に奴らの数を削っていく。

ある地点まで来たところで速度を緩め、俺は奴らに振り向いた。十人以上いたであろう彼らは俺の作戦で既にその数を半数以下に減らしている。残った奴らもせいぜいと息を荒げ、顔を真っ赤にしている。

「やっと……、止まりやがったな」

「覚悟：ゲホツゲホツ！　しやがれ……！」

「あんたら死にかけじゃん。そんなので俺を倒そうっての？　無理無理絶対無理だね」

からからと笑いながら言ってる。事実、今の俺にこいつらは勝てるほどの實力を持ち合わせちゃいない。

俺を追いかけておいて体力切れとか論外だ。冒険者のフランクからやり直すことをお勧めする。

「なんなら試してみる？」

腰の剣を抜きながら俺は冷ややかに笑う。奴らは顔を青ざめさせて後じさりを始めるがもう遅い。

地面を蹴り凄まじい衝撃音がなった後、俺は彼らの後方で剣を振り切った体勢で止まっていた。

一瞬、風が舞う。

直後、奴らの身体が崩れ落ち、地面へと倒れた。奴らの顔には驚愕の表情が浮かんでおり、何が起こったのかさっぱり理解が追いついていないようだった。

「安心しろ、ただの峰打ちだ」

なるべく渋い声で言っただけだ。くうく、俺かっこいい。人生で一度は言ってみたい台詞ナンバーワンだと俺は思ってる。

もっとも、この剣は両刃剣なので峰なんて存在しない。柄の部分で思い切り腹を殴りつけてやっただけだ。

「じゃ、何の目的でこの子を連れて行こうとしたのか吐いてもらおうか？」

少女を脇に寝かせ、ニコリと笑った俺はスキマからロープを出しながら彼らに近づいたのだった。

結論から言うと、大した情報は得られなかった。

あいつらはフォルスの森の周辺で盗みをしていた盗賊で、ある日ねぐらへ戻ると10枚の金貨と、少女を殺すよう命じた紙があったらしい。しかも、少女を殺すことができれば、追加で金貨を更に支払うとまであり、それであいつらは行動を起こしたと言っていた。その手紙も読んだら燃やすように書かれてあつたらしく、燃やしてもうないのだとも言っていた。

結局、俺達は収穫なしということに終わってしまった。そこで丁度事件を聞き付けた騎士団のメンバーが数人来たので、盗賊たちと少女をユリアさんたちに任せ俺は本来の目的地であったギルドへ向かうことにした。ユリアさんはジト目で見ていたが、全く気にしない。

そうして俺はギルドへと向かい、現在ギルドの受付にいるのだった。

「それにしてもジーク君も随分と成長したわね。最初来た時は受付台からぎりぎりで見えるくらいだったのに」

クスクスと笑いながらギルド嬢は懐かしむように言った。俺はそれにそうだなとぶっきらぼうに答える。

ギルドで他国での活動の予定を報告しに来たんだが、迂闊なことに俺の苦手とするギルド嬢に捕まってしまった。長年の付き合いから話しはじめたら長いことと、やたら俺に絡んできてはからかうことがよく分かっているの、できれば遭遇したくなかったところだ。

「ジーク君てばいけずよ。『美人のお嬢さんと話せて幸せー』とか

ないの？」

「アアー、シアワセダナー」

「ああ、あの可愛かったジーク君が今じゃこんなにひねくれ者に…」

「ほっとけ！」

さっさと用件を伝え、仕事をするように頼む。尊大な態度でギルド嬢は返事をし、引き継ぎのための書類を準備し始めた。どうして俺の周りにはまともに働く人がいないのだろう？

さて、ここで少しばかりギルドの活動引き継ぎについて説明しよう。

ギルドで冒険者となれば、そのランクに見合った依頼を受けることができるわけだが、他国で活動しようとなると少しばかり面倒な作業が必要となる。

それは、ギルドに他国で活動するということを経験することだ。ギルドとしてもメンバーの動きは把握しておきたいのだろうし、こちらも作業は多少面倒だが通常の活動が出来るのなら文句を言わずにするべきだろう。

以前、他国で仕事をしようとしていた冒険者がいて、ギルドに何も告げずに他国へ行き、他国で依頼を受けようとしたらしい。勿論、ギルドはそんなことは知らず、しかもその国のギルドでは運悪く冒険者カード読み取り用の水晶が壊れていたので、本当に本人なのかどうかで一悶着あったとのこと。

その後、ギルドは他国で仕事をする際には必ずギルドへ報告することを全ての冒険者に義務付けた。

しかし、今では水晶が壊れるなんてへマは無い。念押しということとその習慣は続いている。

「どこ行くの？」

「フアーレン。今度大会があっただろ？ その大会に出るとの姫の御達示だよ」

「それはまた大変ねえ。そう思わない、ラルカちゃん？」

ギルド嬢が机の上を片付けている少女に話を振る。少女はえつと驚いて机を拭く手を止めた。

こちらに向いたときに揺れた藍色の色の髪は、肩口で切り揃えられており彼女の白い肌の色を引き立てている。クルリとした大きめの目が彼女の可愛らしさの存在感を強めていた。

8年前に俺に初めて依頼を頼んだ依頼主、ラルカだ。

彼女はこういうわけか、あの襲撃のあった後、ギルドで働くことを決め、その修業に励んでいるのだった。

理由を聞いてみたこともあったが、頬を赤く染めるだけで答えてはくれなかった。ギルド嬢は『察してやりなさい』と無言のオーラと目で訴えていたのはよく覚えているぞ。

「そうですね。私からは何とも言えません。ジークさんもお仕事なんですよ」

リリーの暇つぶしだと言ったらどんな顔をするだろうか？

「ただ怪我だけはしないでくださいね？ ジークさんってば無茶ば

かりするんですから」

「分かってるって。なるべく無茶はしないからさ」

「なるべくじゃ駄目です。絶対ですよ？」

腰に手を当て、ぷりぷりと怒りながら彼女は口を尖らせた。どうにもラル力は俺に対してやけに心配性のようだった。

やはり8年前の無茶を知ったからだろうか？

暴竜を倒したのが俺だと知ったラル力はそれはもう怒った。修羅が降臨したのではないかというほどの勢いだった。顔を真っ赤にさせてひとしきり俺に罵声を重ね、その後ボロボロと涙を流していた。俺が必死に宥めすかしたことで彼女は泣き止んだが、その時に一つの約束をさせられた。

『絶対に無理はしないこと』

それ以来、彼女はまるで俺の保護者であるかのように口を酸っぱくしてムリをするな、無茶をするなと言い続けているのだった。もちろん、俺としても迷惑はかけたくないので無茶はしないようにしている。

「それはそうとジーク君、幾つか依頼を受けていってくれないかな？ 最近どうも依頼が溜まっちゃってね」

「それはいいが、他の奴はどうしてるんだ？」

「みんな依頼で出ちゃってるのよ。それにジーク君みたいに武闘会に出るって言うってファーレンに言っちゃう人もいたし」

ほう、これは初耳だ。うちには人員不足に悩まされるぐらいバトルジャ戦闘ンキ狂がいただるうか？ いや、いなかったような気がするが……。

「大会の賞品が凄いらしいですよ？ 何でも凄く貴重な鉱石が優勝賞品として出されているとか」

「鉱石？」

「そ、中々手に入らないんだってさ。おかげでこっちは迷惑してるんだけどねえ」

半ば過疎状態になっているギルド内を見回してギルド嬢はため息を吐いた。

鉱石か……。興味があるのかと聞かれれば俺はイエスと答えるな。まだ作れてない剣の材料にもなりそうだし。

「じゃ、ジーク君。依頼お願いね？」

「いくつあるんだ？」

依頼を受けるのは一向に構わない。稼ぎを得るために俺はギルドに入ったんだし、多少の無理なら俺は出来ると思うぞ。

ちなみに、一般的には一日に受けられる依頼というのは、ランクにも左右されるが大抵採取クエストなら3つ、狩猟クエストなら2つ、護衛クエストとかは1つ受けられるかどうかといったところだ。つまりそれ以上頼まれればそれは明らかかな過重労働であり、元の世界なら労働法に違反するほどの……、

「えーと、狩猟クエストが18個？」

「はいはい、狩猟クエストが18個…ってはいい！？」

そのままの流れで承伏しようとしていた俺は思わず目をむいた。

ギルド嬢は可愛らしく舌をペロツと出しているが、その手に持っている依頼書の厚さが半端じゃない。そばで見えていたラルカはあははと乾いた笑みと同情の眼差しを送ってくる。にっこりと笑顔でギルド嬢は無慈悲にも俺に告げるのだった。

「よろしくね、ジーク君」

かくしてあまりの衝撃に口を開くことが出来なかった俺は、半ば強制的に18もの依頼をこなすことになるのだった。

第22話 女とは……強い生き物なんだ（後書き）

どうもー。博麗まんじゅうです。

新章が始まり、心機一転！な心持ちで書いていたらあっという間にグダグダ感MAX。みんな！おらに文才と時間を分けてくれー（冗談です）。

『番外編 未知の報告書』に『ファーレンの武闘会』が追加されました。

『番外編 人物紹介』に新たな説明が加わったようです。

12/28 本文に多少の修正を入れました。

第23話 狼と鍛冶職人（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

残念ながら今回の話はスパイス（香辛（ry）とは全く関係ありません。

それでは本編へGO！

第23話 狼と鍛冶職人

ざわめくフォールの森。何処かにいるであろう標的に対して俺は極限にまで意識を集中し、気配を感じ取る。が、流石奴もクランク。そう簡単に気配を悟らせてくれるはずもなかった。

突如として飛来する雷球の群れ。一つ一つの軌道はばらばらだが、確実に逃げ場を潰すような動きでこちらを翻弄してくる。

風の障壁でブロックしながら、全身の筋肉をばねのように使い避けていく。まだ甘い。

追撃とばかりに空中から轟音を立てて閃光が俺目がけて迫ってきた。雷の速度はまさに神速。ただの人間なら避けられもしない。

だが、それもただの人間だったらの話だ。

「よっ……！ほっ……！」

風を全身に纏い、ジャンプの補助をしながらバックステップ。穿たれた地面は黒く燻り、煙を上げていた。喰らっていたら流石の俺でもやばかったか？

そう考えると同時にスキマからナイフを取り出して前方へと投げつける。目標は前方の茂みだ。

茂みに突き刺さるかと思われたナイフは、キーンと金属音を立て、空しくも弾かれてしまった。が、それも予想通り。場所さえ分かっ
てしまえばこちらのもの。

腰の剣を抜き、地を駆ける。

一瞬にしてトップスピードへと乗った俺はあっという間にナイフの弾かれた茂みへと迫り、袈裟けさに切り上げた。

鈍い衝撃と肉を断つような感触を感じた次の瞬間、茂みはその姿を変え、大きな木へと変貌へんぼうしていく。

断末魔のような叫び声を上げ、奴は身体をくねらせた。その隙を見逃さず、右方から思い切り剣を叩きつけ、横一文字に振り抜いた。体液が散り、木屑きくずが宙を舞う。

命を散らせた魔物は苦悶の表情を残しながらも、ゆっくりと地面へと倒れていった。

「さて、これで十七個目か……。やっと後一つだ」

緑色に塗れた剣をさっと振るって体液を落とす。まだこびり付いているようだが、手持ちの布を使って丁寧に拭ぬぐい取った。剣というのは意外に繊細なもので、こびり付いた血とか体液をそのままにしておけばあっという間に切れ味は落ちてしまう。だから日頃からの手入れが大切だ。

拭った剣を腰につり下げた鞘に仕舞い、代わりに小型のナイフを取り出した。

「まったく、あいつも相当無茶だよな。一日に十八個もクエスト終わらせるとか、どこの鬼畜だよ」

そう言いつつ、目の前にある魔物の死体の前に跪き、証明部位を切り落としていく。狩猟クエストの達成には倒した魔物の証明部位

と呼ばれる物が必要になる。何も見せないで「倒しましたー」って言っても説得力なんか皆無だし、疑いの眼差しで見られることは間違いないだろう。

そこで証拠となるのがこの証明部位だ。この証明部位は魔物ごとによって違い、魔物を倒してすぐ採取しなければ無くなってしまう部位に設定されている。そのため、不正を起こすことなど出来ず、きちんと魔物を狩るほか無いというわけだ。

今俺が倒したのはドリアードと呼ばれる木の魔物で、見た目植物系でありながら雷属性の魔法を使うというなんとも珍妙なやつだ。しかも通常は変哲のない植物に化けており、探し出すのは困難。

しかし、どういうわけかこいつは水を嫌がる。

お前はどこの岩タイプの木だと言ってやりたいが、残念ながら彼とこいつには全く接点は存在しない。断じてない。大切なことなので二回言いました。

ちなみにこのドリアードの証明部位はやけに高い鼻(?)で、すぐに切り落とさなければ腐敗する特性を持っている。

「よっ……と。うっし、クエスト終了。後は……テンド高原での依頼か」

テンド高原は王都から見て南東に位置しており、ここ、フォルスの森から見ると南に位置している。距離も王都に近く、そこまで強い魔物も出るわけでは無いので、専らビギナーの冒険者や騎士たちの訓練に使われていたりする。しかし、最近ここで強力な魔物が出現しているらしく、冒険者たちの指導が出来ないのだと苦情があったらしい。

出現する魔物は狼をベースとした魔物、ブラッディウルフ。全身

を覆う紅いまだら模様が特徴的で非常に獯猛とつもうな性格をしている。攻撃力も高く、一撃が必殺の威力を秘めているほか、毛が硬く剣が通りにくい面倒くさい相手だ。

空を見ればもう日は傾いて夕方に近い。早くクエストを終わらせてしまわなければ、真つ暗闇で魔物と対峙することになる。

暗闇の中での魔物の戦闘ほど怖い物はない。視界がよく見えないために、普段通りの力が発揮できずに死亡するなんてケースもよく見られる話だ。

ため息を吐きながら俺は立ち上がり、移動を開始する。

今更なんだが、誰かこの苦勞を背負ってはくれないものか……。大体、あのギルド嬢も頼む依頼の量多すぎだろ。俺だって人間なんだから　おい、今人間じゃないって言った奴どいつだ？　少しは減らして欲しい。

まあ、今愚痴った所で状況は変わりはない。仕方ないからまた今度文句を言うことにしよう。

目指す先はテンド高原。できれば日が沈んでしまいう前にしとめてしまいたいものだ。

「ターゲット目標はど〜こかな〜？」

無駄にテンションを上げながらブラッディウルフを探す。いや、

こうしてないと集中力が切れそうなんだ。

そりゃ十七も連続で命がけの戦闘をしてたら体力も精神もごっそり削っていかれるし、疲労も半端じゃない。もしそうじゃない奴がいるなら俺に紹介してくれ。女神直々にチートをもらった俺が人外認定をしてやるう。

それはひどいおかし
閑話休題。

真面目に高原の様子を探る。俺も真つ暗闇での戦闘は嫌だからな。テンド高原は広く、長さの短い草が生えており視界を遮るものはほとんどない。しかし、所々に小高い丘があり足場が不便なのが難点だった。

幸い、ブラッディウルフは身体も大きいし、色も色だからすぐに見つかるはず…。

ドオンッ!!!

思考を妨げるように鳴り響く轟きと揺れる大地。自然発生したもではなく、明らかに人為的に起こされたものだ。と瞬時に判断する。しかも、俺の目の前の丘の向こうから黒い煙が上がっており、焦げ臭い臭いが風に乗ってこちらまで届いてきた。恐らく、現在進行形で誰かが何かと戦っているのだろう。

すぐさま走り出す。もしも相手がブラッディウルフなら戦っている誰かも無事では済まないはずだ。

魔力で強化した足はあつという間に草原を越え、丘の頂上へとたどり着く。そこで俺が見たものは……、

「おいおい、冗談じゃねえぞ……」

三匹のブラッディウルフ相手に満身創痕まんしんそういで立ち向かう女性の姿だった。

剣で必死に応戦していたようだが、それも限界だったようで身体のおちこちに傷を作っている。中でも、肩を大きく抉っている傷はすぐに治療が必要そうな程だ。

簡易的な鎧は着ていたらしく、それ以外には致命傷になりそうな傷は無いようだが酷い様子だった。それでも彼女は生きるためになお戦い続けようと剣を正面に構えた。

ブラッディウルフが女性を取り囲み、牙をむき低く唸る。今すぐにも飛びかかり、女性を食いちぎってしまいそうな牙はぬらぬらと光り、本能的な恐怖を呼び覚ます。

三匹のうちの一匹が大きく口を開け、女性に飛びかかった。女性はそれを手に持つ剣で受け流すが、衝撃までは受けきれなかったらしくぐらつと体勢を崩した。

次いで残りの二匹が息の根を止めようと女性に迫る。

途端、俺は魔力で身体を強化し、走り出した。ブラッディウルフたちとの距離はさほど遠くない。おおそ十メートル強といったところ。

「うらつしゃあー!!」

故に俺が、女性を襲おうとした二匹をその寸前に蹴り飛ばすことができたのは必然だった。

女性は驚きに目を見開き、その黒い目で俺を見つめていた。綺麗であったらるう黒髪は鮮血で固まっており、浅黒い肌の上には幾つ

もの傷と生々しく流れ出る血が裝飾されていた。

吹き飛ばされたブラッディウルフは空中でくるりと体勢を整え、軽やかに地に降り立った。新たな闖入者ちんにゅうしゃに警戒し、一定の距離を保ちつつ俺と女性を取り囲む。剣を抜き、ブラッディウルフたちの様子をつかがいながら、俺は女性に話しかけた。

「おい、大丈夫か!？」

「大丈夫じゃないわね…。今にも死にそうよ……」

「それだけ軽口きけてりゃ十分だ」

スキマから店で買った回復薬を取り出し、女性に投げ渡してやる。これを飲めば少しはましになるはずだ。

一瞬俺が目を離れた隙すきを見計らい、一匹が輪から抜け出して突進をしてくる。ひらりと身かわしてお返しに剣を振るう。半円状に描かれた軌跡はブラッディウルフに迫り、その命を奪わんとするが、紙一重で避けられ空しくも空を切った。

後退するブラッディウルフに、シヨット 魔力を練り上げ、直接ぶつける魔法 を詠唱する。詠唱時間が極端に短く、速度も早い魔力の弾丸は狙いに違ふことなくブラッディウルフの身体に吸い込まれるようにヒットする。

シヨットを受けたブラッディウルフは着弾と共に弾け飛び、跡形もなく消え去った。それを見て動揺する残りの二匹に素早く近づき、魔力で強化した剣を振り下ろす。

一匹には避けられてしまったが、もう一匹は避けきれずに剣の餌食となった。

剣を叩きつけられた地面が一瞬でクレーターへと変貌する。それと同時にこれまで持っていた剣もその役目を終え、ガラスの割れる

ような破碎音と共に砕け散った。魔力に耐えきれずに壊れてしまったのだらう。

「剣が…、砕けた…！？」

女性は驚愕に目を見開き、欠片となった金属を二度見する。俺は残った柄を適当に放り投げ、残る一匹へと相対した。

武器を失った俺を見て好機と取ったか、ブラッディウルフは迷うことなく俺への突撃を敢行し俺へと噛みついた。

それを避け、カウンターに蹴りを入れる。が、驚くことに奴は俺の蹴り上げた足に自らの足を乗せ、俺の蹴り上げる力を利用して後方へと飛び退った。なんてアクロバティックな狼だ。サーカスに売り渡したらそれなりに儲けが出るんじゃないか？

ブラッディウルフはどこかドヤ顔をしてるようにも見える。うわ、うざっ！

半身になって右足と右手が前方となる構えを取る。モロにカウンターを狙っているが、たとえ奴が来なくとも、この構えならこちらから攻撃をしかけることも出来る。

ブラッディウルフは予想通り、自ら突っ込んでくるような真似はせずに俺の様子をうかがっていた。

ニヤリと笑って、左拳に力を溜める。

ついでに魔力も流し込み、俺の左拳は当たればまさに必殺の拳と化した。

ただならぬ雰囲気を感じ取ったか、ブラッディウルフはグルルと低く唸り俺を待ちかまえる。

「行くぞ」

瞬間、景色が飛んだ。

誰も知覚することが出来ないような世界に俺はいた。が、俺の見える世界はひどくゆっくりで相手の一挙一動が手に取るように分かる。

飛びかかろうとしていたであろう奴は重心を後ろへと移動させ、前足を折っていたが俺の拳の前ではその動きはあまりに遅かった。上方から拳を振り下ろす。

俺の知覚する世界が元の速度へと戻った瞬間、先程の比ではない轟音とクレーターが出来上がっていた。

ブラッディウルフは俺の拳の下で埋まっており、その命を終わらせていた。

ゆっくりと立ち上がり、拳を拭う。服の所々に血が飛び散っているが、まあ洗えば落ちるだろう。証明部位をさっさとはぎ取って俺は女性の元へと歩いていった。

「あんたってば無茶苦茶ね……」

戦闘を終えた俺を迎えた女性が最初に漏らした言葉は、ありがとうという感謝の言葉でもなく、凄いなといった賞賛の言葉でもなく、信じられないという呆れた言葉だった。

助けてやったのに随分な言葉だと思つと、女性は慌てて手を振った。

「いや、助けてもらったことには感謝してるけどさ。自分の見たことがどうにも非現実的で……」

「分かった分かった。言い訳はいいから、とりあえず自分の本心を言ってみろ」

「あんた人間？」

そういやどこかの女神にも言われたよなと思いつながら自分が間違いない人間だと答える。その時に女性が言葉通り驚愕に目を限界まで見開いていた。

「むう、最近の世の中ってのは変わってるのねえ。お姉さんびつくりしちゃったわ」

「そうかい。じゃあな」

「いやいやいや、待ちなよ。それじゃ助けてもらったお礼とか受け取らなくて良いの？ 勇者だったら普通にあるイベントよ？」

「俺は初期装備で魔王を倒しに行けとか言われた勇者でもなければ、全身緑で固めてる耳が長い人種の間人でもないんだが……」

呆れたように返すと、女性は「ほへ」と間抜けな声を上げしきりに首を捻っていた。どうやら俺の言ったことが自分の知識にあるかどうかを探っているらしい。いや、無いって。あつたらむしろ困るって。

「とにかく礼なんかいらん。それよりとっとと街に行って傷を癒してこい」

「ああ、傷ならもう治ったから平気よ？」

ああ、そう。傷ならもう治ったのか……ってはあ！？

そんな馬鹿なと女性を見れば、確かに彼女の傷は癒えており、あれ程酷かった肩の傷もすっかり消えてしまい浅黒い肌が覗いている。

……人外決定だな。

人外に関わるとろくなことが起こらないと悟った俺はその場を去ろうとしたが、女性にがしつと腕を掴まれてしまった。

「まあまあ、そんなつれないこと言わないで。そんなんじゃ私の気が収まらずにどこまでも君に付いていくわよ？」

この女性なら本当にやりかねない。仕方なく俺は逃走を断念する。女性は「それでよし」とか言って満足しているが、俺は内心で面倒くさいと感じていた。

「そうね……。あ、そういえばあんた剣壊れてたでしょ？ 私こっから見ても鍛冶屋なんだけど、よかつたら剣作ってあげるわよ？ ただし材料は自費だけだ」

「そのの何処が礼なんだ？」

「私に作ってもらえるってところかしら？ ああ！ 待って待って！ 冗談、冗談よ。だからさりげなく逃げるのやめて」

何だろう……。この人。どこかあの駄女神に繋がる場所があるな……。こっ、ボケの傾向とか。あいつと知り合ったら意気投合す

るかもしれん。

「ま、剣が必要になったら尋ねに来てよ。私の家は王都内にあるからさ。私の最高傑作を作ってあげるわ」

「はいはい、その時が来たらな」

彼女と俺は約束を交わし、それぞれの道を進むために別れた。俺は依頼の完了を報告するために王都へ、彼女はその俺の後を付いてきて……って、おい!?

「何でこつち来てるんだよ!? 帰るんじゃないのか!？」

「いや、だから私の家は王都だって言ってるじゃない。あ、ついでにご飯も奢ってくれると嬉しいんだけどなあ」

「奢るか阿呆!！」

第23話 狼と鍛冶職人（後書き）

もうすぐ年末ですよねえ。早いものです。

最近気候の変化が激しくて風を引く方もいるようです。皆さんも気をつけてください。

12/28 本文に多少修正を入れました。

12/30 キャラ描写に修正を入れました。

第24話 旅は道連れ、世は情け（前書き）

総合PVが20万越え。わーい、わーい¥（・・・）ノ

ただいま作者が錯乱しております。少しの間、本編をお読みにな
ってお待ちください……。。

第24話 旅は道連れ、世は情け

「なあ、こりゃ一体全体どういうことだ？」

俺はこめかみを揉んで目を閉じた。主に次々と降って湧いてくる事態のせいで、心なしか先程から頭痛がする。

「あ、おかえりジーク。遅いから仕事いくらか終わらせちゃったわよ？」

「ああ、すまん。って、いや、そうじゃなくてだな……」

そうしていても何の解決にもならないので仕方なく現実を直視することにした。

いつも通りの執務室にある俺の机の上には少量の書類。珍しいことにはリリーは仕事を済ませたらしい。椅子に座ってニコニコと笑いながら入り口で突っ立っている俺を見ていた。まあ、珍しいことだが 本当に珍しいことだ、ごく希に目にするので驚きはない。部屋を見回しても机の配置が換わっているわけでもなければ、本棚にある本の配置だって換わってない。いつも通りの執務室だ。じゃあ何が変なのか？

「もぐもぐ……、はぐっ……ごくん」

「俺はなんでこいつが元気そうに飯食ってるか聞いてるんだが？」

俺の目の前の少女は全身に包帯を巻きつつも、もの凄い勢いで食べ物喰らい続けている。机に重なる皿は既に優に30皿を越えており、その皿の塔が群を為すかのように10以上連なっている。その食欲には感心するものがあるが、いくらなんでも年頃の女子にしては異常だと言わざるを得ない。

俺がこうやって見ている間も彼女は黙々と皿の上の食べ物を腹の中へと放り込んでいく。

「すみません。追加の食事を持ってきたのですが……」

扉が開く音がして、大量の食事を持った皿が多数載せられたワゴンを押して一人のメイドが入ってきた。蠱惑な香りを漂わせるスープだのパンだの、肉料理だの魚だのが所狭しと並んでいるところを見ると、こちらも食欲をそそられるが今隣で少女が食べているのを見るとその食欲もたちまちのうちに消え失せてしまった。

「ご苦労様。その机の上に置いておいてくれるかしら？ それからその皿も持って行ってね」

「はい。かしこまりました」

メイドはリリーの言葉通りに食事を机に並べて食事の載っていない皿を引き取り、一礼して部屋を出て行った。

「で、ひとまず全ての事情を話して貰おうか？」
「もぐもぐ……………？ ふえ？ あたしの名前ですか？ あたしはレ
ン！ 駆け出し魔法使いやってます！」

いや、俺が聞きたいのは…………、いやもういい。

嫌な予感を感じた俺が思わず天を仰いだのは決して悪いことじゃ
ないだろう。ああ、どうしてこうも厄介事がやってくるんだか…………。

翌日。俺が城へ出てきたときに見たものは、俺が助けた少女が執
務室で猛烈な速度で食べ物を処理してゆく姿だった。その顔は真剣
そのもので話しかけることすら憚はばられるほどで、正直引いたこと
は否めない。いや、俺よりも幼い、しかも女子が平均男子…………、い
やそれ以上の男子でさえも食わないような量を食べていく少女を見
たときの心境を考えてみるといい。自分の目を疑うだろうか？

今でさえもこの光景は信じられないの一言に尽きる。食べ物が出
々と消えてゆき、メイドさんが出入りした数は数知れず…………。数え
るのも面倒くさくなって放棄してしまった。

ようやく少女が満足してその手を止めたときには俺がここに来て
から大凡おおよそ1時間も経っていた。

机に並べられたティーカップにちよつとだけ砂糖を入れて試し飲
みする。うん？ 少し甘かったか？

「もう一度聞くが、君は……なんだって？」

「いえ、ですからあたしはレンという者で、駆け出し魔法使いです」
「駆け出し魔法使いねえ……」

ビシツと敬礼を決めるレン。その時に彼女の赤髪がふわりと揺れ、微かな女子の香りがした。一瞬ドキツとしたのは秘密だぞ？

そういえば、魔法使いというのは大抵が師匠の元で何年か修行して、その後独り立ちするというのを聞いたことがある。となると、この少女もそうなのだろうか？

一抹の疑問を感じながらもレンに話の続きを促すと、レンは不思議そうに首を捻った。

「……………？ まだ何か話すことがありますか？」

「まだあるだろ……。あの追われてた集団と関わりがあるとか、襲われた原因に心当たりがあるとか」

「ん……………、無いです……！」

数秒考えた後の即答。流石にこれには呆れてしまう。

あの盗賊の襲撃の時にわざわざレンを指名したから何かしら関係があるだろうとは思っていたが、当の本人が爽やかな顔で「全く心当たりが無い」と言っている以上、これ以上問い詰めようがない。その疑問はひとまず横に置いておこう。

それじゃあと俺は次の質問に移る。レンは凄いわくわくした顔で俺を見ていた。な、なんだ？ 何か俺の顔についてるか？

「なんか自警団じけいたんの事情聴取みたいですね！」

ぼくぼくぼく、チーン。無言が部屋に訪れた。

レンは「えっ？」と疑問顔で俺とリリーを見るが、彼女に返るのは無言と生暖かい視線のみ。次第に困惑し始めてあたふたした。まるで小動物のようだ。

ちなみに、自警団というのは王国騎士団とは別に存在している機関で、元の世界でいうなら王国騎士が自衛隊で自警団が警察みたいなものだ。自警団はその名の通り、街を進んで警備している組織であり、王国騎士ともそこそこ良好な仲を築いている。だが、いちいち警備の仕方で言い争いを始めるのは止めて欲しい。俺が毎回かり出される羽目になっているからな。

閑話休題。

しらけた空気は元に戻り、爆裂天然少女レンはようやく空気を読み始めてたどたどしい口調で話し始めた。

「ええと、あたしはとある魔法使いの師匠の元で修行してたんです。それで、そろそろ独り立ちの頃だからって試験を出されたんです」

「試験？」

「はい。今度ファールンで開かれる武闘会に参加して上位に入賞してこいって」

うへえ、そいつよつぽどなサビヤリストだな。

武闘会には種族、性別、戦い方云々を問わず、様々な参加者がいる。が、そうは言っても武闘会。参加者のほとんどは魔法よりも肉

弾戦な戦法を使ってくる。熱い拳と拳のぶつかりあい、男のロマンの集合体……、らしい。俺は実際に見たことは無いし、そんな暑苦しい展開を見たいわけでもない。参加者たちにとってみれば、やはり頼りになるのは己の身体ということだろうか。

しかし、一応魔法使い　ここでの魔法使いは精霊使いとか、召喚士とか死霊使いとかも含む　もいるにはいる。だが、彼らはいくら貴重な商品が優勝賞品であるとは言っても、参加をすることはほとんどない。その理由が先程も述べたとおり、相手が肉弾戦を主な戦法としてくるからだ。魔法の詠唱中に攻撃されたらたまったものではない。

「それでファールンに向かってたってことなのね？」

「はい。私の住んでた所はシュヴァイツ王国の東にあつて、ファールンへ行くために歩いてたらあの集団に襲われちゃって……」

ふむ。ということは盗賊達がレンを襲つたのはその師匠か、大会に関係があるのかもれないな。もしも前者ならば、その師匠とやらに恨みがあつてその愛弟子であるレンを殺そうとした。後者ならば、すこしでも優勝するために参加者であるレンを殺そうとした。いずれにせよそれらは憶測の域を出ない。今の状態で結論を出すにはあまりにも早計だ。

「しかし、よくずっと逃げ切れて来れたな」

「師匠に教えて貰つた魔法のおかげです。簡易的な風魔法なんですけど、それのおかげで1度目は逃げ足を速くできてなんとか逃げ切れました。それでもしつこく狙つてきて5回目を越えた辺りから私も疲れちゃつてあんな風になつたんです」

「なるほどねえ」

「それならまだレンちゃんが襲われる可能性もあるわよねえ」

うんうんと頷くりりー。さり気なく机の上に置いてある書類に視線を落として、再び視線をレンに向けた。

机の上のカップを掴み、縁ふちに口をつける。カップを傾け一口、口に含んで胃に落とす。相変わらず美味なそれはりりーが直々に選び抜いたもので、香りも味もトッブスリーに入るであろうことは間違いない。

「うん、そうね。ジーク、この子一緒に連れて行くわよ」

飲んでいた紅茶を吹きかけた。危うくで止めることが出来たが、その代わり情けない面を晒すこととなった。

その時にりりーが一瞬口端を歪めたのを俺は見逃さなかった。覚えてるよ、りりー。

「そりゃレンの同行を認めるってことか？」

「そういうことになるわね。一人ぐらい増えたって良いでしょ？」

はあと俺はため息を吐く。

りりーのその慈善心、胆力には一目置くところがあるが、いくら何でも知り合ってすぐの相手を、それもどこの誰だかも分からないような奴を普通旅の共にするようになるだろうか？ 普通ならしない。そいつが暗殺者の可能性だってあるし、一国の姫という

肩書きを持つ以上信用のおける奴で固めておくべきだ。もっとも、そいつらが主犯格だった場合にはどうにもならないが。

リリーもレンが恐らくただの少女だろうと思っっているからそのようなことが言えるのだろう。実際この少女が暗殺者とかいった類かどうかは分からないが、疑ってかかるべきだ。だが、主人が『この子は信用する。何かあっても後は頼んだわよ』と暗に言っているのなら、騎士である俺はそれに従うのみだ。不満はあるけどね！！

「……はあ…、どうせ俺が反対したって連れて行くって言っただろ？ だったら別に構わないさ。ただし、追加で人員は入れておけよ？」

「ちゃんと組み込んでおくから安心しなさい」

「あ、あの、どういうことですか？」

話について来れず、レンは俺とリリーを交互に見比べた。俺達がレンと同行したいという旨を伝えると、レンは大喜びではしゃぎだした。流石にあの襲撃で内心ビクビクしていて怖かったらしい。旅の道連れが出来て良かったと笑いながら話している。一国の姫を道連れ扱いとは……、この娘やりおるな。

ともかく話が纏まった俺たちは出発当日、街の門で待ち合わせをすることに決めたのだった。

第24話 旅は道連れ、世は情け（後書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

皆様のおかげで総合PVが20万越えを、総合ユニークが3万越えを果たしました！

え？そんなことどうでもいい？あ、はい。そうですね（・
・
）

とりあえず、次回に続く！

続け……

12/28 本文に多少変更を加えました。

12/30 誤字修正をしました。

第25話 清楚？ いいえ、腹黒です（前書き）

遅くなつてすみません。

近々あるテストのせいで更新遅れました。ひとまず本編にGO！です。

第25話 清楚？ いいえ、腹黒です

出発日。

快晴の空の下、時刻通りファーレン方面である西門に集合した俺たち一行は、馬車1つと馬3匹を調達し王都を出発した。

ゆらゆらと規則正しく揺れる馬車に眠気を誘われながら、草を撫でる風に身を委ねる。さわさわと吹き抜ける風は、走り去っていくがごとくあつという間に俺たちを追い越し、彼方へと去ってゆく。

雲一つ浮かばない空は青く澄み切っており、どこまでも引き込まれそうに深い。時折、子を連れた鳥たちが鳴き声を上げながら飛んでいき、列を組んで空に模様を描き出す。その様子にくすりと笑いを漏らしながら左右に広がる草原に目を向ける。

所々に大きな木が数本生えているだけの地面は短草によって覆われ、見事な自然の緑の絨毯を作りだしており、寝転がると気持ちよさそうだ。今度また晴れた日にここに来ることを決め、俺は再び前を向いた。

こうやって自然を楽しむ時間もいいかもしれないな……。そう思っただけで自然を楽しむ俺の一時は後方にいる少女二人によって呆気なく終わりを告げた。

「ジーク、ちゃんとお菓子は買ってきた？」

「遠足じゃあるまいし買うわけないだろ！？」

「バナナっておやつに入るんですかねえ？」

馬車の中できゅきゅと騒いでいるのはレンとリリーの二

人。どうやらお互い馬が合ったようで、先程から五月蠅いぐらいに
姦^{かしま}しい。女子たちの会話というのはどこでも姦^{かしま}しいということか。

そんなリリーたちから視線を逸らして馬車の外に向ければ、そこ
には一人馬に乗っている金髪の青年が一人。將軍の一人、パールさ
んである。

リリーが追加で頼んだ護衛はパールさんで、馬車に乗っている俺
たちとは裏腹に、外で一人馬に跨^{また}がっている。その表情は決して楽
しそうには見えないが、リリー曰く「気分が高揚してるみたいね」
らしい。俺にはいつもの仏頂面^{ぶつちやうめん}にしか見えん。

かくいう俺は御者台で馬2匹を操っていた。もちろん、俺の仕事
の範囲内である。

そういえば、専属騎士 響きが良いように聞こえるかもしれな
いが、実際の所は体の良い雑用係^{てい}だったりする というのは非常
に幅広い仕事をこなさなければならぬ。主人の護衛、書類の処理
の手伝い、お茶請け、書類配達、主人の夜食作りetc……。時に
は中庭の掃除なんかも頼まれたりしたが、そんなもの庭師に任せて
おけばいいのと思ったのは懐かしい思い出だ。もつとも、掃除自
体はきちんとしたが。

しかし、リリーの持つてくる仕事は多い気がする。身近に他の専
属騎士とか忠誠を誓った奴とかいないから余計に判断がしにくい。
ちなみに、魔動車を使えばいいのではという俺の提案は却下され
た。我が姫曰く「景色を楽しみたいじゃない」とのこと。魔動車で
も充分楽しめるのではとは言わなかった。決して彼女から放たれる
負のオーラに屈したわけではない。

まあ、そういうわけでこうして御者台に座っているのだが、如何
せん暇^{ひま}すぎる。

周囲^{周囲}の警戒を怠らないのは当たり前だが、何よりパールさんが怖
い形相^{かたち}で近くを進んでいるのである。身の程をわきまえている魔物

たちは格の違いを感じているのか、俺たちのことを遠巻きに見るだけだ。仕事が楽なのはいいが、こつも楽だと逆につらい。人間暇が一番の大敵だ。

途端、くるりとパールさんが身体の向きを変え、こちらを向いた。

「おい、坊主。さっきから遠巻きに魔物たちが見てるが、あれは放っておいて良いのか？」

「俺たちに害を与えないならそつとしておいても良いでしょう。それ以上にあんたがここで暴れたら地形が変わります」

チツと舌打ちしてつまらなさ気に前に向き直る。パールさんも退屈しているのかもしれないなと思っていると、馬車の中から俺を呼ぶ声が聞こえた。

ぼうつとして生返事で答えていると、後頭部に軽い衝撃を喰らった。振り向いてみると、リリーが拳を握って俺を慄然と見下ろしていた。

状況から判断するに、俺がリリーたちにまともに対応しなかったから怒っているのだろう。眉間に少し皺を寄せ、口を引き結ぶ彼女にはいつかの弱気だった面影は感じられない。

「まったく、主人の言うことにはちゃんと答えなさいよ」

「悪い、考え事してた」

「今度からちゃんと返事してよね。じゃないと今度は何が飛んでくるか分からないわよ？」

「それもはや脅迫に近いものを感じるんだが!？」

拳を握ったままクフフと不気味に笑うリリーに身の毛がよだつ。

ここはとりあえず抵抗をせずに従っておくのが賢明だ。

とりあえず乾いた笑みでそれを見をなんとか流してリリーに用件を尋ねる。わざわざ御者台まで来るのだから何か用があつてのことなのだろう。

すると、リリーはごそごそと服の中をあさると、一つの書類を取り出し俺に手渡した。訝しげにそれを見れば、ずらりと羊皮紙3枚に名前が並べられている。どこかで見たような名前や、今生きている歴戦の猛者の名前たちもあれば、全く知らない未知の名前も載っている。

「なんだこれ？」

「今回の大会の出場者のリストよ。総勢約120人、貴方も知ってる名前も載ってるでしょう？」

「まあ、そりゃこのレインとかグラスゴーとかは有名だが……。でも、何でこれを俺に？」

俺が聞くと、リリーは大仰に肩をすくめて笑った。

「どうせ対戦相手とか調べたりしないでしょ？ 自分がどんな相手に挑むかも知らずに戦おうなんてちゃんちゃらおかしいわね」

あんな、挑むも何もお前が強制的に俺を出場させたんだろつが。楽しみじゃないのかと問われれば俺は首を横に振るが、そこまで言われる義理はないだろ。

俺の心中を察したか、彼女はフツと穏やかな笑みを浮かべた。全

てを分かっている母親のような表情。誰かを包み込む優しさを持つようなその表情は見ているだけでこちらが悪いことをしたかのような気持ちにさせる。案の定、俺はばつが悪い顔でふいと顔を逸らし、馬車の進行方向を見つめた。

「私の専属騎士なんだから文句言わないの」

「さっきまでいい話だったのにな、こん畜生ちくしょう!!」

「どうぞやら、うちの姫はシリアスな話をさせてくれる気は無いらしい……。」

「……………大きいな」

「……………そうね、凄く大きいわね」

「はわぁ……………」

「おい、てめえら。通行人の邪魔になつてんだからとつとと行くぞ」

俺たちは今、所謂コロシウムと呼ばれる場所に来ていた。元の世界の古代のコロッセウムもかくやといった大きさである。

武闘界の開催されるファールエンのある街、エニリスはこのコロシウムを中心にして出来ているらしく、コロシウムから広がる街道

には露天や大型店舗、役所やらギルドやら住宅街やらが立ち並んでいる。特に、大会開催ということもあってか露天の数は多く、古今東西の露天が集まっているらしい。近くの露天商人に食い物を買ったついでに聞いた話だ。

コロシアムで選手認証をしようと来たのだが、如何せんその大きさに圧倒され、パールさんを除く俺たち三人は口をぽかんと開けて間抜けな顔をしていた。……………迷ったら終わりだな。

「はっ！ そうだ、選手登録しないと……………。行くわよみんな」

リリーの声に従い、そろそろと歩き出す。しかし、リリーの容姿が随分と良いせいか、周囲の視線も自然と彼女とその後に続く俺たちを集まっている。

リリーはもう慣れっ子のようで、堂々と戦闘を歩いており、それとは対照的にレンはびくびくと周囲の視線に怯えながらリリーの後ろにぴったりとくっついている。若干リリーが歩きづらそうだ。パールさんはむしろ周囲をギロリとにらみ返している。それに怖じ気づいて視線をずらす数人。こいつらはたいしたことない、と。

周囲の様子を観察しながら俺もリリーの後に続く。強敵だと思われる奴の顔を覚え、パールさんの視線で視線をずらす弱者は無視していく。パールさんで視線をずらすようじゃまだまだだからな！え、俺？ いや、俺が一番怖いのは……………。

「よう、パール坊。元気そうじゃのう」

「あん？ あ、グラスゴーじゃねえか！」

俺の思考を中断させた声は、随分と小柄なグラスゴーと呼ばれるご老人によるものだった。彼の身長は俺よりも少し低いくらいで、白く長い髭を撫でてふおっふおっふおと笑っている。飄々とした雰囲気ひょうひょうを漂わせるが、腰に差した脇差しわきざしが随分と濃密な気配を振りまいている。

「パール坊って呼ぶな、偏屈ジジイ。ぶっ飛ばすぞ？」 あんた、まだ生きてたのか。とっとと引退して楽になつときゃいいのによ」

「お主は坊で十分じゃろう。ワシにも勝てん奴が生意気言っんじゃ無いわい） まだまだ若いもんには負けはせんわい）」

「上等だ、首根っこ洗って待ってる） あんたが言つと洒落にならねエな……）」

「あの、お二人さん。本音と建て前が逆になつてませんか？」

ニヤリと笑うご老人に対して、敵意むき出しの表情を作るパールさん。話から察するにこのご老人がグラスゴーとかいう人で、パールさんの知り合いといったところか。

しかもあのパールさんを坊呼ばわりで殺意全開のパールさんの威圧感を軽く流しているなんて……。にわかには信じがたい光景だが、今日の前で繰り広げられている光景は間違いなく現実のものである。

「うむ？ 坊主は何でここにおるんじや？ それにその子等も……、パール坊の子か？」

「ちげえよ、金髪がうちの姫さんで、赤髪は訳あって同行してる奴だ。その茶髪はクレスの子で、あんたも【鬼の申し子】くらい知

ってるだろっ」

え？ 何その二つ名。父さんそんなあだ名持ってたんですか……。中二臭いのはここが異世界故か……。

「おお、フレレンデュラの子じゃったか。成る程のお、あの二人によく似ておる」

「父さんと母さんを知ってるんですか？」

「この人は昔、王国で指導官やってたからな。俺もクレスもぼろぼろになるまでしごかれた」

「じゃあ……ひょっとして王宮に伝わってる【鬼教官】っていうのは……」

リリーが進み出てグラスゴーさんに尋ねる。ちなみに【鬼教官】っていうのは昔王宮で働いていた凄腕の指導者で、昔その人の訓練の内容を見てみたが……、まあ察してくれ。一言いうならそれができたら人間じゃないと思っただね。

「ああ、恐らくわしのことじゃろっのっ」

首を縦に振ってグラスゴーさんはそれを肯定した。リリーは目を見開くと、がしつと彼の手を取り鼻息荒く彼の手をブンブンと振った。

おおうとグラスゴーさんがよろめいたのは当たり前前の話だ。

「私、【鬼教官】さんに会って見たかったです！ 今訓練内容で悩んでることがあってご相談したいなあとは思っていたんですけどまさか会えるなんて！」

きゃっきゃとはしゃぐリリーに、グラスゴーさんはそうかそうかと頷く。正直あのリリーのテンションにまともに対応できてることが凄いと思う。

それにしても訓練内容って何のことだろうか？ ユリアさんから騎士団の訓練内容考えろとか言われたのか？ でもあの人なら普通に自分で考えてやりそうなものだけだな。

謎に首を捻っている、半目でこちらを見る少女が一人。赤髪を弄りながらじっと見ているのはレンである。どうやら話に加われないのが不満らしい。

「なにいじけてんだ、レン」

「だって皆さん楽しそうに話してるのに私だけひとりぼっちですもん。ぼっちですよ、ぼっち」

いや、強調しなくてもいいから。

ずっと放っておかれたのが面白く無かったらしく、随分と拗ねている。どうどうと慰めていると、リリーとグラスゴーさんの話が終わったらしく、グラスゴーさんはじゃあのと行って人混みに紛れていった。

リリーは充実感溢れる爽やかな表情で額の汗を拭っており、バルさんは心なしが顔が青い。何故かは分からないが……、昔のトラウマでも思い出したのか？

「いやー、良い勉強になったわね。まさかこんな所で彼に会えるなんて思ってもみなかったわ」

「おい、姫さん。それマジでやるのか？ あいつらには荷が重くねえか？ あの気絶させるまで戦わせるなんてのは流石の俺でもどうかと思うが」

「大丈夫、大丈夫。なんていったって、このメニューはジーク専用だからね」

え？

思わず俺がリリーの方を向いて、彼女に視線で尋ねたのは至極真つ当な反応だろう。今この姫はなんと言ってた？ 俺専用メニュー？ しかもグラスゴーさんと話し合ってたやつ？

悪い予感しかしないが、そんなことないよねと笑いながら彼女に尋ねた俺の期待はあっさりと裏切られることとなる。

「大丈夫、ちゃんと負担の出ないように作り替えてはおくから。ちよつと気絶はするかもしれないけどね。ユリアにもマニュアルにして渡しておくわ」

無言で仰いだ天井はやけに滲んで見えていた。

そして、そんな俺の肩をパールさんとレンはぼんと優しく叩いてくれたのだった。

第25話 清楚？ いいえ、腹黒です（後書き）

はい、どうも。

前書きでも述べた通り、テストがあるので更新が遅くなりそうです。恐らく来週までかかるんじゃないかと思っています。

そのため、次の更新は恐らく来週になるのではないかと思っています。

できたら随時更新していく予定ですが、どうしても遅れてしまう所はご了承ください。

12/12 武闘会の開催地について追記をしました。

12/30 リリーの言動に多少修正を加えました。

誤字を修正しました。武闘界とかどこのDBだよ……。

第26話 口は災いの元……（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

更新遅くなつてすみませんでした。なにぶん、テスト勉強が思いの外忙しかったもので。

とりあえず本編へGO！

第26話 口は災いの元……

グラスゴーさんと別れ、俺が大粒の涙を流して絶望を感じた後、リリーが泣いている俺を引きずって大会受付で参加者登録をさつさと済ませてしまった。最近リリーの問答無用っぷりが酷いと言わざるをえない。それどころか良い笑顔をしていいいたのは流石の俺でも引いた。昔はあんなに純粹だったのに……。

そんなわけで受付を終了させ、コロシラムを出た俺たちを出迎えたのは見知らぬ中年の男と、鋼色の鎧に身を包む十数人の男達。恐らくこの男の私兵かなんかだろう。だった。主人とおぼしき男はモノクルの眼鏡をかけており、随分と豪華そうな礼服に身を包んでいる。両の手にじゃらじゃらとした指輪を見せつけるように嵌^はめていて、その一つ一つがかなりの値打ちものであることが連想させられた。体型は中背中肉といった所で、典型的駄目貴族の類ではないらしい。やり手の雰囲気を感じる。

「ようこそ我がエニリスにおいでくださいました、シュヴァイツ王女。私、エニリス市長、ガロン・ドトロスが心より貴方の訪問を歓迎いたします」

ニコニコと笑って恭しく頭を下げるガロン。それに合わせて鎧男達も頭を下げてガチャリと音を立てた。仰々しい挨拶に驚いているのはレンだけで、それ以外のメンバーは至って普通にその挨拶に答えている。リリーはいつものスマイルで、パールさんに至ってはフンと短く鼻を鳴らしたぐらいだ。

リリーはその挨拶に、にこやかな営業スマイルでガロン達に笑い

かけて、小さく、本当に小さく呟いた。

「しまった……、すっかり忘れてたわ……………」

思わず小さくため息を吐く。どうせリリーのことだ、本来の目的であった訪問のことよりも俺の出る大会の方が気になったのだろう。主にどんな風に俺が行動するのかを見るという意味で。決して彼女が俺のことを気にかけているとか、恋愛的感情を持っているとかといったものではない。というかそんなことはありえない。大切なことなので二回言いました。

ニコニコと笑っていたガロンの眉がぴくりと跳ね上がる。その視線はリリーの隣に並ぶ俺とその後ろに隠れているレンに向けられている。

「失礼ですが、そちらの方々は？ 王女の御知り合いですか？」

「ええ、こっちの茶髪の少年が私の専属騎士のジーク、こっちの赤髪の少女は私たちに同行した友人の魔法使いのレンよ」

「よろしく」

「どうも…」

「おやおや、そうでしたか。これは失礼致しました。王女の御知り合いなら、大事はなさそうですね。いやはや、すみません。初対面には職業柄ついこうなってしまうのですよ」

あっはっはと表情こそ笑っているガロンだが、その目は笑っていない。その目の奥に纏わり付くような敵意と吐き気がする程の強欲が一瞬だけかいま見えた気がした。だが、次にはもうニコニコとし

た笑顔に戻っている。あからさまな皮肉を飛ばすガロンに、リリーが少しだけ目を細める。が、それも一瞬。リリーは営業スマイルに戻っていた。

レンはこの中にいるのがいたたまれないのか、そわそわと視線をあちこちにさ迷わせた末に俺とばかり目が合った。

どうしよう？

そんな感情が読み取れるほどに彼女は動揺していた。とりあえずじっとしておくとアイコンタクトして俺はガロンに向き直った。もっとも、アイコンタクトが通じたのかどうかは甚だ謎なところだ。

「わざわざ私たちのために出迎えに来てくださって感謝致します、ドトロス卿」

「いえいえ、こちらこそ王女にご足労願ってもらって申し訳ございません。今回の武闘会は随分と選手の質が良さそうですね。ご迷惑かとは思いましたが是非御観戦いただきしたいと思います」

「まあ、そうなのですか」

「お話中すみません。そろそろこの場を離れた方がよろしいのではないのでしょうか？ 人目も集まってきました」

二人が談笑している。 - 表明上はそう見えているが、先程からこちに向かって話を止めなさいとリリーが念を飛ばしてきていた。相手も気づいているんじゃないか？ - 間に入り込んで告げる。ガロンは眉をひそめたが、すぐ俺に同調して自分の屋敷へ招待すると言い出した。

俺とパールさんに向けてきたリリーの視線に、コクンと頷いて応える。パールさんは何もリアクションを取らずにリリーの顔を見たのだが、それだけで充分に伝わったのだろう。リリーは笑ってお嬢様のような口調で了承の返事を告げた。

「貴女はどうしますか？ 王女の御友人だそうですし、ご招待致しますよ？」

「ふえ！？ あ、あの、わ…、私い？」

わたわたと傍目からも慌てているのが分かるアクションを取った後、彼女は驚いた表情で自分を指差した。

「で、でも！？」と手振り身振りを交えて自分の事情を説明していたが、最後にはガロンに押し切られる形で招待を受けることになった。顔を真っ赤にして俯いているのが微笑ましい。

では、とばかりに先頭を歩き出すガロン。その後にはリリー、俺、レン、パールさんの順に俺たち一行が続き、周囲を覆うように甲冑を着込んだ騎士連中が歩きはじめた。

流石は要人の警護という役職に就いているためか、その動き統率され乱れがない。ニーナさんや父さんみたいな化け物と比べると見劣りはするけど、それを除けばかなりの洗練度だった。

歩幅を少し大きくしてリリーの隣に並ぶ。視線を前に向けたまま、静かに俺は口を開いた。

「どうするんだ？」

「どうするって…、一体何の話よ？」

「…目の前のあいつだ。何というか…、どうもきな臭い」

リリーは思うところがあるのか、顎に手を当ててからしばらくし

て、俺と同じように前を向いたまま、情報を整理するかのようにつくりと話しはじめた。

「確か…、いや、でも……。……。多分、……。問題は無い、とは思わ。今は彼に従いましょう。宿代が節約できたし、ひとまずよしとしましょう」

そうは言うが、と言おうとして俺はその言葉を飲み込んだ。

先程感じたあの感情は他の貴族にもよく見られる。その大概が大した能力も無い、威張ることしかできない役立たずなのだ。

すぐに厚い理性の壁に遮られてしまったが、奴からも確かに激しい感情が感じられた。だが、よく考えてみれば俺の考えすぎだったのかもしれない。

聖人みたいな人間でなければ、普通に人に欲はあるものだし、国のお上もそれは例外ではないだろう。重要なのは、民のためにそれが抑えられるかどうか。

見たところ、この街は祭があるからなのかもしれないが、活気が満ちていて悪いところは今は見られない。ならば、彼はきちんと街の施政を行っているのだろう。頭を振って今までの考えを振り飛ばした。

前を歩くガロンはこちらに背を向けたままだが、十分に距離が空いているというのに、俺たちの会話が聞こえているのか時たまびくりと肩が動く。それでも会話を止めようとしなのは会話から情報を盗もうとしているせいなのか、それとも別の何かがあつてなのか。話題を振ってから、自分の選択のミスに気がついた。

聞こえてはいないとは思うが、張本人のいる前でこの話を続ける

のは危険だ。そう判断し、会話を打ちきって歩みを遅めた。

「そういえば、ジーク殿は王女の専属騎士でしたな」

突然、ガロンがぐるりと頭だけこちらを向いて尋ねてきた。それに曖昧に応えようと、彼は羨望の目を向けてくる。

「随分な出世コースですなあ。凡人な私から見れば羨ましいかぎりです。やはりその腕を買われて？」

「そんなところですよ」

「なるほどなるほど」

彼は何度も頷くと、今度は視線をリリーに向け、彼の横にいる騎士を指差した。

「しかし、騎士が一人では大変ではないですか？ 私の隣にいるアコースなんかは専属騎士向けだと思いますが」

指差された騎士は歩いたまま敬礼をすると、再び自分の位置で任務に戻った。

ここまで直球的なコースで来るのは、流石のリリーにもよめていなかったらしく、鳩が豆鉄砲を喰らったような間抜けな顔を晒している。

「い、いえ、今の私にはジークだけでも充分です」
「ふむ、そうですね。そこまでジーク殿が気に入っていらっしやるか。いやはや、これは余計なお世話でしたな」

ニヤリと笑って前を向くガロン。

提案しておいて直ぐに引っ込んだのが頭に引っ掛かったが、それも隣から流れてくる怒気に瞬く間に塗り潰された。

ニコニコと恐いまでに笑うリリーの頬はびくびくと引き攣っており、漫画とかならば確実に頭に怒りマークが幾つも浮いていることだろう。

彼女が怒っているのがこんな奴おれに興味なんか無いということなら少しばかり寂しい。しょぼーん。

「おい、どうした坊主？」

「何でもないんです。ただ世の理不尽さを味わっただけなのです。放っておいてください、パールさん」

「そ、そうか」

いいんだ、もう慣れたもんね！ 涙なんか流してないんだからね

！ これは心のフィルターから漏れ出た海水なんだから！

くうっ、と唇を噛み締める。騎士の数人がいきなり涙を流しはじめた俺を見て、顔を引き攣らせながらすつと距離を取った。………
理不尽だ。

「ちょっと、貴方！ こんなの高すぎでしょ！」

「うるせえな。客じゃねえなら向こう行ってる」

「黙るのはそつちよ！ こんな質の悪いのをこんな高い値段で売ってるなんて同業者として許せないわ！」

道を行く俺たちの元まで聞こえてくる喧噪。男女が路上の露店で言い争いをしているらしく、人だかりが出来ていた。というか、片方の声は聞いたことある気がするんだが。

記憶の穴をほじくり返していると、一行全員が喧嘩に気付き騒ぎの中心に注目していた。

「何かあったんでしょか？」

「ここまでの喧嘩は滅多に起こらない筈なんですがねえ」

首を捻るレンに伝えるようにガロンは言い、眉根を寄せた。バルさんは興味がないらしく、大きな欠伸を一つ。

肝心の俺はというと、あの声にどうも心当たりがあるのだが、自然と身体が人混みの中へと潜り込んでいた。

人だかりをかい潜り、最前列まで来ると色んなものがよく見えた。つまり、それは見たくないものまで含まれていたわけで……。

「今すぐ店を畳みなさい！ そうしたら、こんな商売をしていたことも見逃すわ！」

「あんたにどうこう言われる筋合いはねえだろ！ とつとどつか行けよ！ 商売の邪魔だ！」

俺の目に映ったのは黒色の三つ編みを揺らしながら露店の店主を怒鳴り付ける、ブラッディウルフに襲われていたあの鍛冶職人の女性だった。

もともと浅黒かった頬は怒りで赤く染まっており、目はこれ以上ないほどに釣り上がっている。髪の色と同じ黒色の目は容赦なく店主を射抜いていた。

ここまで来ておいてなんだが、この戦いを止められる自信が俺には無かった。

OK、言い訳を話そう。

まず鍛冶職人の女性の迫力。とてもじゃないが並の女性ならば出しうる筈のないオーラが背中から滲み出ており、心なしか阿修羅像が見えた気がした。店主はあれに恐れず、反論すらしているようだが、俺には絶対真似できない。

二つ目に俺が完全な部外者であること。あの女性とは確かに知り合いではあるが、それ以上の関係はない。ただ顔を見知っている、その程度の仲だ。店主に至っては完全に初見である。それなのにその中に飛び込んでいけばどうなるのか。それが火に油を注ぐ結果になることは火を見るよりも明らかであり、それなのに喧嘩を止めるために二人の間に突入していくのはどう見ても無謀としか言いようがない。

ならば必然的に俺に残された選択肢は戦略的撤退一択だ。

だというのに、この後ろから押してくる手は一体誰のものなのだろうか？ 何があっても俺を二人の間へと送り込みたい奴がいるらしい。その面を拝もうと首を捻る。そこには両の腕でぐいぐいと俺の身体を前へと押し出すリリーの姿があった。

「なにやってんだ、お前？」

「大丈夫、骨くらいは拾ってあげるわ」
「もはや死ぬこと確定ですか!？」

グッドラックと親指を立てる彼女の顔はやけにいい笑顔。嗜虐めいた思考に走るうちの姫さんが凄いい心配です。誰か直してくれませんかねえ？

そんなアホな思考をしていた俺の一瞬の間を彼女が見逃す筈もなく、ドンツ、と前へと押し出された。その結果、渦中にあった二人の厳しい視線に晒されることとなる。

突然の闖入者である俺に明らかな敵意を向けてくる二人。二つの視線に貫かれた俺が思わず後ずさったのも自然なことであろう。血走った目で見られれば誰だって半歩ぐらいは下がるだろうさ。

ぐつと堪え、真剣な顔を作って二人の視線に相対する。警鐘が鳴り響く。喉がからからに乾き、水を求めていた。知らずかいた汗は頬を伝って地面へと落ちていった。

数秒、彼らに言うべき言葉を必死に頭を回して試行錯誤しながら組み立てて、その後、ゆっくりと口を開く。

「け、喧嘩はいけんから」

それを言った直後、全く同じタイミングで左右から殴られ、俺の身体は宙を舞った。ある意味当然の話だった。

第26話 口は災いの元……（後書き）

小説の続きを楽しみにしていた方（いるのかな？）、更新が遅れてしまい本当にすみませんでした。

ですが、またここ二週間の間にも私用が詰まっているので、更新がまた遅くなりそうです。誠に申し訳ありませんが、ご了承していただければ幸いです。

12/30 ジーク、ユミルの容姿描写に修正を入れました。自分で考えたキャラを間違えるとか……orz

誤字修正を入れました。

第27話 口八丁手八丁（前書き）

遅れてすみません、博麗まんじゅうです。
ひとまず本編へGO！

第27話 口八丁手八丁

「で……、何で喧嘩なんかしてたんだよ？」

無事(?)二つの凶暴な二重フタヘを極めているような拳の一撃を耐えきった後、腫れた頬をさすりながら俺は尋ねた。もちろん、二人には正座をしてもらっている。正座って姿勢の究極体だよな。どうでもいいけど。

二人はさつと俺から目を逸らし、その視線がぶつかりとグルルと唸ってにらみ合いを始めた。

「いい加減にしろ、このアホタレ共が!!」

両手に拳を握り、それを迷うことなく二人の頭頂部に叩き込んだ。所謂拳骨いわゆるげんこつというやつだ。

案の定、俺の一撃を食らった二人は声なき声を上げ、じたばたと地面を転がった。それを通行人や野次馬達が見て引いていた気がしたが、気にしない。ついでに心も痛くない。痛くないんだからな！
リリーたちも 特にリリーは自分で俺をけしかけたというのに

俺の所行を見て同情の眼差しを二人にくれていた。それと同時に俺に批判の視線がリリーからぶつけられる。え？俺ちゃんと仕事してるよね？

「いったあ……。何するのよ少年！ お姉さんの大事な大事な頭から色んなことが消えたら私がどうなるのか分かってるの！」

「どうなるも何もただの馬鹿になるだけじゃないか？」

「あ、そっかあ。……ってそうじゃなくて！？ アホになつたらどうしてくれるのって聞いてるのよ！」

「何もしない。自分、不器用ツスから」

「今そんなボケいららないから！！」

少々ヒートアップしているのか顔が赤く、せいぜいと息を荒げながら俺を睨む女性。ううむ、カルシウムが足りていないんじゃないのか？

「誰のせいよ、誰の！」

自然と声に出していたらしく、俺の漏らした言葉に女性は激しく反応した。

そしてもう片方の商人の方はというと、早く『終わらねえかなあ』みたいな感じでぼうっと宙を睨んでいた。よし、お前。後でO S H I O K I Iしてやるから覚悟しとけ。

「本題に戻るが、何であんな所で言い争いなんかしてたんだよ。いい大人なのに」

この俺の言葉に、女性はよく聞いてくれたとばかりに主観たつぷりの話を饒舌に話し始めた。所々隣の商人が話しに割り込んできたせいで、もつと早く終わるはずだろうと言っほどの短さのエピソードは実に3倍の長さまで膨れ上がっていた。で、彼女を言い分を纏めてみるとだ。

鍛冶材料無いし、街で鍛冶の材料を買っちゃおう。

露天で材料を発見。

違法なぐらいに高い鍛冶材料を売る露天だった。

熱い鍛冶職人魂（笑）が疼いて文句を言っちゃった

論争に発展

「ね！ お姉さんが正義でしょ！？」

「お前が悪い」

「ええ！？ な、何で！？ 可愛い物は正義でしょ！？」

可愛い物が正義かどうか云々は別に置いておくとして、正直アホかと言いたい。

そんな不当に高い物置いてても誰も買わないことは明白だ。なんでそんなことをしたのかは甚だしく謎だし、別に聞きたくもないが、どう考えても害をもたらすようには見えない。というか普通の人はそんなもの買わないからな。どちらかといえば、女性の抗議によって生じた迷惑の方が質が悪い。

今こうして路上で説教をしていることも、他の露天にとつちや迷惑行為だ。どうしてやめないのかという質問はスルーの方向で。

「そんなこんなでとりあえずお前が悪い。はい、これでお仕舞い。閉廷閉廷」

「ちよっ！！ 待ちなさい、少年！ お姉さんはこれじゃ納得しないわ。もつと納得のいくよう聞かせて貰えるかしら？」

「貴殿は有罪^{ギルティ}である」

「言い方じゃないから！ 言い方変えてって言った訳じゃないから！」

「つたく、七面倒くさいやつだな。どうやったら自分の罪を自覚するのか。」

その時、群衆の中からリリーが近づいてきた。右手にはどこから取り出したのか、ピコピコハンマーが握られている。この世界にそんなものないはずなんだが……。

「ジーク、そっちの商人の事情は聞いてみた？」

「おっと、忘れていた。そういえば、そっちの事情も聞かなければな。」

視線を商人の方へ向け、言外に事情を話すよう促す。商人は俺の視線で暗に俺の言いたいことが分かったのか、顔を俯せてぽつりぽつりと語り始めた。

「俺が商売を始めてからもう6年になるんだが……、実は未だに商売を立ち上げたときの借金が返せないんだ……。毎日働いて働いて、家内にもかなり迷惑かけて、必死こいて借金を返そうと働いてたんだ」

あれ？ なに、この展開。予想外にシリアスなんですけど。

戸惑う俺を余所に言葉を続ける商人。彼は覇気を失ったように頂垂れ思わず同情をしてしまうような雰囲気纏っていた。

「妻には買ってやりたい物も買ってやれず……。子供とは遊んでやれず……。それでもなんとか俺は金を稼いだんだ。でもある日、その金は何者かによって奪われたんだ」

ぴくつと僅かにだが視界の端でガロンの眉が動いた。……？ 何かあったのか？

「それで……。借金は返せないし、家は差し押さえられるし、もう自棄になって……。今持つてる全部の物を高い値段で売ろうとしたんだ。そうしたら借金が返せるから……。でも分かってたんだ、こんな値段で売れるはずがないって。馬鹿だよな……。俺……」

重い、重すぎる。

聞いてはいけないような話を聞いてしまい、たらりと汗が流れ落ちる。

見れば他の人も、それどころか他の商売敵であるはずの商人達も涙を流して彼を見ていた。

「……………う、ぐつす……………！ ごほっ……………、ぐすぐす……………ずるずる……………」
「……………（ほろり）」

でも一番彼に共感しているのは恐らくこの二人だろう。

乙女（？）にあるまじき体^{てい}で大粒の涙を流す女性と、目頭を抑え静かに涙を流すリリー。おい、鼻ぐらいはかめよ。

「あ” なんだ、ぐる” うじでだのね”。うだがつちゃっでごべんなぞ ああい！」
「何を言ってるかさっぱり分からんぞ」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で女性は商人に駆け寄り、その手を取った。

商人は「ありがとよ……………」と力なく笑うと、目を閉じて空を仰ぎ見た。

「リリー、（この場を治めるために）どうにかしてくれないか？」
「……………ぐす……………。分かってる。国庫を確認して借金を返してあげられるほどお金があるかどうか見てみるわ」

「いや、駄目だろそれ」

「悲しい……………出来事でしたね。私も協力しましょう」

「いや何言ってるんですかガロンさん。冷静になつてください」
「おい、坊主。こいつの話聞いて何も感じないのかよ？」
「バールさんがそんなことを言うなんて……。神は俺たちを見捨てたか？」

あの最強完全無敵戦闘鬼神戦闘狂が同情を呼ぶようなことに弱いとは……。あれですか？ 道ばたに捨てられてた子犬を見つけたらため息を吐きながら拾っちゃうツンデレさんですか？

一体どうしたのかと呆れて頭を抱えていると、助けは意外なことにすぐにやって来た。

「お父さん」

「……え？」

観衆の中から駆け寄ってくる子供。上質そうな服に身を包み、天真爛漫な笑顔を周囲に振りまきながら父親の元へと駆け寄った。そう、父親である商人の男の元へ。

男はぎよつとして子供に手であっちへ行くよう伝えたが、子供は不思議そうに首を捻ったまま男を見ている。

「……………」

途端、観衆の彼へ向けていた同情の視線がみるみるうちに冷たくなつていく。もちろん、例外なく全員だ。

リリーなど絶対零度を放つ笑顔を彼に向けているし、女性に至っ

てはくつくつと危ない笑いを漏らしながら腰の剣に手をかけていた。もはやこの場に男を庇う者などいない。男は自分の不利を悟つてか、逃げだそうとした。が、観衆によって阻まれる。

「ジーク、判決をどうぞ」

「有罪、いや、極刑。煮るなり焼くなりお好きなように」

「小僧、ちよつとこつち来てろ」

その日、男の断末魔が街に響き渡ったのは言うまでもない。

「いやー、すつきりしたねー」

「本当ですね」

「……………ああ言った俺が言うのもなんだが……………、やり過ぎじゃないか？」

すつきりとした表情の女性陣に対し、視界の端でボロきれのようになつた男の姿が映る。モザイクがかかっているもなんら違和感がないほどだ。子供がやはり不思議そうに父親を見ているが、パールさんがさつとその目を手で覆った。

ぱんぱんと手を叩き、女性は嘆息した後くるりとこちらに振り向

いた。

「ところで、君誰？」

「おい！？」

可愛らしく小首を傾げ、人差し指をあごに当てる。自分の記憶を漁っているらしいが、難しい顔をしたまま考え込んでいるところを見るとあまり芳しい結果は得られそうにない。

「んう？ あ！ 思い出した。確かジャック君だったっけ？」

「惜しい！ だけど俺はトランプは得意じゃない」

「おろ？ じゃあショック君かな？」

「確かにショッキングな毎日を送っているけども！」

「ああ！ デュー……」

「あかん！ それは死のノートの死神や！」

見当違いな名前を述べる女性。だが、無理もない。何故なら俺は彼女に名乗っていないし、彼女も俺に名乗っていないからだ。でも、せめてつい先日助けてもらった奴のことぐらいは覚えておいて欲しかった。

「はあ……。ほら、この前助けてやっただろ」

「ん？ あーっ！ ああああ。フツ……。お姉さんが忘れるわけ無いじゃない。あの激しかった日のことを……」

「それ、もの凄く誤解を招く言い方だぞ」

観衆の俺に向ける視線が、あの商人男に向けていたモノのように
どンドンと冷たくなっていく。まずい、これはまずいぞ。
そうは言っても俺に出来ることと言えば、言葉で説得するのみ。
だが、今の俺の状況を考えてみて欲しい。

俺 加害者（仮）（しかも変 態疑惑付き）

女性 被害者

もう無理だよなこれ。弁明なんてとてもじゃないができそうにな
い。

「ねえ、ジーク……？ 私が……、無茶を言いすぎたから犯罪に走
つたの？ ……もしそうだとしたら……」

「違う！ 絶対に違うから！ そもそもそんな事実さえ存在してな
いから！」

「ううん、日頃から頼りすぎてたなとは思ってたの……。でも、私
……」

「ストップ！！ 今そんな重いの持ち込まないで！？ 今の俺は
みんなに突っ込みきること精一杯だから！」

リリーは悲しそうに目を伏せ、顔を俯かせている。自覚があった
ことに驚きだが、今はなによりこの場を収めることに精一杯だった。

「つつこむだなん「お前はもう喋るな！」ケチーッ！！」

また場をかき乱そうとする女性に先制を打つ。女性は頬を膨らま

せ抗議の意を示すが、知ったことではない。今の俺にはそんな余裕などない。

「まあ、それは二割冗談として」

「十割冗談だよな!？」

「久しぶりだね、少年。名前は何て言うのかな？」

「……ジーク。ジーク・フェレンデュラだ」

女性は俯いて眼を閉じ、記憶に刻みつけるように何度もその名前を繰り返し呼んだ。数瞬してようやく名前を脳にインプットできたのか、顔を上げてにこりと笑った。

「私はユミル。鍛冶職人のユミルだよ。人は私を【剣製の女神】とも呼んだりするわ」

街道にひときわ強い風が吹き、黒色の髪がたなびいた。三つ編みが風にさらわれ、動物のしっぽのようにゆらゆらと揺れる。

浅黒い頬はうつすらと紅く、チヨコに紛れた桜のようにほんのりと色づいている。

一見すれば、ただの可憐な少女だ。だが、その本質は違う。彼女の持つそのオーラは彼女が達人に至った人物であることを十分に証明していた。

圧倒された、彼女の持ち得ていたモノに。

だがそれも一瞬。次の瞬間には彼女はいつものおちゃらけた雰囲気ではへらと頬をゆるめていた。

「よろしくね、ジーク」

差し出された右手を、俺はおどけたように笑いながら握るのだった。

第27話 口八丁手八丁（後書き）

はい、おはこんばんにちは博麗まんじゅうです。

前書きでも書きましたが、遅れてしまい本当に申し訳ありませんでした。これというのも全ては受験のせい……。いや、重要事項ですけどね。

次回はいよいよ武闘会になる……かな？ 話の進行具合ですね。

『番外編 人物紹介』に新たな人物が追加されたようです。

12 / 25 ガレン ガロンに修正。

12 / 28 リリーの言動を変更。罪悪感は抱いていたらしいです。

12 / 30 ユミルの容姿が間違ってたので修正を。

第28話 忍び寄る不穩の影（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

まずは初見さん様々なご指摘ありがとうございます。

自分の分かっていない物語の矛盾をばんばんと示してくれました。矛盾点を直すため必死こいてネタを練り上げている途中です。

これからも本小説をよろしく願いますね。

では、本編へGO！

第28話 忍び寄る不穩の影

「話は終わりましたか？」

後ろからガロンの声がかげられる。俺がそれに頷くと、彼もまた頷き、一言一言兵士に何か告げると、ユミルにお辞儀をして歩きはじめた。

他も軽く会釈をしたりしながらそれに続く。俺もそれに続くため、ユミルに別れを告げようとした時だった。

突然に俺の手が優しく柔らかかなものに包まれる。ドキツとしながら俺の手を見れば、ユミルが俺の手を取り、じっくりと観察している最中だった。

「……なにやってんだ？」

「なんだと思う？」

意地悪く笑うユミルに目を向けてもなにも分かるはずもなく、俺はもう片方の手を挙げて降参の意を示した。

クスクスと笑うと、「なんでもないわ」と言って彼女は俺の手を離した。名残惜しいなんて思っていない。ああ、思っていないさ。

不思議な態度を取る彼女に多少の疑問を持ったが、それはリリーの呼び声ですぐに霧散することとなった。

「そうだ。ジーク君には教えておかなくちゃね」

「教える？ 何をだ？」

「お姉さん、大会に出るのよ。ジーク君も出るんでしょ？ 当たったら手加減してね」

シナを作りながら頼み込むユミルを俺は鼻を鳴らして一蹴した。
当の本人も最初から期待していなかったらしく、肩を竦^{すく}めて俺に手を振った。

「じゃ、ばいばいジーク少年？」

「そっちな」

手を軽く挙げて、それに応えた俺はリリーたちを追い掛けるため走り出した。あれ？ ユミルは何で俺が大会に出ることを知ってたんだろう？

一瞬間が頭を過ぎるが、王都にいる内に誰かから聞いたんだろうと当たりをつけた。ギルド嬢にも言っていたし、その経由で知ってたんだろう。

急いで追い掛けたのですぐにリリーたちには追いつくことができ

た。でも、それはすぐにユミルの元を離れることを意味し…、

「波乱が起きないといいね、ジーク君？」

胡散臭い笑顔（うさんくさいえがほ）を浮かべながら呟かれた言葉が俺に届くことは無かった。

時間は流れ、あつという間に空は茜色へ、そして濃紺へとその容貌を変える。昼間、さんさんと輝いていた太陽は一日の仕事を終えたとばかりに地平線の向こうに沈み行き、夜の闇が降りはじめ。

その様子を屋敷の窓から時折眺めながら、俺は大会の参加者リストをめぐっていた。リリーが纏めてくれたリストは意外なことに見やすい。

参加者の名前、得意な戦術、参考になりそうな戦い方etc。事細かに纏められたそれを見ると、まるでスパイを送り込んだのかと思えてくる。多分そんなことはしてないと思うが…。でも、最近仕事（じむ）が滞（とど）っていたのは……、いやいや、気のせいだ。流石にお遊びにここまで用意周到に準備を…しそうだから困る。

悶々と悩みながらリストを眺めているとこんこんとドアがノックされた。

「開いてますよ？」

「入るわよ」

ガチャリとドアが開けられ、ドアの向こう側から不機嫌そうな表

情をしたリリーが現れた。

彼女はドアを閉めると、リアルに足音が聞こえてきそうな勢いで俺のベッドに歩み寄り、身体をベッドに投げ出した。

ベッドは軋む音を立てながらも無事その身体を受け止め、スプリングを振動させた。

ベッドに身を投げ出して尚リリーは不機嫌そうな表情を崩そうとはしない。ぶすつとした表情のまま身体を仰向けにして天井を眺めた。

「随分とご機嫌ななめだな」

「あんたもあのトークに小一時間付き合っただらそうなるわよ」

場を和ませようと口にした俺の茶化すような言葉は、リリーには逆効果だったらしい。リリーは口を尖らせ、近くにあった枕を胸に抱いた。

確かにあれ、ガロンの話に付き合っただらそうもなるか。

自分をリリーに売り込もうとしているのかどうかは知らないが、この国の特色に始まり、武闘の素晴らしさ、エニリスの国の必然性、武闘会という大イベント等々、饒舌に話し始められた時にはドン引きしたものだ。ここまで露骨に自分の住む地に絡めて自分をアピールをした奴は見たことが無かった。

それでいて時折真面目な話をしたり、こちらが嫌そうに聞いていることを察するとさっと切り上げ、次の話題に移るので嫌みを言ううにも言えない。それがリリーには嫌なのだろう。彼女は嫌なら嫌と堂々と言うのではなく、嫌みで返す。それも地味に心にぐさつとくるやつで。おかげで城では彼女に文句を言おうとする奴はいない。やはり掴み所が無い。

馬鹿なのか、それとも馬鹿を装っている賢者なのか。前者ならば、

対応は楽だが後者なら面倒だ。

「で、ジーク、あなたは何してたのよ？」

身体を起こしたりリーの問いに手に持った資料をひらひらと振ると、それで分かったらしく「なるほどね」と納得したように呟いた。そうしてまたベッドへと背中からダイブする。駄目だなこりゃ。相当キてるみたいだ。

カチツ、カチツ。

壁の時計の指針が動き、無機質な音を立てる。

部屋には沈黙が降りているが、別段気まずいわけじゃない。何度もこういうことはあったし、こうやってリーが黙ったままでいるのは、精神が疲れている証拠だ。今彼女に何か言ったところで変なところで責任感の強い彼女は否定的に捕らえてしまうだろう。

なら、俺は何も言わずに彼女から話し出すのを待つまでだ。何も話さなかったら話さなかったで俺は構わない。それはリー自身が決めることで俺が決めることじゃない。

「……ねえ、ジーク」

「ん？ 何だ？」

「あなたさあ、今私の専属騎士でいるの、嫌？」

掠れた声で問うりりー。その顔は両腕で覆われており、表情を読み取ることは出来ない。

いつも意地が悪そうに俺に無茶を振るりりーらしからぬ発言だった。唐突に問われた俺もその意図を理解できず、戸惑っていた。

「なーんちゃって 騙された？」みたいな展開を望んだのだが、リリーが一向に動かないところを見ると本当にシリウスに陥っているようだった。

「いきなりなんだ？ 弱気になるなんてお前らしくないぞ、リリー」
「……ん、ちよつとね……。疲れてるのかも」

力無い笑い声を漏らすリリー。相当根が深いらしい。
リストを最寄りの机に放り投げ、リリーの隣に腰掛けた。

「何があつたんだ？ ほら、お兄さんに話してみる」
「……あまり頼りにはなりそうにないお兄さんね」
「うるせい」
「ふふ……。……、さっきね、ガロンと話してた時、ジークの話題が出たの」

ほうほう、俺の話とな？ でもどうせ、他の騎士もどうですかな、とか言われたんだろ？

リリーは首を横に振って再び口を開いた。

「『姫様は随分とジーク殿を信頼しているようですね』って言われたの。私もジークは信頼してるし、誇りにも思ってたから笑って返してやったの。そうしたら……」

「いやいや仲がよろしいことで羨ましい限りです。私が今新しい騎士を紹介してもすぐすごと帰ってくるでしょうなあ」

「申し訳ありませんが、今は専属騎士はジークだけで充分ですわ。彼は良くやってくれていますから」

「なるほど。ですがちと心配ですな」

「えっ?」

「いや失礼、これは失言でしたな。わすれてください」

「いえ、私はまだ若輩の身です。間違うこともありましょう。何かあるというのなら言っていたきたいのです」

「ふむ。いや、私が心配したのはジーク君のことですよ」

「ジークが……?」

「ええ、彼に軽く疲労が見えた気がしましてね。ぶつぶつと言いながらもきちんと仕事をこなしてくれる彼は優秀でしょう。それに、彼は彼自身からあなたにあまり頼み事はしないのではないのですかな?」

「それは……」

「彼は何の見返りを求めて仕事をしているのか気になった、私が心配したのはそれだけですな」

「確かに私はジークに頼ってたし、前々から依存はしてるなとは思ってた。いえ、無茶をすら押しつけてた。でも、あなたは私を見限らずにずっといてくれた。私は……、その理由を知るのが怖い……」

「!」

「……………」

「怖い……。いつか私を見限っちゃうんじゃないかって思うと……、」

夜に眠ることすらできない……」

「リリー……」

「都合のいい女よね、私って……。無茶を押しつけてたのに、それをダシにして悲劇の女を演じようとしている」

それきりリリーは黙り込んでしまった。それは俺の言葉を待っているのか、それとも言つべき言葉を見つける事ができないのか。

確かにリリーはいつも無茶を押し付けてきた。俺だって本当に着いていくのをやめようかと思うこともあった。

だけど、リリーを支えようとはいう意志はある。それだけは言える。

あの時、リリーの瞳にあった感情に俺は惹かれた。目に見える物を助けようとした彼女の意志に憧れた。だから俺は彼女を追いかけた。

今ではあの時の純粹さもなく、その瞳の奥に潜む感情をのぞき込むことは出来ない。だから俺は今も彼女にあの感情があることを信じてリリーについて行っている。

だというのに、それに叛旗を翻すかのように俺の口から言葉が吐き出されることは無かった。

「……ごめんなさい、本人の前でする話じゃ無かったわね」

ベッドから身体を起こし、立ち上がる。心なしか目が赤い。俺から逃げるようにドアの前に立つと、彼女は俺に振り返ることなくドアを開けた。

「おやすみなさい、ジーク」
「…ああ、おやすみリリー」

閉じられゆく扉。その向こうに消え行くリリーの姿。リリーがこの部屋から出て行ったとしても追い掛ければすぐにまた会えるだろう。

だというのに、何故だろう？ 俺は今、酷く間違った道を歩んでいるような気がした。

胸の奥で燻くすぶっているような感覚。それが一向に消える気配はなく、見上げた空はもうすっかり闇色に染まっていた。

『大変長らくお待たせ致しました、観客の皆様。これよりエニリス武闘会を開催いたします！！』

沸き上がる歓声。大音量のそれは普段相対そつたいするような魔物の咆哮に負けず劣らずの迫力を有していた。

熱気のせい或少し蒸し暑く、じめじめとした空気が肌に張り付くように表面を撫でる。不快感に顔をしかめるもそれが改善されることは無かった。

『まずは予選です。ルール説明をしますから出場する皆さんもよく聞いてくださいね？ ルール無用で暴れられては後始末が大変ですからね』

芸人のようなトークにどっと笑いが起きる。周囲の選手の反応はまちまちだった。

観客のように笑いを零す者、無然とした態度で鼻を鳴らす者、我関せずとばかりに無視を決め込む者。俺はというと三番目の括りに入る。

今の俺は非常に機嫌が悪かった。それこそ、あのユミルがやんわりと逃げていく程に。ユミル曰く、「近寄りがたい雰囲気を放っている」「らしい。」

『予選は4ブロックに別れて行います。各ブロックではそれぞれ30人にバトルロワイヤル形式で戦ってもらいます』

頭にあるのは昨日の夜の会話。何も言ってやれなかった自分が立つ。あの時の俺は、応えられたはずの答えを先送りにした。それは俺が彼女を傷付けたにも等しい。

彼女に慰めの言葉をかけても意味がないと思ったから？ 普段からの反省を促すべきだったから？ そんなものはただの言い訳に過ぎない。

俺が彼女の専属騎士だ。彼女を支え、護ることが俺に課せられたことだった。自分の不満など飲み込み、全身全霊を持って彼女の味方するべきだったのだ。8年前に交わした契約。俺にはそれがあ
るのだから。

とんだ皮肉だ。今俺は彼女を支えたいと思っていたのにそれは契

約があつたからだと自分で結論づけている。そうじゃない、俺は彼女を自身で支えたいと思つたからだ。攻めぎ合う二つの思い。まるで自分の中に二つの人格があるかのような感覚だった。

『各ブロックの30人の内、無事勝ち残つた4人が本戦への出場を果たすことができます。尚、残念ながら敗者復活戦などという都合のいい救済処置はありませんのでご注意ください』

頭を振り、余計な考えを振り払う。すっかりしろ、もう何も考えるな。今はただ勝つことだけを考えればいい。

すつと目を閉じ、意識を研ぎ澄ませる。それだけで観客の声は遠退き、無駄な思考が省かれていく。

イメージするのは張り詰めた一本の糸。触れれば切れてしまいそうなそれを限界まで引き延ばす。

それと共に心が冷めていくのが分かる。一切の感情を押し殺したような感覚。それだけがあれば今の俺には十分だった。

『それでは出場者の皆さんよろしいですか？ レディ…、ファイトッ！…！』

開始の合図と共に地を蹴る。走れ、今の俺にはそれをする事しか出来ないのだから。

第28話 忍び寄る不穏の影（後書き）

はい、超シリアス回でしたね。

リリーの言動が若干変じゃない？と思っっている方もいらっしやるか
と思います。物語を読み直してみてもいくつか（というかなり）矛
盾点が見つかったので、2章以降、いくつか文章を変更している話
があります。

よろしければ、そちらをご覧になっていただいてこの話を読んでい
ただければ少しはその違和感が解消されるのではないかな……と思
います、多分。

あっ、あと感想、アドバイスについてですが、どんどんやっちゃっ
てくれて構わないです。どんな意見でもばっちこいですよ。

全てを糧とできるよう頑張りたいと思います。
では、また次回お会いしましょう。

……そういえば大会に入れなかったな……。急がないと……。

12/30 凄い馬鹿な言動をしていたため、後書き欄を修正しま
した。ご不快に思われた方、すみませんでした。

12/31 大会がロワイヤル形式の殺し合いになってた……。修
正しました。

第29話 天下で一番な武闘会（一試合目）（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

まずは謝罪の言葉を。

前話の後書きで『指摘が欲しい』と言いましたが、失言でした。自分で考えるべき仕事を放棄するということをしてしまい、反省しております。

ご不快に思われた皆様、本当に申し訳ございませんでした。そして、イソラさん、こんな駄目作者への説教、ありがとうございます。

第29話 天下で一番な武闘会（一試合目）

「本戦出場おめでとう、ジーク君」

「……………」

「あれれ？ 元気ないね？」

選手控え室で一人、腕を組んで座っているとユミルが声を掛けてきた。無論、苛立っているので無視を決め込む。が、ユミルは負けじと声を掛けてきた。

正直今は鬱陶しい。機嫌が良いときならいいんだろうが、今みたいに苛立っているときに話しかけて欲しくはない。ユミルの脳天気な性格に苛立ちを感じるからだ。俺と同じくリリーの周囲にいながら・・とはいつても付き合ってきた長さは俺の方が長いが・・こいつだけがどうして苦勞を背負っていないのかと無性に腹が立つ。

「むう。お姉さんだって構ってくれないと寂しくて死んじゃうんだぞ？」

「……………くれ」

「へ？」

「放っておいてくれと言っているんだ」

尋常でない殺気をユミルにたたき付ける。抑えることなく放たれた全力のそれは飄々としていたユミルの表情すら青ざめさせる程でずさりと後じさった。

これが八つ当たりなのは分かっている。怒りの矛先を向けるべくは自分であり、他の誰かに向けるべきではない。そう、頭で理解し

ていても感情は抑えられなかった。

「ジ、ジーク君機嫌悪い？」

「見て分らないか？ 分かっただらさつさと向こうへ行ってる」

「で、でも一応皆本戦出場は伝えておいた方がいいかなあと」

「知ってる。レンもグラスゴーさんもお前も俺も通った。これで充分だろう？」

つつけんどんに対応する俺に、流石に心が折れたのかしゅんとしながらユミルは俺から離れていった。

頭の片隅に残された冷静な俺が内心で舌打ちする。

ユミルには無い。こうして周りに迷惑を掛けている自分に腹が立つ。苛立ちが募る。そうして新たに負の感情のスパイラルへと陥っていく。

感情に振り回されている俺と、あくまで冷静に物事を見ている俺とが二極化して対立しているかのようだった。だが、優勢なのは感情に振り回されている俺自身だ。だからこうして周りに当たり散らして少しでも自身への負担を減らそうとしている。

嫌な奴だ。

リリーは自分を嫌な女だと称したがそれなら今の俺だって負けてはいない。いや、むしろ不特定多数の人間に危害を及ぼしている自分の方がよっぽど嫌われそうだ。

『それではこれより本戦の第一回戦を開始致します。初戦は、ジーク・フェレンデュラ選手対グラム・コーリッジ選手です！ お二方、ステージへどうぞ！』

司会のアナウンスが鳴り響く。それに呼応するかのように盛り上がる歓声。腹まで響いてくる煩わしいそれを思考の外へと追い出した。

のそりと立ち上がり、ステージへと続く出口へと歩みを進める。途中すれ違った選手がびくりと肩を震わせて道を譲る。それに何の感情を抱くことなく俺はすり抜けた。

感情を殺す。喜びも、悲しみも、苛立ちも。それらが己の動きを鈍らせるのなら、今の俺には必要が無い。だってそうだろう？ 俺の目的はただ勝利にのみあるのだから。

「随分と冷静でいるね、君。でも、少し指が震えているみたいだけど？」

反対側で試合開始の合図を待つグラムは笑って言った。だがその言葉に込められているのは称賛ではない、皮肉だ。

事実、彼はまるで見下すかのように俺を見ていた。

暗に彼はこう言いたいのだろう。内心では怖がっているのだろうか？ 怪我をする前にとっとと棄権したらどうだと。

元より恐怖など感じていない。棄権などという馬鹿げたことも考えてはいない。自分よりも弱いであろう人物に何故恐怖を感じなければならぬのか？

この指の震えは自分の内に渦巻き、荒れ狂う感情を抑えているからだ。少しでも気を抜けば、俺の理性は容易く吹き飛んでしまいうだ。

俺の沈黙を肯定と捕らえたか、グラムは一層侮蔑の色をあらわにした。

『両者準備はいいですか？ では、レディ…、ファイトツ！！』

先手必勝とばかりに突っ込んでくるグラム。その右手には風の魔力が渦巻いているのが見える。恐らく、風を圧縮させたブレードか何かだと見当をつけ、大袈裟な程に横へ飛ぶ。直後、ステージが大きくえぐれ、石の破片が飛び散った。

俺が避けたことに純粹に驚いたのか目を丸くしてグラムは俺を見た。

「驚いた。まさか風の刃を避ける奴がいるとはね」

「生憎、それは俺の得意分野だからな」

そう言いつつも俺は少しばかり驚いていた。

この8年間、修業に修業を重ねようやく風の刃を完全にものにし、更に新たな派生まで生み出すことが出来たが、8年前の俺でもチート補正が無ければ風の刃は使うことが出来なかった。

魔力が扱いづらすぎるのだ。

魔力とは本来魔法を行使するための燃料に過ぎない。魔法を使うためにそれを使うのなら自然なステップで消費し、発動させることができる。しかし、魔力本体は世界に直接顕現させることは難しい。

魔力は世界という枠組みの中では不安定な存在で、人間や魔物の体内といった世界から切り離された場所でも存在は出来るが、それが外へと出されるとたちまちにオドやマナといった魔力素へと変化する。

風の刃はそれを無理矢理に押さえ付け、魔力のまま剣の形を保つたものだ。その難易度は通常の魔法の遙か上をゆく。

故にグラムがそれを扱えることが出来たのに少しばかり驚き、その結果一瞬の隙が出来たのは当然だった。

「あまいよ！」

目にも留まらぬ速さで振るわれた刃を、身体を捻って避ける。しかし完全に避けていたにも関わらず、肩から鮮血が吹き出した。

短く嘆息する。肩の傷は刃の傷ではない。風の刃に纏われた鎌鼬によるものだ。しかも、面倒なことに俺が使っていたモノよりも鎌鼬の範囲は広いらしく、ギリギリで避けても容赦なく身体を削ってくるようだった。

「まったく…、敵が使うとこんなにも厄介とはな…」

剣に魔力を流す。あまり加えすぎれば、剣自体の耐久値が紙のようになってしまう、すぐに崩壊するだろうが素手で闘うよりはマシだ。どうせこの程度の剣ならすぐに代用がきく。

初めからありったけの力を込めて一文字に剣を振るった。

速さは上々。威力も文句なし。並の人間ならば一撃で吹き飛び、沈んでいたであろうそれを、グラムはあっさりと風の刃で防いだ。

ニヤリとした笑みが見える。が、次の瞬間、奴の顔は一気に強ばった。

俺の剣が奴の放つ風の剣を押ししている。それに奴は驚愕していた。剣同士が鏝つばせ競り合っているのなら、それは純粹な力比べだ。鍛えに鍛えたこの身体はそこんじよそこの奴に負けはしない。腕に力を入れ、力づくで斬り倒す。鉄で出来ているはずの剣からミシリと嫌な音が聞こえた。

相手の体制が崩れた所を狙い、腹に蹴りを叩き込む。手加減などない。今の俺に必要なのは勝利だ。ならば、もとより敵に情けをかける必要性などない。

奴は地面に身体を打ち付けながら派手に後方に吹き飛んだ。もうもうと土煙が風に舞う。視界が悪くなるが、そんなことも関係ない。魔力が見える俺には、魔力を持つ奴の居場所が分かる。奴の魔力の塊の見える場所に地を蹴り、肉迫した。

剣を下段から切り上げる。
しかし、硬い金属のような感触にそれを阻まれた。

「危ないなあ。僕じゃなかったら死んでたよ？」

強風が巻き起こり、土煙が晴れてゆく。

その中で、グラムはもう片方の手にも風の刃を出現させ、両刀で俺の剣を防いでいた。

舌打ちをする。両腕で風の刃が使えるのは誤算だった。

俺の剣は二本の刃でがちりと固定されており、更に悪いことに先程の比ではないほどにギシギシと嫌な音を立てている。

「残念だったね。ま、僕とここまで戦えたんだから上出来だと思う

よっ。」

グラムは軽薄な笑みを浮かべながら嘲るように言った。

心の奥の苛立ちが大きくなる。何故こんなにも弱い野郎が俺を見下そうと言っのか……。

押さえられていた剣が少しずつ動き出す。

それはぎこちない動きだったが、確実にグラムの身体へと迫っていた。

「……………っ！？ 最後まであぐのかい？ でも……………」

バキンッ！！

剣に幾重もの筋が入る。瞬く間にそれは剣の刃の全身に広がっていき、呆気なく剣を崩壊させた。

小さな破片となり、煌めきながら風に流されてゆく。

見ている分には綺麗なモノだが、戦闘中となるとそれは実にマズいことだった。

「剣は持たなかったみたいだね？ どうする？ 棄権するかい？」

ニヤニヤと腹の立つ顔で笑う。

その瞬間、俺の中で何かがキレル。

ガチンと何かが嵌るような音が聞こえると同時に、全身から魔力が一気にあふれ出した。それは無意識下の内で自然現象へと変異させていたようで、放出された魔力はすぐに膨大な風へと変わってゆ

く。
感情が湧き水のように、次から次へと心の内から放たれる。硬い理性の壁で覆われていたそれは、いとも容易く壁を砕き、負の奔流を作りだした。

「誰が……、棄権するだつて？」

底冷えのする声が自分の口から放たれる。

自分の口からそんな声が出たのかと他人事のように思う。今激情に駆られているのは自分であるはずなのに、こうして冷静に見ている俺の方が俺自身であるような気がした。

グラムが顔を青ざめさせ、後方へと一歩下がった。それを追うように、一歩踏み出す。

「ひっ！！」

グラムはやたらめったらに魔法を繰り返した。

風と水の弾丸の雨。豪雨とも称した方がいいそれは、もはや相手を活かすことなど考えていない。ただ恐怖に晒され、自分を守るための本能的な防衛によるものだった。

その一つ一つが複合詠唱並の威力を持ち得ている。

たとえ高位の魔術師であったとしても、伝説に残る程の者でなければ全弾を防ぐことは叶わないだろう。

だが、所詮は魔力の集まり。

右腕に魔力を纏わせ、それら全てを腕の一振りで打ち消した。

観衆からどよめきが起こる。無理もない。あれらを全て消すという事態が目の前で起きれば、その反応も必然。

だが、簡単な話だ。一つ一つ打ち落とすなどという馬鹿げたことをしていれば全てを消す前にこの身を弾が貫く。ならば、全てを呑み込むほどの魔力を持ってそれを凌駕してやればいい。

「く、来るな！！ 来るなあ！！」

俺には効かないと分かっているなお打ち続けるグラム。

だが、その度にそれら全てを消し飛ばす。

「……お前、風の刃ができたな」

「そ、それがどうしたんだよ！？」

「あの程度で威張ろうなどと考えると、随分な思い上がりだ」

俺の両腕に風の魔力が巻き付く。

だが、その量は奴の比ではない。風というよりは、それはもう暴風に近い。

それらを擦り合わせ、風を練り上げる。構想し、形成し、錬磨し、補強する。イメージするのは一振りの剣。何者をも容易く切り裂く最強の剣。

思考の齟齬を消す。現実の干渉をはじき飛ばす。
剣を作り上げるといふ思考のみで頭を満たし、それ以外の事象を
排除する。

そして遂に、イメージと現実が結びつく。

俺の手は巨大な風の剣を握っていた。

刃渡りが数十メートルもあるうかという巨大な剣。荒れ狂う風の中
で、翡翠色の輝きを放ちながらそれは確かに存在していた。

それを静かに振り上げる。

グラムはそれを様々な感情がごちゃ混ぜになったような表情で見
上げていた。

「覚えておけ。お前のような稚拙な剣は、この剣の足下にも及ばな
い」

俺はそう言い、全力を持って風の刃を振り下ろした。

グラムに迫る風の刃。

彼に届くか届かないか、その間際で俺は声を聞いた。

『ジークー!!』

誰の声だったのだろうか？ 酷く幼い、でも俺の知っているような……。

怒濤の感情の奔流に冷静な思考が紛れ込む。

一瞬のタイムラグ。それだけで俺を支配していた感情の歯車が、かみ合わなくなるように静止した。

「……………っ！」

その時、俺は何と叫んだのだろうか？

荒れ狂う風にかき消され、自分の言葉だというのに知覚すらしていない。

俺の持つ剣は俺の手に指示された動きに違うことなく、振り下ろされ、地を削り飛ばした。

第29話 天下で一番な武闘会（一試合目）（後書き）

皆様、良いお年をお過ごしください。

『番外編 人物紹介』に新たな人物が追加されたようです。

1 / 2 誤字修正をしました。

1 / 4 タイトルを変更しました。

『天下で一番な武闘会（壱）』

『天下で一番な武闘会（一試合目）』

第30話 俺と焦りと謎の騎士（前書き）

あけましておめでとございます、博麗まんじゅうです。
本年もよろしくお願いします。

蠍虫さん、感想ありがとうございます。これからも頑張っていきたいと思いますね！

では、硬い挨拶もそこに本編へGO！

第30話 俺と焦りと謎の騎士

轟音が響き渡る。振り下ろした翡翠の剣は地面に激突すると共に消え失せ、圧縮されていた空気が逃げ場を求めるように拡散する。解放された空気が暴風となって周囲に襲いかかった。いや、豪風とでも呼ぶのが相応しいだろうか？

顔を腕で覆いながら俺は前方を見据える。

あれに直撃していれば間違いなく助かりはしないだろう。圧縮された暴風の塊がたちまちの内にその身を切り裂き、見るも無惨な姿になっているはずだ。下手をすれば原型すら留めていないかもしれない。

冷えた頭に急激に自責の念が押し寄せる。今俺は怒りに駆られ、人を殺そうとした。紛れもない、この自分の手で。

俺は自分に向けるべき怒りを人に向け、あまつさえ自分の対戦相手をおこの手につけようとした。

やめろ、そんなことを考えるな。まだ死んだと確定したわけじゃない。

頭の中で様々な感情が飛び交う。それを振り切ろうと全てを心の奥底に押し沈める。

そんな俺を待っていたかのように風が収まり、視界が晴れた。そして、その中に一つの影。それはびくりとも動きはせず、見える魔力もか細い。

が、次の瞬間、それは立ち上がり、ふらふらと土煙の中から姿を現した。

「げほっ……、げほっ！ し、死ぬかと思った……」

全身に切り傷こそ負ってはいるが、致命傷になるような傷は負っていない。

ということは、風の刃には当たらなかったということだ。

俺はそのことに内心で安堵し、そして、怒りに駆られていた自分に対して舌打ちする。もしもあれが直撃していれば彼など消し飛んでいただろう。そんなものを人に向けようとしていた自分に腹が立つ。

自分に対する怒りが増大していく。リリーを傷つけ、その上関係のない他人まで巻き込もうとしていた。

ぎりりと奥歯を噛み締める。だが、今度は魔力は漏れたりしないいや、漏れさせない。感情と共に心の奥底に沈め、閉じこめた。絶対にそれが開くことがないように蓋をして。

『い、生きています！ グラム選手は生きていました！！』

わぁッと歓声が上がる。それもそうだ。死ぬかもしれない魔法を受けて生きていたのだから。

それに対して、俺には厳しい目が向けられる。当然の話だ。いくら怒りに駆られていたとはいえ、人を殺そうとしていたのだから。

グラムが手を審判に向かって手を上げた。その表情は硬く、緊張に満ちていた。

「……審判、僕は棄権するよ」

「なっ!? グラム選手が棄権を申し出ました! それは一体何故ですか、グラム選手?」

「僕じゃあこの子に勝てない。今も偶然助かったんだ。僕に向けられるはずだった剣が、軌道を変えてかろうじて僕の横を通り過ぎていった。当たっていたらと思うとぞつとするよ」

「わ、分かりました。では、本戦一回戦勝者はジーク選手です!」

反応はない。当たり前だ。未遂とはいえ、人を殺そうとしていた奴に向かって良い感情を持つ市民が何処にしよう?

俺はそれを聞くと、静かに踵を返し、会場内部に戻ろうとした。が、それは審判の一言によって一度止めさせられることとなった。

「ですが、ジーク選手の行動はやり過ぎです。今回は偶然助かりましたが、グラム選手は危うく命を落としかけました。よって、ジーク選手には制限ハンデを設けさせてもらいます」

「……………」
「ジーク選手には魔法の使用の禁止の制限が付きます。ジーク選手、よろしいですね?」

「…………… かまわない」

「では、ジーク選手は二回戦以降、魔法禁止で戦ってもらいます。なお、魔法が使用された場合、いかなる場合においても失格となりますのでご注意ください」

それだけ聞くと、俺は再び会場内へと歩き出した。その背には後悔と、自分に対する不甲斐なさがずしりとのし掛かっていたのだった。

ドサッ！

音を立てながら長椅子に座り込む。そのすぐ後に今自分のやったことに対して顔を顰めた。

気分が滅入る。何処までも、それこそ奈落の底にまで落ちていきそうな程、俺の心は沈んでいた。先程、荒れに荒れ、多少ストレスを発散したことも関係しているかもしれない。試合中に感じられた怒りは、胸で燻りこそしているがその勢いは収まっていた。

右の手の平を見、それをぐっと握りしめる。

俺は今さっき何をしようとしていた？ 感情に支配されていたとはいえ、人を殺そうとしていた。しかも自分には何の関係もない

対戦相手という括りではあるが 人をだ。

それを思い出し、記憶がフラッシュバックする。見えるのは巨大な翡翠の剣と恐怖を露わにしたグラム選手、そしてそれを驚愕した様子で見る審判と観衆たち。

「くそつたれ……！」

自分を思いきり殴りたい衝動に駆られる。自分の都合のために人を殺そうとすることは悪だ。事情があるならば、それを一考する余地もあるのかもしれない。

だが、俺はどうだった？ 俺にはそんな事情があったか？

答えは否だ。俺にはそんな理由など存在しなかった。自分に対する負担を減らしたいがために、感情のストップパーをこじ開けそれに身を委ねた。

「なにやってんだ…、なにやってんだよジーク・フェレンデュラ…
…！！」

ああ、不甲斐ない、情けない、馬鹿みたいだ。

悩むなど自身に言い聞かせても思考は自然とそこに回帰する。こうして悩んでいたら答えは出るのか？ それも否だ。自分がやってしまったことは否定すべきことじゃない。過去の失敗は未来に活かす、それが正しい過去のあり方だ。

自分がどんどんと深みに嵌^{はま}っていきつつあるのが分かる。藻掻^{もが}けば藻掻^{もが}くほどにそれは俺の身体を絡め取り、闇の底へと沈めていくとする。

思考がストップしそうになるまさにその時、俺の足下に影が落ちた。

「大丈夫、ジーク君？」

「……………ユミルか」

顔を上げれば、ユミルの心配そうな顔が目映った。その目にあるのは憐憫。感情に振り回されている俺に対する哀れみだ。

いや、本当にそんな感情を抱いているのかすら分からない。今の俺は感情の不安定な状態にある。それ故に彼女の感情をそう見

ているだけなのかもしれない。

自分の言葉も何もかもが疑わしく思えてくる。何故、こんなにも考えが纏まらないのか。

「皆心配してるよ？ レンちゃんも、パールさんも、グラスゴーさんも、それに……、リリーちゃんも……」

皆が心配している。俺はそのことにただそれだけの事実しか見つけることが出来なかった。

自分に対する心配の感情。それが今の俺には読み取れない。

どうやら自分で思っている以上に自分は相当まいってしまっているようだった。

このままでいたら俺はまた誰かを傷つけてしまうのかもしれない。そんな考えが頭を過る。それは俺がこのままでいれば確実に起きってしまうことだろう。

座っていた椅子から立ち上がり、ユミルの横をすり抜ける。

「ジーク君!!」

「来るな……」

ドスの聞いた低い声。それにびくりとユミルは身を震わせてその足を止めた。

俺の声が牽制になったか、それ以上ユミルは動こうとしない。俺は背中越しに一度彼女を見て、再び前を向いた。その時に見えた彼女の顔には困惑の色が浮かんでいた。

「今来られたら……、俺は何をするか分からない」

「……………」
「だから……、当分俺には関わるな」

そのまま、その場を去ろうとした時だった。

ドンと背中越しに衝撃を加えられ、俺は大きく前に仰け反ぞった。
歯を食いしばり、何をするんだと言おうと後方を向いて、俺は圧倒された。

後ろを向いた俺を待ち構えていたのは憤怒で顔を真っ赤にさせ、これ以上無いほどに目を吊り上げたユミルの姿だった。

「何が当分関わるな、よ！！ 格好つけてんじゃないわよ、青二才！！ 君なんか所詮二十年と数歳生きたくらいのひつよこじゃないのよ！！」

「……………んだよ。なんだってんだよ！！」

いきなり怒鳴られたことで俺の頭が瞬時に沸騰する。勢いを収めていたはずの怒りが再燃し、視界が真っ赤に染まる。

「ちよつとの失敗をして、それで落ち込んで、悲劇の英雄でも気取ってるわけ？ ハンツ！！ ちゃんちゃらおかしいわ！！ 駄目だつたって思うんならそれを次に活かしなさいよ！！」

「そんなことは俺にだって分かってるさ！！ こうして落ち込んでることもよくよしてることも意味が無いってことぐらい俺にも分かってたんだよ！！」

頭で理解してても感情はそう簡単には変えられない。理屈で分かっ
つていても納得できないことと同じ。

俺がいくら落ち込んでいては駄目だと思ったところで、その感情
の芯である心が動かない。ぬるま湯につかるがごとく、その感情か
ら抜け出そうとしない。自分という人間はどこまで馬鹿な人間なの
かと言いたくなる。

「だったら何で君は行動しないのよ！！ 頭で考える前に動きなさ
い！！ いくら考えても無駄なことは無駄なのよ！！ 身体が動け
ば自然と心はそれに引かれる。だから、まずは行動しなさい」

最後の諭すようなユミルの言葉に俺は何も言い返すことができず、
ただ顔を背けるだけに留まった。

「君には心配してくれるような仲間がいるでしょう？ だったら、
その仲間に相談することだってできる。月並みな台詞だけど、君は
一人じゃないんだから」

仲間がいる。その言葉は確かに正しい。現に俺には信頼できるほ
どの仲間がいる。

だけど、これは俺の問題だ。自分の不甲斐なさを他人にぶちまけ
てどうするという？ それで解決できるとでもいうのか？ そんな
ことで解決できるのだったら、世界に自己嫌悪で苦しむ奴なんざい
ない。それも所詮は気休めでしかないのだ。

前のように感じる。

「……そんな簡単に言えるなら、俺だって苦勞はしてないさ」

小さくそう呟くと、俺もまた控え室を後にする。

ユミルの言葉は多少俺の心に届いたのかもしれない。誰もいなくなった控え室には少しだけ、後悔が置き去りにされていたのだった。

廊下を道なりに進んでいく。当ては無い。ただ俺に決められているのは、時間がくればまたあの控え室に戻り、試合をすることだけだ。

道に迷う心配は無い。ここまで一本道だった。戻るときにも大して苦勞はいらないうららう。

何も考えずにただただ歩き続ける。少しだけ休憩できる場が欲しかった。考えが纏まらずに空回りするのにはちよつと疲れた。今は何も考えずに休みたい。

その一心で歩いてきたからかもしれない。前にろくに注意を割かずに歩いてきた俺は、ボスンと何かに顔をぶつけて立ち止まった。思考が復活し、はて何だろうと首をひねる。色は暗い緑で、触ってみる限りちよつと硬い素材で出来ている。そのまま視線を上へ上げ

ると、ボサボサとした赤い髪が目映った。

人…か？ 俺の予想に違わず、それは人だったようでもうやら俺に背を向けていたらしい。くるりと不機嫌そうな表情で振り返った。

「誰だ、ぶつかった奴……ってジーク！？ お前なんでこんなところ？」

「え……？ アレス？」

そう、俺がぶつかった人物はアレスだった。

いつもの通り、ろくに手入れしていなさそうな赤髪と無精髭は健在で、昔より一層ひどくなっただかもしれない。

何故こんなところにアレスがいるのだろうと考えると、その後ここが大会会場であることを思い出す。

「お前、大会出場者か？」

「まあな。俺の試合はまだ後だけだよ」

なるほど、それならここにアレスがいるのも頷ける。ギルド嬢が、冒険者は出払っていたと聞いたが、それはアレスもだったのか。少しばかり驚き、次いでその理由が分からないのに思い当たる。

アレスはそこそ腕のいい冒険者だし、稼ぎもいいはずだ。こんな大会に出場するほど戦闘狂バトルジャンキーでも無かったはずだし、金目的でもあるまい。となると、彼の理由は何なのだろう？

「お、不思議そうな顔してるな？ 何で俺がこんな大会に出てるの

かつて顔に書いてあるぜ」

「……俺そんな分かりやすい表情してるか？」

「おうよ。ばりばり分かりやすい」

それはそれで困るな。交渉とかの時にはポーカーフェイスを保つていなければならないからな。感情を読まれることなんかないと思っただけだ。

そんなことを思いつつ話を聞いてみると、アレスは今回の優勝商品が目当てらしい。

なんでも、今回の優勝商品はとある希少な鉱石で、武器を作るのに最適の素材らしい。アレスはそれで、俺が以前壊した【バンギス】の代わりになるような武器を作ってもらおうらしい。【バンギス】の話の時に半目で見られたが素早く目を逸らした。

「あれなら多分【バンギス】まではいかなくとも十分威力の高い武器が作れそうだからな。何が何でも取ってやるつもりだ」

「そうかい」

その意気には感心するが、今回の戦いは厳しいかもしれないぞ？俺はともかくとしてグラスゴーさんがいるからな。あの人は強いぞ、多分。

「それで、ジーク。俺もさっきの戦いは見てたんだが……、何があった？」

いきなり確信を突くアレスに、心臓を鷲掴みにわしつかされるような感覚とともに、俺は顔を強ばらせた。鈍い脳筋のアレスに気づかれるとは思っても居なかつたから余計に反応は顕著だつた。

その反応だけでアレスには俺に何かしらあると感じたのだろう。問いつめるように俺を睨み、厳しい表情だつた。

俺は何も答えられずに俯いた。忘れようとしていた感情が心に蘇る。わなわなと唇が震え、手をぐっと握りしめた。

「あの戦い方は明らかにいつもものお前らしくなかつた。いつものお前ならあんな無茶はしないだろ」

「俺は……」

思考が凍り付く。何か上手い言い訳を考えつくことも出来ずに黙つたままだつた。

アレスがはあとため息を吐き、俺に手を伸ばした瞬間、アレスが視界から消え去つた。

「は……？」

「大丈夫かい、君！！ もう大丈夫だ、お兄さんがたすけてやるからな！！」

次いで俺の視界に入る青年の背中。立派な騎士服を身に纏い、さらさらとした金髪の髪が揺れる。

明らかかな部外者であることに間違いは無いのだが、如何せん誰なのかさっぱり分からない。というか誰？

「こんな年若い少年に恐喝だなんて許せないぞ、その悪者！！
空の神の名にかけて、この俺、ランスロット・オルディンが成敗し
てやる！！」

そんなことを大真面目な表情で叫ぶ青年。お前はいつの時代の正義の味方だ？

またよく分からない面倒事か、と俺はため息を吐いたのだった。

第30話 俺と焦りと謎の騎士（後書き）

はい、第30話終了です。

最近シリアスばかりが続いています。正直シリアスばかり書くのも
疲れますね。

早くコメディ書けるといいなあ。

実はこの話にも少しだけ伏線が……。

1 / 5 誤字修正をば。

第31話　なんだ、ただの熱血バカか（前書き）

どうも、博麗まんじゅうです。

後書きに大切な話がありますが、とりあえず本編へGO！

第31話　なんだ、ただの熱血バカか

「さあ、かかってこいチンピラ！！　この俺が相手だ！！」

俺を庇うようにアレスに相對し、拳を構えるこのランスロットという青年。見た目二十数歳ほどで、きりつとした精悍な顔つきとさらさらとした金髪の髪が随分と王子的な印象を抱かせる。こうしてアレスと對峙している時点で、その印象は好戦的なものに塗り替えられてしまったが。

拳を二、三回ボクシングのように振るった後、彼はくいくいとアレスを挑発した。

それに見事に乗っかるアレス。青筋を額に浮かべ、同じようにフアイティングポーズを取る。

穏やかだった廊下がたちまちにバトル場へと早変わりした。

二人の間に緊迫した、ぴりぴりとした空気が漂う。

先に動いたのはランスロットだった。

一瞬にして懐に潜り込んだかと思うと、握り込んだ右の拳をアレスのあご目掛けて振り上げた。しかしそこは冒険者、アレスはいとも容易くそれを避け、お返しとばかりにその手を掴み、足を払いながら彼を放り投げた。宙を飛んだ彼はぎょつとした表情をしたが、それもすぐにかき消え、体勢を整えながら地面へと着地した。

が、地面に足が着くと同時に今度はアレスが突貫する。繰り出される連続の拳戟。狙っているのはランスロットの頭。右、左と的確に狙いを定められた一撃がランスロットを襲う。

しかし、ランスロットも負けてはいない。それを紙一重で避けな

がらアレスの腹に拳を叩き込もうとする。

風切り音すら置いていくほどの激しい拳の応酬。

時にその一撃をその身に喰らい、相手に渾身の一撃を叩き込もうとその拳を振るう。

防ぎ、防がれ、拳と拳のぶつかり合う鈍い音が何度聞こえてきただろうか？

もう数分も経ったと分かった時には、彼らはすっかりと息は上がり、地面に片膝を付いていた。

「お前、中々やるじゃないか。ただのチンピラかと思ったが違うよ
うだな」

疲労しているであろう身体を気にもせず、立ち上がるランスロット。アレスでさえまだ息が整っていないというのに、ランスロットはしっかりと息を整え、まるで好敵手ライバルでも見つけたかのような晴れ晴れとした顔でアレスを見下ろしていた。

「……当たり、前だ……。元々俺は、……チンピラなんかじゃねえっ
ての」

「それにその武闘の腕！ お前、大会出場者だな？」

「確かに俺はそうだが……、まずお前は人の話を聞くことから始め
ような？」

確かにアレスの言うことはもつともである。いきなり横合いから蹴られれば誰だって怒るだろうし、怒らない奴は特殊な性癖を持っている奴としか考えられない。

ランスロットは「うむ」と大きく頷くと、アレスに近づき、その手を差し伸べた。

さあ、とでも言いそうなランスロットにアレスは大きいため息を吐き、その手を取った。

「ってやるとでも思ったかあッ！！！」

アレスの拳がモロに顔に入り、へしゃげた面を晒しながら廊下の遙か遠くへ飛んでいくランスロット。ドップラー効果による悲鳴を残しながら、あつという間に見えなくなりどこぞの漫画やアニメみたく、一点の光となって彼の姿は消え去った。

一体何だったんだ……、あのわけの分からん奴は。

呆れの混じった表情で彼の消えていった方向を見つめる。しかし、こここの廊下もそこまで広くはないはずだ。見えなくなるまで彼が遠ざかるにはあまりにもこの廊下は短い。ということは彼は魔法か何かを使ったのか？

そんな疑問が鎌首をもたげて自分の中で主張を始めるが、それも意外な所からの声ですぐに収まることとなった。

「中々にいい拳だったな。だが、俺を飛ばすには全然足りん！！」

「……………！？」

「おまつ！？ 何で！？ おれあ確かにこの手でぶん殴ったぞ！？」

突如として俺の後ろに現れた、廊下の彼方に消えていったはずのランスロット。鼻に殴られた痛々しい赤い跡が残っているが、それすらも満足したような表情である。

「俺を飛ばすなら、その五十倍は持ってこいって話だ。俺はいつでも挑戦を受けるぜ？ この鍛え上げた身体があるかぎりな」

「いや、身体は関係ないんじゃないか？」

「そもそもお前、俺の拳で思いつきり飛んでたよな？」

「甘いな、チンピラ。あれは……、残像だ」

「じゃあその顔の跡はなんなのさ？」

ツッコミどころ満載の発言を繰り返すランスロット。彼は誇らしげに「戦士の証だ……」と言うと、ニヒルな笑みを浮かべた。

恰好をつけているつもりなんだろうが、顔に残っている赤い跡のせいで間抜けにしか見えない。本人は分かっているやっっているのだろうか？

そんなランスロットの様子に流石のアレスも呆れたか、手で顔を覆って俯いた。かくいう俺も果たしてこの状況をどうやって收拾をつけたものかと頭を悩ませていた。

「それで、お前はこの少年に何をしていたんだ、チンピラ？ 場合によっては本部に引き渡すこともいとわんか？」

さっきまでのふざけていたような雰囲気や嘘のようにかき消え、本気の殺気が場に充満する。その切り替えの速さに絶句する。アレスはおるか、俺ですら反応できなかった速度。その眼差しは、一挙一動も見逃さないと言わんばかりに厳しい。

アレスはランスロットの様子に呆気にとられていたが、顔を上げて
いる。

今度こそ本当に廊下の彼方に消えていくランスロット。何だったんだ、本当にあいつは？

アレスも俺と同じ意見を抱いたようで、眉を寄せて小声で俺が思ったことと同じ事を呟いていた。

場を仕切り直し、改めてアレスと話をするのも少々面倒くさかった。何より、俺は休める場所を探していた。あの乱入者が入ってきたせいで随分と予定から遅れたが。しかし、こんな騒動に巻き込まれた後で十分に休めるかどうか分からない。そう判断し、観客席に行くことにした。

このまま行くと、観客席にいる観客に何をされるか分からないので、スキマから全身をすっぽり覆ってしまえるフード付きのローブを取り出す。それを羽織り、アレスに向き直った。

「アレス、俺も行く。試合負けるなよ？」

「おい、ジーク！」

「この……、大会が終わるまでには話す。だから、今は見逃してくれ」

それだけ告げ、アレスの返事も待たずに歩き出す。

すまない、アレス。俺はまだ、自分自身で整理がついていないんだ……。

『さて、次は三戦目。対戦選手はトルテ・カインジユ選手とグラスゴー・ヴァレンシア選手です！』

ステージの両脇から姿を現すグラスゴーさんとトルテ選手。飄々とした様子でステージに上がるグラスゴーさんと違い、見るからに緊張しているトルテ選手。ステージに上がるときにも危うく階段で躓きそうになった。

何故あんなにも緊張しているのか？ 答えは簡単だ。相手がグラスゴーさんだからだ。

【鬼教官】と呼ばれたグラスゴーさんの実力は伊達^{だて}じゃない。今でも十分に通用する。いや、それどころかこの試合で優勝してもおかしくないほどだ。戦術、技量、心理戦、経験、どれを取ってもトップクラス。大会の要注意人物の一人だ。

グラスゴーさんと当たってしまったトルテ選手にはご愁傷様と言う他ない。恐らく、数分と経たずにやられてしまっただろう。

『それでは、両者とも準備はよろしいですか？ レディ、ファイトッ！』

試合の火蓋が切って落とされた。

トルテ選手はロッドを取り出し、魔法の詠唱を開始する。詠唱の速度は普通の魔法使いと比べると格段に速い。現に、今既に彼の詠唱は終わろうとしているし、その魔法が後方に展開されている。

だが、その完了よりも早く、グラスゴーさんの斬撃がトルテ選

手を襲った。脇差しによる、威力よりも手数重視の連撃。トルテ選手は攻撃を防ぐことに意識を割かざるを得なくなり、後方に展開されていた魔法が消滅する。

ロッドと脇差しが衝突する。

甲高い金属音が鳴り響き、トルテ選手が後方に押される。手数重視の攻撃ですらこの威力だ。威力重視の攻撃となると一体どれだけのものになるのか。もしそれが繰り出されれば、トルテ選手のノックアウトは必至だろう。

後方に下がったトルテ選手を追い、更に一撃を加える。再び金属音。だが今度のそれは最初のものより音が鈍く、防御の失敗が感じられた。

間髪なく脇差しを振り、一瞬の余裕すらも与えないグラスゴーさん。その表情は飄々としたままで、本気の気配など全くない。事実、そうなのだろう。こんなことを言うのはトルテ選手には悪いが、トルテ選手ぐらいの実力では、彼は本気を出さなはずだ。今の彼にとって、この試合はお遊びのようなものなのだろう。

状況に変化が生じる。

今まで防戦一方だったトルテ選手が魔法を繰り出した。詠唱はほとんどないに等しい単一詠唱。グラスゴーさんには効かないと分かった上でやっているのか、それとも何も考えずに繰り出したのか。その答えはすぐに出ることとなった。

トルテ選手の放ったのは炎弾。一直線にグラスゴーさんに向かって飛んで行くが、それは何のこともなく避けられる。何発も打ち込み、そのたびに避けられる。

そして、また一発炎弾が放たれた。やはりグラスゴーさんはそれを避け、脇差しを腰だめに構えて突進した。が、突然に彼は横へ跳ぶ。観客が訝しげに彼の様子を見守る中、今まで彼がいた場所に炎の鉄槌が落とされた。

地面が震動する。それを起こしたモノはゆっくりと鉄槌を持ち上げ、トルテ選手の近くに形を為した。

それは炎の魔神だった。

全身が炎を基盤として形作られ、その大きさは三メートルも届くかというほど。赤々と燃え上がる炎の鉄槌を片手に持ち、人形を為していた。

「……人形術の魔法か？」

人形術とはその名の通り、人形を操る術だ。魔力の糸を用意した人形に付け、それを自在に操る方法だが、それを使うには多大な集中力を要する。なんせ、自分と人形の二つの動きを把握しなければならぬのだ。上手く操れなければただの足手まといに成り果てるし、人形ばかりに集中力を費やしていれば、操者である自分がやられる。

更に、人形術は主に固体の人形を使う。その方が操縦が楽だからだ。形をきちんと為さない水の人形を考えれば楽だ。すぐに形を崩す水の人形は魔力の糸が切れてしまふ可能性がある。故に普通は炎で作られたものなど使わないのだが……。

「……實力はある、か」

少なくとも、ここまで上がってくる實力はあったということだろう。

だが、それもグラスゴーさんの前では無駄な話だ。

グラスゴーさんは一瞬驚いたような表情をしていたが、すぐに飄々とした顔に戻り、脇差しを握った。

ブンッ！！

そんな音がここまで聞こえてきそうな程の速度。今立っていた場所に残像を残し、彼は炎の魔神を斬っていた。

数秒、炎の魔神は斬られたことすら分からずにそこに存在していたが、刹那の後、炎をまき散らして霧散した。

残り火が僅かに宙に舞い、幻想的な光景を作り上げる。トルテ選手はそれを呆然と見ていたが、ふらつと糸が切れるかのように地面に倒れ込んだ。大方、グラスゴーさんがすれ違いざまに一撃加えたのだろう。

『しょ、勝者グラスゴー・ヴァレンシア選手！！』

爆発的な歓声が彼に降り注ぐ。グラスゴーさんはそれを飄々とした表情で受け取ると、会場内へ軽い足取りで消えていった。

医療班もまたトルテ選手を回収し、本部内に消えていく。

その様子を見ながら、俺は思考にふけていた。今見ただけでも彼の戦闘技術は圧倒的だった。次の彼の対戦相手は俺だ。果たして俺は彼に勝てるのか？ 自問自答し、それに失笑して答える。

勝てるか勝てないかじゃない。俺は絶対に勝つんだ。それだけの実力が俺にはあるはずだ。

ローブの下で口角をつり上げる。腰に提げた剣が僅かに震えたような気がした。

第31話　　なんだ、ただの熱血バカか（後書き）

はい、大切なお知らせです。

もう分かっていている人もいるかもしれませんが、センター試験が間近に迫ってきました。そういうわけで、センター試験が終わるまでは更新を中止しようと思います。

読者の皆様には大変ご迷惑をおかけしますが、ご了承してくださるようお願い申し上げます。

『反省会』が0章に追加されました。

『番外編 登場人物』に新たな人物が追加されたようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5587v/>

異世界？へえ、異世界か……、ってはあ!?

2012年1月6日18時33分発行